徳川浪人伝（下）

柴田錬三郎

新潮文庫

新潮日本文学アルバム 全20巻

1 森鷗外
2 夏目漱石
3 樋口一葉
4 島崎藤村
5 柳田国男
6 石川啄木
7 谷崎潤一郎
8 高村光太郎
9 有島武郎
10 武者小路実篤
11 志賀直哉
12 宮沢賢治
13 芥川龍之介
14 斎藤茂吉
15 萩原朔太郎
16 川端康成
17 堀辰雄
18 山本周五郎
19 太宰治
20 三島由紀夫

四六判／モノクロ96頁 カラー16頁 折込カラー口絵一点／毎月一巻20日発売

カバー 東啓三郎

柴田錬三郎 徳川浪人伝(下)

新潮文庫

徳川浪人伝(下)

柴田錬三郎

新潮文庫

〔草〕一五〇=26=z 400

徳川幕府の軍用金を獲得するために暗躍する公儀隠密団。彼らは幼い姉弟に遺された莫大な南蛮財宝の隠し場所を記す絵図面を狙い、ふたりに執拗に襲いかかる……。姉弟を助ける浪人織田重四郎を中心に、力をあわせ徳川幕府転覆を狙う浪人、新天地を海の彼方の国に求め、日本から雄飛しようとする浪人など、多彩な人物を配し、雄大なスケールで描く長編時代小説。

ISBN4-10-115026-5 C0193 ¥400E 定価400円

〜新潮文庫〜

柴田錬三郎の作品

剣は知っていた(上)
〃 (下)
江戸群盗伝
続江戸群盗伝
美男城
眠狂四郎無頼控(一)
〜
〃 (六)
眠狂四郎独歩行(上)
〃 (下)
眠狂四郎殺法帖(上)
〃 (下)
孤剣は折れず
赤い影法師
運命峠(前)
〃 (後)
剣鬼
眠狂四郎孤剣五十三次
眠狂四郎虚無日誌
眠狂四郎無情控
眠狂四郎異端状
徳川浪人伝(上)
〃 (下)

カバー印刷 錦明印刷

新潮文庫

徳川浪人伝

下巻

柴田錬三郎著

新潮社

徳川浪人伝(下)

柴田錬三郎著

新潮文庫

徳川浪人伝

下　巻

柴田錬三郎著

新潮社版

3081

徳川浪人伝

下巻

夢の跡

ぼうぼうとして、夏草が、生い茂っている。
ここが、曽て宏壮な構えを誇った館の跡と知れるのは、ちらばっている松やその他の樹木の、風雅なたたずまいである。
いずれも、充分に吟味され、手入れをほどこされた枝ぶりを、なお、今日も、それらの樹が、とどめている。
眩しい陽光をあびて、夏草の上に、影を落す樹木は、何も、語ろうとはしない。
館は、消えはてても、これらの樹木は、なお、無心に、梢をそびえさせ、葉をしげらせている。
ひとつの人影が、楠の喬木の根かたに、うずくまっていた。
すぐ、目の前には、夏草になかば埋もれて、高麗塔が倒れていた。
その高麗塔へ、暗い視線を落して、ほっと、ふかい溜息をついたのは、下僕嘉七であった。
数馬を、姫路の奉行所からのがすために、おのれをわざと捕えさせた嘉七は、それから間もなく、地引無限斎の働きによって、身の自由を得たのであった。
その足で、姉弟のあとを追って、さがしもとめたが、ついに、めぐり会えなかった。

——もしや？

と、思って、この伏見の白河館跡へ、やって来た嘉七は、ぼうぼうと生い茂る夏草の中に、過ぎ去った日々を偲ぶ感慨を置いて、茫然と、ひとときをすごすことになった。

館のあるじは、豪放寛闊の人物であった。そして、その夫人は、たぐいまれな気品高い、美しいひとであった。

忍者幻夢十郎次という前身を持つ嘉七は、この館に下僕となったことを、生涯の幸せに感じたものであった。

しかし、その幸せは、ものの十年とはつづかなかったのである。

たった一夜にして、館は焼きはらわれ、主人夫妻は、火焔の中に、この世を去ってしまった。

何者とも知れぬ曲者の集団の襲撃は、まことに凄まじい限りであった。

あれから、すでに、七年の歳月が、流れ過ぎている。

——わしは、ご姉弟をお世話しながら、いたずらに、老い果てた。

主人夫妻の仇を討つのを唯一の目的としながらも、おのが力の足りなさに、いまは、姉弟ともはなればなれになってしまい、こうして、館跡に舞いもどって、暗い心を抱いているばかりである。

なんの面目があって、生きながらえているのか、とおのが身を鞭打ちたい。

——お許しを！

嘉七は、目をあげて、明るくひろがった館跡を眺めやりつつ、胸のうちで、詫びた。

その折——。

近くに、夏草をふみわける足音が、近づいた。

嘉七は、視線を移して、眉宇をひそめた。

見知らぬ浪人者であったが、嘉七の直感が働いた。

浪人者は、嘉七と同じく、胸中に何か思いわずらっている様子で、沈んだ眼眸を、館跡へ置いた。

そして、そのまま、動かなかった。

やがて、そのくちびるが、微かにひらいた。

「あの娘は、ここに、生れて、育ったのか」

ひくいつぶやきであったが、嘉七は、ききのがさなかった。

嘉七は、立ち上った。

「卒爾ながら……」

声をかけると、浪人者は、視線を向けて、じっと見すえたが、自分の方から、

「お主、この館にゆかりのある者か？」

と、問いかけた。

「はい。むかしご奉公して居りました」

「それでは、お主、嘉七という家僕ではないか？」

「貴方様は――？」

「わたしは、波乗り佐兵衛にたのまれて、白河館の姉弟を援けに、姫路へ行った浪人だ。織田重四郎という」

「やはり、そうでございましたか。どうも、そのお方のような気がいたしました。さわさんから、貴方様のことは、うかがって居りました」

姫路へ重四郎を案内したさわは、重四郎が、城代家老美濃部将監と再会しているあいだに、嘉七とともに、大坂へ発っていた。

したがって、嘉七と重四郎は、互いに顔を合わせるのは、いまが、はじめてであった。

しかし、双方とも、共通の立場にあるため、初対面のような気はしなかった。

重四郎も、嘉七も、自分がここへ足をはこんで来たことを、対手に説明する必要はなかった。

ただ――。

重四郎の知っていることで、嘉七の知らぬことがあり、嘉七の知っていることで、重四郎の知らぬことがあった。

それは、しばらく、会話を交わすうちに、すぐに、合点された。

嘉七にとって、意外だったのは、伊丹の平家館の神屋主膳が、主人夫妻の敵ではなかったことである。

「そうでございましたか。てまえは、神屋主膳こそ、討たねばならぬ敵、と思いきめて居りましたが……」

「ちがったな。神屋主膳は、そのような卑劣な人物ではなかった。神屋主膳が、白河館の主人と堺で覇を競うていたのを、巧みに利用して、世間に、主膳のしわざと信じさせた者が、ほかにいる」

「何者でございましょう」

「平家館で、杉山道満という老人に会った」

「はい。てまえも存じて居ります。むかし、大坂城において、蔭の軍師のつとめをはたされた御仁でございます」

「あの老人の推察では、白河館を夜襲した曲者は、公儀要職にある者の指令による隠密ではなかろうか、ということだ」

「お――それは！」

嘉七は、思い当る表情になった。

「わたしも、そうではなかろうか、と思う」

重四郎は、そう云って、嘉七の言葉を待った。

嘉七は、しばらく、沈黙をまもった。

やがて、嘉七は、

「ご公儀では、白河館と平家館を競わせて、外国交易の利をあげさせ、それを、ぞんぶんに、召し上げて居られたのでございますが……」

「……」

「お大名方に、交易禁止令を布れ出されてからも、白河館と平家館には、朱印船の新造も許可されて居ったのでございます。……ご公儀が、その一方をとりつぶした、とは、今日まで、夢にも考えませなんだ」

「お主が知らぬことかも知れぬが、白河館は、想像以上の南蛮金のたくわえがあったのではないのか？」

「……」

嘉七は、黙って、重四郎を、見かえした。

「杉山道満の推測では、徳川幕府は、意外に、江戸城の金蔵に、金がないのではないか、という。……豊太閤が貯えた大坂城の軍資金を、徳川家では、莫大なものと信じ込み、豊臣家を滅ぼして、これを奪うことにした。ところが、落城させて、調べてみると、想像したよりも、はるかに、その金は、すくなかった。徳川家康は、失望した。実は、徳川家は、天下をわがものにするために、戦いに明け暮れ、金を貯える余裕がなかった。諸大名には、江戸城の金蔵には、大判小判が山と積んであると思わせながら、実は、まことに乏しかった。そのために、家康は、大坂城を攻めて、豊臣秀頼を滅ぼし、その軍資金を奪わざるを得なかった。ところが、その軍資金は、いつの間にやら、大半つかいはたされていた。……いまや、兵火はおさまり、徳川の威権は、僻邑までも、あまねく、ゆきわたった。しかし、将軍家の手許には、その威権にともなう金はない。これから、百年、二百年の威権をふるう上には、金蔵

を満たしておいても、まだ足らぬ。とすれば、野にちらばっている金を、ひそかに、かき集めようという計画が、幕閣の面々の心中に起って来るのは、当然というものだ。……そこで、軍資金を充分持っている大名を、事を設けて、つぎつぎにとりつぶす一方、野に在って、財力をたくわえている者も、片はしから、狙う。白河館が、目をつけられたのも、やむを得なかった。これが、杉山道満の観察だ」

黙ってきいていた嘉七は、大きくうなずいた。

「あるじが、どれだけの金を、たくわえて居られたか、てまえは、よく存じませぬ。しかし、たしかに、てまえなどの想像以上のたくわえがあったことは、まちがいございませぬ。……ご公儀の狙うところとなったのも、やむを得なかったことでございます」

「老人――。その金は、まだ、どこかに、かくされているのではないのか？」

「……」

「夜襲して来た曲者が、その金を奪うという目的をはたさなかったのであれば、それは、いまだに、どこかで、ねむっていることになる。そうであろう」

「……」

「そのかくし場所を、姉弟が、知っているとすれば、姉弟は、公儀隠密の襲撃からまぬがれることはできぬ」

「織田様――」

嘉七は、語気をあらためた。

「亡きあるじが、どれだけの南蛮金をたくわえ、これを人知れぬところに、隠匿して居りましょうとも、これは、われわれの詮索すべき筋合のものではありませぬ」

「それは、そうだ。楠木数馬が、成年になったあかつき、その身の所有とすべき金であろう。……わたしが、好奇心を働かせ、欲望を起した次第ではない。誤解しないでもらおう。ただ、この隠匿金に対して、公儀隠密のみならず、さまざまの人間が、野盗のたぐいまで、爪をといでいることは、事実のようだ。わたしは、それを、云って居るのだ」

重四郎が、そこまで語った時、嘉七の視線が、館跡の一角へ、鋭く、向けられた。

木立の中に、いくつかの人影が、動いたのである。

ただの動きではないことは、それぞれの間隔が、同じであることで、明白であった。

重四郎は、

「嘉七、しばらく、身を伏せていることだ」

と、云った。

「何者でございましょう」

「この館跡をしらべに来た者どもだ。およその見当はつく」

雑草の中に、身を沈めた二人は、その群れが、しだいに、こちらへ、近づくのを待った。

七人いた。いずれも、小者ていであった。

――何をさがすのか？

重四郎と嘉七が、息をひそめて、見まもるうちに、やがて、七人が一箇処に集まった。

馬蹄の音が、ひびいたのは、その折であった。

重四郎は、木立を、一気に駆け抜けて来たその一騎へ、視線を投げた瞬間、

「お！」

と、ひくく、声をもらした。

「ご存じでございますか？」

「うむ。平家館へ食客として、入っていた公儀隠密だ。黒金又八郎、という」

重四郎は、尼崎の神崎川の畔で、黒金又八郎に呼びかけられ、言葉巧みに誘われ、あやうく生命を落すところであった。

「あの男、腕も立つし、相当の利け者らしいが、隠密としては、大物ではないようだ。あのような男を、百人、いや、おそらく、二三百人も、手足のごとく働かせている人物がいる」

嘉七は、重四郎の言葉に、耳を傾けていたが、

「隠密奉行――そうではありますまいか」

と、云った。

「隠密奉行？　そのような奉行が公儀にはいるのか？」

「大坂城が、焼け落ちた直後、土井大炊頭殿が、設けられたと、ききおよびまする。……てまえが、それを知って居りますのは、隠密奉行を設けるにあたり、豊臣家にやとわれていた甲賀者、伊賀者が、配下に集められたからでございます」

嘉七は、黒金又八郎の指揮で、七人の小者が、巨きな置石を押しのけようとしているのを、

見まもりながら、告げた。
「お主は、大坂城にやとわれていた忍びの者であったのか？」
「はい。十郎次と申す甲賀者でございました」
「隠密奉行は、幕府の大目付が、兼ねたとは、きかぬか？」
「さあ、そこまでは、きき及びませなんだが……」
嘉七は、かぶりを振った。
彼方では、巨きな置石が、ついに押しのけられていた。
「ふむ――？」
黒金又八郎は、ぽっかりと空けられた穴をのぞき込み、
「掘ってみるか」
と、云った。
二人の小者が、黙々として、鍬を、うち込んで、土をはねあげはじめた。
およそ三尺も掘り下げた時、鍬が、かつんと、鋭い音をたてた。
「あったぞ！」
又八郎が、目をかがやかした。
七人の手が、力をこめて、ひきあげたのは、鉄の大函であった。
それは、あきらかに、南蛮製であった。
「よし――運べ」

又八郎は、命じた。
大函が、かつぎあげられるのを、重四郎と嘉七は、雑草の蔭から、見まもった。
「あれは、なんであろう？」
「わかりませぬ」
「館の主人が、あのような品を、庭へ埋めたのを、お主は、知らぬのか？」
「一向に――」
嘉七は、けげんの表情であった。
「尾けることにするか」
重四郎が、云った。
「てまえが、尾けまする」
「いや、それがしに、まかせてもらおう」
重四郎は、落ち合う場所をきめておくと、大函を馬の背にのせて、どこかへ運ぼうとする黒金又八郎を、尾けはじめた。
一行は、館跡の北側の林に入った。
――山をめざしているな。
重四郎は、林の中を尾けるのは、気づかれるおそれがあるので、先まわりすることにした。
一行が、林を抜け出た時、重四郎は、すでにかれらの行手にそびえる楠の喬木の蔭に、ひそんでいた。

先頭を進んでいた黒金又八郎は、その喬木のかたわらを過ぎようとして、小者の一人から、呼ばれた。

「黒金殿――」

「なんだ？」

「この大函を、掘り当てたのは、貴殿のお手柄でござろう」

「そうだ」

「お奉行は、このことをご存じないのでござろう？」

「うむ――」

「お奉行が、ご存じないのであれば……」

「なんだと？」

又八郎は、振りかえって、七人の小者を睨みつけた。

「この函の中の南蛮金を、むざむざ、公儀にさし出すのは、おろかと申せる」

すでに、七人の小者の間には、その下相談が成っていたとみえる。

「お主ら、それがしに、盗賊になれ、とそそのかすのか？」

又八郎は、両眼を、ぎらぎらと光らせた。

――妙なことになったな。

楠の喬木の蔭で、重四郎は、耳をすました。

「盗賊と申されるが、この南蛮金は、すでに所有者はないのでござろう。とすれば、手に入れた者の所有に帰すことに相成る。黒金殿は、苦心して、これを探し当てられたのでござるゆえ、わがものにされて、なんのふしぎはないと存ずる」

「おれは、公儀に奉公する者だ。私腹をこやすことなどできぬ！　お主ら、甲賀衆は、やとわれ者ゆえ、あさましゅう、金に目がくらむのであろうが、おれの指揮下に入っている上は、勝手な考えは許さんぞ！」

しかし、小者ていの甲賀者たちは、すでに、肚をきめているとみえて、叱咤されても、平然たるものであった。

「黒金殿は、いくらの手当をもらわれているのか存ぜぬが、何万両という大金を、目の前にされて――それも、わがものにして、一向にさしつかえもないものを、どうして、むざむざ、お奉行にさし出されるのか、存念のほど、われわれには、さっぱり合点でき申さぬ」

一人が、云いはると、さらに、また一人が、

「場合によっては、これを機会に、公儀隠密を辞されて、浪人されてはいかがでござろう」

と、云った。

「黙れっ！　つべこべと、余計な指図をするのは、許さぬっ！」

又八郎は、かっとなって、呶号した。

「黒金殿は、お奉行とは、あまり、仲がよろしくない、ときいて居り申すが……」

「うるさいっ！　お主らは、この函を運べばよいのだ！　すそ分けを強請するなど、もってのほかだ！　……おいっ！　運ぶのだ！」

しかし、甲賀者たちは、動こうとしなかった。
又八郎は、飼い犬に手を噛まれる憤りと苛立ちで、
「おのれらっ！　おれに、反抗するか！」
と、身構えた。
甲賀者たちは、互いに、顔を見合せた。
こういう事態になることも、予想していたに相違ない。
場合によっては、又八郎を討ちすてる相談が成っているのかも、知れなかった。
黒金又八郎としては、大坂組の組長として、白河館が隠匿した南蛮金を発見して、その手柄によって、江戸組の組長に栄進する心算であった。
目の前の金よりも、将来の権力を、又八郎は、つかみたかったのである。
又八郎の野心は、やがて、自分が隠密奉行になることにあったのである。
「よしっ！　おのれら、あくまで、おれに反抗するのであれば、ここで、勝負してくれる！　来いっ！」
又八郎は、抜刀した。
瞬間――甲賀者たちは、一斉に、闘いの陣形をひらいた。
――これは、おもしろいことになった。
楠の喬木の蔭にある重四郎は、薄ら笑った。
黒金又八郎が、はたしてどのような探索方法で、その南蛮金を、館跡から掘り出したか知らぬが、掘り出したとたんに、飢えた野犬のように、欲心をひき出した連中が、くらいついたのである。

人間のあさましさであった。
――やるがいい！　野犬どもが、獲物を目の前にして、噛み合って、躍り狂うがいい。
甲賀者たちは、黒金又八郎を仆したとしても、こんどは、互いに、その大函の中の南蛮金を争って、血みどろの殺しあいをすることは、目に見えている。
――やるがいい！
重四郎は、冷やかに見まもることにした。
又八郎は、必殺を期した甲賀忍び陣を見まわして、不敵に、にやりとした。
そして、
「よいのだな、おのれら！　覚悟をするがいい！」
と、うそぶくや、不意に、その口から、鋭い笛の音を発した。
隠密は、幾本かの義歯をはめていて、その中に、精巧な笛やら鋸やら毒薬やらを、ひそめているものであった。
舌ひとつの操作によって、その義歯をはずして、あるいは、笛を吹き鳴らして、味方の助けを呼び、あるいは、小さな鋸をひきのばして、獄舎を破り、さらにまた、進退谷まった場合は、毒薬をあおって仮死状態になるのであった。
したがって――。

又八郎が、吹き鳴らした笛の音は、ただの音ではなく、はるかな遠方までもつたわる鋭いものであった。

もとより、それを、甲賀者たちが知らぬはずはなかった。

又八郎が、援けを呼んだと知るや、忍び陣は、猶予のない攻撃をしかけざるを得なかった。凄まじい目まぐるしさで、闘いがくりひろげられた。

跳躍と突きの一手が、この忍び陣の得意とするところであった。

又八郎は、この攻撃を能く、かわした。

柳生流の腕前は、したたかなものであり、その自信があったればこそ、又八郎は、自ら高言して、甲賀者たちを対手にしたのであったろう。

このぶんでは、援けが来るまで、充分、もちこたえられるか、とみえた。

そのうちに——。

一人が、何やら合図の叫びを発するや、四人が、同時に、四方から、又八郎の足もとへ向って、おのが身を投げた。

意外な攻撃術といわざるを得なかった。

おのが足もとへ、四方から、身を投げ込んで来て、白刃を突き上げて来る攻撃術に、流石の又八郎も、あっとなって、反射的に、数尺とびあがらざるを得なかった。

それに向って、のこりの甲賀者たちは、手にしていた白刃を、手裏剣代りに、投げつけた。

その一本が、又八郎の胸いたに、ふかぶかと、突き刺さった。

鮮やかな忍者の攻撃術といえた。

地上へ落ちた又八郎は、そのまま、海老のように、身を曲げて、烈しい苦悶を示した。

次にとった甲賀者たちの行動はすばやかった。

一人が、函を乗せた馬の口をとり、一人が、いきなり、馬の臀部に、斬りつけた。

馬は、その痛みに、棹立ったか、とみるや、狂いたって、疾駆しはじめた。

口をとった者は、数間をひきずられるかたちであったが、そのうちに、たくみに、奔馬を、おのが期すところへ向って、駆けさせはじめた。

そのあとを、仲間たちが、奔った。

又八郎の合図笛をききつけて、数騎が、そこへ到着した時には、もはや、甲賀者たちの姿は、はるかな遠方へ消え去っていた。

「おっ！　これは——」

愕然となって、馬から跳んだ公儀隠密たちは、又八郎を、抱きおこし、

「しっかりせい！」

「どうしたというのだ？」

「敵は？」

と、口々に叫んだ。

又八郎は、視力を喪った双眼を、かっと、みひらいてから、

「む、むねん！」

と、ひくく、もらした。
「敵は、何者だ？　おい、黒金？」
耳もとで、叫びたてられて、又八郎は、
「あ、あいつらだ」
「あいつらとは？」
「おれが、や、やとった、甲賀の、忍び……」
「なにっ？　そやつらに、裏切られた、というのか？」
「金を――、な、南蛮金を、奪られた。白河館の、金を――」
「おい、黒金！　白河館跡から、南蛮金を発見した、というのだな？」
「う、うむ――」
「どうして、一人で、やったのだ？　一人でやるから、やとった奴ばらに、裏切られるのだ」
「お、おれは、奉行に……、おれの働きを、み、みせたかった」
「ばかな！　われら隠密組は、先駆けの功名は禁じられて居る。……いや、いまさら、こんなことを申しても、はじまらぬ。それで、奴ばら、何処へ、消え失せた？　南か、西か？」
「南だ！　……追え！　追って、と、とりもどしてくれ！」
「よしっ！」
四騎は、又八郎をその場へすてておいて、南へ向って、疾駆して行った。

野盗陣

森があった。
王朝の時代、ここに大きな御殿でも建っていたかと思われる。
深い森であったが、野の中をひとすじ、まっすぐに、往還が、森の中へ通じていた。そのむかし、公卿や姫君をのせた牛車が、わだちの跡をのこしたか、と想像される。
いまは、なかば雑草に掩われて、かよう人もないことを示している。
甲賀者たちが、奔り入ったのは、その森の中であった。
粗末な茅葺きの小屋が、木立の中に三棟ばかりちらばっていた。
その一軒の前で、馬を停めて、大函をおろした甲賀者たちは、黙々として、小屋の中へはこび入れると、板敷きに、車座になった。
しばらく、沈黙が、占めた。
やがて、一人が、
「どうする？」
と、見まわした。
「どうするとは？」

「分配のしかただ」
「われわれ五人が、公平に分ければよいではないか」
「そうは参らぬ」
「どうしてだ？　なにが、不服だ、た七？」
「よいか、ろ八。たしかに、この大函を奪ったのは、われら七人、そのうちの二人は、黒金又八郎に斬られたから、五人だ。しかし、われら京洛甲賀衆は、この森だけで、二十三人居る。かせいだ金は、これまで、二十三人が、公平に分配して居るぞ」
「それは、大名衆その他に、やとわれて、貰いうけた金のことだろう。この金は、ちがうぞ。他の者たちの、かかわり知らぬ金だ」
「そうだ、その通りぞ」
「待て、し六――」
た七と呼ばれた男は、制した。
この森をすみかとする京洛甲賀衆と称する連中は、いろは文字と数字をくみあわせて、おのが通称としているようであった。
「これだけの大層な南蛮金を、われら五人が占めれば、他の者たちに、伏せておくことはできぬ。いずれ、露見する。その時のことだ。われら五人は、裏切り者にされるぞ」
「よけいな心配をするな。これだけの大金だからこそ、われわれだけのものにしようではないか、た七。……場合によっては、この森から、おさらばすればよいのだ」

「うむ！」
「そうではないか」
し六は、皆を見まわした。
どの顔も、我欲をむき出していた。舌なめずりしかねまじい表情であった。
「よし、きまったぞ！」
し六は、にやりとした。
「さあ、蓋を開けるぞ！」
し六が、片隅から、忍び道具の鉄鉤をつかんで来た。
とたんに――。
裏口から、
「そうはさせぬぞ！」
呶号が、とび込んで来た。
五人は、愕然となって、一斉に、突っ立った。
裏戸が、蹴開けられた。
六尺ゆたかの男が、凄まじい眼光を、射込んで、
「た七！　し六！　ろ八！　おのれらは、京洛甲賀衆を裏切る所存か！　掟を破れば、どういうことになるか覚悟の上で、裏切るか！」
と、呶鳴った。

五人は、顔を見合せた。

――露見した上は、やむを得ぬ！

五人の顔面に、殺気がみなぎった。

次の瞬間――。

し六が、忍び刀を抜きざまに、裏口へ躍った。

「たわけっ！」

大兵の忍者は、一間を跳び退った。

し六は、凄まじい叫びをたてて、小屋をとび出した。

「し六っ！　ひきかえせっ！」

た七が、叫んだ。

すでに、他の二軒の小屋から、幾人かがとび出して来ていた。

し六は、小屋へ戻ると、裏戸を閉めて、

「どうするのだ？」

と、四人を見まわした。

「われに三倍する敵をむこうにまわすのだぞ！　どうするのだ？」

「やむを得ん！　闘うのだ！」

た七は、呶鳴りかえした。

たしかに、こうなれば、死力をつくして、闘うよりほかはなかった。

すでに、つ三というその大兵の男によって、他の二軒からとび出して来た連中は、五人の裏切りを、知らされて、色めきたち、たちまち、その小屋を包囲していた。

た七ら五人が、途方もない大金を、どこからか、運んで来た、ということは、京洛甲賀衆の、目を剝かせる一大事件であった。

忍者というものは、ありとあらゆる危険きわまりない仕事を引受けなければならぬ。その冒険とひきかえに得る報酬は、あまりにもすくないものであった。

次から次へとやとわれて、生命がけの仕事をやりとげても、百石の知行にも満たなかったのである。

そのすくなすぎる報酬にあまんじて、あえて死地におもむくのは、忍者が、常人には為し得ぬ業を持っているという自負にささえられているからであった。

しかし、忍者といえども、人間であった。

ひとたび、目の前に、生唾をのませる馳走を置かれれば、本能には克てぬ。

一城をも買えるほどの大金が、この隠れ地へ運び込まれた、と知れば、一人のこらず、目の色が変るのは、人情というものである。

――た七やし六に、独占されてたまるものか！

どの肚裡にも、火のような我欲が燃えた。

つ三が、おもての戸口に迫って、

「た七！　し六！　ろ八！　か九！　と二！　降参せい！　降参すれば、許してやる！　お

いっ――降参せい！　手むかっても、むだだぞっ！」
と、呶鳴りたてた。
他の者もまた、口ぐちに、
「た七！　お前は、仲間を裏切るような料簡を持って居るまいが――」
とか、
「し六！　わしは、ち五だ。お前とわしは、血をすすり合った義兄弟だぞ。忘れたか」
とか、
「ろ八、国で女房子供が待っていることを、思い出してみい」
とか、叫びたてた。
「うるせえっ！」
し六が、小屋の中から、喚きかえした。
「この南蛮金は、おれたちが、さる館の跡から、さがし出したものだ。お前らに分ける筋合の金ではねえぞ。裏切って、取り込む金じゃねえ。……勝手に、裏切り者呼ばわりをしやがるなっ！」
「弁解は、通らん！」
つ三が、声をはりあげた。
「出て来て、降参するか。それとも、小屋にたてこもって、一人のこらず果てるか、ふたつにひとつだ。十かぞえてやる。返辞をしろ！」

つ三は、ひとつ、ふたつ、と間を置いて、かぞえはじめた。
小屋の中では――。
か九という男が、急に、ぶるぶるっと身顫いして、
「多勢に、無勢だ。手むかっても、勝てやしねえ」
と、つぶやいた。
「死ぬのは、つまらん」
と二という男も、かぶりをふった。
「それじゃ、お前ら、この南蛮金を、あいつらに、取られるのを、指をくわえて、見ているというのか？」
た七が、双眼をぎらぎらさせた。
「あいつら、脅かしてやがるだけよ。そのうちに、猫なで声になって、和睦を申し入れて来やがるにきまっているんだ」
と、し六が、自信ありげに、云った。
しかし、つ三が、
「九つ！」
と、叫んだ時、か九が、突如、はねあがって、
「降参だっ！」
と、大声を発した。

「この野郎っ！」
し六が、猛然と、忍び刀をかざして、か九に、躍りかかった。
「し六！　やめろっ！」
た七が、制した時には、し六は、すでに、か九の頬から、血を噴かさせていた。
か九も、逆上して、刀を抜きはなっていた。
「十っ！」
つ三の、かぞえおわる声が、ひびいた。
とたん——。
おもての板戸が、ものすごい音をたてて、破れた。
十人ばかりが、長い太い丸太をかかえて、ぶちつけて来たのである。
し六とか九は、斬りあってはいられなくなった。
つづいて、焔硝玉が、数個、小屋の中へ、投げ込まれた。
「うっ！」
「むっ！」
五人組としては、当然予想しなければならなかったにもかかわらず、忍者にあるまじく、追いつめられた者の焦燥で、余裕をうしなっていて、この不意撃ちに、はげしく狼狽した。
「出て来るぞ！」
つ三が、にやりとした。

戸口に向っては、小弓につがえられた矢が、狙いをつけている。
しかし——。
もおっ、と渦巻く白煙の中から、躍り出て来るものは、一人もいなかった。
そこは、忍者のことであった。
いずれも、はねあがって、天井へやもりのように吸いつき、竹筒を、茅葺きの屋根へ突き通して、口にくわえたのである。
煙が消え去ると、五人は、とび降りた。
「こんどは、火攻めかのう」
と二が、ひとつ胴ぶるいしてから、云った。
「安心しろ！　ここに、この大函がある限り、火攻めはして来ねえ」
し六が、云った。
火攻めをしかけてこないとなると、包囲したまま、こちらの飢えるのを待つことになるのであろうか。
小屋の中に、食物は乏しかった。三日も四日も、たてこもるわけには、いかなかった。
しかし、降伏をがえんじない上からには、たてこもるよりほかに、すべはなかった。
かれらのうちに、一人でも、軍略というものを心得ている者がいたならば、この危機を巧みにきり抜ける策をめぐらすことができたであろうが、あいにく、頭脳は単純であった。
包囲陣と、妥協するとみせかけて、その裏をかくごとき策謀は、全く思いつかなかった。

たてこもって、時折呶鳴りあうだけであった。
また、包囲陣の方も、口舌を用いておびき出す知恵を持たなかった。
やがて、日が昏れた。
五人組は、小屋の中を、しんの闇にして、ひそと、息をひそめていた。
包囲陣も、じりじりしながら、小屋をにらんでいるばかりであった。
月光が、あかるさを増した頃あい——。
遠くから、馬蹄のひびきが、つたわって来た。
この森へ向って、近づいて来る。
「なんだあれは？」
包囲陣は、耳をすました。
この森は、そのむかし、羅生門の鬼が棲んでいた、という伝説があり、ここにふみ込むと、祟られる、と地下人たちはおそれて、近づかぬのであった。
その伝説を利用して、京洛甲賀衆は、ここを、すみかとしていたのである。
およそ、二十騎あまり、一列になって、月下の野を、まっしぐらに、横切って来た。
森を一町あまり前方に見る地点で、先頭の者が、たづなをひいた。
じっと、森の中をすかし視ていたが、
「ちがうようだ。ここではなかろう」
と、云った。

黒金又八郎を手負わせて、南蛮金を奪い去った京洛甲賀衆を、さがしもとめて、八方を駆けまわっていた公儀隠密の一団であった。
すぐうしろにいた者が、
「ふみ込んでみては、どうだ？」
と、云った。
「いや——、鬼に祟られるのは、好かぬ」
隠密らしくないことを、云った。
「ばかな！」
二三人が、笑い声をたてた。
と——。
その折、野を流れる小川沿いに、ひとつの人影が、こちらへ近づいて来た。
老爺のようであった。
「おい、おやじ！」
しんがりにいる者が、大声で呼んだ。
老爺は、立ちどまって、怯えたように、しきりに、すかし視ていたが、
「なんで、ござりましょうか？」
「お前は、この在所に住む者だろう？」
「はい——」

「あの森の中のことを知って居るか？」
「はい。鬼が棲んで居ります」
「鬼ではない、人間が棲んでいるだろう。忍び者らしい徒党が、すみかとしているだろう？」
「いえ、人間などは、棲んでは居りませぬ。鬼がいるのでございます。入れば、必ず、祟られます」
「鬼火のようなものが、見えたことはないか？」
「森の中は、いつも、暗闇で、うす気味わるう、しずかでございます」
隠密団は、老爺の言葉を、信用した。
「ここではなかろう。忍者というやつは、案外、縁起をかつぐ」
二十騎は、馬首をめぐらした。
老爺は、遠ざかって行くその騎影を見送って、
「あれは、公儀隠密どもだな」
と、つぶやいた。
老爺は、嘉七であった。
嘉七が、ここへ姿を現わしたのは、偶然ではなかった。
嘉七は、鬼の森の中へ、ふみ込む目的でやって来たのであった。
伏見の町の旅籠で、待っていた嘉七は、やがて、やってきた織田重四郎から、黒金又八郎を手負わせた小者五人のあとを尾けて行くと、鬼の森の中へ消えた、と報されると、

「てまえに、おまかせ頂きましょう」
と、ひき受けたのであった。
嘉七は、その前身は、甲賀の上忍であった。
京洛甲賀衆という存在を、知っていたのである。
すでに、二十年も前から、甲賀の里とは、縁を絶ち、忍者仲間との交流を、自分の方から拒否してしまっているとはいえ、甲賀の里に於て幻夢十郎次の名は、まだ消えてはいないはずであった。
甲賀の里で、幻夢家といえば、頭領格の上忍であった。代々、十郎次を名のり、その威光は、絶対のものがあったのである。
嘉七は、ある偶然の機会から、忍者たることに、絶望して、その名をすてたのであった。
現代流の表現をつかえば、嘉七は、忍者たる前に、人間でありたい、と自覚したのであった。
しかし——。
このような事態に、出会うと、嘉七は、幻夢十郎次という過去のおのれが、甲賀衆に対して、充分、威力をそなえていることを、考えたのである。
嘉七は、なんのためらうところもなく、まっすぐに、鬼の森へ向って、足をはこんで来たのであった。
忍者のかくれ住む場所へ、ふみ入るのであった。不意の襲撃をさけるふみ込みかたをしなければならなかった。

嘉七は、森に沿うて、草地をまわって行き、見当をつけて、身軽く、跳んで、わが身を木の上のものにした。

木立に歩み入ることは、危険であった。茂みの中には、おとし穴や、けもの獲りの罠が、無数にしかけてあるはずであった。

嘉七は、樹から樹へ、むささびのように、とび移った。

この音を消す跳躍は、よほどの術と体力をそなえていなければならぬ。

——わしも、老いた。

嘉七は、途中で、息切れをおぼえた。

やがて——。

月明りに、浮きあがる三軒の小屋を、みとめた。

多数の人影が、一軒の小屋を包囲している光景を見わけて、嘉七は、ただちに、これがどういう状況か、さとった。

——仲間同士が、対立している！

このことは、こちらにとって、好都合といえた。

嘉七は、地上へ、とび降りると、すたすたと、その場へ、近づいて行った。

「だれだ？」

鋭い誰何の声が、あびせられた。

「支配の上忍に、会おう」

嘉七は、おちついた声音で、云った。

「何者だ？」

「会えば、判る」

「支配の上忍は、甲賀へもどられて居る。……おいっ！　おのれ、何者か、名のれ！」

「幻夢十郎次」

「なにっ?!」

前に立ちはだかった下忍は、はげしい愕きをみせた。

さっと、奔って行って、仲間に、その旨を告げるのを、嘉七は、眺めやりつつ、

——幻夢十郎次の名は、若い下忍に対しても、まだ威力をもっているようだ。

と、満足をおぼえた。

数人が、嘉七の前に進んで来た。

「幻夢十郎次とは、まことか？」

その声は、つ三のものだった。

嘉七は、見わたして、

「下忍ばかりだの」

と、云った。

「おいっ！　わしらをたぶらかしにやって来た者なら、正体が露見した時、どうなるか、承知しているのだろうな」

つ三が、睨みつけた。

「態度に気をつけるがいい。下忍のぶんざいで、幻夢家のあるじに、そのような態度をみせると、お前の方こそ、あとで、おのれでおのれの舌を切らねばならぬぞ」

嘉七は、云った。

「贋者（にせもの）かも知れぬではないか！」

「疑うなら、なんでも、質問してみよ」

「よし！　幻夢家の庭にある一番大きな樹は、なんだ？」

「樟（くすのき）」

「その樹の根かたには、文字が刻んである。なんという文字だ？」

「刃の下の心」

「うむ！」

もはや、一同には、疑う余地はなかった。

幻夢十郎次は、二十年前、甲賀の里を出て行き、一度も、帰って来てはいなかった。他の普通の村ならば、それだけの永い歳月、消息不明であれば、生存しているなどとは考えず、墓までもつくってしまうであろう。忍者の里では、五年が十年、いや二十年が三十年、消息を絶っても、それをふしぎとはせず、その家をつぶすことはしないのであった。いつかは、必ず、生きて還って来るものと、信じていた。

ただ——。

幻夢家は、甲賀の里を統率する家であり、当主自身、他郷へ出て行って、永い歳月を、消息不明ですごすことは、ならわしになかったのである。

幻夢十郎次は、甲賀の里を動かず、忍者を育てあげて、働きに送り出す地位にあった。

したがって、当代にいたって、十郎次が、出て行ったまま、消息を絶ったことは、他の者の場合とちがって、死去したと解釈せざるを得なかったのである。

つ三はじめ、面々が、前に立った老爺を、疑ったのは、当然であった。

問答によって、まぎれもなく、その人、と判って、一同は、その場へ、ひざまずいた。

嘉七は、指さして、

「あの小屋を包囲して居るのは？」

と、問うた。

「五人の者が、裏切り行為をいたし、たてこもって居ります」

つ三が、こたえた。

「南蛮金を詰めた大函（おおばこ）をはこんで来て、分配をこばんだのであろう？」

「その通りにございます」

「わしが、なだめよう」

嘉七は、小屋へ向って、歩き出した。

つ三が、ぱっと起（た）つと、さきに走った。

「た七！　し六！　幻夢十郎次様が、お見えになったぞ！　神妙にせい！」

そう叫びかけると、小屋の中から、
「だまされぬぞ！」
と、呶号が、かえされた。
「嘘ではないぞ！　いま、入って行かれる！　手向いするな！」
嘉七は、小屋の前に立つと、
「幻夢十郎次じゃ。……入るぞ！」
と、云った。
「まことか？」
「疑うなら、わしが入ってから、問答せい」
嘉七は、土間に足を入れた。
五人は、緊張し、身がまえて、老人を凝視した。
上忍と下忍の間には、いささか大仰な云いかたをすれば、侍大将と足軽ほどのへだたりがあった。
すくなくとも、下忍にとっては、上忍は、侍大将よりも畏怖すべき存在であった。
五人は、なかば疑いつつも、おそれをこめて、嘉七を見まもらざるを得なかった。
嘉七は、平然として、板敷きへ上って来ると、
「おのれら下忍が、謀叛をくわだてるとは、笑止！」
と、きめつけた。

「謀叛ではござらぬ！」
し六が、叫びかえした。
「謀叛でなければ、なんだ？」
「こ、この函は、わしら五人が、さる館跡からさがし当てたものでござる。されば、これを分配せねばならぬ義理あいは、ござるまい。これは、いわば、美しい女子のようなもの。一同の共有などには、でき申さぬ」
し六としては、せい一杯の巧妙に条理を立てたつもりであった。
「たわけたことを申す！」
嘉七は、冷笑した。
「一同うちそろって、水なき山を越えたとする。お前ら五人が、物見に出て、たわわに実った梅の木を見つけた。三日も一滴も飲まぬ一同が、あとに待っているのを知って居りながら、お前ら五人は、その梅の木を占有しようと、申すか！」
「……」
「こたえられまい」
「し、しかし――」
「云うな！　弁解は、ききとうない。……それよりも、お前らがその函をさがしあてたのは、白河館の跡であろうがな」
「ご存じか？」

「白河館の跡から掘り出された宝ならば、当然、それは、白河館の人に帰する」
「白河館は、すべて死に絶えて、誰も生き残っては居らぬ、ときき申す」
「それが、生き残って居ったら、どうする？」
「まことでござるか？」
「遺児二人が生き残って居られるぞ」
「……」
「教えてつかわそう。この幻夢十郎次が、白河館が焼け滅びるまで、やとわれて居ったのだ」
「げ！」
「わかったか！」
「わ、わかり申した」
「わかったならば、それでよい。その函の蓋を開けるがよい」
そう云われて、五人はまだ、函の中の南蛮金をたしかめていなかったことに、気がついた。
五人は、顔を見合せた。
嘉七は、腕を拱いて、待った。
「よし！」
た七は、仲間たちに目くばせして、函に近づいた。
外を包囲した者たちが、戸口に近づくや、し六とろ八が、
「寄るなっ！」

と、悪鬼のように、喚きたてた。
我欲は、まだ、凄まじかった。
た七によって、函の錠前が、こわされ、蓋が、ひきあけられた。
皆の視線が、その中へ、集中した。
「な、なんだ、こりゃ！」
し六が、あきれ声をあげた。
函の中に詰めてあったのは、南蛮金ではなく、大きな三個の石塊であった。
「畜生っ！」
ろ八が、函ごと、蹴りかえそうとした。
「待て！」
嘉七が、制して、のぞき込み、その石のひとつを、把りあげた。
石の裏には、「み」という一字が、刻まれていた。
嘉七は、次の石を持ちあげて、裏がえしてみた。「か」という一字が刻んであった。
三番目の石に刻んであったのは、「が」という一字であった。
「み、か、が――」
嘉七は、呟いた。
「いったい、こりゃ、なんの意味であろうな？」
た七が、小首をかしげた。

嘉七は、ゆっくりと立ち上ると、
「生命がけで掠奪したのが、石であったとは、気の毒であったの」
と、云いすてた。
外へ出て歩き出すと、つ三が、いそいで近づいて来た。
「幻夢様。甲賀へ、どうして、おもどりではありませぬのか？」
「わしは、忍者であることを、二十年まえに、すてた」
「すてられたと？」
「いまは、喪家の犬じゃ。……ごめん」
遠ざかる嘉七を、甲賀衆は、見送ったが、いずれも、
——あれは、まことの幻夢様か？
と、疑惑の目つきになった。
「つ三！」
三人ばかりが、寄ると、
「あれは、まことの幻夢様ではないのではないのか？　たかり者ではあるまいか」
「たかり者とすれば、生かしてはおけぬぞ！」
「彼奴、石ころとみて、さっさと、逃げたのであろうが——」
気色ばむ三人を、つ三が、
「すてておけ。幻夢様であろうとなかろうと、もう、どうでもよいわ。……南蛮金と思うたのが、ただの石ころであったとは、ばからしゅうて、話にならぬ」
「では、た七らも、すてておくのか」
「いや、裏切り者の彼奴らは、そのうちに、しまつしてくれる」
つ三は、にくにくしげに云ったことだった。

大坂城

それから、数日後——。
織田重四郎と嘉七は、大坂への道を、辿っていた。
大坂城へ忍び込む。
重四郎は、その決意をしていた。
白河館跡から、黒金又八郎が、あの函を掘り出したということが、重四郎にその決意をさせたのである。
公儀隠密である黒金又八郎が、どうして、白河館跡に、南蛮金が、隠匿されている、とさとったのか。
その函の中には、南蛮金はなかった。しかし、謎めいた三文字が記されてあった。
その三文字を、重四郎は、嘉七からきくと、

「かがみ」

と、読んだ。

かがみ、とは、すなわち、鏡のことに相違ない。

ただの函ではなかったのである。

これが、館跡に埋めてあることを、黒金又八郎は、どうして、さとったのか？

黒金又八郎は、大坂隠密組の長であった。その地位によって、隠匿の秘密を知ることができたに相違ない。とすれば、大坂城内に、忍び込めば、何かの手がかりの綱がつかめるのではないか。

そして、その手がかりの綱をたぐれば、白河館を夜襲して、主人夫妻を惨殺した下手人が、何者であるか、つきとめることができるのではあるまいか。

重四郎は、杉山道満の言葉を思い出しながら、

——やろう！

と、決意したのであった。

「老人——」

重四郎は、嘉七に、たずねた。

「大坂城には、牢獄が設けられて居るのではないか？」

「左様——。地下牢が、つくられて居ることを、耳にしたことがございます。太閤時代に、つくられた由で、勘気にふれて、入れられたおさむらいも、かなりいたらしゅうございます。

……どうなさいます？」

「地下牢があれば、大坂隠密組によって捕えられた囚徒が、幾人か、いるであろう。その中に、白河館と何かの縁を持った者が、居るかも知れぬ」

「……」

嘉七は、重四郎の言葉をきいて、急に、鋭い表情になって、考えはじめた。

「黒金又八郎は、その囚徒から、館跡に、南蛮金が埋められている、ときき出したのかも知れぬ。あるいは、他の、何かの書類に記されているのを読んだとも考えられるが、そういう書類があったならば、ずっと以前に、あの函を掘り出しているはずだ。わたしは、捕えた者の口から、きき出した、と考えたい」

「しかし、ご主人の内密の下知を受けて、働いて居ったてまえ自身が、あの函のことは、知らされて居らなかったくらいでありますゆえ、他に、秘密を知っていた者があろうとは、考えられませぬ」

「老人——」

重四郎は、嘉七を見やって、微笑した。

「燭台の下は、はなれた場所よりも、かえって暗いものだ。お主が、気がつかなかったあるじの秘密の行為があったかも知れぬ」

「はい、そう仰言れば、そうでありましょうが……」

嘉七は、記憶の糸を、白河館が盛んな威勢を示していた頃へ、たぐった。

「白河館のあるじは、異邦人とのつきあいは、親密であったのではないのか？」
「堺にあった屋敷へは、月に二度ばかり行かれました。その時は、いつも、お一人で行かれましたゆえ、どのような数日をすごされていたか、てまえも存じませぬが……、あるいは、異邦の商人たちとつきあって居られたか、と想像できまする」
「ふむ――」
「あ――思い出しました。主人は、堺の屋敷から帰られた時は、必ず、珍しい南蛮の品を持参なさいました。きっと、オランダ人やポルトガル人から、お貰いになったのだと存じます」
「そのオランダ人やポルトガル人の中には、商人に化けた切支丹伴天連がいたのではなかったか？」
「さあ、そのようなお話は、一度も、主人の口からきかされては居りませなんだが……、なかったとは申せますまい」
「隠密奉行支配下に、江戸組とか大坂組とかを組織した主たる目的は、浪人狩り、外様大名の動静探索ではなく、隠れ切支丹を捕えるのが、主たる目的であろう、と想像される。……黒金又八郎は、異邦の商人を、日本へ布教に来た切支丹伴天連と看破して、捕えた。そして、その者の口から、白河館のあるじのことをきき出した」
「すると、わが主人は、切支丹信徒であった、と想像なさいますのか？」
「あるいは――」
「いえ！」

嘉七は、つよく、かぶりを振った。
「主人は、南無妙法蓮華経を、つねに、お唱えでございました」
「わざとであった、と考えられぬか？」
「そのようなことは、考えられませぬ」
嘉七は、つよく否定したが、「あ――」と思い出し、
「そう申せば、奥方様は、あるいは、切支丹であられたかも知れぬ、と思い出される二三のふしがございます」
「そうか。……いずれにしても、お主のあるじは、異邦人と親交があったに相違ない」
重四郎は、前方に、眼眸を据えて、
「妙なものだな」
と、つぶやいた。
「なんでございましょう？」
「わたしは、姉弟の仇討の助太刀に、ただ、五百両という金に目がくらんで、やとわれただけの浪人者であった」
「……」
「それがいつの間にか、姉弟の身内のように、必死になって、敵の正体をつきとめようとして居る」
「てまえが、波乗り佐兵衛に、たのんだばかりに、貴方様を、このような状態に、引き入れ

てしまい、申し訳なく存じて居ります。しかし、貴方様に味方して頂けることは、ご姉弟にとって、この上の幸せはございませぬ」

「老人――」

重四郎は、眼眸を、遠くへ置いた。

「わたしは、静香殿を、忘れ得ぬ女性にして居る」

「え？」

「白状しよう。お主が留守中、姫路の家に身を寄せたわたしは、ある夜、静香殿を、手ごめにしかかって、こばまれた。その時から、女性を愛する、ということを、わたしは、知った」

「……」

「わたしが、こうして必死になって、姉弟の両親の敵を、さぐり当てようとしているのも、打ち明けるならば、恋のためだ」

「……」

「このことは、はっきりと、お主に、つたえて置く」

嘉七は、しばらく沈黙を置いてから、

「よう打ち明けて下さいました。てまえの口からは、お嬢様と貴方様が、夫婦になられますよう、おすすめはできませぬが、お嬢様ご自身のお気持次第では、そうおなりになっても、反対申し上げるものではございませぬ」

「老人――、忝ない」

「お礼を申されるのは、いささか、早うございましょう」

嘉七は、笑った。

重四郎も、苦笑した。

大坂の市中に入ると、嘉七は、重四郎に待っていてもらいたい旅籠を告げておいて、何処かへ、消えた。

旅籠は、道頓堀をうしろにしたところにあった。左右も、向いも、みな旅籠であった。

重四郎は、昏れがたのあわただしいおもてのにぎわいを、二階の出格子から、見下ろしていた。

ふと――。

向いの旅籠へ入ろうとする男女一組の旅人に、目をとめて、はっとなった。

女人は、八千代姫であった。ともなっているのは、兵庫の浜辺で知りあった金井半兵衛という浪人者に、まぎれもなかった。

――あの男、姫を姫路城へかえしてはくれなかったのか。

憤りが、全身を熱くした。

しかし、考えてみれば、行きずりの素姓の知れぬ浪人者に、姫の身柄をたのんだこちらが、あやまっていたのである。

――あの男が、約束を破ったからといって、憤るのは、まちがっている。こちらが、軽率であったことだ。

それにしても、八千代姫は、なぜ、金井半兵衛について、大坂まで、やって来たのか？
この重四郎に会わせてやる、と半兵衛に、云われて、信じたのか？
そのうすぎたない旅籠の一部屋に通った八千代は、どうしても、このような下級民のくらしになじめぬ、こわばった面持で、片隅に、坐った。
厠に行っていた金井半兵衛が、入って来て、
「当分、この旅籠で、すごすことになろうな」
と、云った。
八千代は、心細いまなざしを、半兵衛に当てた。
「そなたが、城の奥で、たくさんの女中にかしずかれていたのも、人生なら、こうして、臭気のこもったぼろ部屋ですごすのも、人生だな」
半兵衛は、笑いながら、云った。
この男は、八千代の胸中を、すっかり見通してしまっているようであった。
「……」
八千代は、俯向いた。
この気丈夫な姫君が、口数すくなくなり、重い気鬱にとじこめられた風情を、半兵衛は、終始平然として眺めている。
「そなた、姫路城内が、恋しゅうなったのではないか？」
半兵衛は、たずねた。

「いえ――」
八千代は、かすかに、かぶりを振った。
「恋しゅうなったのであれば、遠慮なく、云ってもらおう。いつでも、送りとどける」
ぬけぬけと云う半兵衛に、八千代は、憤りをおぼえた。
この男にけがされてしまった身を、どうして、おめおめと、姫路城へ、もどすことができるものであろうか。
なんという冷酷な言葉を、吐く男なのであろう。
この男の性情は、心底から酷薄にできているに相違ない。
「わたくしは、もう、貴方に、従うて生きるよりほかに、すべを知りませぬ」
忘れようとして忘れられぬ織田重四郎は、もはや手のとどかぬ彼方に遠ざかってしまっていた。たとえ、めぐり会うても、こちらから、身をさけなければならないのだ。
八千代は、半兵衛が、憎かった。
どれほど、憎み、のろいつづけたろう。
しかし、大坂までの道中、幾日か泊りを重ねて、夜毎、身をまかせているうちに、八千代自身もどうすべくもない絆で結ばれてしまうことを知ったのである。
これが、男女というものの、理性では割りきれない因果な縁であろう。
もとより、半兵衛の方では、八千代の憎悪を、知りすぎるほど知っているに相違なかった。
それでいて、平然として、連れているのであった。

牀に就けば、そうきめているように、必ず八千代のからだを求め、執拗に愛撫した。
そのからだは、二十歳前の稚いものではなかった。本来ならば、疾くに、嫁いで、子供が二人ばかりは生れている年齢であった。
八千代の肌は、熟していたのである。
憎みつつも、その肌は、愛撫によって、急速に、花ひらこうとしていた。
八千代は、ごろりと仰臥して、まぶたをとじた半兵衛を、見まもった。
「この大坂で、どのようにして、すごされるのでありましょう？」
「さあ、まだ、考えて居らぬが……、人間がひしめきあっている場所では、すこし知恵を働かせれば、悠々とくらせるものだ」
半兵衛は、ぬけぬけとこたえた。
「悪事を働くのは、お止しになって下さいませ」
「悪事か——。ははは……、悪事とはなんであろうな。こちら側から眺めると、悪事だが、あちら側から眺めると、善事かも知れぬ。……たとえば、庶民をいじめ、だまし、こき使って、大金を貯えた商人がいる。こいつの金を、盗みとる。盗みは、たしかに、悪事であろう。ところが、この商人をうらんでいる庶民からみれば、この盗みは、やんやと喝采すべき快事に相違ない。……世の中に、真の悪、真の善などというものは、あり得ぬ。人間のその立場その時の都合で、どうでも、解釈できる」
「……」

「わしは、何事にもとらわれぬ、水の流れのようなすごしかたを、信条として居る。……いやなものはいやだとはっきりきらう。好きなものなら、遠慮せずに取る。……身分の上下などに、気がねせず、尊びも、さげすみもせぬ。将軍の地位だとか、大名という身分だとかは、天がきめたものではない。人間が勝手にきめたものだ。時世が変れば、ひっくりかえるだろう。……わしは、そんな階級や、世間のしきたりなどに、煩わされずに、生きたいように、生きる」
「わたくしを、手ごめにされて、もてあそばれたのも、そのためですか？」
八千代は、半兵衛の寝顔を、にらんだ。
半兵衛は、薄目をあけて、八千代を見上げた。
「そなたは、美しい。気品がある。男ならば、誰でも抱きたくなろう」
「本能のままに、したいことをするのは、けだものと変りはありますまい」
「人間は、万物の霊長などと申すが、他愛もない誇示だな。べつに、けだものと、変っては居らぬ」
「そんなはずはありませぬ！　人間は、抑えるべきことを抑える理知を持って居ります」
「ははは……、はたして、そうかな。……そなた、昨夜あたりは、わしに抱かれると、とりみだしはじめたぞ」
「……」
八千代は、狼狽した。

「まあ、よい。……わしに、ついて来るからには、わしのやり方を、黙って見て居るがいい。そなたを、すてようとは、申して居らぬ」

「家をお持ちなされては――？」

「この大坂に、長く住むつもりはない。あきたら、ほかへ往く」

「……」

半兵衛は、いきなり、猿臂をのばして、八千代の手をつかむと、ずるずると、ひき寄せた。八千代に、抵抗する力はなかった。

同じ頃あい――。

嘉七は、堺との中間にあたる一廓にかたまった、おそろしくうすぎたない貧民窟に、入って行っていた。

埋立地で、はじめは新田にするつもりであったろうが、土がわるくて、放棄されていた地帯であった。

豊臣氏が滅亡した直後、枯葉が吹きだまるように、貧しい者たちが集まって来て、小屋を建て、その聚落がしだいにふくれあがったのである。

嘉七は、石蹴りをしてあそんでいる子供たちのそばへ寄って、

「苦之市という者の家は、どこかな？」

と、たずねた。

「そこをまがって、まっすぐ行った、いちばん奥の家じゃ」

「そうか、ありがとう」

「おじいさん」

かれんな面立の女の子が、まぶしそうに、嘉七を仰いで、

「苦之市さんは、病気だよ」

と、告げた。

「そうか。寝ついているのじゃな？」

「うん――」

嘉七は、その小屋の前に立った。

破れ板戸が傾いて、風でゆれていた。

嘉七は、その板戸を、そっと開いてみた。

たった一間しかない小屋であった。

板敷きに、ぼろ夜具が、人の寝ていると思えないくらい、ぺちゃんこになって、延べられている。

「苦之市――」

嘉七は、呼びかけた。

「わしだ。幻夢十郎次だ」

それをきくと、夜具が、むくっと動いた。

首が、あげられた。

なんとも、のっぺりした顔だちであった。

年齢はさだかではないが、嘉七が知りあった二十年前から、同じ顔つきをしている男であった。

嘉七のような一流の忍者が、はじめて出会った時、この男に、まんまと、だまされている。女装をしていたのである。

嘉七は、しばらくは、女だとばかり信じきっていたのである。また、事実、美しかったし、肌理もこまやかで、なよなよとした姿態は、遊女以上になまめかしかった。媚のつくりかたも、堂に入ったものであった。

苦之市、というのは、もとより本名ではなかった。女という字を、ばらばらにすれば、くノ一、となる。

苦之市は、伊豆の忍者であった。

嘉七は、起き上ろうとする苦之市を、とどめて、

「やつれたのう」

と、笑った。

「おはずかしい」

苦之市は、掛具で、顔をなかばかくした。重患に苦しみながらも、色っぽさを忘れぬ男であった。

「怪我か？」

「はい。つい、あたしとしたことが、不覚をとりまして……」

「刀か、槍か、矢か？」

「いえ、手裏剣に、やられました」

苦之市は、悲しげな目つきで、嘉七を仰いだ。

「手裏剣？　対手も、忍びか？」

「はい」

「毒が、塗ってあったのか？」

「はい――」

「それは、気の毒だったのう。しかし、まあ、生命に別状なかったのは、さいわいであった」

「幻夢殿、あたしが、むざと生命など、落して、たまりますかねえ。まだまだ、これであと十年くらいは、美しゅう装うて、男をだまさなければ……」

苦之市は、女装して、好色な男たちに、ながし目をくれて、あとをつけさせ、近くの旅籠につれ込むと、その懐中を頂戴して、姿をくらます、という仕事を、ここ数年つづけていたのである。

「ははは……、お主は、化物だからの。七十になっても、同じ顔つきをして居るわさ」

「ありがとう存じます」

「ところで、さわが、たずねて、来たろう。実は、わしが、お主をたずねさせたのだ」

嘉七とさわは、波乗り佐兵衛から莫大な金を受けとるべく、姫路から大坂へ出て来たので

あったが、ついに、佐兵衛が、約束の場所に現われず、そこに金もとどかなかったのである。そこで、嘉七は、ひとまず、姫路へひきあげたのであるが、その時、さわには、この苦之市をたずねさせたのであった。

「幻夢殿――」

苦之市は、ちょっと、うらめしそうな表情になり、

「さわさんが、たずねて来られたために、あたしは、このように、あわれな姿になったのでございますよ」

「どうしたというのだ？」

嘉七は、眉宇をひそめた。

「あたしは、さわさんから、白河館のご姉弟のお話をきいて、ふと、思い当ることがございました」

「……？」

「お前様が、白河館の郎党をなされていた頃から、あたしは、館には、莫大な南蛮金が、かくされている、という噂を、小耳にはさんだことがありました。……去年のこと、あたしは、大坂城にやとわれている伊賀衆の一人に、めぐり会った時、その伊賀衆から、小盗人などやらずに、もとの忍びにかえって、大きな仕事をやらぬか、と相談をもちかけられたのでございます」

「……」

「それは……、つまり、白河館の隠匿金のことでございました。実は、大坂城内にいる公儀隠密衆が、必死になって、それをさがして居るのだそうで、その伊賀衆は、そのことを、かぎつけたのだ、と申します」

「ふむ！　それで……？」

嘉七の顔が、にわかに、ひきしまった。

「あたしは、その時は、伊賀衆に、仲間になることを、ことわりました」

苦之市は、話をつづけた。

「ところが、さわさんが、たずねて来て、白河館のご姉弟の敵討のことを、話されるのをきいて、あたしは、もしや、と思い当りました」

「もしや、とは？」

「つまり……、七年前に、白河館が、何者かに、襲撃されて、ご一族が滅亡されたのは、大坂城内の公儀隠密衆のしわざではあるまいか、と――。以前、お前様から、敵は、伊丹の平家館のあるじだ、ときかされて居りましたが、そうではなく、公儀隠密衆が、隠匿金を奪うために、襲撃したのではあるまいか。あたしは、さわさんに、そう云いました。すると、さわさんが、是非、一緒に、大坂城へ忍び入って欲しい、と申されるので、あたしは、もし隠匿金をさがしあてた時、千両ばかりもらえるならと、それを条件にして、ひさしぶりに、忍びにかえることにしました」

「……」

「ところが、さすがに、大坂城内の警戒はきびしゅうて、さわさんとあたしは、たちまち、発見されてしもうて、ばらばらにわかれて、遁げ出したのでございました」
「では……、さわは、殺されたのか？」
「それは、わかりません。……あるいは、殺されたか。もしかすれば、捕えられたか……」
ぶじに遁げ出せたのであれば、すでに、嘉七の前に現われているはずであった。
「そうか。判った。お主には、気の毒なことをした」
「幻夢殿――。お前様は、その隠匿金が、欲しゅうて、白河館の郎党になられて居りましたのか？」
苦之市は、きいた。
「わしは、あの頃から、もう我欲というものは、すてて居った。そんな莫大な南蛮金が、どこかにかくされていようなどとは、ついぞ、今まで知らなかった」
「お前様なら、さがし出せるのでは、ありますまいか」
「苦之市、お主は、そんなに手負うて苦しんで居りながら、我欲だけは、まだ、盛んだの」
嘉七は、笑った。
「人間万事金の世の中でありますわな」
「そうとばかりは、限らぬぞ。……ところで、お主をそそのかした大坂城の伊賀衆は、なんという名だ？」
「草兵衛、という男でございますよ」

「お主に打明けぬ白河館の秘密も、知っているようであったかな？」
「さあ……？　ともかく、草兵衛は、公儀隠密衆が、どのような働きをしているか、それは、よく知っているようでありましたけど……」
「そうか。……養生肝心だな、苦之市」
嘉七は、そう云って、腰を上げた。
「幻夢殿――」
苦之市は、目をすがりつかせた。
「あたしは、すぐ、癒りますゆえ、役立てて下さいませぬかえ？」
「癒ったら、わしと一緒に、また、大坂城内へしのび込む勇気があるか？」
嘉七にそう云われて、苦之市は、ちょっと、まばたきしたが、
「隠匿金の一部を、くれてやる、と約束して頂けるなら――」
「大坂城へ、もう一度、しのび込むことを辞さぬ、というのだな」
「幻夢殿。これで、苦之市は、忍びでございますよ」
「そうか。……起き上れるようになるには、あと何日ぐらい待てばよいかな？」
「さあ、五日もお待ち頂きましょうか」
「五日か。……不死身だの、苦之市」
「幻夢殿も、そのお年で、大坂城へ忍び入ろうと申される。この苦之市は、幻夢殿より、二十も若いのでございます」

「では――待っている」

嘉七は、その貧民窟を出た。

尾けている者はないか、と要心ぶかく、あたりに気を配ってから、嘉七は、目立たぬ老人に還って、とぼとぼと、歩き出した。

――さわが、大坂城内に、捕えられているかも知れぬ？

すててはおけぬことであった。

さわは、その父親が、白河館に仕えていたという縁で、味方についてくれた女であった。

嘉七としては、さわを犠牲にすることはできなかった。

――わしの生命をすてても！

嘉七は、さわの生死をたしかめ、生きて捕われの身になっていれば、救い出そうと、覚悟をきめた。

夜もかなり更けてから、嘉七は、重四郎の待つ旅籠へ、入った。

嘉七は、苦之市という女装忍者のことを告げ、さわの不運について、相談した。

重四郎は、なんのためらいもなく、

「おれも、一緒に行こう」

と、云った。

「危険なことでございます。生きて脱け出せるのは、八に二の割合かと存じます」

「のりかかった船だ。乗らずばなるまい」

重四郎は、笑って、こたえた。

嘉七は、感動して、両手をつかえ、礼をのべた。

重四郎は、

「危険ついでに、大坂城内で、つきとめたいことがある」

と、云った。

「なんでございましょう？」

「隠密奉行、という存在だ。いまは、大坂城内に、本拠を置いていると考えられるのだ。これが、どれほどの力をもっているか、つきとめておきたい」

「隠密奉行が、白河館の南蛮金のことも、調べあげたのでございましょうね」

「おそらく、そうであろう。隠密奉行は、日本全土にかくされた金を奪いあげるのが、役目であろう」

「では、さわさんも、隠密奉行に捕えられて居るに相違ございますまい」

「対手にとって、不足はない敵だ」

「まさしく」

大坂城内――。

豊臣家のものであった頃は、そこは、淀君以下千余の女性が住んでいた一廓であった。

いまは、松の疎林になり、その中に、ごく目立たぬ建物が、見える。

その建物のひとつで、公儀隠密奉行・赤松丹波は、夥しい記録類を左右に置いて、それを、

ひとつひとつ、丹念に調べていた。

鼻梁秀でた見事な風貌であり、それにふさわしい恰幅であった。

外様大名はもとより、譜代大名からも、非常なおそれを抱かれている。

いや、閣老さえも、この人物の言葉は、やすやすとは、きき流すことはできないのであった。

ある大目付は、

「われら大目付が、隠密奉行から命令されるとは何事であろうか」

と、憤然として、致仕を願い出た、という話があるくらいである。

庭に、人の気配が近づいた。

赤松丹波は、綴りものから顔をあげた。

「何用だ？」

「黒金又八郎、京洛甲賀衆の裏切りにより、手負うて、先刻息をひきとりました」

「何の理由で、裏切られた？」

「黒金の遺言によれば、伏見の白河館跡から掘り出した南蛮金を、甲賀の忍びどもに、裏切られて奪われた由にございます」

「黒金が、白河館から、南蛮金を、さがし当てたと？　ばかな！」

赤松丹波は、いかにもばかばかしげに、吐き出した。

「白河館跡に、南蛮金など、埋められては居らぬ」

「は――？　しかし……」

「黒金は、いったい、何を掘り出したのか知らぬが、南蛮金では、絶対にない。もし、埋められていたならば、このわしが、とっくに、掘り出して居る。……黒金の奴、小ざかしゅう、たちまわる男であったが、それが、仇となったな」

「裏切りました京洛甲賀衆を、このまま、すておけませぬが、いかがいたしましょう？」

「しばらく、そのまま、すておけ」

「もし、掘り出したものが、南蛮金でありましたならば、これは、由々しき大事でございますが……」

「たわけ！」

丹波は、一喝した。

「わしが、そうではないと断定いたして居るのだぞ！」

「はいっ――」

「たぶん、石塊かなにかが、詰められた函でも、掘り出したのであろう」

丹波は、いまいましげに、云いすてた。

しかし、云いすてたとたん、丹波は、ふと、眉宇をひそめた。

ひとつの直感が、ひらめいた。

黒金又八郎ほどの男が、南蛮金と思い込んで、掘り出した物である。

その函の中には、金はなかったにしても、何か、意味のある品が入れてあったのではある

まいか。

「山県――」

丹波は、障子をへだてて、縁側にうずくまっている隠密を呼んだ。

「はい」

「京洛甲賀衆が、黒金から奪った品を、しらべてみい」

「はい……。ただ、かれらは、そのすみかをかくして居りますゆえ、それを、目下、さがして居ります」

「うつけめが！　彼奴らのすみかを知らぬとは、なんというなさけない者どもだ。伏見から東南へ二里、鬼ガ森、というのがある。鬼が棲むと、地下の者どもは、おそれて、近づかぬ。そこを、さがせ」

「かしこまりました。参ります」

山県という隠密が、去ると、赤松丹波は、ふと思いついて、机の上の金の鈴を鳴らした。

すぐに、用人が入って来た。これも、永年隠密をつとめて来た男とみえて、眼光が鋭かった。

「先般、捕えた女子を、ここへ、連れて参れ」

「はい、すぐに――」

丹波は、書類を片づけてから、立ちあがると、後ろ手を組んで、ゆっくりと、広い部屋の中を歩きまわりはじめた。

どうやら、この人物が、考えごとをする時のくせのようであった。

次の間との仕切りの襖が、ひらかれたが、丹波は、なお、歩きまわることを、止さなかった。

次の間には、高小手に縛られたさわが、ひき据えられていた。

さわは、やはり、この大坂城内に捕えられていたのである。

自分の運命がどうなるのか、見当もつかぬままに、さわは、みじんも、怯じる気色もなく、歩きまわっている人物を、黙って、眺めた。

やがて――。

丹波は、急に、次の間に入って来て、さわの前に、立った。

冷たく光るまなざしを、当てて、

「そなた、美女だの」

と、云った。

「……」

「せっかくの美女に生れながら、なぜ、このような危険な仕事をえらんだ？　美女には、それにふさわしいくらしかたがあろうが――」

「……」

「いままで、そう云われたことはなかったか？」

「ありませぬ」

「そなたが会った男は、目が不自由であったな。それとも、そなたは、惚れた男にでもたのまれて、当城内へ忍び入ったか？」

「……」

「こたえたくないようだな。あいにくだが、このわしは、こたえたくない者の口を割らせるすべを心得て居るぞ。……むだに強情をはらぬがよい」

「貴方様は、どなたでございましょう？」

「わしか。わしは、そなたのような曲者を、捕えて、拷問にかけるのを、あきないにして居る」

さわは、この人物が、ただ者ではない、と微かな戦慄をおぼえた。

「わたしを、どうなさろうと申されるのです？」

「なんの目的で、忍び入ったか、まだ、尋問して居らぬ。それをきいた上で、そなたの身柄を、どうするか、きめるといたそう」

「……」

「ただ、こう問うただけでは、白状いたすまい」

「……」

「そなたは、どうやら、尋常の家庭で、両親にはぐくまれて、育った女ではないようだな？」

「いえ――」

「かくしても、判るぞ。そなたは、かなり長いあいだ、当城内の地下牢に、とじこめられて居った。にも拘らず、すこしも、やつれた様子をみせて居らぬ。これは、よほど、からだをきたえてある証左であろう。どうだな？」

さわは、顔を伏せた。まさしく、丹波に、云われた通りであった。

さわは、十歳の頃から、薙刀、小太刀、走法、水泳など、男児同様の修業をさせられて来たのである。三月、半年、陽のさし込まぬ地下牢にとじこめられても、からだが衰えるようなこともなかったし、その苦痛に堪えるだけの強い精神力もやしなっていたのである。

「ははは……、さわと申したな。人間は、いろいろの生きかたがあるが、そなたのように険しい道をえらんだ者は、当然、こういう状態に置かれるのを覚悟して、からだをきたえていたのであろう。ひとつ、そのからだを、わしが、試してみようか」

「……」

「どれほどの屈辱に堪えられるか、ということを試す！」

「女子に、はずかしめを与えて、すこしも、心が痛まぬ御仁でありましょうか？」

「左様さの。これまでに、わしは、多くの人を殺し、はずかしめて居る。七十歳の老婆もいたし、いたいけな幼女もいた。べつに、怨霊になって、枕辺に現われた者も居らぬところをみると、わしの業力は、神仏の力よりも旺盛とみえる」

「いずれ、天罰を蒙られましょう」

「その時は、その時のことだな」

丹波は、ゆっくりと、さわに近づいた。

一瞬――。

さわは、肩を蹴られて、のけぞった。

膝がはねあがり、小袖の裾が、ぱっとひらいた、とみえたが、次の刹那には、くるっと、からだを一回転させて、もと通りに、坐っていた。

高小手に縛られていながら、みごとなわざであった。

「ふむ！」

丹波は、冷笑した。

「きたえて居るのう――」

こんどは、丹波は、猿臂をのばして、さわの頭髪をつかんだ。

顔へ顔を、近ぢかと寄せて、丹波は、云った。

「そなたは、まだ男を知らぬであろう？」

「……」

さわは、にらみかえしているばかりである。

「わしが、そなたにとって、はじめての男になる、と申したら、どうする？」

「……」

「操を守りたくないか？」

「……」

「返辞をせぬか！」

丹波は、ぐいと、さわの頭髪を、うしろへ、ひっぱった。

仰向けにされたさわの顔は、無表情であろうと努めつつも、さすがに、内心のいかりとくやしさが滲むのを、かくしきれなかった。ひしと閉じた目蓋の、長い睫毛が、かすかに、ふるえている。

丹波は、徐々に、頭髪をひっぱって、うしろへ、たおした。

ついに――。

長く、畳の上へ、仰臥させられたさわは、一瞬、くちびるを、わななかせたかとみるや、睫毛を押しあげるようにして、泪をあふらせた。

「くやしいか。くやしくとも、白状はせぬと覚悟をきめて居るのであろう」

丹波の一方の手がのばされた。

小袖の裾が、いきなり、捲くりあげられようとした。

そのせつな――。

さわは、ぱっと、目蓋をひらいた。

「舌を嚙むことができますよ、わたしは！」

いささかの乱れもない声音で、そう云った。

「操を奪われるくらいで、やすやすと、おのが生命を落すことができるかな？」

「できます！」

さわは、きっぱりとこたえた。

とたんに——。

丹波は、さわをひき起すと、脇差を抜いて、高小手に縛った麻縄を、切りはなしてやった。

さわは、思いがけぬ丹波のふるまいに、けげんな表情になった。

「のがすのではないぞ」

丹波は、云った。

「当分、そなたを、わし付きの女中として使ってやろう」

「意味が、わかりませんが……？」

「べつに、意味はない。隙をうかがって、遁げ出そうとしてもよいし、わしの寝首をかいてもかまわぬ」

「……？」

「但し、それには、条件がひとつある。もし、失敗した時には、そなたは、舌を嚙まずに、すなおに、操を、わしに、呉れるがよい」

「……」

「どうだ、この条件は？」

「失敗しなければよいのですね」

「そうだ。見事、遁走するか、わしの寝首をかくか——やってみるか？」

「はい。お約束いたしましょう」

さわは、承知した。

「面白いことになったぞ。ははは……」

丹波は、哄笑した。

男子の志

伊丹の平家館にあっては——。

化物道人こと杉山道満が、珍しく緊張した面持で、現われて、神屋主膳の前に坐ると、

「ひとつ、老骨に花を咲かせようと存ずる」

と、云い出していた。

「何を思案された？」

「公儀を対手に、ひと騒動を起してみようと、思い立ち申した」

「ひと騒動を！」

主膳は、眉宇をひそめた。

主膳にも、この怪物の肚裡は、はかりかねる。

この前、対坐して交した問答では、主膳は、おのが計画を、包まずに、打明けていた。

いまの時世に不満を抱く浪人者たちを集めて、一騎当千の精鋭隊を組み、これを、幾艘かの軍船に、乗せて、海の彼方に、新天地をもとめる。そのことであった。

その計画に対して、道満は、かなり否定的な忠告をしておいて、去ったのであった。
しかし――。
道満は、それから、今日まで、何事かを思いめぐらしていたに相違ない。
公儀を対手に、ひと騒動を起す、というのは、おそらく、主膳の計画を実現させるための援助を意味しているに相違ない。
「道人――」
主膳は、微笑しながら、
「騒動を起すには、兵が必要ではないか？」
と、問うた。
「いや、有象無象は、いくら率いても、役に立たぬ。ま、右腕左腕が、居れば良い」
「この館の浪人たちの中から、えらぶがよろしかろう」
「由比民部という若者と、それから、お許の甥御の長曽我部左門――この二人を、呼んで頂こうかな」
「承知した」
すぐに、民部と左門が、姿を現わして、座に就いた。
主膳が、
「道人が、たのみがある由」
と、告げた。

道満は、二人を見くらべながら、
「無聊をかこっているお主らに、ひと働きをして頂こうかな」
と、云い出した。
「それがしの剣を、役立てたい、と云われるか？」
左門は、すぐに、応じた。民部の方は、黙って、道満を見まもっているだけであった。
「いささか、手荒な仕事をやってみたい。まず、生命がけじゃな」
「生命がけは、のぞむところ――」
左門は、昂然と胸を張ってみせた。
「何をされようと云われる？」
民部が、たずねた。
「ひと口では、申せぬの」
「たとえば？」
「たとえば……大坂城を、焼きはらう」
道満は、云ってのけた。
たとえ、放言にしても、大坂城を焼きはらうとは、容易ならぬ言葉であった。
左門は、大きく目を見はったし、主膳も、いささかあきれて、道満を見まもった。
民部だけは、わずかに眉宇をひそめて、
「公儀をむこうにまわしての仕事でござろうか？」

「左様――。公儀を、敵にする――と申すよりも、幕府の権勢を代表する者を、斃す。それから……、それから先の仕事は、まあ、わしにまかせておいてもらおう」

「幕府の権勢を代表する者とは、老中を指しますか？」

「いや、老中などは、江戸城内で、大名をとりつぶすことばかり思案して居るゆえ、直接、われわれと、なんのかかわりもない。……お主らは、隠密奉行という存在があることを、承知かな？」

「まだ、存ぜぬが……」

「隠密奉行は、老中、若年寄以上の、実権を持って居る。公儀では、外様大名を押えつけるために、隠密奉行を設け、これに、大きな実践力を与えたのじゃが、いまでは、老中、若年寄といえども、この隠密奉行に対しては、遠慮しなければならなくなった模様じゃな」

「……」

「たとえば、閣老の妙策によって、外様大名を、いや、譜代大名でも容赦なく、つぎつぎと、とりつぶしているが、さて、改易にしたその大名の家にたくわえられていた軍用金じゃが、これをおさえてしまうのが、隠密奉行の役目である。奪いあげた軍用金は、江戸城の金蔵か、大坂城の金庫に納められる。わしが、推測するところ、隠密奉行は、近畿以西の改易大名の軍用金は、ことごとく、大坂城内へ、はこび入れた模様じゃな。……この莫大な金を、ひとつ、こちらへ頂戴できぬものか、と考えて居る」

「……」

「無謀であろう、という顔つきじゃな？」

道満は、民部を、見据えた。

「たしかに、無謀と存じます」

「だからこそ、やるのだ！　何十万両という金を手に入れるには、無謀の挙によらねばならぬ。のるか、そるか――大博奕じゃな」

「道人の申されることは、よく判りますが、およそ、事を成すには、それだけの成算があって、ふみ出さねばなりますまい。大坂城内にたくわえてある莫大な軍用金を、奪うなど、不可能のわざとしか考えられませぬ」

民部は、きっぱりと云った。

「不可能を、可能にしてみせようではないか。虎穴に入らずんば、虎子を得ず、じゃて――」

道満は、平然として、うそぶいた。

「いったい、どれだけの人数で、やろうと申される？」

「せいぜい十人じゃな」

「ばかな！」

民部は、かぶりを振った。

「多勢徒党を組めば、目立つではないか。わしは、お主ら二人を、股肱として、他に、七八人の手練者をひきつれて、この壮挙をなそうとするのだ」

「それがしは、反対いたす」

民部は、厳しい態度で、拒否した。
「不可能は可能にはならぬと存ずる！」
道満は、そう云いはなつ民部を、見かえして、
——惜しい！
と、内心思った。
——この若者を、参謀とすることは、事を成す上に、最も必要なのだが……。
「どうしても、義挙に加わらぬ、と云うのじゃな」
「犬死は、いたしとうござらぬ」
「犬死か。事敗れて、くたばるのは、まあ、犬死と申せば犬死じゃな」
道満は、さあらぬ口調で、云いすててから、
「やむを得ぬ。……左門氏の方は、どうであろうかな？」
と、返辞を、きいた。
「それがしは、お供つかまつろう。壮挙の主旨、充分にのみ込み申した」
左門は、民部に対する示威の意味もあったから、調子の高い声音で、応じた。
「では——善は、急げじゃ。ははは、あまり、善とも云えぬが、思い立ったが吉日での、早速、出かけるといたそう」
道満は、腰を上げた。
「道人——。食客の中からは、えらばぬのか？」

主膳が、問うた。
道満は、かぶりを振った。
「ろくな奴は、一人も居らぬな。……そうだ。あの織田重四郎という浪人は、いまごろ、大坂にいるはずだ。あの男が一人いれば、まず、十人分の働きをしてくれよう。ひとつ、くどいてみるか」
この言葉をきいて、左門の双眸が、光った。
「道人は、織田重四郎をご存じなのか？」
「うむ。連れになってな、姫路城下で、ひとあばれした。お主、知り人か？」
左門は、ちょっと、まよったが、
「兵法者として、織田重四郎と雌雄を決したい意志を持ち申す」
と、こたえた。
「さてのう……、お主もなかなか強そうじゃが、あの織田重四郎に勝てるかな？」
「最初の立合いは、それがしが、敗れ申した。しかし、この次は……」
「まあ、待たっしゃい。雌雄を決するのは、大坂城の軍用金を頂戴したあとのことにしてもらおう」
道満は、出かけるべく、玄関へ向って歩き出した。
左門は、白河館の姉弟に、別れを告げておいて、そのあとにしたがった。
静香と数馬は、この館にとどまることに、なにか、心細さをおぼえたが、さりとて、左門

について行くわけにもいかなかった。

織田重四郎からの便りがあるまで、とどまっているよりしかたがなかった。

道満からは、

「織田重四郎に会ったら、ここに、そなたたちがいることを報せよう」

と、云われていたのである。

道満と左門が、肩をならべて、平家館を出て、ものの三町も行ったところで、不意に、林の中から、ふらりと姿を現わして、前に立ったのは、春奈であった。

「わたしをすてて、お行きになるのですか、道満殿？」

きつい表情で、じっと、見つめた。

「はは……、そなたのことを、忘れていたの。許さっしゃい」

道満は、ぬけぬけした笑顔で、云った。

「俘虜を、勝手にすててお行きになる法はありますまい。わたしにも、道満殿の何やら企てて居られることに、加担させて頂きましょう」

「女のカンは、鋭いの。しかし、こんどの計略には、女子は不要じゃて」

「わたしは、ただの女子ではありませぬ」

「左様、それは、わかって居る。わかって居るが……」

道満は、そう云いかけて、急に、鋭い眼光になった。

「そなた、頭領を持って居るのであろう？」

「……」

「そなたは、かなりの数の徒党を組んで居る、とわしは視た。当然、頭領が居るはずだな」

「……」

「ひとつ、わしが、徒党を組んだ目的を当ててみせようか。そなたは、どこか、改易になった西国大名の、重臣の息女、というところか。徳川家に対して、うらみを抱き、一矢むくいる計画を樹てた。そうではあるまいかな。……つまり、そのために、軍資金が、要る。そこで、白河館のかくし金を狙った。とは、どうじゃな？　当ったかな？」

春奈は、道満のうしろに立つ左門へ、チラと警戒の目を向けて、容易に、口をひらかなかった。

「ははは、この若者を、何者か、うさんくさいと思うて居るらしいな。これは、長曽我部家の遺児じゃ。そなたが、とりつぶされた西国大名の縁の者なら、同じ境遇というわけだ」

これをきいて、春奈は、安堵して、はじめて、しずかな表情にもどった。

「道満殿の申されたこと、当って居ります。主家の名は、いまは、伏せますが、徳川将軍家に、讐を復そうと誓い、その挙兵のために、党を組み、軍資金を求めていることも、申された通りです」

「そうか。すると、目的はちがっても、手段は、そなたも、わしも、同じということに相成る」

「味方にお加え頂きましょう」

「頭領は、なんという？」
「千本強兵衛と申します」
「ほう……。千本強兵衛は、生きのびて居ったか」
「ご存じ寄りでありましたか？」
「むかし、戦場で、草を枕にして、語った間柄じゃ。奇縁じゃのう」
道満は、笑って、
「参ろうか」
と、歩き出した。
その時——。
「おーい、待ってくれえ」
うしろから、声があがった。
振りかえると、息せききって、追って来るのは、天堂寺辰馬であった。
春奈が、ふりかえって、舌打ちした。
春奈にとって、辰馬のような男ぐらい、嫌悪にあたいする存在はなかった。
見かけは、いかにも堂々たる偉丈夫でありながら、きも玉が小さく、腕も立たず、依頼心がつよく、こんな取柄のない男はいなかった。そのくせ、どこやら図々しくて、踏んでも蹴っても、死にそうにもなかった。
しかし、道満の方は、べつにいやがる様子もなく、

「はは……、あの男のことも忘れて居ったな」
と、笑っていた。
加古川大尽の屋敷へ押し入って、千両箱を奪った際も、辰馬は、せいぜい見張り番の役にしか立たなかった。
春奈にとっては、そばにいるだけで、腹が立つ男だが、道満の方は、べつに追いはらおうともせず、ついて来られるままに、連れにして来た。春奈には、道満の気持が、判らなかった。
辰馬は、追いついて来ると、
「道満殿、それがしを、あの館に、すて置くとは、ひどいではござらぬか」
と、食ってかかった。
「お主とは、ここらあたりが、別れ時と思ってな」
「それがしは、あんな館の居候になどなって居る存念は、毛頭ござらんぞ」
「では、一人で、勝手に、どこへなりと、参るがよかろう」
「別れると申されるなら、別れてもよいが、頂戴すべきものだけは、頂戴いたしとうござる」
「金かな」
「左様——。はこんで参った三千両、そのうちの、幾割かは、頂戴できるものと存ずる」
「あれは、盗んだ金じゃ」

「それが、どうしたというのでござる？」
「盗んだ金は、個人が私すべきものではなかろう。酒や女に使っては、武士の面目にかかわるのではないかな」
「それがしは、無一文でござるぞ！」
「働けばよかろう。人間一人、おのが口を糊することぐらい、なんでもなかろう」
「せっかく奪った三千両を、老人は、なんの為に、あの館の主人にあずけられた？　それをうかがおう」
辰馬は、必死であった。
道満は、こたえず、歩き出した。
「老人！　人をばかにするのも、たいがいにしろ！」
辰馬は、かっとなった。
しかし、道満につれ立った二人の男女の腕前を知っているだけに、手も足も出ない辰馬であった。
ただ、呶鳴りたてるよりほかにすべがなかった。
道満は、かまわず、歩いて行く。
「よしっ！」
辰馬は、ほぞをかためた。
「それがしは、どこまでも、くっついて行くぞ！」

本当にその気になって、道満たちのあとから、歩き出した。
「老人――」
左門が、冷やかな声音で、云った。
「追いはらい申そうか」
「いや――」
道満は、かぶりを振った。
「蠅じゃ、蠅――。うるさくつきまとっても、そのうち、あきらめて、どこかへ、飛び去るであろう」
「しかし、ついて来られると、神経にさわる」
春奈は、左門が自分と同じように、辰馬を嫌悪しているのに、微笑した。
左門は、道満が、止めるいとまもなく、身をひるがえしざま、
「蠅めっ！」
と、呶号して、抜刀した。
「うわっ！」
辰馬は、仰天した拍子に、石ころかなにかにつまずいて、ぶざまに、地べたへしりもちをついた。
生命惜しさの本能で、一回転して、くさむらから、田圃の中へ、ころげ落ち、それから、両手をさしあげて、

「ま、待った！」
と、叫んだ。
そのさまが、あまりに滑稽であったので、左門は、苦笑して、刀を下げた。
「貴様、それでも、武士か！」
「武士である前に、人間でござる。生命をひとつしか持たぬ人間でござる」
「ばかめ！」
「ただ、ついて行こうとしている者を、斬ろう、とされるのは、兵法者の為すべき振舞いでは、ござるまい」
「おのれごとき蠅同然の奴は、ついて来られるだけで、胸くそがわるいのだ」
左門は、唾を吐いた。
「成程、それがしは、蠅同然の、くだらぬ男かも知れぬ。しかし、意味もなく、斬られるほどの人間の屑ではござらぬ。それがしを、友としてくれた者も居り申す」
辰馬は、必死で、云いはった。
「貴様を、友にした？　そんな奴は、貴様同様にくだらぬ人間だろう」
「織田重四郎が、そうでござるぞ！　お主が、生涯の好敵手と目している織田重四郎が――」
辰馬は、いつの間にか、それを知っていた。
「ふん――」
左門は、道満と春奈が遠ざかったので、追いつくために、白刃を腰に納めると、辰馬をすてて、いそぎ出した。

辰馬は、のこのこと、路上へあがると、ふうっ、とひとつ吐息した。
それから、
「ばかにしてやがる！」
と、呟いた。
しかし、なんとも、自分が惨めであった。
同じ日――。
金井半兵衛は、大坂天満の姿不見橋と称された土橋の袂にある風流な構えの家を、訪れていた。
冠木門には、「軍学・兵法指南楠不伝」という看板が、かかげられてあった。
楠不伝の名は、この近畿では、かなり売れていた。
一般庶民は、楠不伝を、楠木正成の末裔と信じていた。
楠木氏の系図をみれば――。
正成の末子正儀に、四人の男子があった。その四男正平から九代の後胤に、正虎という人物がいた。
天文のはじめ、十七歳の時、足利将軍義輝に仕え、大饗を苗字としていた。実は、楠木正儀のすえであったが、将軍家をはばかって、そう称していた。
大饗正虎は、やがて、織田信長の執奏によって、永禄二年、正親町天皇から、「朝敵」の

名を勅免され、楠正虎となった。「楠木」ではなかった。そして、従四位下河内守に叙任された。

正虎は、信長の右筆をつとめ、能筆であった。信長が、本能寺に相果てたのち、行方をかくして、ついに、再び世に出なかった。

ある人によれば、

「京の白河に、草庵をむすんで、隠者のくらしを送った。その子が、秀れて、海外交易の壮志をのばして、やがて、伏見に、宏壮な白河館を築き、陰然たる勢力を持った。楠木正成の後裔は、まさしく、白河館のあるじであった」

と、いうことであった。

白河館は、たしかに、楠木という苗字をつかっていた。

しかし、その白河館が、何者かの手にかかって、潰滅して、二年ばかり過ぎて、

「自分こそは、楠正虎の嫡男である」

と称す者が、大坂に現われた。

それが、楠不伝であった。

本名甚四郎正辰。どこで、どのようにして、すごしたか、不明であった。出現した時は、一流の軍学者であった。

当時——。

軍学といえば、楠木流を最高とした。

楠木正成の軍学を伝えたのは、名和長年であった、という。

その子孫に、名和正之という者がいて、京に在った日蓮宗僧侶日応に『理尽抄』という一巻の兵書をさずけた。

日応は、これをもとにして、ひとつの流派を創って、加賀前田家に招かれて、家中に講じた。これが、正式に「楠木流」と称されるはじまりである、という。

日応の「楠木流」を正しく受け継いだのは、山科言経であった。楠甚四郎は、某日、山科言経を訪ねて、

「軍配の弟子にして頂きとう存ずる」

と申し入れた。

軍配とは、「軍配団扇」の軍配のことで、すなわち、兵法・軍学のことである。

言経は、楠甚四郎に、起請文を書かせて、兵書『気巻』を貸し与えた。

甚四郎は、これを読んで、軍学者になった。

いずれにしても——。

楠不伝が、山科言経の門に入って軍学修業をしたことは事実であったが、かれが、楠木正成の後裔であるという証拠は、何もなかった。

ただ、その風貌と、軍学を指南する弁口の巧さによって、しだいに、世間の信用を得たのである。

金井半兵衛は、この楠不伝とは、旧知であった。

半兵衛は、木戸をくぐって、庭に入った。

座敷では、十人あまりの門弟を前にして、不伝が、「孫子」を講義していた。

「……故に、善くたたかう者は、能く勝つ可からざるを為すも、敵をして必ず勝つ可からしむる能わず。――この意は、敵に勝てぬ、ということは、ひとえに、わが掌裡にあるゆえ、善く戦う者であったならば、まず、勝てるように、陣営をととのえることだ」

きいている門弟は、勿論大半が、武家の子弟であったが、二三人、町人がまじっていた。

「軍法」を商売に利用するつもりかも知れなかった。

「つまり……いやしくも、敵に勝とうとするなら、わが兵備を強大にして、改善を加え、敵の兵備と行動に、絶えず、目をはなたち、隙を見つけたならば、すぐさま乗じなければならぬ」

不伝は、風貌も立派であったが、口調も重々しく、いかにも軍学者らしかった。

総髪、長髭、袖なしの虎皮羽織をまとい、鉄扇を、膝に立てていた。

「戦国の世にあっては、英雄、こぞり興って、小なる者は、一方に雄たらんとし、大なる者は、天下を取らんと志した。千軍、鋒を交えて、まことに壮観であった。なかにも、上杉謙信、武田信玄、北条氏康は、三傑といえた。一勝一敗の間に、関東を争ったありさまは、まさに、戦国の華であった。上杉と武田は、弘治元年、第一回の川中島合戦を皮切りに、爾来、数年――にらみあいつつ、宿敵の滅亡を期して、兵を増し、武を練り、最後の必勝を期した。これすなわち、善く戦う両雄は、勝つべからざるをなした。

永禄四年九月十日、川中島八幡原の第三回の合戦は、どうであったか。

謙信は、天下横行の八千騎とおそれられた旗本を基幹に、一万二千を率いて、妻女山に、陣取った。一方、信玄は、総勢二万の兵をひっさげて、海津城に拠り、対手の虚隙をうかがった。

優勢の信玄、まず動いて、一万二千の迂回隊をもって、妻女山を夜襲し、謙信を山からひき出し、その降りて来たところを、八幡原に待ちかまえる本隊八千をもって、挟撃する、という放胆不敵の包囲策をとった。

しかるに、謙信は、信玄の企図を看破して、先手を打って一挙に山を馳せ下り、その全兵力をもって、八幡原の信玄本隊を、衝いた。あと一歩で、撃滅というところで、武田方の迂回隊が、背後を襲って来たため、謙信は、やむなく、善光寺へ退却したのだ。これ――孫子の兵法の具現といえるではないか」

不伝は、そう述べて、自ら謙信・信玄でもあるかのごとく、莞爾としてみせた。

講義がおわり、門弟がゾロゾロと起って、去るのを待って、金井半兵衛は、庭から、のそりと、上って行った。

不伝は、半兵衛を、じろりと眺めやって、

「どこを、うろついて居った？」

と、問うた。

「日本中を――」

「日本中を？」

「軍学者殿。もはや、わが日本の領土内では、合戦などは、起り申さぬよ」
「なに？」
「したがって、兵法・軍学など、無用のものと相成った」
「ばかな！」
「徳川の天下は、もはや、大安泰――。すくなくとも、百年や二百年では、ビクともいたすまい」
「二百年も泰平が、つづくなどとは、考えられぬぞ」
「いや、そうではない。軍学者に向って、説法をいたすつもりはないが、天下ひろしといえども、もはや、徳川家に矢を射る度胸のある大名は、一人も見当らぬ。どれも、これも、腰が抜けた。……ようも、こうまで、みごとに、骨無しにされたものだ。これと申すのも、徳川家康という人物は、偉大な曲者であった、ということに相成る」
「待て、半兵衛！」
不伝は、不快げに、手をあげて、制した。
「素浪人一人、諸国をうろつきまわって、はたして、諸侯が、腰抜けになったかどうか、早計に判断し得るものではあるまい。……あと十年も経てば、あるいは、天下は、どう変るか、知れるものではない。薩摩のあたりから、徳川幕府打倒の狼火が、あがるかも知れぬぞ」
「甘い！」
「なに、甘いとは？」

「軍学者たるもの、天下の状勢が、正しく、観てとれぬとは、なさけない。島津など、いまは、手足をもぎとられたダルマだ」
「勝手にきめるな」
「事実だから、いたしかたあるまい。徳川家の威光は、ただの威光ではない。おそるべき実力をそなえた威光だ。伊達も、前田も、毛利も、黒田も――どれも、みな、完全に、屈服してしまった。下層の階級の中から、のし上って、一国一城のあるじになる時代は、もはや、去ったのだ。武士は、これからは、儒教にがんじがらめになって、貧乏にあえぐばかりだのう」
「……」
「あとは、金だな」
「金？」
「左様――。徳川家に対抗し得るのは、刀でも槍でもない。金だ。つまり、商人が、金をたくわえて、対抗する時世がやがて来るだろう」
「ばかもやすみやすみに申せ。商人が、金をたくわえれば、公儀で、取り上げるばかりだ。商人など、問題にならぬ」
「だから、軍学者の石頭など、なさけない、というのだ。……金こそが、天下を制するのだ！」
半兵衛は、云いはなった。

半兵衛と不伝の、険しい問答は、それから、しばらく、つづいた。
「半兵衛――。では、お主は、大金をもうける野心を抱いて、大坂へ来たか？」
「まあ、そんなところだ」
「どうやって、大金をつかむ？」
不伝は、目を光らせた。
半兵衛という男が、若いが、端倪すべからざる人物であることを、不伝は、知っていた。
「教えたら、片棒をかつぐか？」
「事と次第によってはのう」
不伝がこたえると、半兵衛は、にやりとした。
「この大坂で、いちばん金が集まっているところは、どこか、知って居るか、軍学者殿？」
「さあ、どこであろうかな？」
不伝は首をかしげた。
「鴻池屋かな。それとも、紀州屋か――」
「ちがうな」
「では、どこだ？」
「大坂城内さ」
「なに?!」
「商人どもは、まだ、せっせと、蓄えている最中だ。あと二三十年もしなければ、倉に、千

両箱は、積みかさねられまい。ところが、大坂城内には、千両箱が山と積んであるはずだ。外様諸侯を、つぎつぎと、とりつぶして、その軍用金をとりあげて、はこび入れているのだ。わしがみるところ、二百万両は下るまい」
「……」
「あるところにはある」
「おい、半兵衛、正気か？　正気で、そんなことを申すのか？」
「正気だ。あるところにはある。だから、その金を頂戴いたしたい」
「バカな！」
「軍学者というものは、まことに、なさけないものだな。幕府が集めた金は、まるで、空の星みたいに、手のとどかぬものに、思って居る」
「そのような金を、お主ごとき痩浪人一人の手で、どうして、盗み取れる、と申すのだ？　正気とは思えん！」
「はは……、楠不伝殿は、もうすこし、骨の通った度胸の持主と思っていたが、失望したぞ。相談にはならん」
「半兵衛、くだらぬ妄想は、すてい。お主ほどの頭脳ならば、どこへでも、随身できるぞ。紀州侯あたりに、伺えば、忽ち、気に入られよう。そうせい」
「主取りが、浪人者の夢か。ははは……、まっぴらご免だな」
「なぜ、いつまでも、ひねくれて居る？」

「ひねくれて居るのではない。わしは、自由に生きたいだけなのだ。忠義だとか、仁節だとか、ていさいはいいが、所詮、飼い犬が、エサをもらうために、尾をふっているだけのことにすぎぬ。ばかげた話だ」

半兵衛は、起ち上ると、

「ご免――」

と、庭へ降りた。

「半兵衛、待て――」

不伝が止めたが、ふりかえりもしなかった。

夜嵐

朝もやが、まだ、林や人家を、おぼろにつつんでいる時刻であった。

大坂も、南に入って、このあたりになると、ひろい野になり、田畑よりも、原始の樹木や、雑草の原野が多くなる。

織田重四郎と嘉七は、肩をならべて、歩いていた。

「人生は、夢まぼろし、と申しますが、まことにそうでございますね」

嘉七が、云った。

「大坂城が、焼け落ちた時のことを、思い出すか？」

「はい。あの頃は、この街道などは、兵と馬で、うずまって居りました。つい、そこの野で、後藤又兵衛殿が、討死なさいました。……過ぎてみれば、人間と人間の戦いというものは、はかないものに思われまする」

「お主は、大坂落城を機会に、忍者をすてたのであったな？」

「左様でございます。あのように、滅亡というもののあわれさを、身をもってあじわいましては……」

「にもかかわらず、二十年を経て、再び、忍者にもどって、大坂城へ、忍び入ろうとして居る。業とは思わぬか？」

「はい。まさしく……。しかし、このたびは、生きるも死ぬるも、これは、自身で、進んで、死地に入ることでございます。悔いは、いたしませぬ」

その言葉を、きいた瞬間、重四郎の脳裡を、ふっと、不吉な予感が、かすめた。

――この老人は、大坂城内で、死ぬのであるまいか。

重四郎は、しかし、その予感を、ふりはらいはしなかった。

いや、むしろ、

――それで、よいのかも知れぬ。

と、思った。

――この老人は、死場所をさがして居ったのであろう。

「老人――」
「はい」
「お主と出会ったことを、わたしは、幸せに思って居る」
「なんと仰言います？」
「お主は、私心というものを、持たぬ人だ。生涯で、このような人と、幾人も出会えるものではない」
「いえ、私心がないのではなく、老いぼれて、欲がないだけでございます」
「年寄れば、ますます我欲が強くなる者も、すくなくない。お主は、わたしという無頼の浪人者に、すがすがしい気分を与えてくれる。これは、礼をのべておきたい」
「もったいない。貴方様こそ、縁もゆかりもない姉弟のために、生命を投げ出して下さいます。この上の悦びはございませぬ」
「ははは……、先日も云ったが、わたしは、静香に惚れた。惚れた娘のために、やることだ」
そこまで云った時、重四郎は、おのが背中を刺して来る視線を感じた。
重四郎は、
――不覚！
と、全神経を、後方へ配った。
さらに、数歩進んでから、重四郎は、

「老人――。尾けられた」
と、小声で、云った。
「尾けられましたか」
嘉七は、さして、おどろかずに、こたえた。
「おれが、片づける！」
重四郎は、くるりと踵をまわすや、すたすたと、ひきかえして行った。
かなり重い荷を背負った行商人が二人、肩をならべて、歩いて来ていた。
重四郎は、そ知らぬふりで、行き交うた。
行商人たちは、行き交うた瞬間、互いに、ちらっと、鋭い視線を合わせた。
――なぜ、ひきかえして来たのだろう？
二人とも、それをうたがったのである。
すると、いったん行き交うた重四郎が、くるりと向きなおって、
「おれがひきかえして来たのは、お主らを、斬るためだ」
と、あびせた。
瞬間――。
二個の背負荷が、宙へはねあげられ、密偵二人は、一間を跳んだ。
重四郎は、すでに、抜刀していたが、跳んだ二人へ、一挙の勝負を挑むことはしなかった。
無腰の対手がたには、当然飛道具の用意がある、と視てとったのである。

はたして――。

一人の手から、手裏剣が、つづけさまに、数本放たれて来た。

これを、重四郎が、ことごとく打ち落した時、もう一人が、鎖鎌をかざし、分銅をうならせつつ、肉薄して来た。

もう一人は、道をはずれて、雑草の湿地を踏みながら、じりじりと廻り込んで来ようとしている。この敵は、まだ、手裏剣を懐中にしている様子であった。

重四郎は、右手で、白刃を胸前へななめに構えつつ、左手で、ゆっくりと脇差を抜いた。

「えいっ！」

凄まじい気合もろとも、分銅が振り込まれるのと、左手の敵が、手裏剣を放って来るのが、同時であった。

これに対して、重四郎の身が、さっとひくく沈んだ。

とみた刹那――。

分銅は、重四郎の脇差へからみつき、手裏剣は、重四郎の頭上を越えた。

そのあとの重四郎の迅業は、充分余裕があるものであった。

まず、湿地上の敵を、襲って、血煙りをあげさせておいて、次に、身をひるがえして、鎖鎌の敵へ、突進した。

重四郎は、敵の顔面に、絶望の色が刷かれるのを視てとって、

――公儀隠密とは、ちがうようだ。

そう直感した。

いずれにしても、生かしておくわけには、いかなかった。

重四郎は、前進を止めなかった。

やがて――。

重四郎は、嘉七の待つ場所へもどると、

「われわれを尾けるのは、公儀隠密だけではないようだ」

と、告げた。

「はて？　何者どもでございましょう？」

「この大坂には、さまざまの徒党がいるらしい。こちらがいかに要心していても、蟻が甘いもののあるところを、かぎつけるように、鼻が利くのかも知れぬ」

「尾けて参っていたのは、旅の商人ていでございましたね？」

「うむ」

「では、同じ旅籠に泊りあわせていた手輩かも知れませぬ。こちらの話を、ぬすみぎいたのでございましょう」

「こちらが、油断したことか」

「やむを得ますまい」

嘉七は、さして、気にかける様子でもなかった。

二人が、ほどなく入って行ったのは、例の埋立地の貧民窟であった。

その小屋では、すでに、苦之市が、不死身の強さで、血色をとりもどして、起き上っていた。

嘉七から、重四郎を、ひきあわされた苦之市は、なまめいた身のくねらせかたをして、挨拶した。

重四郎は、すでに、嘉七から、苦之市がどういう男かきかされていたが、それにしても、こういう女性化した男は、薄気味わるかった。

「からだは、恢復したようだな？」

嘉七は、たずねた。

「ええ、もう、すっかり……、ほんとに、ひどい目にあいました。おかげで、あたしの器量も、七分がたおとろえてしまいましたわえ」

「ははは……、それは、年齢のせいではないかな、苦之市」

「年齢のことは、申されますな。……で、いつ、大坂城へ忍び込まれます？」

「今宵うちにも――」

「それはまた、気ぜわしい」

苦之市は、媚をこめたまなざしを、重四郎に、くれた。

重四郎は、微かな悪寒をおぼえた。

「いえ、あたしは、もう、いつでもかまいませんですよ」

「じゃ、今宵ときめよう」

「かしこまりました。織田重四郎様、よろしゅう、仲間にお加え下されませ」

「お主に、きいておきたい」

重四郎は、云いかけた。

「なんでございましょう？」

「大坂城内に、隠密奉行という職にある人物が、逗留しているはずだが、知らぬか？」

「存じて居ります。赤松丹波という、おそろしい人物でございますよ。大層なきれもので、その残忍なことも並はずれているという噂を耳にいたしました」

「見たことはあるか？」

「いえまだ……」

重四郎は、尼崎の神崎川の畔で、出会った公儀隠密団の指揮をとっていた人物を思い出していた。

その時――。

その人物は、

「その剣を、千両で買おう」

と、重四郎を誘ったものであった。

――あれが、赤松丹波であったに相違ない。

重四郎は、ほぼ確信を持った。

「苦之市、大坂城内の警備ぶりじゃが……」

嘉七が、問うた。
「かなりのものかな？」
「まず――」
苦之市は、うなずいてみせた。
「頭数は、さほどではありませんなんだが、要所要所に詰めているのが、そこいらの大名屋敷の宿直の徒士とは、ちがいますぞえ。……隠密奉行が、逗留しているのであれば、しぜん、警備の者どもも、緊張するのでありましょうが――」
「隠密奉行が、起居している部屋が判れば、よいのだが……」
重四郎が、云うと、苦之市は、妙にうっとりとした表情で、重四郎を見まもりながら、
「それは、そうむつかしいことではございますまい。あたしが、その役目は、お引受けいたします」
と、云った。
重四郎は、どうも、この男は、好きになれそうもなかった。
嘉七は、重四郎の気持を読んで、
「織田様――。こやつは、役に立つ男でございます。餓鬼の頃から、女子に仕立てられたので、貴方のような御仁からみると、薄気味わるくおぼえられましょうが、この点は、ご辛抱を願います」
と、云った。

「幻夢殿――。なにも、そのように、はっきりと申されずとも……」
苦之市は、また、くねくねと、身をねじった。
それから、ふと思い出したように、
「幻夢殿――。大坂城へ忍び込むには、もう二人ばかり、手つだいの者をえらんだ方がよくはありませぬかえ？」
と、云い出した。
「どうしてだ？」
「火薬を使う上手が一人、石垣やら建物を登り降りする巧者が一人――これは、必要でございましょうな」
「ふむ。お主は、そういう二人を、もう、ちゃんと、やとったのであろう」
「はい」
苦之市は、にやにやした。
「手まわしのいい奴だ。呼んで参れ」
「かしこまりました」
苦之市は、出て行った。
嘉七は、笑いながら、重四郎に、
「この貧民窟には、あらゆる種族が、ひそんで居ります。そのつもりになれば、即座に、二十人や三十人の、盗賊隊を組むことができます。それぞれ、特技を持った者どもがな」

「いちど、そんな盗賊隊を組んでみるか。あるいは、江戸城を襲うことも、可能かも知れぬ」

重四郎は、そう云ったとたん、いつか、そうする日が来るような気がした。

ほどなく、苦之市は、二人の男をつれて来た。

いずれも、うすよごれた、乞食同様の男たちであった。

一人は、疱瘡のあとすざまじい、いわゆるいもがさ面であった。その面相を名にとって、芋兵衛という。

もう一人は、五尺に足らぬ小男であったが、その胴に比べて、おそろしく両手の長い男であった。おそらく、幼い頃から、その不恰好ゆえに、猿、猿と呼ばれていたに相違ない。猿助という。

「こいつら二人を、つれて参れば、役に立ちまするぞえ」

苦之市は、云った。

芋兵衛と猿助は、神妙にかしこまって、頭を下げた。

嘉七は、鋭い視線を、じっと当てていたが、

「お主ら、報酬次第で、どんな働きもする、というのであろう？」

「へい、その通りで――」

芋兵衛が、こたえた。

「では、とりあえず」

嘉七は、所持の財布の中から、いくばくかの金子をとり出して、二人の膝の前へ、投げた。

「へえ？　これだけで？」

芋兵衛は、不服そうな顔つきで、猿助と見交した。

「仕事が成れば、その十倍を呉れる」

「たしかで？」

「疑いぶかいの」

「なにしろ、大坂城へ忍び込むというのは、生命がけでござるでのう」

「芋兵衛、猿助――」

「へい」

「わしを、信頼できぬようなら、乞食になれ」

「へえ？」

「甲賀忍者の頭領であった幻夢十郎次は、いまだ曽て、約束したことを、破ったおぼえは、一度もない！」

厳然として、云った。

芋兵衛と猿助は、平伏した。

「決った」

嘉七は、重四郎に向い、

「目的はふたつ、さわを救い出すことと、隠密奉行を討ちはたすこと――」

「うむ」
「しかし、はたして、両方ともはたし得るとは限りますまい」
「ふたつとも失敗するかも知れぬ」
「いや、いずれかは、必ず、なしとげまする。ついては、いずれの方に、重点をかけて、わ
れわれは、働きましょうか。ご指示を願います」
「さわ女を救い出すことだな」
重四郎は、こたえた。
すると、猿助が、小さな丸い目を、くるくるさせて、
「そのご婦人は、若うて、美しゅうござろうな？」
「なぜ、きく？」
「その方が、はげみになり申す」
重四郎は、微笑しながら、
「さわという女性は、おそらく、お主らがこれまで出会うたことのないくらいの美女だ」
と、云った。
「ま、まことでござるか！」
猿助が、生つばをのみ込んで、首をつき出した。
苦之市が、なさけなさそうに、首を振って、
「猿助、チトひかえませぬか。男が好色なのは、本能じゃけれど、お主は、いささか、度が

すぎるぞえ」
と、たしなめた。
「苦之市、わしらは、なんぼ報酬をもろうても、はげみがなくては、たったひとつしかない生命を投げ出す気にはならぬわえ。……いや、大層な美女を救い出す、というのであれば、これは、武者ぶるいがする。さても、どんな美女か、お目にかかるのが、愉しみじゃぞ」
猿助は、舌なめずりさえしてみせた。
芋兵衛の方は、むっつりしている。
まことに、対蹠的な二人であった。
重四郎は、眺めやって、
――こいつらは、使える！
と、感じた。
それから、二刻あまり、五人の男は、大坂城忍び込みの手筈を、綿密に打合せた。
忍び込むまでは、猿助が、先導する。
忍び込んでからは、嘉七が、指示する。豊臣家滅亡とともに、大方の建物は、焼け落ちてしまい、修築された建物は、再現ではなく、場所もちがっているに相違なかったが、曽て大坂城の忍者であった嘉七は、方角に見当をつけることができたし、身をひそめる箇処も知っていたのである。
苦之市に、見取り図を描かせてみて、嘉七は、

「ここには、まだ櫓が、のこっているようだ」

とか、

「このあたりの林は、もとのままだ」

とか、正確に当てたのであった。

さわがとじこめられているであろう地下牢を、破るのは、芋兵衛の役目。嘉七が、救い出して、まず、逃げる。

そのあとで、隠密奉行を狙う。

これは、勿論、重四郎が、受け持つ。苦之市が、さがし当てて、重四郎が、踏み込む手筈にした。

わずか五人の力で、この二つの目的が遂げられるものか——もとより、誰も、自信はなかった。

しかし、打合せているうちに、五人は、重四郎を中心にして、十五年前からの、生死を倶にすると誓いあった一党の同志のような気持になって来た。

苦之市も芋兵衛も猿助も、おそらく相当な悪事をかさねたしたたか者に相違なかった。しかし、話し合っているうちに重四郎は、かれらが、胸中の一点に、澄みきった純情を持ちつづけていることを、さとった。

嘉七が、仲間にえらんだのは、かれらが、この心を持っていることを知っていたからなのだ。

薄雲の散らばった夜空には、上弦の月があって、出たりかくれたりしていた。

大坂城の城壁が、くろぐろとそびえている。

曽て、そのむこうには、日本一の天守閣が、空を截り抜いていたものであった。いまは、さむざむと、夜空がひろがっているばかりであった。

修築された建物は、城壁にかくれて、外濠をへだてては、見わけられない。

外濠は、大坂役の折に、埋められ、人が降りて歩いて渡れる浅さになって、涸れていた。しかし、濠の縁には、高い鉄柵が、はりめぐらされていた。

城壁の上からは、見張りの番士が、目を光らせているに相違なかった。

二十年前、大坂城に拠っていた幾多の浪人者が、なお生き残って、近畿の諸方をうろついているはずであり、飢えて追いつめられたかれらが徒党を組んで城を占拠する、というおそれもないことはなかった。そのために、警備は、厳重であった。

外濠の前面には、つわものどもの夢の跡が、瓦礫と雑草を一望にひろげていた。

陽が落ちた頃から、出て来た風が、しだいにはげしさを加えて、死に絶えたようなぼうぼうたるこの廃墟の野を吹きつのっていた。

深更——子刻。

織田重四郎、嘉七に、苦之市、芋兵衛、猿助を加えた五人が、それへ現われたのは、その時刻であった。

すぐに、猿助が、鉄柵ぎわまで、忍び寄って、しらべていたが、皆のところへ、もどって

来て、

「石垣をのぼるのは、あぶないのう」

と、云った。

「石垣をのぼらずに、城内へ忍び込めるか」

嘉七が、云った。

「勿論、のぼらなけりゃ、忍び込めぬ。それには、ちょいと、策を用いなけりゃならんて――」

猿助は、芋兵衛に、何やら耳うちしていたが、二人で、ごそごそと、どこかへ歩いて行った。

程なく、二人は、もどって来たが、四匹の野犬を、縄にかけて、曳いて来た。

「どうするのだ？」

嘉七が、問うた。

「ま――見ていなされ」

猿助は、一人で、四匹の野犬をつれて、鉄柵のそばへ、進んで行った。

芋兵衛の方は、三人をみちびいて、猿助とはかなりはなれた地点へ、忍んで行った。

猿助は、野犬どもを、縄にかけたままで、空濠の中へ投げ込んでおいて、おのれも、そっと、鉄柵を越えた。

それから、脇差を抜くや、すばやく、四匹の野犬の臀部を、斬った。

手負うた野犬どもは、狂ったように悲鳴をあげて、暴れまわった。

縄でつながれているために、疾走することができぬままに、そこに、凄まじい騒ぎが起った。

城壁上には、その騒ぎをききつけた番士が、あちらこちらから、駆け集まって来た。

その隙に――。

「いまじゃ！」

芋兵衛が、まっさきに、鉄柵を躍り越えた。

猿助の策は、みごとに、功を奏した。

四匹の野良犬が、狂ったようにはねまわる光景は、城壁上からは、いったいどうしたことか、まるっきり見当がつかぬことであった。

縄でつながれて、臀部を斬られているのである。その騒ぎは、凄まじくなるばかりであった。

ただ、さかりがついて、はねまわっているのではないため、城壁上の番士たちは、不安にかられつつ、見まもらざるを得ないのであった。

その隙に――。

芋兵衛を先頭に、重四郎、苦之市、嘉七とつづいた。

すこしおくれて、猿助が、のぼって来るはずであった。

城壁上は、銃眼をあけた高い土塀がつらなっていたが、これは、いたるところ、破壊され、どこからでも、ふみ込むことができた。

土塀の内側は、さいわいに、松林が深く、身をひそませるに、あつらえ向きであった。

嘉七は、松林の中から、城内を見わたして、

「変ってしもうた」

と、感慨ぶかく、つぶやいた。

太閤秀吉の権勢をもって、日本全土の諸侯を動員して、築かせた日本一の名城のおもかげは、もはやあとかたもない。

月下に、さむざむと、空地がひろがっているばかりであった。

「猿め、どうしたか」

芋兵衛が、云った時、すこしはなれた地点に、人影がうごめいた。

「猿か――」

「おう」

応えて、寄って来ると、

「ちと、まずい」

猿助は、云った。

「どうした？」

「番士の一人が、縄梯子をおろして、濠へ降りて行き居った。犬めらのざまを見れば、これが、はかりごとと判るかも知れん」

「やむを得まい。……急ごう」

重四郎は、うながして、さきに立って、歩き出した。

苦之市の描いた見取図では、修築された建物は、南方三の丸に、ある。

嘉七は、太閤時代から、地下牢が設けられてあることを知ってはいたが、それが、二の丸か、三の丸かは、判っていなかった。

三の丸に、かためて、建物が新しく築かれてあるところを考えれば、地下牢もまた、その下だ、と見当をつけてよさそうであった。

五人の進んで行く空地は、いたるところ、落城当時のまま放置されてあり、身をかくすには、便利であった。

さいわいに、風は、さらにひとしきり強くなっていた。

五人は、三の丸に迫り寄るまで、風の味方によって、番士に見とがめられるのを、まぬがれた。

いくつか、櫓が建っていて、その上には、見張りの目が光っている様子であったが、音もなく地上を掠める五つの黒影には、全然気がつかぬようであった。

その時刻から、雲がひろがりはじめて、月かげをかくしてくれたのも、さいわいした。

「幻夢殿――」

苦之市が、指さした方角に、くろぐろと、建物が浮きあがっていた。

嘉七の記憶にある三の丸とは、様相を一変させている。

建物は、幾棟かちらばっているが、いずれも、新しく建てられたものばかりであった。

「さて――、どうしたものか？」
嘉七は、当惑した。
「あたしらが、見つけられたのは、あの右方の建物に忍び入ったとたんでありました」
苦之市が、告げた。
「ふむ！」
嘉七は、重四郎のそばへ寄ると、
「どうなさいます？」
と、意見をもとめた。
「番士の一人を、とらえて、隠密奉行のいる建物を、白状させることにいたす」
重四郎は、云った。
「その役目、うけたまわる」
芋兵衛が、云い、猿助に、「行こう」とうながした。
「いや、その役目は、あたしにまかせてもらいましょう」
苦之市が、云った。
そして、背負うていた包みを、すばやく、おろすと、その中から、女ものの衣裳を、とり出して、身につけた。
あっ、という間に、女に化けた苦之市は、
「しばらく、お待ちを――」

と云いのこしておいて、そこから、するすると、出て行った。
「番士を、たぶらかすのか」
猿助が、首を振った。
「うまく、やるかのう？」
「やるだろう。あいつのことだ。この前は、男のいでたちで忍び入ったから、失敗した、と云うて居った。……あいつ、夜目には、男をふらふらとさせる色香をこぼしてみせるからのう」
重四郎と嘉七は、別のことを考えていた。
「老人――、この三の丸に、建物を集めているのは、なぜであろう？」
「そのことを、わしも、考えて居ります」
「本丸跡も二の丸跡も、そのままに、放置してある模様だ」
「なにか、理由があるに相違ありませぬ」
「もしかすれば、地下牢のほかに、この三の丸には、軍用金などをたくわえておく地下倉があるのではないか？」
「あるいは――」
女装した苦之市は、物陰から物陰へ、身を移して、建物へ、近づいて行った。
「あ――あそこに！」
苦之市は、立ちどまって、月闇の中で、ひとり、にやっとした。

建物から、人影が、ひとつ出て来たのである。
着流しだが、大小をたばさんでいる。
――百人組だな。
苦之市は、看てとった。
この城には、幾人かの与力の下に、御先手同心百人組が、配属されて、守備についている。
その一人であった。
「は、はっくしょいっ！」
大きなくしゃみをしてから、同心は、前をまくると、立小便をはじめた。
――こいつがよかろ。
苦之市は、物蔭から出ると、しなしなとした足どりで、近づいて行った。
その足音に、同心は、ふりかえって、月明りに、すかし視て、
「なんだ？」
と、誰何した。
「あい……」
苦之市は、こたえて、そばへ寄ると、媚をこめたしぐさで、
「お願い申しまする」
と、云いかけた。
「お前、お城の女中ではないではないか。町かたの、遊び女だな？」

「あい、そうでございます」
「どうやって、まぎれ込んだぞ。けしからん奴だ」
「与力様に、つれて来て頂いたのでございますよ」
「なに、与力に――？」
「あい。……殿がたというものは、まことに、現金でございますね。ご用が済むと、さっさと帰れ、とすげなく突き出しておしまいになって……、なにしろ、この広さでございます。どちらへ参れば、戻れるのか、見当もつかなくなって、途方にくれて居りまする」
まことしやかに、云った。
「そうか。それは、気の毒にのう。では、わしが、送って行ってつかわす」
「ありがとう存じます。たすかります」
「そのかわり、送り代をもらうぞ」
同心は、猿臂をのばして、苦之市の肩をつかんだ。
「あれ……」
苦之市は、からだ中を、なまこのように、ぐにゃぐにゃさせた。
その媚態が、同心の欲情をあおったらしく、
「与力にはからだを売っても、同心には売れぬ、と申すか」
「い、いえ、そのような……。でも、どこにも、しのび会う場所はございませぬが――」
「ははは……、しのび会う場所は、どこにでもあるぞ。いやでなければ、地下に部屋がある。

ひとつ、十日ばかり、そこで、しのんで、われら百人組を、客にとらぬか。もうかるぞ」

同心は、ぐっと、苦之市を抱きしめた。

「そのようなかくれ部屋がありますのかえ？」

苦之市は、抱き締められるにまかせながら、問うた。

苦之市は、夜でさえあれば、どんなもてあそばれかたをしようと、男であることが露見する不安がなかった。完全な女に化けてみせる自信があった。

「あるある！　たとえ、十日が一月になっても、かくれられる秘密部屋があるぞ。わしが、食いものをはこんでやるゆえ、どうじゃ、当分そこで、くらさぬか。……ふふ、お前のからだは、やわらこうて、抱き心地がええぞ」

同心は、すっかり、興奮しきった。

「では、そこへ、つれて行って、下さいませ」

「行くか！　そうか！」

二三歩行きかけて、苦之市は、急に思い出したように、

「あ、荷物を！」

と、云った。

「荷物を、どうした？」

「荷物が、重うて、あそこの、焼け跡へ置いて居りまする」

「うっかり者よのう。あそこというて、どこだ？　取って来てやる」

「あれ――そう申されると、方角がわからなくなってしもうた」

同心は、舌打ちした。

「よう見まわせ」

「すみませぬ。……たしか、あそこあたりと思いまするが……」

苦之市は、見当をつけた風に歩き出した。

同心は、やむなく、ついて来た。

そして、築地跡らしい小高い場所を越えた――とたん。

苦之市は、身をひるがえしざま、同心の鳩尾へ、拳を突き入れた。

同心は、ひくいうめきをのこして、その場へ、くずれ落ちてしまった。

苦之市は、すばやく、同心をくくりあげておいて、

「とらえました」

と、風に声をのせた。

重四郎ら四人が、そこへ来た。

「色仕掛けというやつには、男は、他愛なく、ひっかかるのう。要心！　要心！」

猿助が、云った。

芋兵衛が、同心をひき起すと、背活を入れた。

意識をとりもどした同心が、愕然として、はね起きようとするや、苦之市が、その頬げたを、ぴしっと、張った。

「な、なにをする？」
「不覚でありましたぞえ、同心殿」
「なんだと？」
「ほほほ……、あたしは、男じゃ。おわかりにならぬかえ？」
「く、くそ！」
「もう、あわてても、おそいわえ。……さ、白状してもらいましょう。お主が、出て来た建物に、隠密奉行が、逗留しているのであろうな？」
「それが、どうした？」
「会いたいのじゃ」
同心は、きょろきょろと、自分をとりまいた五人の曲者を、見まわした。
――遁れられぬ！
そう観念せざるを得ないようであった。
「同心さんよ」
猿助が、ぽんと肩をたたいた。
「白状するんだのう。ほかの人は、知らんが、わしは、気が短いぜ。ぐずぐず、ごねると、ぶすっとやりたくなる」
「ま、まってくれ。なんでも、しゃべる。……隠密奉行殿は、あの建物には、住んでは居られぬ」

「では、どの建物だ？」
「それが……わしらにも、よく、わからぬ」
「わからぬ？　なにを、ぬかす！」
猿助は、いきなり、同心の頬げたを、なぐりつけた。
「う、うそはつかぬ。……たしかに、隠密奉行殿は、当城に逗留して居られる。しかし、どの建物に起居されて居るのか――わしらは、知らぬ。いつわりは申さぬ。まことでござる！」
同心は、必死で、弁解した。
重四郎は、きいていて、
――この同心の云うことは、いつわりでなかろう。
隠密奉行という職分に在る者ならば、たとい、安全と思われる大坂城内に起居していても、瞬時も油断せずに、護身の法をえらんでおくのが、当然というものであろう。
毎日、その居室を換えている方が、隠密奉行らしい振舞いであろう。
「よし、それは、お主の申す通りであろう。しかし、隠密奉行が、起居するのは、あの三の丸の建物のうちであることはまちがいないであろう？」
「そ、それは、まちがいござらぬ」
同心は、みとめた。
「さて、次は、地下牢が、どこにあるか、教えてもらおう」
嘉七が、問うた。

「そ、そんなものは、当城には……」

否定しかけた同心の鼻さきへ、苦之市が、顔をつき出し、

「あたしを、十日が一月でも、かくれさせてやる、と云うたのは、どなた様でありましたぞえ？」

と、あびせた。

同心は、夜目にも、はげしい狼狽の色を示した。

地下牢は、北端の建物の下にある、と判った。

同心は、猿ぐつわをはめられ、築地蔭の凹地へころがされた。

「老人――。この三人を指揮して、地下牢を破ってもらおう。芋兵衛、牢を破る方法は、すでに、成って居るのであろうな？」

「たしかに、この胸に――」

芋兵衛は、胸を叩いてみせた。

「老人は、救い出したさわをつれて、遁走する」

「織田様は、どうしても、奉行の生命を狙われますか？」

「うむ」

重四郎は、うなずいた。

「奉行のやすんでいるところを、さがし当てるのは、この苦之市の役目でありますわえ」

苦之市が、云った。

「その前に、さわを救い出すことだ。苦之市も、老人について行け」

「では、織田様お一人で――？」

「ひとつの建物だけでも、室の数は二十以上はあろう。およそ七棟の建物をさがすのは、容易ではない。これは、わざと騒動を起して、奉行の居場所をつきとめるのが、逆手の策であろうと思う」

「織田様お一人で、同心百人組を、一手にひき受ける、と申されますか？」

「やむを得ぬ」

「しかし、それは、おのれで、死地をつくってしまうようなものでござるぞ」

猿助が、云った。

「無謀と申すものでござる」

芋兵衛も、かぶりを振った。

「やむを得ぬ！」

重四郎は、もう一度、きっぱりと、云った。

嘉七が、

「おのおの――、織田様の下知に従おうぞ！」

と、云った。

「かしこまった！」

猿助が、まず、承知した。

事態も、ここに至れば、野盗ごろつきのたぐいでも、一命をすてる覚悟は成る。
嘉七は、三人を引具して、北端の建物をめざして、進んで行った。
重四郎は、その反対の、南端の建物に向って、近づいて行く。
風は、ますます強くなり、月は全く層雲の上に、かくれた。
しんの暗闇であった。
——雨が来るな。
重四郎は、予感した。
天変は、なによりの味方となる。
建物に数間の地点で、地面に身を伏せた重四郎は、
——風来坊の素浪人が、途方もない冒険をやるものだ。
と、他人事のように、胸で呟いた。
隠密奉行を襲う名目は、あった。
もしかすれば、白河館を全滅させたのは、隠密奉行のしわざかも知れないのであった。そうだとすれば、隠密奉行は、白河館姉弟の敵であった。
姉弟に代っての、敵討になるのだ。
やらねばならぬ壮挙、といえる。
しかし——。
この壮挙は、猿助や芋兵衛の云う通り、まさしく、死地をつくることであり、無謀きわまりないことであった。

百に一も、隠密奉行の首級が挙げられるとは、重四郎自身考えられなかった。
にも拘らず、やろうとする。
これが人間という奴なのだ、と重四郎は、おのれに云いきかせた。
中空を吹きつのる烈風の唸りは、重四郎に、
——さあ、やれ！
と、せきたてているようであった。

隠密奉行

ぶるっ、とひとつ、猿助が、身ぶるいした。
築地を越えて、その建物の前の庭に入って、身を伏せた時であった。
「予感がする」
猿助は、かたわらの芋兵衛に、ささやいた。
「なんだ？」
「イヤな予感だ」
「イヤな予感だと？」

「わしは、餓鬼の時から、予感というやつを、大切にしている。ふしぎに、これが、当る」
「予感など、あてになるものか」
「それが、わしの予感は、いままで、はずれたことがない」
「ふうん。……しかし、もう、あとへは引けんわい。なるようにしかならん。やっつけるよりほかに、しょうがないわえ」
芋兵衛は、吐きすてるように、云った。
嘉七と苦之市は、数間はなれたところに、伏せている。
庭といっても、豊臣時代は、美しく手入れされていて、さぞ立派であったろうが、いまは、荒れるにまかせて放置され、雑草が生い茂っている。築山の樹木は、倒れたままになって居り、大きな泉水も、水は涸れて、落葉の溜りになっている模様である。
ここならば、白昼、身をひそめていても、発見されることはないように思われる。
しかし、猿助は、イヤな予感がする、と云う。
嘉七と苦之市が、身を起して、走るのが、見わけられた。
猿助も芋兵衛も、それにつづいて、走った。
四人は、築山の頂きに、達した。
前方に眺める建物は、巨大な怪物のように、どっしりと闇の中に、わだかまっている。
「やっぱり……イヤな予感がする」
猿助が、また、つぶやいた。

「もう、止せ」
芋兵衛が、制した。
「わしも、云いたくはない。しかし、予感が起っている以上、しかたがなかろう」
「では、お前だけ、ひきかえせ」
「そうは、いかん。……ええい、くそ、まったく、やりきれん！」
猿助自身、実際、黒雲のように心中にわきあがって、渦をまく不安感を、なんとかして、払いのけたいのであった。
嘉七が、近づいて来て、
「芋兵衛――、火薬の用意はよいのだな」
と、念を押した。
「まかせておいてもらいましょう」
「この風なら、建物は、ひとなめにできるであろうな」
「たやすいこと」
「しかし、なるべくは、大騒動を起さずに、ぶじに、遁走したいものだ」
嘉七が云うのをきいて、猿助が、
「幻夢殿も、予感がしますかの？」
と、きいた。
「予感？」

嘉七は、ききかえした。
「左様――イヤな予感が、さっきから、起って居るのでござる」
猿助は、こたえた。
それをきいて、嘉七は、ちょっと沈黙を置いてから、
「備えのあるところへ踏み込む以上は、生命をすてる覚悟をしなければならぬ」
と、云った。
厳然とした幻夢十郎次の言葉であった。
猿助も芋兵衛も、それをきいて、一瞬、覚悟ができたようであった。
「行こう！」
四人は、するする……と築山を、降りるや、涸れた泉水を越えて行った。
建物へ、二間あまりの距離まで近づいて、身を伏せた時であった。
突然――。
どーん、と大きな音響とともに、闇空に、花火が、うちあげられた。
四人は、はっとなって、ふり仰いだ。
花火は、白煙の尾をひいて、こちらめがけて、しゅるしゅる、と落下して来た。
とたんに――。
彼方此方（かなたこなた）の望楼から、鐘が早打ちされはじめた。
「いかん！　やっぱり、予感は、当ったぞ！」

猿助が、叫んだ。
番士が、外濠へ降りて、つながれた手負いの野良犬どもの狂乱ぶりを眺めて、曲者侵入と直感したに相違なかった。
「うむ！」
嘉七は、うめいた。
「どうなされるぞえ、幻夢殿？」
苦之市が、意外におちついた声音で、問うた。
「地下牢を破るのは、一時中止じゃ！　織田重四郎様を、殺してはならぬ！」
嘉七は、云った。
いままで、烈風の中で、ひっそりとねむっていた建物が、にわかに、明りをつけて、騒然となるさまを、見てとった四人は、瞬間、身をひるがえして、奔（はし）りはじめた。
吹きつのる烈風が、味方をしてくれなければ、四人は、たちまち、同心百人組はじめ、兵卒の群れに包囲されたに相違なかった。
築山を越えようとしたとたん、そこを見張りに来た三人の番士に、真正面から衝突したが、あっという間に、斬り伏せて、遁れた。そして、それは、烈風の音に消されて、他の番士たちの耳目には、とどかなかった。
こうした一瞬の闘いには、意外にも、苦之市が、最も目ざましい働きをした。
三人の番士のうち、二人を斬ったのは、苦之市であった。さわと一緒に忍び込んだ時の、

さんざん追いまわされたくやしさを、いま、はらしてやろう、という闘志が、わき立っていたのかも知れぬ。

苦之市は、一尺二寸あまりの短い刀を携えていたが、それをまっすぐに突き出して、体当りをくれたのである。

「苦之市、見なおしたのう」

走りながら、猿助が、云った。

この夜――。

隠密奉行・赤松丹波は、最近召抱えたばかりのういういしい腰元を、伽させて、ねむっていた。

大手門近くから、花火が打ちあげられるや、我破とはね起きた。

「何事だ？」

大喝に応じて、宿直の士が、あわただしく、馳せて来て、廊下から、

「曲者が侵入いたした気配がありまする」

と、告げた。

腰元は、乱れた寝衣をなおすいとまもなく、奉行が身じまいをととのえるのを、手つだわなければならなかった。

赤松丹波は、衣服をつけおわると、

「茶を一服――」

と、命じた。

腰元は、「きかえまするゆえ、暫時――」と乞うた。

「そのままでよい。寝みだれ姿も、また、よいものだ」

丹波は、笑った。

腰元は、丹波の所望で、燃えるような緋の寝衣をまとうていた。

腰元は、しかたなく、そのすがたで、大火鉢にかけてあった鉄瓶をとって、茶を淹れた。

宿直の士から、つぎつぎと報告に来たが、まだ、曲者を発見した、という報告はひとつもなかった。

丹波は、茶碗を受けとってから、腰元に、

「江戸へもどる時は、そなたを、ともなうぞ」

と、云った。

よほど、この白い肌理こまやかなからだが、気に入った様子であった。

幾度目かの報告者が、廊下に来るや、丹波は、凄まじい声音で、

「めくらども！　何をいたして居る！」

と、きめつけた。

腰元へ云いかける丹波とは、全く別人であった。

この時――。

曲者は、すでに、この建物の中に、忍び入っていた。

評定のために設けられた百畳の広間に、織田重四郎は立っていたのである。

小部屋にひそむよりも、かえって、大広間をえらんだ方が、探索の目をのがれやすい、と考えたのは、賢明であった。

廊下を馳せすぎる足音は、絶え間なしにきこえたが、誰も、この大広間をのぞこうとはしなかった。

――隠密奉行は、この建物の中だ！

重四郎は、しばらく、ここに立っているあいだに、確信を持った。

宿直の士たちが、馳せて行く奥に、その寝所がある、と合点された。

しかし、容易に、奥へ向って、進むことはできなかった。

発見されたならば、阿修羅とならねばならぬ。

人間一人の力など、知れたものであることを、重四郎のこれまでの経験が教えていた。

それにしても、いつまでも、この大広間にひそんでいるわけには、いかなかった。

――いったん、退散するか？　それとも、ここまで踏み込んで来たからには、是が非でも、隠密奉行の首級を狙うか？

しばらくためらっていた重四郎は、急に、決意した。

――やむを得ぬ！　虎穴に入らずんば虎子を得ずだ。

すでに、侵入したことを気がつかれたのである。

警戒網が、くまなく張られてしまう上からは、脱出の可能性もきわめて薄くなってしまっ

たのである。

窮鼠は、猫を噛むよりほかにすべはない。

重四郎は、檜戸へ寄ると、じっと、廊下をうかがっていたが、宿直の士たちがすべて、おもてへ奔ったとみえて、急にひっそりとなったのを窺って、すっと出た。

足早に奥へ向って、進むうちに、また、むこうから、あわただしく馳せて来る足音がひびいたので、身をひるがえして、かたわらの部屋へ、とび込んだ。

とたんに、

「ひっ！」

と、悲鳴があがった。

緋の下着いちまいの若い女が、衣裳をつけようとして、不意の侵入者に、ふるえあがった。

「しずかに！」

重四郎は、制した。

「さわげば、やむなく、斬る！」

「は、はい――」

腰元は、うなずいた。

重四郎は、廊下を、足音が馳せすぎるのを待ってから、あらためて、部屋を見まわした。

牀は、のべてある。

しかし、寝た形跡はなかった。

いま時刻、起きあがって衣裳をつけようとしているのは、どうしたことか。

——妙だな。

重四郎は、腰元を見まもった。

その場へうずくまって、ふるえている姿が、いかにも、ういういしく、いたましかった。

「そなた——」

重四郎は、呼んだ。

「偉い人の伽をして来たのではないのか？」

「……」

腰元は、うなだれて、こたえぬ。

「そうではないのか？　そなたは、人身御供になったのではないか？」

「……」

重四郎は、そばへ寄って、腰元の肩をつかんだ。

「こたえてもらおう」

重四郎は、肩をつかんだ手に、力をこめた。

腰元は、急に、両手で顔を掩うと、すすり泣きはじめた。

「やはり、そうか。……では、そなたが、伽をして来た部屋を教えてもらおう。いままで、そなたは、そこにいたのだろう？」

腰元は、泣きやめると、怯えたまなざしをあげて、

「わ、わたくしを、つれて、にげて下さいましょうか？」

と、乞うた。

「できるものなら、引き受けてもよいが……、まず、そなたが伽をした部屋を、教えてもらおう」

「ここから、三部屋むこうの、奥の間でございます」

「よし——」

重四郎が、出て行こうとすると、娘は、はじかれたように、はね起つと、

「おねがいでございます！　わたくしを、おつれ下さいませ！」

と、とりすがった。

「待っているがよい。……こちらが、死ぬ覚悟でいるのだ。もし、天佑があって、生きのびて、堂々と城を出て行く奇跡でも与えられたならば、勿論、そなたをつれて行ってやろう」

「は、はい」

「そなたの名をきいておこう」

「たか、と申します」

「町かたのむすめだな？」

「はい。父は研師でございます。……赤松丹波様が、時おり、おみえになるうちに、わたくしを、所望なさったのでございます」

「赤松丹波！」

重四郎は、その名を、脳裡に刻み込むように、口にした。
「では――」
重四郎は、たかに一揖しておいて、廊下へ出た。
とたんに――。
奥からもどって来ようとした一人の士が、
「何者っ！　……曲者か？」
と、誰何した。
瞬間――重四郎は、飛鳥の勢いで奔りざま、抜きつけの一太刀をあびせた。
呻きもあげずに、廊下へのめった士の上を躍りこえた重四郎は、まっしぐらに、その一室をめざした。
そして、その前に達するのと、檜戸がひき開けられるのが、同時であった。
重四郎は、手槍を構えた隠密奉行を一瞥するや、
――やはり、その人物であったか！
と、にやりとした。
赤松丹波の方も、
「ほう――お主が推参か！」
と、薄ら笑った。
重四郎が、一歩押し入るや、丹波は、一歩退った。

重四郎は、油断なく片手青眼に構えつつ、左手で、檜戸を閉めた。
「わしの首級を取りに参ったか？」
「談合次第では――」
「なんの談合だ？」
「当城地下牢に、さわと申す女が監禁されているはず。申し受けたい」
「お主の女か？」
「どうお受けとり下さろうと、かまい申さぬ。さわは、たしかに、地下牢に監禁されて居りますな？」
丹波は、しかし、それには、すぐこたえず、
「女一人を救いに、当城へ侵入して参るとは、見上げた度胸とほめておこう」
と、云った。
重四郎は、おちつきはらった隠密奉行の堂々たる貫禄に、いささか圧倒されるものをおぼえて、その意識をはねのけるために、急に、二歩ばかり迫った。
丹波は、槍の構えを直して、
「犬死をいたすな。それだけの業前を持った身を、自身で、惜しめ」
と、云った。
「こちらには、生命をなげ出す理由があるのだ」
「きこうかの？」

「隠密奉行殿は、七年前、伏見の白河館を、夜襲されたおぼえがあろう？」
「それがどうした？」
――やっぱり、そうであったか！
重四郎は、うなずいた。
「お手前は、白河館をみな殺しにして、その下手人を、伊丹の平家館のあるじと見せかけた。そのため、白河館の遺児二人は、今日まで、神屋主膳を敵と思い込んでいたのだ」
「それで……？」
「それがしは、遺児たちに、必ず、両親のうらみをはらさせる、と約束いたした」
「わしが、敵であることを、つきとめに参ったのか。殊勝な心掛けよのう」
「お手前を討つことは、これまでとりつぶされた幾十の大名衆のうらみをはらすことにも相成るぞ！」
「正義の旗をふりかざしたあっぱれな志――とほめてやりたいところだが、たわけっ！」
丹波は、一喝した。
「目をあげて、天下を見よ！　徳川家の権勢が、大河の流れのごとく、百年二百年の後代まで、流れて行くさまを見よ！　わしなどは、その流れの上で、せっせと、小舟をあやつって居る船頭にすぎぬ。……おのれは、改易になった外様大名たちに、同情いたして居るのであろうが、滅びる者は、滅びるだけの理由があり、これは、運命と申すもの。徳川家も、何百年の後には、やはり、滅びる秋が来れば、いかに、あがいても、支えきれぬ。これが、人間

の生きて居る世の中のさだめと申すもの。……おのれ如き、痩浪人が、躍起になって、このわしを討ってみたところで、それが、何になる！　わしが死ねば、また、幕府は、第二のわし、第三のわしをつくるだけのことだぞ」
丹波の云うことは、その通りだ、と重四郎には、合点できた。
しかし、合点できたとしても、刀を引くわけにはいかなかった。
重四郎は、この隠密奉行とは、別の世界に住んでいる。
いかに、正論を吐かれ、説き伏せられようとも、この人物の下に、座すことは、まっぴら御免であった。
重四郎は、こういう傲慢にも、おのが立場を正当化して、いかなる残酷な所業でも平然と為す人物を、最も嫌悪する。
「奉行！」
重四郎は、丹波の説得力をはねかえすべく、鋭く睨みつけて、云った。
「白河館を潰滅せしめたのは、そのたくわえた南蛮金の奪取にあったのだろう。それに失敗するや、生き残った遺児の行方をつきとめて、刺客を送りつけて来た。正常の人間の為すべきことか。幕府の権勢という大河の流れの上で躍る小舟の船頭ならば、その残酷も許される、というのか！　それがしは、その残酷を憎むのだ」
「わしは、隠密奉行だぞ。隠密奉行の任務は、公儀金庫をみたすことを、第一の目的として居る」

「その目的を遂行するためには、手段をえらばぬ、というのか」
「左様――、えらばぬのう。公儀の目をかすめて、こっそり金をかくして居る者が、いれば、容赦なく、これをあばいて、殺し、召し上げる。隠密奉行の任務が、これだ！」
「天が許さぬ！」
「業力さかんなれば、神力もひきさがる、と申すぞ」
丹波は、うそぶいた。
瞬間――。
重四郎は、猛然と突進した。
白刃と槍の穂先が、火花を散らした。
流石、隠密奉行だけあって、兵法も一流の達人であった。
重四郎は、丹波を床の間まで、追いつめながら、一撃をあびせることが叶わなかった。
再び、睨みあいの対峙になった。
「織田重四郎、と申したな」
「……」
「織田家にゆかりのある者とみたぞ。信長公の血をひいて居ろう」
「そのようなことは、どうでもよい！」
「どうでもよくはないぞ。名家の血を享けた者は、やはり、志に高いものを持つはずだ」
重四郎は、悠々たる余裕を示す丹波の態度に、いら立った。

一瞬を、えらんで、またもや、猛撃に出たが、勝負はつかなかった。
ぐずぐずしていれば、宿直の士がやって来て、発見されるに相違ない。
丹波が、家来を呼びたてぬのは、腕に自信がある証左であるが、また、隠密奉行としての貫禄を示して、こちらに刀をすてさせる気持もあるに相違なかった。
その肚のうちが読みとれるだけに、重四郎は、あせった。
じりじりと追いつめながら、追いつめているおのれの方に、しだいに、余裕が失せてくるのは、堪えがたかった。
「織田重四郎――考えなおせ！」
「問答無用！」
「いまに、わしの部下が来るぞ。そうなれば、お主は、斬り死の一途しかないのだぞ！」
「生命は、すでに、すてている！」
「たわけ！　ひとつしかない生命ではないか。また、押し入って参った理由は、斬り死するほどの名分にはならぬ」
「云うなっ！」
重四郎は、三度び攻撃にうって出た。
その頃、嘉七以下三人は、その建物へ、十歩の間近まで、奔って来ていた。
しかし、もう、その時は、疾駆する四人の速影は、城中警備の面々の目に、とらえられていた。

「曲者は、あそこだっ！」
「のがすなっ！」
「忍びらしいぞ！」
「とらえろっ！」
叫びが、風に乗って、四人の耳にもとどいた。
銃声も起った。
この頃合になって、また、月かげが、下界をあかるくして来たのも、四人の立場を不利にした。
「建物へ、にげ込むことだぞ！」
嘉七は、三人に云いきかせておいて、先頭をきって、奔った。
しかし、行手に、十数人の敵に立ちふさがられるや、もう、四人は、ばらばらになって、闘うよりほかはなかった。
四人は、それぞれ、おのが流儀の闘いぶりを示した。
嘉七は、襲いかかる白刃や槍をはねかえし、ふせぎはしたが、自らすすんで、敵を斬ろうとはしなかった。忍者であることをすてて以来、嘉七は、人命を奪うことを自らに禁じていたのである。
苦之市は、その女装を利用して、もっぱら、ひらひらと舞うようにのがれ、生捕ろうとする者を、片はしから、短剣で刺した。

猿助は、一番敏捷であった。いかにも、その名にふさわしいすばやさで、はねまわって、包囲する敵たちをとまどわせた。
それに反して、芋兵衛の方は、動きがひどくにぶいものに思われた。敵の方は、それを見て、最初かなりあなどった模様であったが、そのうちに、そのいかにものろくさい動作が、正確な技をそなえたものであることに、気がつかなければならなかった。
芋兵衛は、一太刀ずつで、攻めかかる敵の手くびを斬ったのである。
そのうちに——。
嘉七も苦之市も、猿助も芋兵衛も、隙をうかがって、建物の中へ、身を移していた。
しかし、廊下を、奥へ向って、突進しようとした時、嘉七は、やはり老年の疲労をおぼえていた。
すでに、身に幾箇処か、傷を負うてもいた。
前後、二人ずつの敵に迫られて、その攻撃をふせぐ動きをくりかえすたびに、疲労が濃くなって来た。
一瞬——。
前後から同時に、
「やあっ！」
「えい！」
と斬りつけられ、嘉七は、反射的に、右手の杉戸を蹴って、のがれようとした。

そのせつな、その部屋の闇の中から、びゅっと、槍が、くり出されて来て、したたか、嘉七の横腹を刺した。

「うっ――むっ！」

嘉七は、槍の柄をつかんでよろめいた。

この光景を、廊下を奔りぬけようとした苫之市が、チラと目にとめて、

「幻夢殿！」

と、呼んで、とび込んで来た。

嘉七は、横腹から槍の穂先を抜きざまに、その敵を、はじめて、斬った。

「苫之市――。わしに、かまうな！」

嘉七は、床柱へよりかかると、かぶりを振った。

「幻夢殿！　浅傷じゃ！」

苫之市は、馳せ寄ると、

「のがれられませ！」

と、せきたてた。

「い、いや――」

嘉七は、大きく吐息して、「最期が来た」と呟いた。

苫之市は、肉薄して来る数人の敵を、ふせぎつつ、嘉七に血路をひらかせようとした。

しかし、嘉七は、動かなかった。

「苫之市――」

「はいっ！」

「さ、さいごの、手段じゃ。……芋兵衛に、火、火薬を……」

そこまで云ってから、嘉七は、ずるずると、畳へ崩れた。

「わかりました！」

苫之市は、もはや、嘉七を救うのぞみはない、と知るや、身をひるがえして、廊下へ出た。

苫之市の得意とする業は、ぱっと身を沈めざまに、くるっと、宙を回転することであった。

敵のすべては、苫之市が女であることを、疑わなかった。したがって、苫之市が、宙を回転して、赤い下着をぱっと散らせば、どの目も、はっとなる。これは、男の本能であった。

その隙に、苫之市は、立った瞬間には、必ず、一人を突き刺していた。

苫之市は、そうしながら、廊下を二十間あまり、奥へ奥へ、と進んだ。

中庭へまわり出た時、苫之市は、そこでたたかっている猿助と芋兵衛を、見出した。

「芋兵衛！」

苫之市は、叫んだ。

「火薬じゃぞえ！」

「わかった！　どこで、やる？」

「あたしに、ついて来な！」

「合点――」

芋兵衛は、その場へ、二人ばかり、仆しておいて、
「猿っ、ここでふせげっ！」
と、叫びのこして、廊下へ躍りあがった。
中庭をへだてる奥の建物には、敵の影はすくなかった。
というよりも、苦之市と芋兵衛の奔るのが、あまりにはやくて、敵勢は、追いすがれなかったのである。
一気に、暗い廊下を駆け抜けて、二人は、見当をつけて、とある一室へとび込んだ。
そこには、数人の女中が、かたまっていて、悲鳴をあげた。
「怕うはない！」
苦之市は、笑ってみせる余裕をみせた。
その女中部屋を、突ききって、別の廊下へ出た苦之市と、芋兵衛は、ともに、申し合せたように、ピタッとそこへ伏せて、廊下板へ、耳をあてた。
瞬間——。
苦之市と、芋兵衛は、期せずして、
「やっている！」
と、叫んだ。
次のせつな、二人は、鳥のごとくはね起きて、廊下を奔った。
二人の鋭敏な感覚は、ごく近い部屋にみなぎっている凄まじい殺気を、察知したのである。

そして——。
そこへ奔って、檜戸をさっと開くや、二人は、部屋の一隅に、隠密奉行と重四郎の対峙を、見出したのであった。
「やれ——、間に合うたか！」
芋兵衛は、にやりとしたし、苦之市は、
「お奉行殿、もはや、とりこじゃ。観念なされませえな」
と、云った。
赤松丹波は、はじめて、追いつめられた者の表情を、微かにうかべた。
芋兵衛は、すばやく、腰に携げていたかなりの大きさの革袋を把って、廊下ぎわと、広縁ぎわの檜戸の敷居へ、白い粉を、撒いた。
「お奉行殿、もはや、抗うのは、むだでありますわな。降伏！　降伏！」
苦之市は、せきたてた。
芋兵衛は、短筒を右手にして、待ちかまえている。
重四郎は、青眼の剣を、やや、下げて、丹波の出様を、じっと凝視している。
と——。
奥庭を奔って来る多勢の足音がして、広縁へ、どっと躍りあがって来た。
「殿っ！　曲者は、こちらへ遁げ込みましたぞ！」
「ご油断なく——」

叫びたてた。

丹波は、おちついた声音で、

「曲者は、ここだ！」

と、こたえた。

「おっ！」

「ご免――」

檜戸が開かれた――一瞬、芋兵衛は、短筒の引金を引いた。凄まじい轟音が起った。

敷居に撒いた白い粉が、爆発して、ふっとんだ檜戸が、広縁に殺到した同心百人組の面々にむかって、はね散ったのである。

とみるや、芋兵衛は、ひととびして、また、広縁へ、白い粉をぱっと撒いた。

「もう一度、やるか！」

芋兵衛は、威勢よく、叫んだ。

「待て！」

丹波が、大声で、とどめた。

丹波は、ようやく、おのが入った窮地を、のがれられぬ、とさとったのである。

丹波は、もはや、重四郎の迅業をかわすには、流石に、体力がつきていた。

いま、丹波が、反撃に出ようとすれば、重四郎の剣下に、あえなく伏すことになろう。

「織田重四郎、剣を引け。この赤松丹波が、はじめて、敗北をみとめよう」

隠密奉行にとって、この言葉を吐くのは、死ぬほどの苦痛であったに相違ない。

「条件は？」

「女をひき渡そう」

丹波は、こたえた。

「条件は、もうひとつあるはず――」

「なんだな？」

「白河館姉弟の敵が、何者であるか、判明いたした」

「その儀か。……どうする？」

「助太刀を引き受けたそれがしとしては、期日と場所を指定させて頂こう。いかがであろう？」

「待て！」

丹波は、かぶりを振った。

「わしは、まだ、為さねばならぬことが、山ほどある。いま、楠木家の遺児らに、討たれてやるわけには参らぬ」

「仇討の儀を、こばまれるか？」

「いや、こばみはせぬ。遺児らが、わしの首を、狙うことは、一向に、かまわぬ。いつなりとも、襲ってくれてよかろう。但し、わしの方から、指定の場所へおもむく約束は、できぬ。隠密奉行であるわしには、遺児らのほかにも、わしを敵と狙う者たちが、十人や二十人では

ない。それに、いちいち討たれる約束をしてやっては、いくつ首があっても足りぬ。この理屈わかるであろう？」

たしかに、その通りであった。

「よろしかろう。では、日時と場所は、約束いたさぬ。しかし、それがしは、必ず、姉弟に助勢して、お手前の首級を申し受ける」

「その覚悟は、しかときいた」

丹波は、大きくうなずいてみせた。

苦之市が、重四郎のそばへ寄って来て、

「だまされますな」

と、ささやいて、丹波を、にらんだ。

「だまされはせぬ。……しかし、対手を信用してみることも、いまは必要だ。この隠密奉行は、われわれを、無事に城外へ送り出すであろう」

重四郎は、云った。

重四郎の観察に、まちがいはなかった。

丹波は、与力、同心に、大声で申し渡して、侵入者どもに手出しを禁じた。そして、さわを、地下牢から、ひき出して、渡してやるように命じた。

夜が明けた。

丹波は、重四郎、さわ、苦之市、芋兵衛、猿助がならぶのを眺めて、

「この小人数で、押し入って参ったとは、あっぱれなものよのう。お主らのような度胸を持った者が、わしの配下に、幾人居るか――」

と、笑った。

重四郎は、黙って、踵をまわした。

さわとひきかえに、嘉七に生命を落させたことが、激しい悔いとして、胸中にのこっていた。

城外へ出た時、重四郎は、その悔いを、深い吐息にした。

志ある人々

同じ大坂の、道頓堀の旅籠街の一軒に、金井半兵衛と八千代は、なお、旅客として泊りつづけていた。

昼も夜も、騒々しい、さまざまの臭気のまじりあった旅籠ぐらしに、八千代は、どうしても、馴れることはできなかった。

そのために、八千代は、半兵衛と、しばしば、口争いをした。

今朝も――。

食膳をへだてて、八千代は、半兵衛に向って、態度をあらためると、

「わたくしは、もう、このようなくらしには、堪えられませぬ」
と、云った。
「姫路城へ帰るか」
半兵衛は、まるで受けつけようとせぬ冷酷な表情をみせた。
「わたくしが、姫路へもどれるかどうか、ご存じのくせに、どうして、そのように、いじめようとなさいます？」
「わしに従っている上からは、そのくらしにあまんじなければならぬ」
「わたくしは、貴方の妻になって居ります。貴方から見はなされては、生きてゆくすべはありませぬ。このことは、もう、幾度も、申し上げました。ただ、いつまで、このような旅籠ぐらしをなさるのか――それが、不安でなりませぬ」
「裏店ぐらしは、まっぴらだと申して居る」
「町をはずれたところに、しずかな一軒家をお借りなさればよろしいではありませぬか」
「家を持つのは、性に合わぬ」
「わたくしは、女です。人の妻となれば、家を持ちたくなりまする」
「姫――」
半兵衛は、八千代を冷やかに見据えた。
「わしは、そなたと夫婦になったとは、考えて居らぬぞ！」
「え?!」

「男と女が、偶然、一緒に、こうして、旅籠の一部屋で、すごして居る。それだけのことだ」
「まあ！」
八千代は、あまりの冷酷な言葉に、唖然となった。
しばし、男の顔を見つめかえしているうちに、八千代は、にわかに、はげしい怒りにかられた。
「わたくしの操をうばい、夜毎自由にもてあそんでおいて、そのお言葉は、何事でありましょう。女子の操は、いのちでありまする！」
「こっちは、そうは思わぬ。お互いに、愉しんで居るではないか。そなたは、わしによって、女のよろこびを知ったのだぞ。女と生れて、男女の睦みによろこびを知るのは、神のさだめるところ。しかし、そのために、夫婦にならねばならぬ、という掟はない。そのうちにあきて来れば、対手をかえればよい。その方が、自然であろうな」
「貴方は、なんということを！」
八千代は、かっと、全身の血潮が逆流するような思いがした。
半兵衛の方は、こともなげに、
「わしは、人間の生きかたをきめて居る」
と、云った。
「では、貴方は、わたくしを、あきたならば、すててしまうと申されるのですか？」
「いやになっても、一緒にいるのは、お互いに、堪えがたかろう」

「女というものは、いちど良人と思いさだめた御仁を、いやにはなりませぬ！」
「男は、ちがう。あきてしまったら、手をふれるのも、まっぴらだ」
「貴方は、もう、わたくしを、あきて来られたのじゃ！」
「ははは……、そのように夜叉のような形相になると、あきても来よう」
半兵衛は、そう云いすてて、立ち上っていた。
一瞬――、八千代は、半兵衛が二度と、この部屋へもどって来ないような気がした。
「どちらへ、お出かけになります？」
「そろそろ、懐中が乏しくなった。すこしばかり、工面して参る」
「どのようなお仕事をなされて？」
「外へ出て、歩き出しながら、考える」
そう云いすてて、半兵衛は、出て行ってしまったのであった。
午をむかえて、八千代は、なお、じっと、坐りつづけて、半兵衛の帰りを待ちつづけていることに、堪えがたい焦燥をおぼえた。
半兵衛は、いったん、出て行くと、どこでどうすごすのか、決して、夜おそくでなければ、もどっては来なかった。
八千代は、ただ、その帰りを待ちつづけるだけで、毎日をすごして来た。
いっそ、姫路城へ帰ろうか、と幾度考えたか知れなかった。
しかし、それは、できなかった。

いまさら、おめおめと帰れる身ではなかった。
帰れば、あるいは、許されるかも知れなかった。しかし、大名の息女が失踪して、どこでどんなくらしをしていたか不明のままに、また舞い戻って来た、ということになれば、これは、狂気沙汰として、帰って行くや直ちに、座敷牢ぐらしをしいられるに相違なかった。
本多家としては、世間に対する面目上、そうせざるを得ないのである。
城中奥ふかく、とじこめられてしまった生活が、どのように暗い灰色のものか、八千代には、手にとるように判るのであった。
八千代は、死んでもイヤであった。
また――。
いかに半兵衛が冷酷な男ではあっても、深夜、牀に入った時の激しい愛撫を想うと、八千代は、半兵衛からはなれられなかった。
たしかに、半兵衛に指摘されたごとく、肉体の熟した女は、ひとたび、愛欲のよろこびを知ると、地獄までも堕ちる気持を持ってしまう。
女の性の哀しさであった。
八千代は、男の帰りを待ちつづけながら、
――あのような冷たいことを云いながら、あの人は、心のどこかでは、わたくしを愛しているのだ。
と、自分に云いきかせていた。

「ごめん下さいまし」
廊下から、声がかかって、八千代は、われにかえった。
顔をのぞけたのは、ごく平凡な顔つきの町人であった。
「お迎えに参じました」
「え？」
八千代は、眉宇をひそめた。
「金井様が、奈良街道へ入るあたりに、しずかな一軒家を、見つけられまして、お借りになる由でございます。それで、てまえに、妻を呼んで来てくれ、と仰言いますので、お迎えに参じたのでございます」
これをきいて、八千代の閉ざされていた暗い心に、ぱっとあかるい陽ざしがさした。
「まあ！　それは――」
「お供いたします」
町人は、にこにこして、頭を下げた。
金井半兵衛のうかつというべきであった。こういう下層の世界では、見知らぬ人間に対しては、要心しすぎるほど要心しても、決してむだではない、と八千代に教えておくべきであった。
悪党であるほど、善人の仮面をかぶっているものゆえ、油断するな、と教えておかなければならなかったのである。

八千代は、なんのうたがいも抱かずに、いそいそと立ちあがり、その町人について、おもてへ出た。
「お内儀様は、まことにお美しゅうございますな」
町人は、案内して行きながら、ペラペラと、よくしゃべった。
「はき溜に鶴、とはこのことでございます。金井様ともあろう御仁が、どうして、こんなお美しいお内儀を、あんなうすぎたない旅籠にとじこめておかれるのか、合点のいかぬことでございますよ」
「その……一軒家というのは、どのようなたたずまいでしょう？」
「へ――そりゃもう、閑静なところに、さるお武家の隠居所として建てられた家でございまして、おすまいとしては、まことに……」
町人は、まことしやかに、こたえつつ、かなりの急ぎ足で、八千代を、見知らぬさびしい道へと、いざなった。
とある辻に出てから、町人は、
「駕籠になさいますか」
と、すすめた。
八千代自身、歩くことには、馴れていなかったので、うなずいた。
辻駕籠にゆられて、かなりの道程を行ってから、不意に、
「そこだ」

と、町人の声が、指示した。
町人は、八千代を駕籠にのせてから、なぜか、黙りこくっていたのである。
駕籠は、往還をそれて、雑草をかきわけて、進むようであった。
やがて、停められた。
町人が、たれをあげた。
「出てもらおうかね」
言葉づかいが、ひどく横柄になっていた。
八千代は、不審のまなざしを、あたりへまわした。
松林の中の空地であった。家らしいものは、どこにも見当らぬ。
遠くから、潮騒がひびいて来ていた。
「ここは、どこです？」
「どこでもいい。出てもらおう」
険しい声音をあびせられて、八千代は、ようやく、だまされてつれ出されたのだ、とさとった。
「お前は、半兵衛殿の名をかたって、わたくしをおびき出したのですね？」
「やっと、わかって頂けたかね。その通りさ。……ここまで連れて来られたんじゃ、観念するよりほかにしようがねえ。おとなしく、こっちの指図にしたがってもらおうか」
「お前は、何者です？」

「盗人が稼業でね、宵闇の仙六、という、ちっとは知れた男さ。かどわかしはいまがはじめてだ。あんな旅籠に、いつまでも泊っていりゃ、かどわかしたくもなろうというものだ。――さ、出るんだ」
云いざま、猿臂をのばして、八千代をひき出そうとした。
とたんに、
「あ――ちっ！」
悲鳴をあげて、とび退いた。
八千代の右手には、懐剣が抜き持たれていたのである。
「あまっ！　しゃらくせえまねをしやがる！」
宵闇の仙六は、形相を一変させた。
八千代は、すばやく、駕籠から、反対側へ抜け出て、
「慮外は、許さぬ！」
と、叱咤した。
仙六は、隙をうかがって、とびかかろうと、狙ったが、どうにも隙がないとみてとるや、
「旦那！　日野の旦那！」
と、高声で、呼んだ。
松林の中から、ふところ手で現われたのは、六尺を越えた大兵の浪人者であった。
眉間に刀創があり、眼光も鋭かった。

「これか！　ふむ！」

八千代を、じろじろと眺めて、

「これは、逸品だの。仙六、たまには、本当のことを申すの」

と、云った。

「正真正銘の大名のご息女でさ。一生にいっぺんお目にかかれるかどうか、という上臈ですぜ」

仙六は、舌なめずりしてみせた。

「ふむ。大名の息女、と申しても、信じてもいいくらい気品があるの」

「いや、本当に、まちがいなしに、これは、姫路の殿様の……」

「なに、本多美濃守の！　おい、まことか、そなた？」

浪人者は、八千代を見据えた。

「……」

八千代が、返辞をするはずもない。

「まことならば、これは、女郎に売りとばすよりも、ほかに料理のしかたがあるの」

浪人者は、高笑いしてから、

「日野権十郎、ひさしぶりに、血がわくのう」

八千代は、懐剣をかまえながら、すこしずつ、地歩を移した。

しかし、遁れる隙は、到底ないようであった。

日野権十郎という浪人者は、なお、ふところ手で、悠々とおちつきはらっている。腕に自信のある態度であった。

八千代は、遁れるには、捨身になって、攻撃に出るよりほかはない、とさとるや、

「えい！」

と、突きかけた。

勝気な女性であったし、武芸も修得していた。

その鋭い切先を、日野権十郎は、あやうく、くらいかけて、

「おっと！」

と、うしろへ跳び退った。

その隙をとらえて、八千代は、ぱっと走り出した。

「遁すかい！」

宵闇の仙六が、追いすがって、その袖をとらえた。

とたんに、八千代の一振りした懐剣に、眉間を斬られて、

「あ――ちっ！　くそっ！」

と、悲鳴をあげた。

八千代は、膝がしらまであらわになるのも忘れて、夢中で、駆けた。

しかし、所詮、女の弱い足では、ものの一町も遁れることは出来なかった。

松の枯枝が、投げつけられ、それに足をとられて、八千代は、地べたへのめった。

裳裾が散って、太股までむき出され、女の本能が、それをかくそうとした。

日野権十郎が、それに、とびかかって来て、懐剣を奪い取り、そのまま、馬乗りになった。

「ははは……、あまり、さわぎたてると、この場で、操を頂戴することになるぞ！　それでもよいのか！」

そうあびせて、にやにやと、舌なめずりしてみせた。

八千代は、くやしさといかりで、死にたかった。

しかし、四肢をおさえつけられていては、せいぜい、唾を吐きかけるぐらいの反抗しかできなかった。

「生娘ではあるまいし、操を守るに必死にならんでもよかろう。ははは……、これは、どうじゃな」

権十郎は、一方の膝がしらで、八千代の片手をおさえつけておいて、胸の隆起をさぐろうとした。

八千代は、思いきりの悲鳴をあげた。

その悲鳴が、さいわい、救い手を呼んだ。

「あっ――さむれえが来やがる！」

仙六が、叫んだ。

権十郎は、すばやく、八千代を俯伏しにさせると、

「仙六、女をしばっておけ！」

と命じた。

「合点――」

仙六は、権十郎と代った。

そこへ、疾駆して来たのは、編笠をかぶった浪人ていの武士であった。

権十郎は、居丈高に仁王立って、

「よけいな邪魔だては、無用！　逃走した主家の息女をとらまえて、国許へ帰参する者でござるぞ」

と、云った。

編笠の武士は、冷やかな声音で、

「そうは、見えぬ」

「なにっ！」

「お主、悪党の内でも、下の部だな」

「なんだと！」

権十郎は、まなこをひきむいた。

「まことの悪党というものは、風姿態度ともに、立派なものだ。むしろ、外見は、君子のように思われる。……ところが、お主は、顔つきといい、態度といい、悪党そのものだ。すなわち、悪党でも、下の下の部に属して居る」

「うぬが――ほざくなっ！」

権十郎は、いきなり、斬りつけた。
対手は、かるがると、一間あまりとび退った。しかし、編笠が、斬られていた。権十郎は、かなり腕の立つ方であった。
武士は、編笠をすてた。
権十郎は、一瞥して、
「なんだ！　青二才か――」
と、顔に侮蔑の色をうかべた。
武士は、思うところあって、化物道人杉山道満とは別に、大坂へ出て来た由比民部であった。
「その青二才に、お主は、負けるぞ」
「笑わせるな！」
権十郎は、じりじりと、距離を縮めた。
民部は、両手を空けて、迫られるにまかせた。
「ええいっ！」
権十郎は、地を蹴った。
と同時に、民部も奔った。
両者は、風の迅さで、行き交うた。
民部は、二間を奔って、ぴたりとたちどまった。いつの間にか、その右手には、白刃が抜

き持たれていた。
一方、権十郎の方は、一間と駆けぬうちに、ぐらぐらと上半身をゆらめかせ、泥酔者のようによろついた。と見るや、松の幹へぶっつかって、そこへ、崩れ込んでしまった。
ぞんぶんに胴を、薙ぎ斬られたのであった。
民部は、八千代へ向って、歩いた。
その時、宵闇の仙六は、敵わぬ、と見てとるや、脱兎のごとく、遁走していた。
八千代は、民部から、いましめを解かれると、文字通り蘇生の思いで、礼をのべた。
「送って進ぜる」
民部は、云って、先に立って歩き出した。
八千代は、救いの主のなんとない冷やかな態度を感じながら、あとに従った。
「あの無頼者は、主家の息女を云々、と申していたが、まんざら、でたらめを申したわけでもあるまい。そなた、どこかの名ある武家の出か？」
「……」
八千代は、返辞にまよった。
「こたえたくなければ、強いては、きくまい」
民部は、云った。
八千代が、ふっと、金井半兵衛に復讐してやりたい気持をわかせたのは、この時であった。
「お願いでございます！」

八千代は、必死な語気で、云った。

「なんだ？」

民部は、ふりかえって、八千代を視た。

「仔細あって、素姓を申上げるわけに参りませぬが、わたくしは、行きどころのない女でございます。お救い下さったのを、なにかの縁とおぼしめして、わたくしを、ともなっては下さいませぬか？」

「……」

民部は、けげんの視線を、八千代の顔へ据えた。

「お願いでございます！」

八千代は、頭をふかく下げた。

民部は、返辞をしかねた。

この窮鳥は、いかにも、美しすぎる。民部が、これまで出会った女性のうちで、ずば抜けて美しかった。

もとよりまだ若い民部は、これまで、美しい女との恋など経験したことはなかった。

――このような美女を連れにしてよいものか？

民部は、自分の将来にとって、禍いとなるような気がした。

しかし、このまま、悃願をしりぞけるのも、非情にすぎるように思われる。

民部は、まよった。

「どうぞ、お願いでございます。……わたくしを、下女としてお使い下されて、かまいませぬ」

「こんな美しい下女は居らぬ」

民部は、苦笑した。

「わたくしは、貴方様に、ここで、はなされてしまうと、また、無頼の者どもに襲われるような予感がいたします」

「そなた、まことに、行きどころはないのか？」

「はい。あてはありませぬ」

「遠くてもよいが……、人をやとって、送らせるが――」

「いいえ、わたくしは、この広い日本のどこにも、身を寄せる家はありませぬ」

「弱ったことだな」

民部は、会話を交わすうちに、いつの間にか、この美女を連れて行くよりほかはない、と自分に云いきかせていた。

「やむを得ぬ。そなたの身柄をあずかってくれる家を、さがさねばなるまい」

「有難う存じまする」

八千代は、自分が消え去っているのを知って、半兵衛が、どんな様子をみせるか、想像した。

よもや、平然とはしていまい。

あわてて、さがしまわるのではあるまいか。すてておくわけがない。

八千代は、小気味よいことだ、と思った。

――わたくしがいなくなって、はじめて、わたくしがどんなに大切なものであったか、思い知るであろう。

八千代は、半兵衛に対する復讐として、この若い浪人者に、身をまかせてもよい、とさえ考えた。

化物道人杉山道満は、仮の宿所を大坂西郊の禅刹の離れにもとめていた。住職が、旧知であった。

左門と春奈が、一緒であった。

道満は、ここに起居をきめるや、毎日外出しはじめたが、何処へ行って、何をするか、一切左門たちには告げなかった。

おかげで、左門も春奈も、所在ない無為な日々をすごさなければならなかった。

この日も――。

夕餉がおわっても、道満は、戻って来なかった。

左門は、やむなく、境内へ出て行き、白刃の素振りを何百回か、やって汗をかいた。

いつの間にか、春奈が、近くに立っていることに気がついて、

「そなた、対手にならぬか」

と、さそった。

「つい、このあいだまでは、女子にも、兵法を修めることは、大切だと思い、いささかの業前を自慢にして居りましたが……」

春奈は、こたえた。

「大きな志を抱くからには、兵法が大切なのは、あたりまえだ」

「でも、いまは、女子には、兵法など、なんの役にも立たぬ、と知りました」

「そんなことはない。役に立つ！」

左門は、声を高くした。

「徳川将軍家の首級を狙うためには、兵法は絶対に必要だ」

「その誓いも、あやしゅうなりました」

「ばかな！　ひとたび樹てた志をすてることはあるまい」

「女子には、女子の生きる道が、ほかにあるような気がして参りました」

春奈は、道満に従って、大坂へ出て来て以来、妙に無口になって、なにか思いに沈むようになっていたのである。

そのことを、悩んでいたのであろう。

「主家のために、生命をなげ出すのに、男女の区別はない。せっかくの志を、なぜすてるのか！」

左門は、どなるように云った。

春奈も、勝気な娘であった。そう云われると、くじけかかっていた気持をとりなおした様子を、みせた。

「一手、お願い申しましょうか」

「そうだ！　やろう！」

やがて、暮色濃い境内で、若い男女は、木太刀を相青眼に構えて、対峙した。

対峙するや、すぐに、左門は、

——これは、できる！

と、看てとった。

尋常の修業では、これだけの構えはできぬ。

春奈には、剣の才がそなわっていた。

二人は、月光が、霜を降らせたように、地面を浮きたたせる時刻まで、じっと、不動のにらみあいをつづけていた。

時おり——。

「やあっ！」

左門が、さそいをかけたが、春奈は、乗って来なかった。

さそいをかけられるたびに、わずかに、切先を浮き沈みさせるばかりであった。

左門は、しだいに、苛立って来た。

女子風情に、撃ち込むことができぬ、というのは、いかにも、腹立たしかった。

——容赦をせぬ！

左門は、おのれに云った。

それまでは、春奈のからだを傷つけずに、ただ、その木太刀を払いとばすことだけを考えていたので、むだな時間を費やしたのである。

容赦なく撃ち据えてやろう、と肚をきめると、にわかに、闘志が全身にみなぎった。

「参るぞ！」

左門は、一歩出ざま、地を蹴った。

木太刀と木太刀が、烈しく撃ち合されて、鳴った。

ひっぱずして、二の太刀を送るや、春奈のからだは、けもののような軽さで、跳びかわした。

左門は、それに向って、息もつがせず、襲いかかった。

月光をはね散らして、二本の木太刀は、撃ち合っては離れ、また撃ち合った。

そのうち——。

にかわでつけられたように、ぴたっと合ったなり、固着した。

左門は、徐々に力をこめた。

力と力の争いになれば、春奈が敵うはずがない。

春奈は、じりじりとあとずさりつつ、必死に、左門の力を支えとめていた。

と——一瞬。

春奈は、斜め横へ、ぱっと、かわした。
尋常の対手ならば、かわし得たであろう。
左門は、山中で、野生の動物を対手として修練した男であった。
「おおっ！」
叫びざまに、にげる春奈めがけて、とびかかった。
木太刀が、宙にとび、春奈は、その場へ、のめって、倒れ伏すと、動かなくなった。
左門は、跼みかかって、
「おい！」
と、呼んでみた。
春奈は、死んだように、ぐったりとなっている。
左門は、どこを撃ったか、わからぬまま、不安になって、いそいで、抱き起してみた。
月光をあびた顔は、美しく、あわれであった。
左門は、気絶したからだをかかえあげると、離れへはこんだ。
若い女のからだをしらべるに、ちょっとためらいがあったが、すててておけずに、その帯を解いた。
ふっくらと盛りあがった白い乳房の下に、黒いあざができていた。
――怪我はない！
ほっと安堵したとたん、左門は、にわかに、その美しい肌に、神経がさわいだ。

左門は、いまだ、女の肌を知らなかった。その肌を眺めるのも、いまが、はじめてであった。
肌理こまかな白い柔らかな肉体が、なんの抵抗もなく、あらわにされて、しずかに息づいているのであった。
左門の心臓が、おそろしい勢いで鳴った。
ごくっ――と生唾が、のみ下された。
払うことの不可能な昂奮が、左門の全身をかけめぐっている。
瑞々しい豊かに張った白い肉体が、いま、左門の眼下に、在る。
生れてはじめて、左門は、女体というものに対する男の本能に目ざめたのである。
――取れ！
烈しい言葉が、耳にひびいた。
――この女を、取れ！
左門は、はげしい口中のかわきに、また、生唾をのみ込んだ。
春奈が、微かに呻いて、身もだえした瞬間、ついに、左門は、われを忘れた。
……小半刻の沈黙の時が、過ぎた。
左門は、のろのろと春奈の上から、起き上った。
春奈は、なお依然として、死んだようになっていた。
左門にとってはさいわいなことであったが、はたして、春奈が、烈しい男の力をからだに

加えられつつも、意識を失いつづけているものか、どうか——。
あるいは、すでに、意識をとりもどしているのかも知れないが、わざと、死んだようになっているとも疑われる。
左門は、ほっと、ひと息ついた。
昂奮は、さめて、妙な虚脱感が来ていた。
女体を犯した、という罪の意識も、心の隅にあった。
——ゆるせ！
左門は、胸中で、わびた。
と——その時。
隣室に、人の気配があるのを、左門は、さとった。
道満が、もどって来ているのだ。
われを忘れていた左門は、全く気がつかなかったのである。
——老人に、目撃された！
左門は、かっと全身の血潮が熱くなるのをおぼえた。
えへん！
ひくい咳ばらいがきこえるや、左門は、さっと立って、隣室に入った。
道満は、ひとりで、夕餉を摂っていた。
左門は、しばし、その悠々たる姿を、睨み下ろしていた。

道満は、やおら、左門を見上げて、
「どうしたな？」
と、問うた。
「老人——」
左門は、坐って、何か云おうとしたが、すぐに、言葉が出なかった。
「なにを、そのように、昂奮して居る？」
「い、いや……」
左門は、狼狽した。
道満は、何も見ていないのかも知れないのだ。
「大坂も変ったのう。十年ひとむかしと申すが、二十年経つと、見知った顔はひとつもない。何十万の人間が、そっくり入れかわったように思われる」
道満は、云った。
「……」
左門は、黙って見かえした。
「日月逝く、歳、我と与ならず。年年歳歳、花あい似たり、歳歳年年、人同じからず。……こういう感慨は、お主など若い人にはわかるまい」
道満は、そう云って、みにくい顔をつるりとなでた。
「分り申さぬ」

左門は、憮然としてこたえた。

「うらやましい。若さ、というのは、この世の中で一番貴重なものだ。梨花一枝、春雨を帯びた風情に、目をうばわれて、夢中になれるのも若さのためだ。わしのような年寄りになると、そのきれいな肌も、一枚剝げば髑髏になる、と思うのだな」

——やはり、あの光景を、のぞいたのだ、この老人は！

左門は、全身がかたくなった。

「老人！　それがしは……」

左門は、にがいものを押し出すように、云った。

「それがしは、春奈を、犯した」

「ふむ——」

「それがしは、人非人の振舞いをいたした」

「ちがうの」

「ちがう？」

「わしも、むかし、お主と同じことをした。まだ、こんな化物面でなかった頃だ。ははは……これで、なかなか、美丈夫であったのう。尤も、女に惚れられていた次第ではない。ちらりと、白い脛が見えた。それだけで、前後を忘れて、とびかかって、けだもののように、犯してしまった。それから、どうなった、と思う。ききたくはないか？」

「うむ！　うかがいたい」

「女は、わしを、憎みはしなかったのう。わしがきらいであったなら、気を失ったふりはしなかったろう」

「……」

「女が、大切なものを奪われるのに、意識を失いつづけて、すこしも気がつかぬ、ということなどあり得ぬ。ちゃんと目ざめて居る。だから、もし、いやな男であったら、死にもの狂いで、抵抗いたすであろう。そうなれば、いかに、男の方に膂力があっても、犯すことは及びもつかぬ。……わざと、意識を失ったふりをしていたわけじゃな」

「……」

「ははは……、考えてみれば、男の方がお人好しで、女の方が、ずるいのではあるまいかな。で——わしは、十日あまり、その女と一緒にくらして、戦場へ出て行き、それきりになったが、三年過ぎても、五年経っても、いや、十年の後までも、あの女はどうしているであろうか、と思い出したものだ。女の方は、とっくに、どこかの男と夫婦になって、わしのことなど、忘れてしまったに相違あるまいが、男は、ばかなもので、いつまでも忘れなんだ」

「……」

左門は、道満の思いやりを感じた。

隣室で、春奈の起き上る気配がした。

「行ってやることだな。勝気な娘も、いまは、いじらしく、男にすがりつきたい心根になって居ろう」

栄枯天運

偶然であった。

由比民部が、八千代をともなったのは、天満の姿不見橋の袂にある楠不伝の家であった。

しかし、これは、ただの偶然ではなかった。

由比民部は、少年の頃、楠不伝に、養われたのである。

十四歳の時、故郷由比宿を出奔して、あちらこちらと放浪しているうちに、楠不伝に、ひろわれ、その才智を愛されて、約三年間、その家に置かれた。

民部は、不伝によって、漢籍を読む力を与えられ、それによって、生来の秀れた頭脳をきたえられた。

その頃、楠不伝は、京都四条に住居をかまえて居り、世に名を挙げる機会をうかがっていた。

民部は、その家から、御所へ使いに遣られて作法を学び、また、吉岡道場へもかよって、剣を学んだのである。

いわば、民部にとって、不伝は、父親代りの恩師であった。

しかし、三年の歳月を経て、民部は、不伝という人物に、物足らなさをおぼえた。

不伝の才器の小ささ、度量の狭さが、才気ありあまる俊髪には、次第にあきたらなくなったのである。

もとより、恩師に対して、目に見えた反抗は示さなかったが、その許に永くいるのはおろかとさとって、出て行く日をうかがった。

やがて、不伝が、大坂へ住居を移すことにきめた時、民部は、日本全土を経巡る武者修業を、乞うて、許された。

そして、民部は、再び、不伝の許へは、還らなかったのである。

民部が、放浪の旅をつづけているうちに、不伝は、望み通りに、一流軍学者の名を挙げた。

民部は、その噂をきいた時、

――楠不伝が、一流として世間にもてはやされるのであれば、この民部は、将軍家軍師にもなれる。

ひそかに、そう思ったものである。

杉山道満が、長曽我部左門と春奈をともなって、大坂へ出て行った後、民部は、急に、思案するところがあって、そのあとを追って、出て来たのであったが、不伝をたずねる気持は、なかった。

民部の性格には、異常なまでの冷酷非情さがそなわっていた。

たとえ終生の恩師であっても、氷炭相容れぬ、とさとり、おのれが心服するに足らぬ、と思いきめれば、民部は、一片の未練すらものこさずに離れ去る男であった。そのことに、な

んの良心の痛みもなかった。

ふとしたことで、高い身分の武家娘と思われる美女を、無頼浪人の手から救った民部は、こういう窮鳥をたのむには、不伝こそ最も適任者である、と思いついたのであった。

ただ、それだけで、恩師に久しぶりに再会するなつかしさなど、みじんもなかった。

民部が、八千代をともなって、その家を訪れた時、不伝は、大坂屈指の大商人たちを前にして、軍略利用の商法を教えていた。

不伝の前に、かしこまっているのは、七人の大坂商人であった。大坂の町は、この七人の町人たちによって、支配されているといっても、過言ではなかった。

不伝は、かれらに向って、軍略を説き、それが、商法にも充分利用できる、と教えている。

「……孫子に、間を用いる、という言葉がある。つまり、間者を使う、ということでござる。その用間には、五つある、と孫子は、説き申す。……郷間、内間、反間、死間、生間。この五つ。敵国の軍人を用いるのが、郷間。敵の内部にあって、わが味方を勤めるのが、内間。敵の間者を逆に利用するのが、反間。わが間者をして、敵に虚報を放たしめたりするが、この者は結局敵のために殺されてしまうのが、死間。敵地に忍び込んで情報をつかんで持ち帰って来るのが、生間。間者にも、いろいろあるものでござる」

ゆったりとかまえて、商人たちに講述する不伝の態度は、いかにも、たのもしく、信頼されるに足りるものとみえた。

「先生、間者を用いた大名衆の例を、おきかせ下さいますまいか」

「左様――。間者を用いる名人は、毛利元就でござったな。当面の敵である陶晴賢を、折敷畑で破ったのも、間者を用いたおかげでござった。陶晴賢は、よし、それならば、こちらも間者を用いてくれる、と腹心の矢野右衛門入道慶庵という男を、毛利の陣中へ、間者として、送り込み申した。

しかし、元就の鋭い目は、すぐに、慶庵を敵方の間者と看破いたした。そうして、この間者を逆に利用することにいたした。

すなわち、慶庵をして、毛利は、厳島を非常に重大な要害と考えている、と晴賢に報告せしめるように、工作いたした。陶勢を、厳島にひきつけて、一挙全滅せしめるための巧妙な策でござった。

元就は、慶庵が、それを報告したのを見すまして、こんどは、急いで厳島に宮尾城を造り、精鋭三百を送って、配備いたした。慶庵は、おのが探索が正しかった、とばかり、このことを、晴賢に報告いたした。

さらに、元就は、晴賢の元家臣であった桜尾城主桂元澄が書いたと信じさせる偽書をつくりあげて、慶庵に、わざと奪い取らせたのでござる。

その偽書には、元就は精鋭三百をもって厳島を守らしめて居り申すが、もし陶勢が、そこを襲うならば、必ず元就は、その救援におもむくに相違あるまじく、この隙に乗じ、桜尾城に挙兵いたせば、心ならずも降服し従っている諸城主は、風を望んで、陶家に内応いたすと心得申す、と記してござったのだ。これを受けとった晴賢は、されば、とばかり、兵を率い

て厳島を襲い、まんまと、元就に滅ぼされ申した。これを、反間の計画と申すが、お手前がた町人衆も、商売敵と競うにあたって、郷間、内間、反間の策は、是非とも必要でござろうな」

微笑して、見まわす不伝に対して、商人たちは、一斉に、うなずいた。

こちらの部屋に待っている民部にも、不伝の述べるところは、のこらずきこえていた。

――商法にも、間者を用いることが必要か。

民部は、薄ら笑った。

――この説くは易く、為すはむつかしい。軍学者は、いかにも、天下を左右してみせるような面がまえで、説いてみせるが、実際に、軍師となった時、どれだけの実践力を発揮できるか。

民部は、商人たちに向って講述する不伝の声音を耳にしながら、ひそかに、冷笑していた。かたわらで、八千代は、なかば放心のていであった。

やがて――。

不伝は、商人たちを送り出しておいて、その部屋に入って来た。

民部は、門下の礼をとって、畳に両手をつかえて、挨拶した。

「放浪にはあきたか、民部――」

不伝は、永い歳月、音沙汰なかった弟子に対して、皮肉をあびせた。

「無音にうちすぎました儀、お詫びのいたし様もありませぬ。しかし、おかげで、この民部、つぶさに世間の表裏を眺めて、いささか、さとるところありました」

「どうさとったな？」

「一言にてはつくしませぬが……」

民部は、不伝を見かえして、微笑した。

「まず、人間のねうちというものは、見ただけでは判らぬことを、さとりました。生涯を土とともに生きている農夫の中にも、いつとなく、見事な悟りができている者もあることを知りましたし、また、大国を領し、巨城に拠った大名衆の中にも、意外に見せかけだけの、大仰に構えた案山子同然の御仁もある、と知りました」

「ふむ。修業をいたしたの」

不伝は、民部が、自分に対して皮肉を返していることには、気がつかず、

「それで……、また、わしのところへもどって参ったのは、なんとした心境だな？」

と、問うた。

「いえ。それがしは、まだ、経巡る国をのこして居ります。今日、おうかがいいたしましたのは、別に、お願いの儀があってのことであります」

「なんだ？」

「これにひかえる女性を、しばらく、お預かり頂きとう存じます」

不伝は、そう乞われて、あらためて、八千代へ、視線を向けた。

「家を失うた娘御か？」

「いえ、家はあります。これは、さる大名衆の御息女でありますゆえ――」
「なに？」
不伝は、おどろいて、
「まことか？」
「仔細あって出奔されたため、いますぐ、素姓を打明けるのは、はばかる、と申されて居りますゆえ、ご容赦の程を願い上げます。……さる御城主のお身内であること、相違ありませぬ」
「それが、まことならば、預からねばなるまいな」
不伝は、うなずいてみせた。
不伝は、この美しい女性に対して、非常な興味をおぼえた。
大名の息女ということであれば、これを預かることは、何かの利になる、という我欲も働いた。
「ただ、あずかるだけでよいのか？」
「身分が身分でありますゆえ、女中のような扱いはお許し頂かねばなりませぬが……」
民部は、云った。
「もとより、あずかる上は、左様な扱いはいたさぬが――」
「お願いつかまつります」
「民部のたのみならば、やむを得まい」

不伝は、しぶしぶ引受けるような態度を示した。
民部は、しかし、すでに、不伝の肚のうちを、読みとっていた。
「何卒、よろしく――」
民部は、頭を下げてから、八千代をふりかえり、
「よろしいな？」
「はい――」
八千代は、不伝に向って、
「造作に相成りまする」
と、畳へ両手をつかえた。
民部は、それから、小半刻ばかり、なんとはない世間話をしてから、腰を上げた。
八千代は、民部に去られることに、いささかの不安をおぼえたが、ひきとめるわけには、いかなかった。
民部が去ると、不伝は、八千代に、点前を所望した。
茶室に入って、八千代の点前を見まもった不伝は、
――このみごとな作法は、そこいらの並の武家の娘がおいそれと身につけられるものではない。
と、合点した。
点前がおわると、不伝は、

「ふたつ、三つ、わしの問いにこたえて頂こうかな？」
と、云い出した。
「はい――」
八千代は、覚悟した。
「そなた、市井のくらしというものをご存じか？」
「いえ、存じませぬ。しばらく、旅籠に泊っただけでありまする」
「ふむ。……で、これから、市井でずっとくらしたい、とお思いか？」
「もはや、生家へはもどれませぬゆえ……」
「姫君として育った身が、はたして、市井のくらしができ申そうかな」
「できまする。その覚悟をきめて居りまする」
「尤も、市井のくらしと申しても、いろいろとあるが……」
不伝は、じっと、八千代を見据えた。
「わたくしには、町の娘御たちに、作法を教えることはできますまいか？」
八千代は、民部にともなわれて、ここへ来る途中、そのことを考えていたのである。
「そうさな。それも、わるくはあるまい。だが、まあ、しばらくは、のんびりとすごされるがよい」
不伝は、この窮鳥を、当分大切に飼ってやることにした。
同じ日――。

織田重四郎は、さわとともに、苦之市が見つけて来た堺の浜に近い防風林の中にある一軒家に入っていた。
古びてはいるが、住み心地のよさそうなたたずまいであった。
部屋数も五つあり、そのうち、座敷はかなり凝ったしつらえであった。
重四郎は、案内した苦之市に、
「どうして、この家が、借りられたのだ？」
と、たずねた。
「栄枯盛衰、世のならいでございますよ。ここは、堺旦那衆の筆頭であった和泉屋源左衛門殿が、公儀のお咎めを受け、遠島、家財召し上げをまぬがれぬ、とさとって、去年春に、自害をして果てた別荘でございますわな」
「ふむ――」
「ひどう公儀を恨んで、亡くなったので、怨霊となって、現われる、という噂が立ったために、公儀が、没収の上、下げ渡すことになっても、堺の商人たちは、ふるえあがって、ご免を蒙ったわけで……」
「つまり、これは、幽霊屋敷か」
重四郎は、苦笑した。
「ま、そんなわけで……。織田様は、幽霊というものが、この世にいる、とお思いでございますかえ？」

「まだ、出会ったことはないゆえ、いるかいないか、わからぬ」
「べつに、気味わるいとはお思いなさいますまい」
「おれが、たたられるわけでもあるまい。……和泉屋源左衛門は、なんの咎をこうむったのだ？」
「伴天連をかくまった罪でございます。あたしは、実は、その伴天連とは、懇意だったのでございますわさ」
「お主は、伴天連にまで、媚を売ったのか」
「いえ、とんでもない」
苦之市は、あわてて、手を振った。
「いくらあたしが、生れぞこないでも、南蛮人にまで、肌身はまかしませぬわな。……いえね、その伴天連は、オランダ人で、それはもう、立派な人物でございました。あたしは、その伴天連から、短筒をゆずってもらって、その撃ちかたをおそわり、芋兵衛は、火薬の使いかたを、おそわりました」
重四郎は、ふと、ある予感をおぼえた。
「そのオランダ人の名は？」
「妙な名でございましたねえ。……なんとかサンテン」
その名をきいたとたん、重四郎は、
「そうか！」

大きくうなずいた。
重四郎は、伊丹の平家館で、アンナという異邦の娘と、会っている。
アンナは、実父がこの日本のどこかにいる、とかたく信じて、めぐり逢うのを、毎日祈っている、と語った。
その父の名が、ファン・サンテンと云った。
ファン・サンテンは、オランダ東洋総督スペッキスに命じられて、徳川幕府と交易談判すべく、はるばる海を渡って来たヤンスゾーンという人物の通訳であった。
オランダ使者ヤンスゾーンは、交易談判が成立しないままに、バタビヤへ帰って行ったが、その時、どうしたわけか、通訳のファン・サンテンを、日本へのこして行った、という。
それきり、ファン・サンテンは、何処へ消えたか、消息を断ったのである。
「そうか、この堺の商人が、かくまっていたのか」
重四郎は、アンナの美しい容姿を思いうかべた。
「そのサンテンというオランダ人は、和泉屋源左衛門が自害した時には、どうしていた？」
「そこがねえ、どうも、よくわからないのでございますよ」
苦之市は、首をかしげてみせた。
「公儀の手で、殺されたのではないのか？」
「伴天連は、つかまって、処刑される時には、かならず市中ひきまわしになりますけど、それが、されなかったので……。どうも、つかまらずに、どこかへ、逃げたような気も、いた

します。……和泉屋が、自害する前に、突然、姿を消してしまったのでございますからねえ」
「では、生きている、とも考えられるのだな？」
「さあ――？」
「公儀の手でとらえられて、どこかに――江戸のどこかで、ころばされ、日本人にされてしまった、とも考えられるではないか」
「そう仰言られると、そんな気も、いたしますね」
この時、かたわらで、ずっと黙ってきいていたさわが、
「もしかすれば……」
と、口をはさんだ。
重四郎と苦之市は、さわへ視線を向けた。
さわは、あまり自信はなさそうな口ぶりで、
「わたしが、入れられていた大坂城の地下牢には、まだほかに、幾人か囚人がいる様子でした。その中には、異邦人もまじっているらしく……、番士らの交している会話から、うかがわれましたけど――」
「ふむ」
重四郎は、
――それは、きっと、サンテンだ！
と、直感した。

――隠密奉行赤松丹波は、サンテンを、なにかに利用する考えで、処刑せずに、生かしているに相違ない。
「しかし、それが、サンテンさんでも、あたしらは、もう二度と、大坂城へ忍び込んで、救い出すのは、まっぴらですわさ」
苦之市が、かぶりを振ってみせた。
重四郎自身も、アンナの願いを知ってはいるものの、再び、危険を冒す気にはなれなかった。
やらねばならぬのは、赤松丹波が、城外へ出た機会をとらえて、白河館の姉弟に讐を復たせることであった。
「ともあれ――、ここが、幽霊屋敷ならば、無断で住みついても、誰も文句はあるまい」
「ありませぬともさ。安心して、寝起きなさいまし」
苦之市は、こたえた。
苦之市が、出て行ったあと、重四郎とさわは、しばらくのあいだ、嘉七のために、黙禱した。
主家の遺児を守りつづけることのみしか考えなかった老いた忍者の、非業の最期を思いかえすと、重四郎もさわも、烈しく、胸が痛んだ。
その生涯は、誠実という二字でつらぬかれたものであった。
このような人物は、おそらく、一生のうち出会うことは、まれであろう。

重四郎は、

——あれほどの赤心を持った人物を、なぜ、神は死なせたのか！

と、うらまずにはいられなかった。

黙禱をおわった時、重四郎は、さわに、

「そなたが、頼りにした人は、つぎつぎに、この世を去った。波乗り佐兵衛、幻夢十郎次——義理というものをさとり、任俠を尚んだ人たちであった」

と、云った。

「……」

さわは、俯向いて、泪ぐんだ。

「わたしは、老人たちの意志を受け継ぎたい、と思う。無頼の流浪者が、人間として目ざめた、といえば、いささか大仰だが、生きる上で目的を与えられたことは、有難い、と思っている。しかし、そなたは、女子だ。まだ、若く、美しい。自分自身の道をえらぶに、決しておそくはない。……どうであろうか？」

「いえ——」

さわは、顔をあげて、かぶりを振った。

「わたしは、貴方様の下で働かせて頂くよりほかに、生きるすべを知りませぬ」

「そんなことはない。そなたが生きる世界は、別に、いくらでもあろう」

「ありませぬ！」

さわは、きっとなって、重四郎を見つめた。

「わたしは、女であることを忘れて、貴方様に従いたく存じます」

「なぜであろう？」

さわは、重四郎の視線を受けとめているうちに、くちびるをわななかせた。

「わたしは、あの隠密奉行に、復讐いたさねばなりませぬ！」

「……？」

「わたしは、あの男に——犯されました！」

さわは、にがいものを押し出すように、云った。

「犯された！」

「はい。あの男は、けだものでした」

「……」

さわの頬を、泪がつたい落ちた。

——そうか。それで、判った。

重四郎は、合点した。

赤松丹波が、なんの未練気もなく、やすやすと、さわの身柄を、こちらへ渡したのは、すでに、そのからだを自由にしていたからなのだ。

——あわれな！

重四郎は、さわがその屈辱の悪夢に堪えているさまを見まもって、心からあわれんだ。

「お願いです！　わたしを、お使い下さいませ！」
重四郎が、さわの願いを、受け入れた折であった。
「へい。猿でござる」
その声が、おもての戸口でした。
入って来た猿助は、膝をそろえると、
「苦之市にしては、なかなか、見上げた思案で、この家をえらんだことでござる。しかし、この家は、決して、安全な隠れ家とは、申しかねますな」
と、云った。
「どうしてだ？」
「どうも、われわれは、大坂城を出てから、尾行されたような気がいたすのでござる」
猿助と芋兵衛は、堺の町中に、身をひそめていたが、その家の前を、尾行者とおぼしい男に、うろうろされた、という。
「この家を、つきとめられるのも、遠くはあるまい、と存ずる。……いや、まてよ、さきほど、漁師と、道ですれちがったが、あいつ、もしかすると――？」
猿助は、目を光らせて、腰を上げたが、「ままよ」とかぶりを振って、坐りなおした。
「襲って来れば、やむを得まい。闘うまでだ」
重四郎は、おちついて、云った。
「むざむざ、犬死いたすことはござるまい。……お手前様との約束は、大坂城での仕事が成

れば、前金の十倍を、頂戴いたすことでござった。その金を頂戴して、酒と女と博奕をたのしんだら、その時はもう、この世に未練はのこしはせんが……、幻夢十郎次殿が相果てたいま、頂戴できるわけのものでもなし――、まあ、しかたがないから、隠密奉行を討ち果すまでは、お手前様に、くっついて、働き申す」
「猿助――」
「へい」
「気の毒だが、わたしには、金がない。嘉七が生きていれば、金の調達は苦もないことであったろうが、わたしには、その才覚はない。たとえ協力してくれて、隠密奉行を討ち果すことができたとしても、その時、お主に与える礼金を、わたしは、持って居らぬ」
「へえ？」
猿助は、ちょっと、とまどった面持で、蓬髪を、ひっかいた。
「犬死をする、と思ったなら、いまのうちに、はなれ去ってくれてかまわぬ」
「い、いや……」
猿助は、腕組みした。
「そう仰言られると、返答にこまるんだが……」
重四郎は、誠意を語気にこめて、
「大坂城内では、お主らに、あれだけの働きをさせて、なんの礼もできぬのを、心苦しく思っているのだ」

「織田様！」

猿助は、重四郎を見かえして、

「そういう仰言りかたは、どうもこっちが挨拶にこまるのでござる」

「では、どういう云いかたをすればよい？」

重四郎は、微笑しながら、たずねた。

「つまり、そのう……」

猿助は、その名の通り、顔中に皺を寄せて、しきりにまばたきしながら、云った。

「わしらは、金のないお手前様に対して、不服を申しているのでは、さらさら、ござらぬ。幻夢十郎次殿を、死なせてしもうたのは、わしらの働きが足りなかったことでござる。……金などは、欲しゅうは、ござらぬ。いや、欲しいのは欲しいが、お手前様から、頂戴いたそうなどとは……、えいくそ、どうも、うまく申せんのう。つまりでござる。わしらは、お手前様の味方になったのでござる。味方になった上からには、お手前様のために、ひきつづいて、働くことが、あたりまえのことでござる」

この言葉をきいて、重四郎は、感動をおぼえた。

おそらく、この猿助という下忍は、これまで、決して、白昼堂々とおもて道を歩くようなくらしかたをして来てはいないに相違ないのだ。

人には語れぬ悪事を、かずかず犯して来たであろう。

にも拘らず——。

心の中には、神に慙じぬ美しい純粋なものを、のこしている。

「それは、お主だけの気持であろうか？　芋兵衛は、どうであろう？」

「あいつは、わしと同じでござる」

「そうか」

重四郎は、うなずいた。

「わたしは、考えちがいをしていたようだ。お主らは、ただ、報酬めあてに働く者たちだ、と思っていた」

「織田様——、その通りでござる。わしらは、これまでは、金が欲しさに、人にやとわれ、また、悪い事もして参ったのでござる。……ただ、こんどばかりは、そのう、ちょっと、事情がかわって来て、わしらの気持も、報酬めあてということにはならなくなった、とお思い下され」

「……」

「つまり……、お手前様も、大坂城へ忍び込まれたのは、金のためではござらなんだ。……幻夢十郎次殿は、主家へのご奉公でござったが、お手前様は、いわば、義侠のふるまいをされた。これは、わしらにとって、はじめて、えらいものだ、と頭を下げないわけにいかなんだのでござる」

「わたしは、べつに、義に勇み、仁を尚ぶ男ではない。ただ、行きがかり上、こう相成ったまでだ」

「そ、それでござる。このセチがらい世の中に、お手前様のような御仁は、ザラには居らんのでござる。……さむらいが、主家に奉公するというが、主家がつぶれたら、おのれの飯の食いあげでござるゆえ、主家をせっせと守るだけの話でござるわさ。また、町人どもは、浮世は万事金じゃ、と思い込んで居る。……お手前様のように、行きがかりで、生命をなげ出して、働かれる御仁は、またと居るものではない」

猿助は、けんめいにしゃべりつづけたおかげで、額にも鼻のさきにも、汗をかいていた。

猿助は、いつまでも、重四郎が黙っているので、少々いらいらして来た。

「織田様――。わしらの気持が、わかって頂けるのでござろうな？」

催促されて、重四郎は、猿助を見かえし、

「お主らの気持、生涯忘れはいたさぬ」

そうこたえて、

「働いて頂きたい。こちらより、お願いいたす」

と、頭を下げた。

「やあ！」

猿助は、不意に大声をあげた。

「きまった！　これで、つまり、そのう……、お手前様とわしらは、同志ということでござるわけじゃ」

その折、あわただしく、走り入って来る足音が、ひびいた。

「芋兵衛か」

猿助が、縁側へとび出した。

庭へ駆け入って来た芋兵衛は、緊張した面持で、

「来居った！　五人じゃ！」

と、告げた。

「たった五人か。片づけるに造作はない」

「そうは、いかんぞ。忍びらしい。一列にならんで来るさまが、かげろうの動くようなけしきじゃ。なまやさしい敵ではない」

「芋兵衛！　わしらは、たったいま、織田重四郎殿と同志に相成ったのだぞ。同志の働きのほどを、ごらんに入れようかい」

「う、うむ！」

庭へ跳んだ猿助が、芋兵衛と肩をならべて、出て行こうとするのを眺めて、重四郎は、すてておけずに、腰を上げた。

「おっと！」

猿助が、ふりかえって、手を振った。

「お手前様が、出て来られたんでは、わしらは、同志のねうちを発揮することは、でき申さんわい。まかして下され」

「同志であれば、力を合わせて、敵に当らねばならぬが――」

「こっちの理屈を、まず、通させて下され。芋兵衛、いそごうぞい」
猿助と芋兵衛は、風の迅さで、とび出して行った。
重四郎は、さわを視た。
「同志――まさしく、かれらは、同志だ。わたしは、いま、生きている幸せをおぼえている」
「はい――」
さわも、美しい微笑をかえした。
「あのような人たちが、このような美しい心根を持っていようとは、わたしも、いまのいままで、知りませなんだ」
それから、ものの四半刻も過ぎて――。
重四郎たちの前に、二人の同志が、もどって来た。
芋兵衛が、深傷を負うた猿助を背負うて……。
重四郎は、いそいで、芋兵衛の背中から、猿助をおろした。
猿助は、にやっとして、
「生命に別状はござらぬ。同志は、犬死など、つかまつらぬ」
と、云ってみせたことだった。

夜襲

赤松丹波は、今日も、机のまわりに、おびただしい書類を積みかさねて、調べものに余念がなかった。
こうした毎日が、つづいていた。
この人物が、大坂城を出て、輩下を指揮して、血を呼ぶ行動を起すのは、一年のうちに、かぞえるほどしかない。
まるで、読書人のごとく、書屋にとじこもっているのが、一年の大半の日々である。
しかし、ひもとくのは、儒教の書物でもなければ、軍学の本でもない。
身の左右に置かれているのは、日本全土に放ってある隠密から、つぎつぎと送られて来る調書であった。
丹波は、それらの調書を、片はしから丹念に読み、その中から、徳川幕府にとって利となるものと不利になるものと、そのいずれかを採りあげる。
例えば、西国にある外様大名がいる。
金鉱を発見し、採掘をはじめ、意外に多量の金を産出する可能性がある、とする。
この金を、その大名に私有させることは、許されぬ。

その大名を理由を設けて改易にし、金鉱を奪いあげるのは、幕府の利となる。しかし、この残酷な処置を、急いでやってのければ、公儀は非常な反感を買うであろう。これは、幕府にとって、不利である。

さてどうするか？

そこが、丹波の思案どころであった。

その大名をとりつぶす時機を、いそいではならなかった。その判断がむつかしかった。

また——。

ある大商人は、三十艘の船を持ち、これを北に南に、西に東に、はしらせて、各地の産物を運びかわして、巨利をむさぼっている。これを、見のがしておくわけにはいかなかった。

といって、その店をとりつぶせば、虻蜂とらずになる。その巨利だけを、幕府の金蔵へ、吸いあげる方法はないか？

丹波の狡知は、その真価を発揮しなければならないのであった。

まことに——。

この人物に、ひとたび睨まれたならば、大名も商人も、遁れる余地はないのであった。

「申し上げます」

庭さきから、声がかかった。

山県某という腹心の隠密であった。

「入れ」

丹波は、こたえた。

山県は、障子を開けて、入って来ると、

「江戸表より、竜造寺匡殿が、おっつけ、当城へ参られます」

と、告げた。

「ふむ——」

丹波は、ちょっと、首をひねった。

竜造寺匡は、公儀目付であった。

しかも、目付の中でも、最も敏腕をもってきこえた人物であった。

大目付は、老中の耳目であり、目付は、若年寄の耳目であり、おのずと監察に区分があったが、実は、その働きに於ては、比較にならなかったのである。

大目付はむしろ閑職に近いが、目付は実際に、百般の監察を為した。

目付は、場合によっては、大目付さえも、監察した。

大目付は、大名、寄合旗本及び高家を監察する、という職務であったが、主として、典礼のことを司っていた。

しかし、目付の方は、旗本以下の侍を監察するにあたって、私生活をもさぐることを許されて居り、しぜん、旗本と大名のむすびつきまでも、調べあげることになり、これを、直接将軍家へ言上できる特権を与えられているため、むしろ大目付以上の立場に置かれているのであった。

隠密奉行は、大目付、目付に対しても、容赦のない目を光らせることができるが、また逆に、目付から、ひそかにさぐられる場合もあった。

実は――。

赤松丹波にとって、目付・竜造寺匡は、公儀中、最も警戒を要する人物であった。また、対手も、こちらを、そう思っているに相違ないのであった。

竜造寺匡は、まだ若かった。三十を出たばかりであった。

――なぜ、突然、大坂へやって来たのか？

丹波は、不審であった。

目付であるから、前ぶれもなく、不意に姿を現わしても、べつにふしぎはない。

山県は、首をひねっている奉行を、じっと見まもっている。

――会いたくなければ、姿をかくされるであろう。

そう思っていた。

竜造寺匡が、大坂へ入って来たのを、すばやく発見して、大いそぎで報せたのも、そのような場合もある、と考えたからなのだ。

丹波は、しばらく、沈黙を置いてから、

「会おう」

と、一言云った。

「かしこまりました」

山県が、出て行くと、丹波は、腕を組んで、宙を見据えた。

――竜造寺匡は、もしかすれば、隠密奉行の地位を、ねらって居るのではないか？

ふっと、そんな予感をおぼえた。

今日まで、丹波は、そんな不安をわかせたことは、一度もなかった。

幕府にとって、隠密奉行という秘密の職は、絶対に必要であり、その任をつとめることのできるのは、自分を措いて他にはない。丹波は、確信を持っていたのである。

また、事実、丹波の権力は、今日まで、微動だにしないものであった。

ところが――。

竜造寺匡が現われる、と報されて、自分でも意外な不吉な予感がしたのは、なぜであろうか？

丹波は、あわてて、つまらぬ不安をはらいのけることにした。

――竜造寺匡が、たとえ、野望を起しても、わしを倒すことなど、不可能なのだ。

丹波は、わざと、にやりとしてみせた。

――わしが、いま倒れれば、幕府にとって、どれだけの大きな損失になるか。それは、老中も若年寄も、知りすぎるほど知っているはずだ。

目付・竜造寺匡は、それから一刻あまり後、丹波の前に姿を現わした。

三十を出たばかりの若さで、風貌、態度ともに、赤松丹波に比して、いささかも見劣りしなかった。

挨拶を了えてから、竜造寺匡は、

「公儀来年度の予算は、今年度より、十万両あまり上まわる、とのことでござる。お心得下さいますか？」

閣老たちが、その調達を、隠密奉行にたのんで来るのは、毎年のことであった。

しかし、十万両の巨額は、はじめてであった。

「日光東照宮と、上野の東叡山に、すこし費用をかけすぎだな」

丹波は、云った。

丹波にすれば、始祖家康を神格化するためのさまざまの造営は、すべて外様大名の負担にすべきである、という意見であった。公儀自身の失費になることは、ひどくおろかに思われるのであった。

天下を統べる幕府は、当然、江戸城の金庫に、金をありあまらせておかねばならぬ。家康が、大坂城から運んだ荷駄百七十頭分の金は、いまは、半分に減っている。

毎年、予算が超過しているのは、すべての行事が派手になっていることと、神社仏閣の造営、修築があいついでいるためであった。

金の調達をする側にとっては、やりきれたものではなかった。

金の調達は、勘定奉行の役目であり、隠密奉行の関知するところではないはずであった。

ところが、その超過額は、ここ数年、隠密奉行が調達するならわしになってしまっていた。おかしな話であった。

隠密奉行が、手に入れるのは、世間に知られぬ内密の金であった。大名を改易にしたり、大きな商人をとりつぶしたり、密貿易のもうけを取りあげたり、また切支丹宗門のかくし金を奪ったり——すべて、世間の目のとどかぬところで、ひそかな操作によって、たくわえられる金であった。

こうした金こそは、軍用金として、江戸城の金庫に、ねむらせておかねばならぬ。

丹波としては、せっかく苦心して手に入れた金を、宮廷を模倣した仰々しい行事や、神社仏閣を建てたり、なおしたりする費用にあてられるのは、にがにがしい限りであった。

竜造寺匡の方は、当然、丹波の心中を知りすぎるほど知って居りながら、

「お引受け下され、忝のうござる」

と、云った。

「予算超過金の調達が、隠密奉行のつとめになってしもうては、いかんな」

丹波は、わざと渋面をつくった。

この大坂城内には、すでに七十万両ばかりを、たくわえてあった。丹波は、しかし、それを出したくはなかった。

「これも、ご奉公でござれば……」

竜造寺匡は、冷然として、こたえた。

「左様さの、ご奉公ではある。しかし、評定所で、行事をふやす相談をしたり、東叡山に五重塔を建てたりすることを打合せたりするご奉公とは、苦労がちがう」

丹波は、鋭い口調で、つづけた。

「商人が、何かのあきないをやって、金をもうけることも容易ではないが、隠密奉行は、もともと、諸藩の動静探索と邪宗門取締りの目的をもって、もうけられた職だ。改易した家の財産を没収することなど、二の次のことであるし、改易にしてみれば、その城には、一文もなかったこともあり得る。切支丹信徒を捕えてみても、かれらがすべて分限者であるとは限らぬ。いや、かえってその日ぐらしの貧しい者が大半である。かくし金など、持っては居らぬ。また、商人どもの抜荷買いは、巧妙をきわめて居って、容易に尻尾をつかめるものではない。わしは、ここ五年あまりのうちに、大坂商人を、三軒ばかりつぶしてみたが、合わせて五万両も召し上げたにすぎぬ。……いずれにせよ、隠密奉行に、超過予算額の調達を命ずるなど、閣老がたも、どうかして居る。まして、毎年、それを当然のようにきめてしまうとは、なんとしても、ばかげて居る」

丹波は、せいぜい、竜造寺匡に向って、隠密奉行という職務が、いかに苦労なものか、教えておこう、と思っていた。

竜造寺匡の方は、黙って、なんとも云わぬ。

丹波の目には、沈黙しているその態度が、小面憎いものに、映った。

「ところで、貴公、せっかく、大坂へ参られたのだから、どうであろう、身をもって、金子調達が、いかに苦労なものか、あじわっては――？」

丹波は、皮肉を投げた。

竜造寺匡は、眉宇もうごかさずに、丹波を視かえした。

「ご指導によっては、つかまつる」

「ほう――やってみられるか」

「どこかに、召し上げるべき金子が、ねむって居りましょうか？」

目付は、たずねた。

「ないこともない」

「何処に――？」

「伊丹だな」

丹波は、こたえた。

「伊丹？」

「うむ。伊丹に、平家館と称する豪族の屋敷がある。そこに、金がある。わしのにらんだところ、五十万両は下るまい」

「その平家館のあるじは、神屋主膳でありますな」

「ほう――ご存じか」

「堺に於て、手広く、朱印船を走らせて、あきないをいたしている由――」

「左様、抜荷買いじゃ。同時に、切支丹伴天連もかくまって居る。いや、伴天連をかくまうことによって、異国船の信頼を得て居る。……したたかな曲者でな。わしは、ずっと、探索いたして居るが、容易なことでは正体をあらわすとは、思えぬ。なにせ、この近畿きっての

名家で、慶長の頃から、かくし知行一万石を頂戴して居る。大坂の役でも、大きな功績があったし、なまなかのことでは、手入れは出来ぬのだ」

丹波は、竜造寺匡をそそのかす一方、しりごみさせる予備知識も与えた。

竜造寺匡は、ちょっと、沈黙を置いていたが、口をひらくと、

「それがしに、平家館をとりつぶす役目を、おゆずり下さいますか？」

と、丹波を、見据えた。

「ふむ。やってみる、と云われるなら……」

「つかまつりましょう」

竜造寺匡は、きっぱりとこたえてみせた。

「思案があろうか？　神屋主膳は、いま申した通り、ただの曲者ではない」

「やってやれないことはござるまい。神屋も人なら、こちらも人でござる」

丹波の耳には、その言葉は、きわめて不遜なものにきこえた。

「援助は、惜しまぬ」

「いや、引き受け申したからには、この竜造寺匡の力をもって、平家館をとりつぶしてみしょうと思い申す」

「貴公一人で、やれるものでもあるまいが……」

「こういうこともあろうか、と存じ、手練者を、十人あまり、ひきつれ申した」

丹波は、これをきいて、あっと思った。

――やっぱり、この男は、わしから、隠密奉行の地位を奪いに、大坂へやって来た！

憤怒が、腹の底から、こみあげて来た。

しかし、それを顔色に出すのは、丹波として、屈辱であった。

なにげない口調で、

「さすがは、公儀随一のお目付、見上げた心掛けと申すもの。……ただ」

丹波は、薄ら笑いつつ、

「十人で、足りるかどうかな」

と、云った。

「足りなければ、急遽、二三十人を江戸より呼び寄せ申す」

竜造寺匡は、その言葉をのこして、座を立った。

丹波は、しばらく、宙を見据えていたが、

「竜造寺め！」

憎悪をこめて、吐き出した。

思いがけなく――全く思いがけなく、丹波にとって、おそるべき強敵が出現したものであった。しかも、それは、味方の中から名のり出て来たのである。

丹波は、竜造寺匡を、断じて許せぬ、と思った。

自分が、この隠密奉行の地位を、老中、若年寄をも遠慮せしめるまでに、確固たるものに築きあげるまでには、どれだけの努力と歳月を必要としたことか。人には語れぬ無数の苦難

をのりこえて来たのだ。そのためには、悪鬼になることも、やむを得なかった。百人いやそれ以上の人を暗殺する非情も、敢えてしたのであった。

この地位を、横あいから、やすやすと奪いとられてたまろうか。

「若僧め！　この丹波を、なんと思うて居る！」

丹波は、思わず、こぶしで、机の上を打った。

「むざむざ、奪われてたまろうか！」

竜造寺匡が、神屋主膳の逆襲をくらって、生命をおとすことを、丹波は、心からねがわずにはいられなかった。

竜造寺匡が、ひきあげて来たのは、大坂城から程遠からぬ浄願寺という古刹の方丈であった。

そこに、十人の選ばれた旗本の若い武士が、待っていた。

竜造寺匡が、五年前に八万騎の中から選び出して、苛酷な修業を課し、きたえあげた面々であった。

葵決死党。

その名称を、ひそかに与えていた。

竜造寺匡は、十人を前にすると、

「お主らが、五年間修業した――その腕前を発揮する秋が来た」

と、云った。

どの顔も、鋭くひきしまって、頭領を凝視している。

「伊丹に蟠踞する豪族神屋主膳を、討つ」

竜造寺匡は、ずばりと云ってから、

「その目的は、かくまっている切支丹伴天連を捕縛し、密貿易によって得た巨額の南蛮金を召し上げることにある」

と、教えた。

「おうかがいつかまつる」

一人が、申し出た。

「なんだ？」

「神屋主膳なる者、どれほどの配下を擁して居りましょうか？」

「百人以上、と申せば、お主らは、怯じ気づくか？」

竜造寺匡は、薄ら笑って、十の顔を見わたした。

「千人ときき及んでも、しりごみはつかまつらぬ！」

「よし、その心意気で、当ってもらおう。……神屋主膳が構えて居る、平家館と称す屋敷は、十万石の大名の家よりも、規模は大きい由。その屋敷に、食うことにあぶれた喪家の犬どもが集まっている。しかし、必ずしも、烏合の衆とは申せまい。気骨あって、再び主取りをせぬ者も居ろうし、満々たる野望を抱いている者もまじって居ろう。また、神屋主膳は、いくたびとなく、八幡船を駆って、異国へおもむいて居るゆえ、意外の武器もたくわえている、

と推察される。……容易の敵ではない」

「お目付――。ならば、ご公儀より、軍勢をくり出して、とりつぶされることを、なぜ、なさらぬのでござろう？」

「神屋主膳が、反逆したという証拠はひとつもない。とりつぶす名目が立たぬ。……よいか、わが葵決死党が、平家館を奇襲するのは、あくまでも、世間には内密のことだ。表沙汰にいたしては相成らぬ。このことは、胸にとどめておくがよい」

一同は、うなずいた。

竜造寺匡は、奥の部屋に入った。

そこに、若い女中が、待っていた。

つい数日前まで、大坂城に在って、赤松丹波に侍女として仕えていた娘であった。

実は、竜造寺匡の間者として、送り込まれていたのである。

「須江、どうだ、もうすでに、隠密奉行に手がつけられ居るのではないか？」

竜造寺匡は、皮肉な微笑をうかべながら、たずねた。

須江という娘は、急に、きっとなって、

「おからかいでございますか？」

と、竜造寺匡を、にらんだ。

「まあ、そう目くじら立てるな」

竜造寺匡は、笑って、

「赤松丹波は、きこえた好色漢だ。そなたほどの器量の娘を、そのまま、すてておくはずがあるまい」

「わたくしは、貴方様に、操をさしあげた者でございます。どうして、お奉行などに、身をまかせましょうか」

竜造寺匡は、須江を大坂城へ送り込むにあたって、一夜、おのが牀にひき入れたのであった。

女を間者にするには、まず、おのが女にせよ、というのが、隠密の職にある者の考えかたであった。

須江は、その時、処女だったのである。

「奉行は、そなたを、求めなかった、と申すか？」

「……」

「そんなはずはあるまい」

「わたくしは、こばみました。まことでございます」

「ふむ――」

「信じて頂きとう存じます！」

須江は、必死な面持で、云った。

「よい、よい。判った。……ところで――」

竜造寺匡は、赤松丹波の日常のくらしぶりについて、質問した。

須江は、知っているかぎりのことを、報告した。
さらに、どのような人物が現われたか、質問されて、須江は、よどみなくこたえた。
ききおわって、竜造寺匡は、須江を引き寄せた。
須江は、それを待ちのぞんでいたように、息をはずませて、身を投げかけた。
烈しい愛撫のひとときがすぎると、竜造寺匡は、身を起して、
「奉行も、相当な曲者よのう」
と、独語するように、云った。
「え？」
須江は、はっと顔色を変えた。
「そなたを間者と看破して、無理矢理、操をうばい、こんどは、逆に、おのれの間者として、わしに送りかえして来た」
「お、お目付さまっ！」
須江は、仰天して、全身をわななかせた。
「須江！　かくしても、もうおそいぞ！」
「ああ……」
須江は、喘いだ。
「先般、怪しげな浪人者が、手下をひきつれて、大坂城へ忍び入り、奉行の生命を奪わんとした。そのことを、そなたは、わしに報せなかった。奉行に、口止めされたのであろう」

須江は、はじかれたように、起って、遁れようとした。
竜造寺匡は、猿臂をのばして、その裳裾をつかむと、ずるずると引寄せた。
やがて、須江は、十本の指に頸を締めつけられて、ぐったりと、事切れた。
その日――。
伊丹の平家館は、いつもと変らず、平穏な宵を迎えていた。
神屋主膳は、白河館の姉弟を、庭の南隅にある茶亭に呼んで、点前をしていた。
静香も数馬も、この人物と対坐するたびに、しだいに、父親のような親しみをおぼえていた。
父母の敵とばかり思い込んでいた人物が、実は、意外にも味方の立場にある、と知って、はじめは、とまどい、疑いをのこしていたが、いつとなく、敬慕の念が生じていたのである。
点前をおわって、主膳は、あらためて姉弟を、見まもり、
「そなたたちに、わるい報せをきかせなければならぬ」
と、云った。
静香も数馬も、はっとなった。
主膳は、ふところから、一通の封書をとり出して、静香の前に置いた。
「読むがよい」
主膳に、うながされて、把りあげた静香は、不安のままに、披いた。
それは、織田重四郎からの手紙であった。

読みおわった時、静香の双眸から、泪があふれた。
忠僕嘉七が相果てた報せだったのである。
「姉上！」
数馬が、呼んだ。
「数馬――。嘉七が、亡くなりました」
「えっ?!」
数馬は、ひき裂けんばかりに、眸子をみはった。
「敵をもとめて、大坂城へ忍び入って、討たれました」
「ち、ちくしょうっ！　じいやを殺したのは、だ、だれなのじゃ?」
数馬は、叫んだ。
「忍び込んだのですから、曲者として、討たれたのです」
「敵が、いたのじゃろ?　大坂城に、いたのじゃろう」
「左様――、そなたたちの敵は、大坂城内に在る幕府隠密奉行と、ほぼ確信できる模様だ」
主膳が、云った。
「隠密奉行とは、どういう職務で、ございましょうか?」
静香が、問うた。
主膳は、くわしく、説明してから、
「いずれ、この平家館も、遠からぬうちに、そなたたちの家と同じ運命を持つであろう。隠

密奉行が、当館を狙っていることは、すでに、数年前からであったが、最近になって、入り込んで来る密偵の数が増したところをみると、襲って来るのは、間近と思われる」
その危険を予感しつつも、主膳の態度はおちつきはらっている。
姉弟は、息をつめて、主膳を、見まもった。
「しかし、たとえ襲って来ても、そなたたちの身の安全は、約束できる」
主膳は、立ち上ると、床の間に寄り、その掛物をはずした。
そして、壁をひと押しした。
すると、ギギギ……と軋る音とともに、壁が、回転しはじめた。
「そなたたちは、今宵から、この茶亭にやすむことになる。万が一の場合は、こうして、壁をまわして、この奥へにげ込むのだ。これは、地下道へ通じて居る。地下道は、屋敷のうしろの森のむこうへ抜けて居る」
主膳は、微笑しながら、静香と数馬へ告げた。
「ついでに、知らせておくが、当館の奥の別棟には、異邦の伴天連と娘が、住んで居る。わしが、ずっと、かくまっている。この二人も、やはり、地下道から、にがすことになる。そなたたちと一緒になることもあろうが、いやがらぬように、心得て欲しい。二人とも、神に仕える立派な人たちゆえ、親しくなれば、そなたたちも、尊敬の念が生じよう」
「はい」
静香は、頭を下げた。

切支丹信徒とともに、にげるのは、なんとなく、不安があったが、主膳がそう云うのであれば、うなずかざるを得なかった。

主膳が出て行くと、数馬は、姉の膝を押えた。

「姉上！　ほんとうに、じいやは、亡くなったのか？」

「これは織田様のお手紙です。ずっと、嘉七とともにすごしておいでした。白河館を襲うた敵が、大坂城にいる、ということが判って、忍び込まれたのだそうです。……数馬、嘉七のために、祈りましょう」

姉弟は、大坂の方角に向って、坐ると、両手を合わせた。

長い黙禱がおわった時、静香は、そのまま、遠いまなざしを、宙に置いた。

織田重四郎のおもかげが、その宙にうかんでいた。

この館に身を寄せてから、静香は、就寝した時、ねむれぬままに、いつとなく、重四郎のおもかげを想い描くようになっていた。

重四郎と自分とのあいだは、目に見えぬ絆でつながれているような気がしていたのである。

——あのかたに、めぐり会うたことは、神様のおぼしめしであったに相違ない。

静香は、そう信じるようになっていた。

「姉上——」

弟に呼ばれて、われにかえった静香は、

「え——なに？」

と、見かえした。

「わしらは、大坂城へ行こう」

「……？」

「織田様の助太刀で、敵討をするんだ！」

「ええ……」

「ここで、じっとしているのは、いやだ！」

「でも、織田様が、お呼び下さるまでは……」

「かまわないよ。行こう」

「もうしばらく、お待ちなさい」

「でも、ここにいれば、敵は攻め込んで来るのだろう。その前に、大坂へ行こうよ」

数馬は、姉をうながした。

主膳の方は、まっすぐに、食客溜りの広間へ足をはこんでいた。

広間には、二十人あまりの浪人者が、ごろごろと、自分勝手なひまつぶしをやっていたが、突然の館の主人の出現に、あわてて、姿勢を正した。

「御一同、そのまま、そのまま——」

主膳は、愛想のいい態度で、云っておいて、ずうっと見渡し、

「殿原伝九郎、と申される御仁は？」

と、たずねた。

「それがしでござる」
三十なかばの年配の、大兵の男が、立ち上った。
「貴公が、殿原伝九郎氏か。……業物を所持されている、とうかがったが、まことかな？」
「いや、それがしの差料など、さして自慢するに足りる品ではござらぬ」
「謙遜されることはない。……後学のため、一度、拝見できぬか？」
殿原伝九郎と名のる男は、ちょっと、けげんそうな面持になったが、立って行って、自分の差料を、持って来た。
「ごらん下されば、お判りになりますが、無銘の、つまらぬ品でござる」
「さて、どうであろうかな？」
主膳は、白刃を鞘から抜いて、ピタリと直立させた。
しばらく、じっと見据えていた主膳は、ふっと、微笑すると、
「わからぬ」
と、云った。
「え？　わからぬ、とは？」
「業物かどうか、生き胴を試してみなければ、わからぬ」
「……」
主膳は、殿原伝九郎を、見据えた。
その表情は、刃物のように鋭いものになっていた。

一瞬——。
殿原伝九郎は、ぱっと起った。
遁れようとする伝九郎めがけて、主膳は、凄まじい気合もろとも、白刃を躍らせた。
血煙りが噴きあがった。
虚空をつかんで、四五歩よろめいた殿原伝九郎は、床柱にすがって、首をねじまげた。
「う、うぬっ！」
憎悪をこめて、にらみかえす殿原伝九郎に対して、主膳は、微笑してみせた。
「公儀隠密衆の一人——とみたが、ちがって居ったかな？」
「……」
大きくひと喘ぎしてから、殿原伝九郎は、ずるずると、床柱をすべって、崩れ落ちた。
主膳は、血ぬれた白刃を携げて、浪人者一同を、見わたした。
「やむを得ぬ仕儀であった。諒として頂こう。……まだ、ほかに、公儀隠密衆が、まじっているかも知れぬが、こちらの気がつかぬうちに、出て行って頂かねばならぬ」
そう云われて、浪人者たちは、猜疑の視線を、まわした。
主膳は、ゆっくりと、中央へ進み入った。
「ついでながら、お手前がたに、おつたえしておこう」
主膳は、しずかな声音で、云った。
「当館は、近いうちに、公儀隠密衆の襲撃を受けることに相成ろう」

浪人者たちは、その言葉をきいて、ざわめき立った。
「お館、それは、まことでござるか？」
「まず、まちがいはない」
「近いうちと申されると？」
「今明日にも――」
「ま、まことでござるか？」
どの顔も、一変した。
「そう申したら、お手前らは、急に浮腰になったが、去る者は、追わぬ。生命が惜しい御仁は、いますぐにも、当館を出て行って頂こうかな」
申し渡された浪人者たちは、はたして、主膳が、自分たちをだましているのかどうか、半信半疑のまま、押し黙った。
主膳は、血刀をほうりすてると、
「日頃の腕自慢を、ひとつ、披露してみたい、と思われる御仁は、とどまるがよろしかろう」
と、云いすてて、奥へ去ろうとした。
「お、お待ち下され！」
一人が、あわてて、呼びとめた。
「お館、われわれをかつがれるのではござるまいな？」
「たわけ！」

主膳は、一喝した。
「まことならば、遁走するが、いつわりならば、このまま、のうのうと、ただ飯をくらおうとする――その下種な根性を、わしが知らぬとでも思って居るのか！」
浪人者たちは、その叱咤に、ふるえあがった。
それから、半刻経たぬうちに、十六人の浪人者が、こそこそと退散した。
居間にいた主膳は、その報告をきくと、
「そうか」
と、笑った。
報告したのは、居残った浪人者の一人であった。
田野村丹三郎というこの浪人者は、実は、食客ではなかった。
主膳が、見込んで、監視の役を与えて、溜りの広間へ入れておいたのである。
「さむらいという者も、腰抜けになった」
「いかにも――。討ちはたすにもあたいせぬ卑怯者ぞろいでございました。……今夜うちにも、堺より、船の男どもが参上つかまつります。これらは、たのもしい生命知らずでありますれば、ご安堵下さいますよう――」
「丹三郎――。海の男らを呼び寄せても、無駄かも知れぬぞ」
「なんと仰せられます？」
「これは、わしの予感だが、襲って来るのは、おそらく、尋常一様の隠密ではあるまい。こ

の平家館をとりつぶすには、公儀がたも、よほどの覚悟であろうゆえ、一騎当千の手練者をさし向けて参るであろう」

主膳は、そう云った。

田野村丹三郎は、緊張して、

「では、お館には、討死を覚悟なさいますのか？」

と、鋭く問いかけた。

「いや、ひとつしかない生命ゆえ、大切にいたそう。むざとは、あの世へは参らぬ存念だ。しかし、襲撃勢に、勝てるとは思えぬ」

「……？」

丹三郎は、主人の肚のうちが、判らなかった。

主膳は、微笑して、

「丹三郎――。この屋敷の中には、もう何も、のこっては居らぬ」

「は――？」

「焼けてしまっても、惜しいものは、ひとつもない。いや、いっそ、すべて、烏有に帰した方が、さっぱりするかも知れぬぞ」

「お館――」

「わしには、未練をのこすべき妻子も居らぬ。この屋敷が、あとかたもなくなれば、それで、心気あらたまって、日本をすてることができよう」

「はい」

「人間という奴は、妙なもので、この古びた屋敷に永年、住んでいると、いつの間にか、しぜんに、愛着が生じて、すて去るのがどうしても、できなくなってしまって居る」

「……」

「わしが、この屋敷を持っていなければ、もっと早く、日本をすてていたかも知れぬ。十年、いや、二十年も前に、海を渡って、いまごろは、どこかの異邦の地で、日本人町をつくりあげ、数千の家来を擁して、王侯ぐらしをしていたかも知れぬ」

「……」

丹三郎は、ふかくうなずいた。

「ところで……」

主膳は、丹三郎を見据えて、

「敵が襲撃して参った時のことだが……、お前にたのんでおきたいのは、シモン司祭とアンナと、それから、白河館の姉弟の身を、地下道をみちびいて、堺へつれて行ってくれることだ」

「承知つかまつりました」

堺には、三軒ばかり、隠れ家がつくってあったのである。

公儀隠密といえども、その隠れ家は、かぎつけていないはずであった。

「問題は、どうやって、四人を安全に、堺まで、つれて行くか、だが……」

「商人の荷駄に見せかけては、いかがでございましょう？」
「うむ。まず、考えられるのは、それだが……、敵がたも、目は鋭いぞ」
「しばらく、この近くの山中に、かくまっておくことも、できましょう」
「いや、それは、かえって、いかん。敵がたは、すでに、伊丹周辺は、しらべつくして居るに相違ない。襲撃すれば、当然、わしが、近くの山中へ、逃げ込む、と推測したであろうから――」
「では、万難を突破して、四人のかたを、堺へおつれつかまつります」
丹三郎は、誓った。

夜三更――子刻を過ぎていた。
主膳は、ふっと目ざめた。
――来たのではないか？
その予感が、脳裡をかすめた。
べつに、館へ迫って来る気配を感じたわけではなかった。
風の落ちたおだやかな深夜は、どんな微かな物音でも、高くひびくものだが、主膳の耳に、なにもきこえたわけではない。
にも拘らず、主膳の神経は、鋭くとぎすまされた。
田野村丹三郎に申し含めてから、すでに五日が過ぎていたが、主膳は、衣服をつけたまま

で就寝し、いかなる深更でも、襲撃を受けて立つ用意をととのえていた。
主膳は、起き上ると、短筒を懐中にし、差料を腰に佩びた。
食客溜りの広間には、浪人たちに代って、丹三郎が、堺から呼び寄せた海の荒くれ男たち十名が、やすんでいた。
主膳は、廊下へ出ると、しずかに歩き出した。
その時――。
遠くから、凄まじい喊声が、静寂の夜気を破った。
しかし、それは、ただの一瞬であった。
――やはり、来た！
その喊声は、丹三郎が、交替で終夜見張りに出していた海の男の一人が発したものに相違なかった。
敵襲と見てとったならば、鉦を鳴らす手筈であったが、すぐそばまで迫り寄られたのに気がつかず、とっさに、喊声をあげて、報せたものに相違なかった。
主膳が、十歩もあゆまぬうちに、丹三郎が、風の迅さで、奔って来た。
「お館！」
「うむ！　来たのう」
「備えはできて居ります」
「どれだけふせげるか。むざと、あけ渡すのも業腹ゆえ、ひとふせぎしてみせようか。……

丹三郎、あの四人をたのむぞ！」
「かしこまりました。……お館、おん身大切に！」
「生命は惜しむゆえ、安心して居れ」
丹三郎は、奥へ駆け入った。
主膳が、広間に入ってみると、すでに、海の男たちは、丹三郎の指令に従って、一人をのこして、それぞれさだめられていた守備の持ち場へ奔っていた。
居残った浪人者たちも、闘うべく、庭へとび出していた。
——こういう時、道満がいれば。
ふっと、主膳は、あの異様な化物面を、思いうかべた。
一人そこに残った海の男は、まだ十八九の、少年の俤をもった、きりりとひきしまった顔だちであった。
「お前は——？」
「紀之吉と申します」
「むだに生命をすてるなよ。いざとなったら、逃げるのだ」
主膳は、云いきかせた。
「はい。しかし、お館のためなら、よろこんで死にます！」
暗黒の闇にまぎれて、迫り寄った敵勢が、どれくらいの頭数か、館側には、見当がつかなかった。

まず、その人数を、さとる必要があった。そして、それを見さだめる用意が、なされていた。
先頭に立った襲撃者の一人が、釣り橋を、一歩踏んだ瞬間、凄まじい炸裂音とともに、橋のまん中で、火薬が、焔を噴いた。
たちまち——。
あたりは、真昼の明るさになった。
襲撃した敵勢の姿が、くっきりと、地上に浮きあがった。
「十騎だぞ！」
正門わきの櫓で、海の男が、叫んだ。
——十人！
庭を見わたせる広縁に立っていた主膳は、眉字をひそめた。
「十人とは、すくなすぎるが……」
主膳は、公儀隠密衆が寄せて来るとすれば、三十人は下るまい、と考えていたのである。
——十人というのは、よほど、えりすぐった、一騎当千の手練者と、解釈してよい。
主膳は、そう受けとることにした。
ゆっくりと、広縁を歩いて、奥へ消えて行った時、門前では、ふたたび、凄まじい爆薬の音が起った。
しかし、これは、館側の攻撃ではなかった。

夜襲側が、大筒を撃って、門扉を破壊したのである。
そして——。
夜襲者たちは、疾風を起して、門内へ斬り込んで来た。
「野郎っ！」
「畜生っ！」
「くたばれっ！」
「やあっ！」
「おうっ！」
短い呶号に、文字通り必死の覚悟をこめて、躍りかかって行ったのは、海の男たちであった。
それぞれ、ふりかざした得物は、ちがっていた。青竜刀もあれば、西洋剣もあった。
それをふるうのは、度胸と経験にものいわせただけの、いわば、実戦兵法であったが、所詮は、盲滅法のあばれかたにすぎなかった。
突入して来たのは、いずれも、柳生道場で、少年の頃から、きたえぬいた腕前の持主であった。
尋常の勝負に於ては、問題にならぬ差があった。
あっという間に——。
そこに、ここに、二人三人と、屍になって仆れ伏した。

「引けっ！　屋内をかためろ！」
誰かが、叫んだ。
「引けるかっ！」
「くそっ！　こいつらに、負けてたまるかっ！」
海の男たちは、引くことを知らなかった。血に狂いたった、といえる。
いずれも、野性のけものと化したように、襲撃者に向って、躍りかかって行く——。
その時——。
館の内から、どっと煙が噴き出た。それも、一箇所ではなかった。
表玄関からも、書院からも、奥座敷からも、濛っと、煙が噴き出て、夜空にまきあがった。
あきらかに、火を放ったのである。
この計画は、海の男たちも、きかされてはいなかった。
「おっ！　なんだ？」
「お館っ！」
「焼くことはないっ！　なぜ、焼くんだ！」
呶号と呶号が、剣戟の間に、ぶっつかりあい、修羅場をさらに、悽惨なものにした。
煙の中から、主膳の声が、ひびいた。
「無駄に生命を落すなっ！　引けい！」
下知に応えて、海の男は一斉に、引こうとした。その隙をのがさず、襲撃者たちは、残忍

なまでの凄まじい剣技を発揮した。

首が刎ねとんだ。腕が地べたをころがった。血しぶきが、五尺も宙へ噴きあがった。

こうなると、海の男は、意気地として、引きさがることを忘れた。

うわあっ！

野獣じみた喚声をほとばしらせるや、死にもの狂いの反撃に出た。

主膳としても、もはや、止めようはなかった。

館の内からは、すでに、紅蓮舌が、はい出ていた。

「神よ！」

主膳の声が、高く、きこえた。

「われら人間どものおろかな戦いを、許されい――」

轟然と、音たてて、母屋の大屋根が火柱を、天に突っ立てた時、すでに、地上の闘いは、熄んでいた。

地面に仆れているのは、すべて海の男ばかりであった。

竜造寺匡が、ゆっくりと、門を入って来た。

「流石は、神屋主膳だ。われらに、一物をも渡さぬか」

一人が、

「追いますか？」

と、問うたが、匡は、かぶりを振った。

「無駄であろう。火をはなつ上からには、逃げ道は、つくって居ろう」

火焔に照らされた匡の顔は、険しくひきしまっていた。

「お目付――」

二人の部下が奔って来て、

「もはや、屋敷内には、人影は見当りません。……すでに、襲撃を予知していたものと思われます」

と、告げた。

「あっぱれなものだ。やはり、神屋主膳は、ただものではなかったな。対手にとって不足はない。……これだけの伝統を有つ豪壮な邸宅を、平然として焼きすてるとは、大した度胸と申せる。ただ、神屋主膳は、その度胸の太さゆえに、ひとつだけ失敗を犯した」

「なんでありましょう？」

「火を放ったということは、南蛮交易によって得た財宝は、この屋敷内から、ことごとく、ほかに移して居る証拠だ。そのことを、わしに知らせた」

生命ある日

館が燃えあがった頃あい――。

白河館の姉弟と伴天連シモン司祭とアンナの四人は、田野村丹三郎の誘導で、地下道を抜け出ていた。

不幸なことは、老いた異邦の神父は、数日前に、心臓のやまいで臥牀していた。丹三郎の肩をかりて、ようやく、暗い長い地下道を抜け出た時、老人の体力は、尽きていた。その喘ぎをきいただけで、もう絶望であることが判った。

抜け出た場所は、密林の中の小屋であった。

その土間へ横たわったシモン司祭の顔は、丹三郎がともした手燭のあかりを受けて、死相を呈していた。

「弱った。……急がねばならぬが、このからだをはこぶわけには参らぬ」

丹三郎は、当惑した。

静香と数馬は、身を寄せあって、黙って、老人を見まもっていたし、アンナは、胸で両手をくみあわせて、ひくく、オラショをとなえつづけていた。

喘ぎが、すこしおさまってから、シモン司祭は、

「アンナ」

と、呼んだ。

アンナが、顔を寄せると、老人は、わななく手を、アンナの額の上にかざした。

「主キリストの恩寵が、そなたの上にありますように――」

おのが生命の最期をさとった司祭は、アンナのために、神に祈った。

静香にも、数馬にも、言葉は解せぬが、老人の為すことは、判った。

アンナの双眸は、泪に濡れた。

シモン司祭は、しずかに、十字を切ると、丹三郎に、

「おねがいします。……この、若い人たちを、どうか……安全な、ところへ――」

と、云った。

「承知いたした」

丹三郎は、うなずいたものの、老人を、このまま、ここへすてて行くことを、ためらった。

シモン司祭は、アンナに何か云った。

アンナは、老人の皺だらけの手へ、口づけすると、立ち上って、

「シモン様のご命令です。一人で、やすらかに、天国へ参りたい、と申されています」

「では――」

丹三郎は、異邦の伴天連に、ふかく頭を下げておいて、小屋を出た。

静香・数馬姉弟も、同じようにして、丹三郎のあとにつづいた。

アンナは、膝まずいて、天に在る救世主に祈りの声を送っておいてから、出て来た。

「この林を出たところに、百姓家があり、そこに、牛を三頭用意して居り申す。その背に、米俵とみせかけて、お手前がたをのせて、はこぶでござる」

丹三郎は、教えた。

小屋の中に心をのこしつつ、四人は、黙々として、忍び歩いて行った。

夜がしらじらと明けそめた時刻であった。

野道から、広い街道へ、米俵をのせた牛が三頭、ゆっくりと、頬かむりした農夫に曳かれて、出て来た。

明るい陽ざしをあびて、ぽくぽくと街道をひろって行く光景は、まことに、のどかであった。

但し——。

頬かむりのかげで、ひそかにあたりにくばる農夫の眼光は、鋭いものであった。

田野村丹三郎が、化けた姿であった。

思案の挙句、虎口をのがれるまでは、米俵の中に、白河館の姉弟とアンナをかくしたのである。

姉弟はともかくも、アンナは、異邦の金髪の娘であった。絶対に人目に当ててはならなかった。

もとより、このままで、大坂の市中を通って、堺まで行き着くわけではなかった。

大坂に近くなったところに、駕籠を用意してあった。

それまでの忍耐であった。

数町を辿った時、後方から馬蹄の音が起った。

丹三郎は、直感で、ただ者ではないな、とさとった。

第一の危機を迎えたのである。

はたして——。

忽ちに、追いついて来たのは、そのひきしまった顔つきで、ただの武士ではないと判る三騎であった。

非常な勢いで、いったん、追い抜いたが、しんがりの一騎が、たづなをひいて、頭をまわした。

「おい、百姓——」

「へ、へい」

丹三郎は、ぺこぺこと頭を下げた。

「お前は、どっちから来た？」

「あちらでございます」

丹三郎は、こうした場合、反対の方角を指さすべきであったろうが、わざと、平家館の方を指さした。

「途中、伴天連らしい者を見かけなかったか？」

「へえ……？　そんな者には、出会いませなんだ」

「人目をはばかるように、道をいそいでいた者は、居らなんだか？」

「さあ？　……道で会うたのは、なにやら、ひどうくたびれた様子の浪人衆が一人だけでございました」

「そやつは、どの方角へ行った？」

「どこへ行かれましたかのう。路ばたへ腰を下ろされて、じっとしておいでしたので……」
その一騎は、すぐに、前の二騎を追って、駆け去った。
——やれやれ、まず、第一の危機はまぬがれた。
丹三郎は、全身がじっとりと汗ばんでいた。
さらに、数町を進んで、阿弥陀堂の前を過ぎようとすると、格子戸の中から、
「おい、百姓、ちょっと待て」
と、声が、かかった。
のっそり、阿弥陀堂の中から、現われたのは、浪人者であった。
丹三郎は、その顔を、一瞥するや、
——まずい！
と、思った。
その浪人者は、先頃まで、平家館の食客になっていた天堂寺辰馬であった。
杉山道満にともなわれてやって来て、ごろごろしていたが、道満が大坂へ向って出かけるや、この男の姿も館から消えていた。
辰馬の方も、こちらの顔を見おぼえているはずであった。
「百姓——、大坂へ、米をはこぶのだろう？」
辰馬は、たずねた。
「へい」

丹三郎は、顔を伏せて、うなずいた。
「では、弁当を持って居るだろう？　半分、合力したい」
朝はやく出て、日が暮れてから帰るのだとすれば、弁当を持参しているのは、問わないでもあきらかなはずであった。
ところが、丹三郎は、弁当など持ってはいなかった。
「あいにくでございます。いそいで出て参りましたので、忘れてしもうて……、わし自身、こまって居ります」
「おれに分けるのが、惜しいのか」
辰馬は、険しい顔つきになった。
「滅相もない。持っていれば、お分けいたします」
「嘘をつけ！」
辰馬は、空腹のせいで、気が立っていた。
いきなり、とび降りると、ずかずかと迫って、丹三郎の胸ぐらをとろうとした。
「おゆるしを……」
丹三郎は、顔をそむけて、あくまで、農夫をよそおおうとした。
「弁当を出せ！」
辰馬は、力ずくで奪うべく、丹三郎が顔をかくした手拭いをむしり取ろうとした。
瞬間——。

丹三郎は、足ばらいをかけた。
辰馬は、あっけなく、しりもちをついた。
「おのれっ！」
はね起きて、とびかかって来ようとするのを、丹三郎は、
「たわけ！」
と、一喝した。
「な、なんだと！」
辰馬は、目を剝いた。
そして、丹三郎の顔を、凝視して、あっとなった。
「お、お主は……！」
「そうだ。平家館の田野村丹三郎だ」
「ど、どうしたというのだ？」
「昨夜、館は、公儀隠密の一団に襲われて、焼けた」
「えっ？」
「それがしは、やむなく、姿をかえて、堺へおもむこうとして居る。……お主が、むだな合力をするので、しかたなく、正体をみせたが、こうなれば、お主を、味方につける」
「……」
「この米俵の中には、南蛮の珍宝が入っている。お主、護衛してくれれば、あとで、多分の

礼をいたそう」
天堂寺辰馬が、どれだけ信用のおける男か、丹三郎には、判らなかったが、この場合、やむを得なかった。
――大坂を過ぎるまでは、つれて行くよりほかはない。
そう考えた。
辰馬の方は、思いがけぬ幸運にぶっつかったと、単純によろこんで、空腹も忘れるくらいであった。
「南蛮財宝と申すと、この米俵だけで、十万両にも相当するのでござろうな？」
辰馬は、よだれをたらしそうな顔つきで、問うた。
「お主とは、関係ないことだ。……それよりも、百姓と浪人者が、肩をならべて歩くのは、人目に立つ。はなれていてもらおう」
「そうだな。では、小銭を少々めぐんで頂けまいか。そこいらの飯屋で、腹を満たして参る」
丹三郎は、苦笑しつつ、いくばくかの銅銭を与えた。
辰馬は、「めし」という幟を出している掛小屋へ、大急ぎで駆け込んだ。
――厄介者を背負うた。
丹三郎は、うんざりしつつ、街道をいそいだ。
やがて――。

辰馬が、追いかけて来た。
「やあ、人間、空腹と満腹では、気持に天地の差があるとは、どうも、妙なものだ」
そんなことを云いながら、丹三郎の目をぬすんで、そっと、米俵のひとつへ、手をふれた。
とたん、
「お！」
と、小さな叫びをあげた。
米俵の中で、何か、生きものが、もぞとうごめいたのである。
——ははあん！
辰馬は、目を光らせて、丹三郎の背中をにらんだ。
——財宝と云ったが、人間をかくして居る！
辰馬は、大股に、丹三郎へ近寄った。
「田野村氏。それがしは、気が変った」
「……？」
丹三郎は、じろっと、辰馬へ一瞥をくれた。
「ここでお別れする。ついては、路銀を合力いたしたい」
「どうしたというのだ？」
「べつに、どうもせぬ。……百両ばかり、頂戴いたしたい」
「……」

「ま——そう険しい顔をされるな。口止め料としては、百両は安い。いや、あさましい申出であることは、それがし自身、承知いたす。しかし、先立つものがなければ、浮世は渡って行けぬ」
辰馬は、丹三郎の一撃を警戒しつつ、ぬけぬけと云った。
——どうしてくれよう？
丹三郎は、とっさの間の思案がつかなかった。
「百両——口止め料としては、べつに高くはござるまい」
丹三郎としては、この髭面の脅迫者を、一撃でぶち倒すことは、できなかった。
すでに、朝の街道には、人影が多くなっていた。
さりとて、むざと、百両をくれてやるのも、腹立たしかった。
「いったい、お主、どういうこんたんなのだ？」
丹三郎は、つとめて、おだやかに、問うた。
「べつに、こんたんはない。ただ、それがしは、生来好人物にできて居って、これまで、さんざ、狡猾な者どもから、だまされて来たので、もっぱら、だまされぬようにつとめて居るだけの話だ」
「わしが、お主を、だましたというのか！」
「ま——そういうわけだな。そちらが、だましてかかるのであれば、こちらも、それに対抗して、居直らねばならん」

「なにを、だました、と申すのだ？」
「しらばくれないでもらおう」
辰馬は、肩をそびやかした。
「お主は、味方になって、堺まで同道してくれれば、この米俵にかくした南蛮財宝を、分けてやる、と申したな。……生きた人間を、どうして、分けることができる？」
「……」
丹三郎は、米俵の中身を、辰馬に知られて、顔色を変えた。
「中身を分けるとは申さぬ。応分の礼をすると申しただけだ」
「ごまかしても駄目だ。さきの礼よりも、いまのめぐみを、それがしは、欲して居る。……百両の合力、たのみ申す」
「渡さぬ、と申せば？」
「やむを得んな。……いずれ、追手が、この街道を駆けるであろうゆえ、その時……」
「密告すると申すのか！」
丹三郎の全身に、殺気がみなぎった。
辰馬は、すばやく、とび退いた。
「ま——そう、慍るものではない。ものは相談、と云っているのだ」
「百両など、いま、所持しているはずもない！」
辰馬は、丹三郎の必死の気色を看てとって、

——これは、いかん！
と、思いなおした。
「わかった！　ともかく、人目に立つ路上で、争うのは、お互いにまずい。……了承した。堺まで、供をしよう」
「……」
「いや、実は、お主が、それがしを信用せず、途中で、討ちはたすこんたんを抱いているのではないか、とうたがって、心にもない、大金の合力をしてみたまでだ。お主の方で、それがしを、信用してくれるのであれば、決して、ゆすりがましい振舞いはせぬ」
辰馬は、下手に出た。
丹三郎は、いまいましさを、抑えて、
「堺へ行けば、いくらでも、のぞみのままに礼をする。それまでは、距離を置いて、ついて来てくれるがよかろう」
そう云った。
一方——。
神屋主膳は、館を、どのような方法で脱出したものか、大屋根がもの凄い火柱をたてて、夜空をいろどった頃あい、裏手の小高い丘陵上に、佇立していた。
数百年の間、この地方の豪族として、その由緒ある備えを誇った平家館が、いま、あとかたもなく、烏有に帰そうとしているのである。

さすがの剛腹の主膳も、無量の感慨で、胸が疼いた。

――これで、日本への未練をすてて、海を渡って、異邦の地に、骨を埋める決意ができた！

自分に云いきかせたものの、やはり、祖宗が築き、永く残してくれた家を、自らの手で焼きはらった罪の意識をふりはらうべくもなかった。

主膳は、次第に、火勢がしずまって行く森の中のわが館へ、視線を投じて、いつまでも、立ちつづけていた。

やがて――。

まきあがっていた煙も、落ちるのを見とどけて、主膳は、われにかえったように、ほっと、ひとつ、ふかい溜息をもらしてから、踵をめぐらした。

丘陵は、次の丘陵と、なだらかな斜面をつなぎあわせ、その谷間を、細い川が流れていた。流れに沿うて、しばらく辿ると、雑木林に入る。

暗闇の中では、忽ち、径に迷いそうであったが、主膳の足どりは、たしかであった。

そして――。

夜が明けた時、主膳が立ったのは、雑木林の奥に、ひっそりと建っている草庵の前であった。

草庵の前は、きれいな水が流れていて、そこにしゃがんで、かなり年老いた女が、芋をあらっていた。

人影が前に立ったので、はっとなって、顔をあげて、

「まあ！　お館様！」

と、いそいで、腰を上げると、挨拶した。

「伍兵衛は、元気か？」

主膳は、問うた。

「はい、相変らず、頑固で、すごして居ります。……お館様は、また、どうして、お供もなしで、急に、お出まし下されました？」

「うむ。宿無しになってな」

「え？　宿無しに――？」

「伍兵衛に、話がある。呼んで来てくれぬか。畠に出て居るのであろう」

「はい。すぐに、呼んで参じます」

女は、いそいで、歩いて行った。

主膳は、草庵の中へ入った。

粗朶火の燃えている囲炉裏の端へ、腰を下ろすと、しばらく、音たてて燃える炎の色へ、視線を当てていた。

――丹三郎は、ぶじに、四人をつれて、逃げたであろうか？

その思いが、ちらと脳裡をかすめていた。

ほどなく、足音が、いそいで、近づいて来た。

主膳の前へ、両手をつかえたのは、あきらかに、日本人のものではない面相をそなえた男であった。

褐色の頭髪、秀でた鼻梁、毛むくじゃらの手。骨格が大きく、その皮膚は赤かった。

しかし、物腰も言葉づかいも、日本人以外の何者でもなかった。

遠いむかしに、この日本へ渡って来て、この国の人情風俗をわがものにしてしまったに相違ない。

伍兵衛という名にふさわしい人間になろうとつとめ、そうなったのであろう。

「伍兵衛――」

主膳は、微笑しながら、云った。

「わしも、いよいよ、日本をすてる秋が来たらしい」

「決意なさいましたか」

「うむ。まだ三四年の余裕はあるつもりであったが、そうのんびりと腰を据えてもいられなくなった」

「なにか、不都合でも起りましたか？」

「公儀が、隠密をさし向けて来て、しきりに探索して居ることには、気づいて居ったが、いよいよ、こちらをとりつぶしにかかって来た」

「……」

伍兵衛は、じっと、主膳を見つめかえした。

「公儀も、おのが施政方針を実行するに、気ぜわしすぎる。わし一人を、滅ぼしてみたところで、どうということもあるまいに……、なんのために躍起になるのか。わしが、いささかたくわえている物が欲しい、というわけであろうが、奪いあげたところで、歳費をおぎなうに足りる額でもない。個人が、努力してたくわえた私財を奪い取るなど、一国を治める者の為すべきわざではない」

「ご尤もの仰せです」

「それよりも、わしら海の人間が、はるばる渡航して、外国と交易した経験を利用して、ひろく世界をひらけば、どれほど、国が富むか。……鎖国主義というのは、どうにも、わしらの合点のいかぬところだ。外国とのつきあいを断わって、自国のみで万事を処置しようとするのは、まちがって居る。おのれで、おのれの腹をひもじゅうするようなものではないか」

「その通りでござる」

「公儀は、外様諸藩が、外国の力を借りて、叛くことをおそれている模様だが、そんなうれいは、万に一もありはせぬ。ばかげた妄想だ」

「わたくしにもうひとつ、判らぬのは、公儀が、なぜ、キリストの教えを禁じられるのか、そのことでござる」

「うむ。そうだな。神に祈ることを、どうして、弾圧するのか。神は、万国すべての人類の上に在るものだ」

「この国に、戦乱があまりに永くつづいたので、国を治めるためには、あれも禁じ、これも

禁じ、徳川家に神のような万能の力を持たせねばならぬ、と考えたのでありましょうか」

「そうであろうな。将軍は、現世神になったのだ。ばかげた話だ」

主膳は、笑いながら、云った。

「そのおかげで、平家館も、灰にされてしまった」

「え？」

伍兵衛は、おどろいて、主膳を見かえした。

「ははは……、昨夜、公儀隠密の一団が襲うて参った。わしは、かれらに、一物も渡すのは好まぬので、自身で、火を放っておいて、立退いて参った」

「それは！」

伍兵衛は、目をみはった。

「やむを得ぬ仕儀であった。また、わしとしては、館への未練を断ち切るための思いきった手段でもあった」

「それにしても、惜しいことを――」

「うむ。丘の上から、燃え落ちるのを眺めたが、さすがに、胸が疼いた。三百年もつづいた家であった。柱一本庭石ひとつにも、先祖代々大切に守られて来た息づかいがあった。わしは、それらのすべてを、殺してしまったような罪の責めをおぼえて居る」

「お気持重々にお察しつかまつる」

「しかし、これは、愚痴だ。……わしらは、新しい世界に向って、歩いて行かねばならぬ。さいわいに、わしには、お主をはじめ、多くの誠実な部下が居る。部下たちとともに、異邦へ渡って、新天地をきりひらく、という夢は大きい」

「……」

伍兵衛は、主膳の顔面がひきしまるのをたのもしく眺めた。

「お主には、ここにかくれ住んで、永いあいだ、蓄えた財物を、管理してもらった。まことにご苦労であった」

「とんでもござらぬ。流れ着いた、どこの馬の骨ともわからぬ外国者を、親切に養うて下されたばかりか、信頼して財宝を守る役を与えて下されたご厚情は、ことばで感謝することはできませぬ。どうして、わたくしのような外国者をえらんで、こんな大切な役目をお与え下されたのか、あらためて、おうかがいしたいものでござる」

「目の色や皮膚はちがっても、お互い人間同士ではないか。わしは、洋の東西の人種の差別はつけぬ。心と心のふれあいが、肝心のことではないか。……お主をたのんだのは、ひとつには、世間の目にふれる場所では、異邦人として特殊扱いをされるし、お主自身それを好まぬらしいからであった。この山奥ならば、なんの気がねもなしに、女房とふたりで、平和な日々を送れるゆえ、お主に、そうしてもらったまでだ」

「お館様――」

伍兵衛は、あらためて、両手をつかえると、

「忝（かたじけ）のうございました」

と、礼をのべた。

「いまさら、礼には及ばぬ。わしの方こそ、感謝して居るのだ。……ところで、船団をしたてて、日本を出て行くとなれば、ここに蓄えたものを、はこばねばならぬが、これは、容易のわざではない。公儀隠密の目が光っているただ中を、どうやってはこぶかだ」

伍兵衛は、主膳に云われるまでもなく、そのことを、すぐに、考えていた。

ここに匿されてある財物は、おびただしい。南蛮金だけでも、日本の金にすれば、三十万両を下るまい。主膳は、異邦に渡った時のために、それらの金貨を、鋳つぶさずに、そのままに、取り置いていたのである。

ほかに、精巧な銃、短筒、大砲、衣服類、薬品、航海上必要な諸器具など、見知らぬ異邦の地に上陸して、それをわがものにするためのあらゆる品々を、とりそろえていたのである。

それらの財物を、堺まで、運ぶことは、目下の状況では、不可能にちかいわざであろう。

主膳自身さえまだ思案のつかぬところであるから、伍兵衛に妙案のうかぶはずもなかった。

「いかがいたせば、よろしいものか？」

伍兵衛は、首をひねったまま、口を真一文字にひきむすんだ。

「ま――今日明日、というのではない。そのうち、いい考えもうかぶであろう」

主膳は、云った。

「ともかく、腹が空いた。芋粥でも喰べさせてもらおうか」

「おお、これは、失礼をばいたしました。すぐに――」

伍兵衛は、手をたたいた。

それに応えて、女房のおこんが、台所から、食膳をはこんで来た。

おこんは、平家館で使われていた下婢であった。伍兵衛と夫婦になったのは、誰の命令でもなかった。日本人になりきろうと努力している伍兵衛を眺めて、なにくれと世話をやいてやっているうちに、心がかよいあって、一緒になったのである。

夫婦になってもう二十年になるが、喧嘩ひとつしたことがないのであった。

のみならず、この山中で、たった二人きりのくらしをつづけているのであった。

どちらが欠けても、一方は生きられぬのではないかと思われる。

主膳は、芋粥を摂りながら、

「こん――、異邦の土地でくらす勇気が、お前にはあるかな？」

と、問うた。

「なんと仰せられます？」

おこんは、いぶかしげに、ききかえした。

「お館様は、お屋敷を焼きはらわれたのじゃ。いよいよ、船で、日本を出て行かれるためにな」

伍兵衛が、告げた。

「まあ！」

おこんは、主膳を、まじまじと見まもって、

「まことでございますか、お館様？」
「うむ。もはや、それよりほかに、生きて行くすべがなくなったのでな」
主膳は、微笑してみせた。
「お館様、こんは、わたくしが行くところならば、どこへでも、ついて参りますぞ」
伍兵衛が、女房に代ってこたえた。
主膳は、伍兵衛の言葉に、うなずいた。
おこんは、必死の表情になり、
「お館様！　どこへ、お行きになるつもりでございますか？」
と、問うた。
「さあ、まだ、決めては居らぬ。いずれ、暑い島国をえらぶことになろうな」
「公儀の監視の目をかすめて、船出するのは、大変でございましょう」
「大変だよ。伍兵衛が行く上からには、お前も一緒に行くことになる。しかし、失敗すれば、一蓮託生、覚悟をしてもらわねばならぬ。良人とともに、天国へのぼれるならば、べつに悔いはせぬであろう」
「もとよりのことでございます。でも、どうぞ、ご成功をお祈り申し上げます」
おこんが、さがって行くと、伍兵衛が、
「財物をはこぶに一手を思いつきました」
と、云った。

「きこうか」
「酒樽に詰めて、禁裏御用の札をたてて、いったん、京へ運んではいかがでありましょうか？」
「ふむ。それは、妙案だな。禁裏御用の酒ならば、公儀隠密も、調べないであろうな」
主膳は、うなずいた。
「京から運ぶには、いくらでも手段はある。淀川を船で運べばよい。よし、きまった」
伍兵衛は、自分の計画を受け入れられて、うれしそうな表情になったが、すぐに、真剣なまなざしになり、
「軍船は、幾艘がほどになりましょうか？」
「十艘を考えて居る」
「それでは、かなりの人数を必要といたしましょう」
「うむ。はじめ、二千人ばかりと考えていたが、杉山道満老人に、一騎当千のつわものを、二千人も集められはせぬ、と反対された。せいぜい五百人も集められれば上々であろう、と云われたが……、五百人ではどうしても足りまい。……いま、道満老人は、大坂へ行って、大坂城を襲うて、一騒動を起し、その噂で、諸国から、再挙の機会が来るのを待っていた浪人衆が、集まって来るのではあるまいか、という計画をたてて居る。それが、成功すれば、千人の部下が持てることになろうが、さて、どうであろうかな」
「烏合の衆では、千人が一万人集まっても、なんともなりませぬゆえ、信頼すべきつわもの

が三百人も集まれば、よろしいかと存じます」

主従は、親しく、お互いの心を、いつわりなく打明けあっているうちに、午を迎えた。

主膳は、午後の一刻をねむった。

伍兵衛は、そのあいだに、財物を酒樽に詰めて京へ運ぶ計画を実行すべく、どこかへ出て行った。

夜に入って、戻って来た伍兵衛は、主膳と、囲炉裏をへだてて、対坐した。

「どうにか、見通しがつきましたゆえ、ご安堵を――」

「そうか。忝ない」

主膳は、酒を盛った木椀を、置いて、

「これで、人さえ集めれば、堺から船出できる！」

われら同志

大坂には――。

杉山道満は、長曽我部左門と春奈とともに、西郊の禅刹の離れにいた。

由比民部は、偶然、小悪党の手から救った八千代を、天満の楠不伝の家に預けておいて、その孤身を、どこかに置いている。

そして、堺には――。

織田重四郎が、さわとともに、苦之市が見つけてくれた浜の防風林の中の家に、仮ずまいしていた。

それぞれが、それぞれの志を抱いて、機会をうかがっているのであった。

年が明けて、すぐに一月あまりが過ぎた。

寒風がつよい、晴れた日の午後であった。

大坂城の巨大な城壁をのぞむ外濠ぎわに、編笠をかぶった浪人姿が、立った。

――曽て、ここには、尾張中村の水呑み百姓から身を起して、天下人――それも、太閤の称号まで得る出世をなしとげた豊臣秀吉が、君臨した。

編笠の蔭から、光る双眸は、鋭かった。

由比民部は、大坂の市中を、歩きまわるうちに、その殷賑ぶりに、心がふるい立って来るのをおぼえていたのである。

この大坂城の外濠ぎわにも、いくども、立った。

民部は、これまで、誰人にも――神屋主膳にさえも打明けたことのない大きな野望を、胸にひそめていた。

――太閤秀吉も人間ならば、この由比民部も人間だ。

民部は、おのれに云いきかせる。

――天下は、徳川家のものになっている。しかし、この権勢が、絶対不動のものとなって

いるかどうか、それは、神のみぞ知る。……かりに、もしかりに、ここに稀世の軍師が出現して、外様の雄藩を盟約させ、一斉に、事を起すならば、徳川家が倒れない、とは誰も断定できまい。

「おい――」

不意に、背後から、声をかけられて、民部は、われにかえった。

民部は、そこに、旧知の金井半兵衛の姿を見出した。

「半兵衛か」

「ははは、編笠をかぶって居っても、後ろ姿で、民部ということが、すぐ判ったぞ。大坂城を眺めて、何を思うて居る？　太閤秀吉のことか？」

半兵衛は、云いあてた。

二人は、三年前に別れていた。その時、すでに、半兵衛も民部も、お互いが、将来に大きな野望を抱いていることを、知っていたのである。

「民部、わしのところへ来ぬか？」

半兵衛は、さそった。

「どこに居る？」

「大坂随一の両替商の食客になって居る」

「お主が、用心棒とは――」

「ちがう。両替商は、後家だ。わしは、その後家に惚れられた」

半兵衛は、笑った。

「あさましゅう堕ちたか」

民部は、あざけった。

「堕ちたか堕ちぬか、現状を眺めてもらおう」

民部は、商家の食客になっているばかりか、その家の後家の情夫になっている半兵衛のあとに、ついて行くことに、誇りがゆるさなかったが、さりとて、目下のところ、べつに、為すべき仕事を持っているわけでなし、ひまをもてあましている身であったので、半兵衛が歩き出すと、なんとなく、肩をならべてしまった。

やがて――。

民部が案内されたのは、「津之国屋」という看板をかかげた大店の奥に、別棟になっている座敷であった。

その造りは、おどろくほど凝ったものであったし、屏風、掛物、壺、香炉その他の調度も、ただの品ではないように見受けられた。

民部は、見まわして、

「ふむ！」

と、思わず、うなった。

床わきの厨子棚には、南蛮時計が、秒を刻むしずかな音をたてているのであった。

「ここは――？」

「わしの居間だ」

半兵衛は、そうこたえて、机の上から、一冊の書物を把って、民部の膝へ投げた。

南蛮書であった。

もとより、民部には、皆目読めなかったが、挿入してある絵が、すべて、地図であるところから察して、地理学書のようであった。

「こんなものを、お主、学んで居るのか？」

「長崎で、オランダ人から、横文字を教えられた。尤も、わずか二年あまりだから、この本をすらすら読めるほどの力は持って居らぬ。……大店の女房にやしなわれながら、異邦の地理の本を読んでいるくらしは、わるくない」

「……」

民部は、この金井半兵衛という男の、端倪すべからざる図太い性格と知能を、知っていた。

「いったい、何をもくろんで居るのだ？」

「まだ、自分でも、判らんな。判って居ることは、この日本という島国が、小指ほどの狭隘であるということだな。こんな小さな島国の中で、戦国百年の間、彼処此処で、城を取ったり取られたりしていたとは、人間という奴は、あさましいものだ、と思う。——ま、そんなことは、どうでもよい。お互いに、このまま、世に埋もれているわけにいかん。そろそろ、大志を行うために、踏み出す秋か」

半兵衛は、民部をあおるように、云った。

「大志を行う、というが、お主自身、まだ何をしていいか、判って居らぬ、と云ったではないか」

「大志は、きまっている。ただ、その大志を行うために、何を為すべきかが、判って居らぬのだ」

「大志とは？」

「お主自身の胸に、きけ。想うところはひとつだ」

半兵衛は、笑った。

その時、襖が開いた。

茶菓子を持って入って来たのは、三十前後の、おっとりとした面立の女であった。

「ようこそ、お越しなされました」

挨拶する挙措も、おっとりとしていた。

民部は、この大店の後家のふっくらとした色香に、圧倒されるものをおぼえた。

こんなにゆたかな、あたたかい雰囲気をもった女に、民部はまだ、接したことがなかった。

「ごゆるりとなさいませ」

そう云いのこして、後家が出て行く姿を、民部は、茫然と見送った。

「ははは……」

半兵衛が、高笑いしたので、民部は、はっと、われにかえった。

「民部、お主は、まだ、女の味を知らぬようだな」

「何を申す！」

「べつに、うろたえずともよいぞ。お主の年齢で女の味を知らぬのは、あたりまえだ。……どうだ、あの後家を、今夜、抱いてみるか？」

「な、なに?!」

民部は、愕然となった。

「わしがたのめば、必ず、承知するぞ。……抱いてみとうはないか？」

「ばかな！　お主を、亭主代りにしている女ではないか。お主に、惚れているからこそ、こうした立派な座敷を与えて、気ままにくらさせているのであろう。……売笑婦のまねをするはずがあるか」

「それが、わしが説ききかせると、女子という奴は、呪法にかけられたように、従うのだな」

民部は、ぬけぬけと、そう云いはなつ半兵衛に、憎悪さえおぼえた。

「お主のような冷血漢は、知らぬぞ！」

「そういう民部、お主も、性根は、わしよりも、冷たくはないか」

「……」

「お互いに、恃むのは、おのれ一人の能力だ。他人の援けなど、期待して生きて行ける世の中ではないのだ。……そうなれば、おのれの能力を、あらゆる場合に、試してみたくなろう、というものではないか。女を自由にあやつってみるのも、これも、ひとつの修業であろうが

な」

「……む」

民部は、半兵衛の言葉を、みとめざるを得なかった。

「よいか、待って居れ。後家を、説いて来てやる」

半兵衛は、さっさと、立って、出て行った。

一人になった民部は、あらためて、半兵衛と自分を、比べてみないではいられなかった。

三年前――。

袂をわかって、左右に別れる時は、むしろ、民部は、気概に於て、半兵衛にまさっている、という自負があった。いや、内心では、半兵衛の、どこやら下俗の性根を、軽蔑していたのである。

幾年かのち、めぐり会った時は、半兵衛と自分との距離はひらいているであろう、と想像したものであった。

半兵衛は、面つきまでいやしくなっているのではあるまいか、などと思ったことである。

ところが――。

この予感は、みごとに、裏切られた。

民部は、半兵衛が、自分よりも一歩も二歩も、いや、十歩の彼方に進んでいるのを、みとめざるを得なかった。

半兵衛は、すでに、浮世の表裏を知りつくした人物にのしあがっているようであった。そ

れにひきかえて、自分は、大志を胸にひそめたまま、いまだ一介の浮浪の青二才でしかないではないか。

襖を開けて、半兵衛が、戻って来た。

「後家は、承知したぞ」

にやにやして、告げた。

「但し、貸すのは、今夜一夜だけだ」

「こちらが、たのんだわけではない。お主が勝手にきめたことだ」

「そう肩肱を張るな。女子を抱くには、もっと、気分をゆったりとすることだ。ははは……」

半兵衛は、声をたてて笑った。

民部は、おちつかなくなった。

その様子を、半兵衛は、わざと面白がるふうに、腰をおちつけて、

「民部、まさか、お主、女を知らんわけではあるまいな？」

「もとより、知って居る」

「但し、数を知るまい」

「数を知らねば、女を知ったことにならぬのか？」

「そうムキになるな。女にも、さまざまあって、知れば知るほど、興味ぶかくなる」

「わしは、一人の女を愛すれば足りると思って居る」

民部は、云った。

「わしは、ちがうぞ。一人よりも十人、十人よりも百人、百人よりも千人の女を知る方が、男の生甲斐と思って居る」

「お主には、それが、できるようだな。……ところで、あの後家が、どうして、承知したのだ？」

「女子という奴は、おのれが納得し、絶対に秘密が保たれるならば、いかなる破廉恥な振舞いでもするものだ。女の方が、男よりも、本能の力が強いことを知れば、おのずから説得のしかたもあろうというものだ」

そう云われても、民部には、合点がいかないことであった。

やがて——。

夕餉の時刻が来たが、その席には、後家自身が現われて、にこやかに給仕した。

半兵衛に説得されて、民部にからだを与えることを承諾しているはずであったが、その態度からは、あさましい行為を後刻にひかえた者の気ぶりなど、みじんもうかがえなかった。

民部だけが、こだわって、身も心もかたくしているばかりであった。

半兵衛は、愉快そうに、しゃべりたてていたし、後家は、その話をおもしろそうにきいて、笑いつづけていた。

膳が下げられ、後家もまた姿を消すと、半兵衛は、

「民部、明日からどうするのだ？」

と、たずねた。

「どうするとは？」
「いつまでも、流浪をつづけては居れまい」
そう云われたとたん、民部は、脳裡に、ひとつの企てを、ひらめかせた。
「半兵衛――。お主は、以前はよく、乱世であれば、軍師になって、縦横の活躍をみせてくれるのだが、と申していたな？」
「ああ、云ったぞ」
「いま、百人の浪人を集めれば、大坂城を襲うて、十日や二十日、占領することは、できるであろう？」
「造作もないことだが、そんなことをやっても、何もなるまい。いずれ、幕府の軍勢が、どっと攻め寄せて来れば、ひとたまりもないではないか」
「いや、目的は、ほかにある。……いま、大坂城には、改易にした西国大名や、とりつぶした大商人からまきあげた金が、金蔵にたくわえられて居る。これを奪うのだ」
「ふむ！」
「幕府隠密奉行が、城内を支配して居る模様であるし、これは、相当の利け者らしい。しかし、お主が、智略をふるえば、金蔵を破って、奪取することは、さまでの難事ではなかろう。……奪ったならば、さっとひきあげて、浪人勢を八方へ散らしてしまい、金を何処かへ匿し、再び、孤身にかえって、何食わぬ顔で、市井でくらす。幾年か経て、秋いたらば、こんどこそ、挙兵して、江戸城を焼きうち、将軍家を討って取る」

「大層な計画だな」
「男子の本懐であろう」
「たしかに……。実現不可能とは、云わぬ。お主が、この三年間に、胸であたためた大志とは、それか？」
「半兵衛、真剣に相談に乗ってくれい」
「そうさな。いま、わしに、云えることは、お互いが、若すぎる、ということだ」
「若いのが、どうしていかぬ？」
「秀れた家来を集め、これを心服させるには、こちらに、それ相応の貫禄というものがなければならぬ。目下のお主にも、わしにも、貫禄というやつは、そなわって居らぬ。吹けば飛ぶような青二才でしかない」
「……」
「あせることはない。まあ、待て。……それよりも、そろそろ、後家の居間へ忍ぶ時刻だぞ」
半兵衛にうながされて、民部は、どきりとした。
重い責務を負わされたような気分であった。
「わしは、あの後家を……求めては、居らぬ」
「痩我慢を張るな。わしが、すすめて居るのだ。抱いて、悔いはないぞ」
「……」
「怯気づくようでは、徳川の天下をくつがえすことなど及びもつかぬぞ」

「い、いや！」
民部は、立ち上った。
半兵衛が、後家の居間へ忍んで行く手順を教えた。
民部は、廊下へ出た。
歩き出そうとして、ふと、
——半兵衛に、からかわれているのではあるまいか？
疑惑が起った。
しかし——。
もはや、中止することはできなかった。
——半兵衛が、もし、わしをからかって居るのであれば、あとで、決闘になろう。
民部は、剣に於ては、半兵衛に、劣るとは思わなかった。
肚がきまると、民部は、まっすぐに、後家の居間に向って、進んだ。
そして、その前に立ちどまった時には、けものが獲物を狙うに似た闘志さえも、わかしていた。
「ごめん——」
杉戸を開けた。
居間は、暗くしてあった。
灯心一本のあかりが、ほのかに、延べた夜具を、浮きあげている。

しかし、その中に、人は寝ていなかった。
民部は、はぐらかされたような気分で、枕屏風わきに、坐った。
と——。
屏風のむこう側から、
「どうぞ、おさきに、おやすみ下さいませ」
と、声が、かかった。
はっとなって、そこをのぞこうとしかけて、民部は、あわてて、止めた。
しかし、民部は、黙っておとなしく、さきに寝るのは、なんとなく、気に食わなかった。
「内儀に、きいておきたいことがある」
「なんでございましょう？」
「そなたは、金井半兵衛と、夫婦同様のくらしをしているのであろう。にも拘らず、わしと、閨をともにすることが、よくできるものだ。どういう料簡であろうか？」
「それは、半兵衛殿から、おきき下さいませ」
「そなたの口から、ききたい」
「おゆるし下さいませ」
後家は、こたえるのをこばんだ。
——勝手にせい！
民部は、腹を立てると、衣服をぬぎすてて、牀に横たわった。

それを、待って、後家は、屏風の蔭から、姿をあらわした。
桃山時代の御殿女中の寝召は、こうであったろうとおぼしい華美な花模様をまとっていた。
民部は、チラと一瞥をくれてから、あわてて、目蓋を閉じた。
後家は、民部がぬぎすてた衣服をたたんでおいて、いったん、居間を出て行って、しばらく、もどって来なかった。
民部にとって、待つ時間は、長かった。
後家は、もどって来ると、
「お待たせ申しました」
と、ことわって、するりと、牀へ入って来た。
「わからぬ！」
民部は、胸の動悸を抑えるために、云った。
「なにがでございますか？」
「そなたと半兵衛の心が、だ」
「まだ、そんなことをお考えなのでございますか」
後家は、身をすり寄せて来た。

せわしい小鳥のさえずりで、民部は、目をさました。
すでに、後家は、となりにはいなかった。

いつ起き出て行ったのかも知らず、民部は、ねむっていたのである。
雨戸の隙間から縞になってさし入る朝陽を仰ぎながら、民部は、しばらくのあいだ、痴呆のように、ぼんやりとしていた。
女体の匂いは、なお、まだ、牀の中に、ぬくもりとともに、こもっていた。
——情痴に溺れる、とはこのことか。
民部は、つぶやいた。
これほど強烈な、しかも、甘美な官能の快楽を、民部は、はじめて経験した。
民部は、これまで、男が、女色に溺れて、身をほろぼす、という話をきいて、
——なんという愚かな男か！
と、さげすんでいたのである。
ところが、昨夜を境にして、民部の人生観は、かなり訂正されることになった。
これほど、五体をしびれさせる淫楽ならば、これに迷うて、われを忘れてしまうのも、やむなき仕儀であろう、と思わざるを得なかった。
のろのろと起き上った民部は、もの倦いあくびをするおのれを、微かに自嘲した。
衣服をつけて、縁側に出ると、どこか近くで、鋭い懸声とともに、木太刀が宙を截る音がひびいて来た。
——半兵衛だな。
民部は、庭へ降りた。

木戸をくぐると、そこは、裏手の空地になっていた。
金井半兵衛は、片肌ぬぎになって、素振りをしていた。
見事な技であった。
民部は、黙って見まもるうちに、再び、この男に対するおそれをおぼえた。
——あの豊満な女体を、夜毎抱きながら、こいつは、いささかも、情痴に溺れては居らぬ。のみならず、平然として、自分に、女を貸し与えてくれたのである。
もし、立場を代えて、自分が半兵衛であったならば、はたして、女を貸したであろうか。決して、貸しはしないであろう。
やはり、三年の歳月の間に、半兵衛は、自分を、百歩もひきはなす成長を遂げていたのだ。
びゅっ、びゅっと、宙を截る木太刀の音をききつつ、民部は、半兵衛に対して、憎悪と羨望さえおぼえた。
やがて、素振りを終えた半兵衛は、ゆっくりと、民部の前へ寄って来ると、
「憑きものが、落ちたような顔をして居るな」
と、笑った。
「お主は、あの後家を愛しては居らぬのか？」
民部は、たずねた。
「愛して居る？　ははは……、何を云う。あれは、遊女のかわりにして居るにすぎぬ」
半兵衛は、平然として、こたえた。

「遊女の代りにして居るのだと！」
民部は、唖然として、半兵衛を眺めた。
「ははは……、民部、お主は、後家に惚れたのではないか」
半兵衛に、ずばりと云いあてられて、民部は、狼狽した。
「な、なにを云う！　ばかを申せ！」
思わず、大声を発した。
「そう慍るな。つまり、女体の味をおぼえたのではないか、ということだ」
「おぼえないとは申さぬ。しかし、お主の女を欲しいとは思わぬ」
「いや、もし欲しければ、遠慮するな。くれてやる。わしは、そろそろ、この家に食客になっているのに、あきた」
「半兵衛！」
民部は、にらみ据えた。
「なんだ？」
「お主は、人間の尊厳ということを、考えたことはないのか」
「藪から棒に、何を云いたいのだ？」
「お主の行状を眺めていると、おのれ自身のみを大切にして、他の人間を、虫けらとしか見ていないように思える」
「民部、人生で最も大切なのは、自我のみだぞ。おのれ以外に恃むべき、信ずべきものが、

ほかにあるか」

「ちがう！　人間と人間が寄り集まってつくる社会に、他人に対する信義なくして、どうして、正しい人生が送れようか」

「青いな、民部！」

「なに！」

民部は、気色ばんだ。

「まあ、よい」

「よくはない！」

「そう、いちいち、つッかかるな。それよりも、朝飯にしよう。腹が空いた」

半兵衛は、さっさと歩き出した。

民部は、その後ろ姿をにらみつけたが、同時に、半兵衛という男の魅力にも惹かれていることも、みとめざるを得なかった。

朝餉の座には、後家が、姿をみせた。

何事もなかったように、にこやかに給仕する女を眺めて、民部は、いささか途方にくれる思いになった。

なんというふしぎな性を持っているものか、と首をひねらざるを得なかった。

昨夜のことは、夢でしかなかったのか？

こうしてなごやかな朝餉にむかっていると、そうとしか考えられなかった。

朝食がおわって、二人になると、民部は、

「半兵衛、江戸へ行こうではないか」

と、唐突に云い出した。

「大坂城を乗っ取るのではないのか？」

半兵衛は、笑った。

「出府して、徳川幕府の権威のほどを、この目で眺める必要があるのだ」

「うむ。それも、わるくはない」

この若い浪人者二人は、やはり、心と心の通じ合う情誼を持っていた。

後年――慶安の異変を起した時も、由比正雪となった民部を、たすけて、異常なまでに尽力して、その生死を倶にしたのは、金井半兵衛であった。

堺の空

「うるせえな！　朝っぱらから、ひっかき鳴らしやがって――」

むくっと起き上った猿助が、出窓から、往還へ、首をつき出して、

「ばかやろう！　やくたいもねえ蛇踊りなんぞ、しやがるねえ！」

と、呶鳴りつけた。

往還には、数人の唐人服をつけた男が、巨きな張子の竜をかついで、踊りまわっていた。そのうしろで、金鼓やら胡弓やらが鳴らされていた。

これは、堺の町はずれの空地に小屋がけした唐人芝居の宣伝なのであった。

長崎からやって来た一座で、芝居のほかに、軽業やら手妻やらを観せて、人気を呼んでいた。尤も、唐人は二三人で、あとは、日本人ばかりであったが——。

「なにを、いらいらしとるんだ？」

寝そべって、いかがわしい絵草紙をひらいている芋兵衛が、猿助に、きいた。

ここは、ごく最近に発展した曲輪であった。曲輪といっても、京の島原や大坂の新町などのような遊廓をまねているわけではなく、それぞれの店が三四人ずつ女を置き、それに、御殿女中とか町方女房とか百姓娘などの扮装をさせている新しいかたちの遊里であった。

頭をまるめさせて歌比丘尼の恰好をさせている店もあった。

そして、それぞれの店が、唐人館を模倣したり、御殿風にしつらえたり、あるいはオランダ屋敷を猿まねしたりして、趣向をこらしていた。

いわば、ゲテモノ趣味であったが、これが、大いに当って、大坂の大商人たちも、よくかよって来るようになっていた。

猿助と芋兵衛は、ここの常連であった。

「いらいらもすらあ。……十日も流連けすりゃ、女にも、酒にも、あきらあ」

「うん。わしも、あきた」

「いったい、苦之市の野郎、何をしてやがんだ。織田重四郎の旦那を、あの家へかくしたきり——それっきりじゃねえか。大坂城の金蔵破りは、どうなっているんだ？」

「おめえ、もう一度、大坂城へ忍び込んで、生きるか死ぬかの、綱渡りをやりてえのか？」

「べつにやりたかァねえや。しかし、よう——大坂城の金蔵を破る、といったんきめた以上は、やっつけるのが、男の意気地というものじゃねえか。隠密奉行って奴を、ぶっ仆さなけりゃ、幻夢十郎次の爺さんの霊も、うかばれめえ、というものだろう」

「そりゃ、そうだの。……織田の旦那は、何を考えていなさるのか」

「さあって、あの女子と一緒にくらしているうちに、腑抜けになったんじゃあるめえな」

「まさか——」

「いや、人間てえ奴は、ぬくぬくとしたくらしをして、毎夜、女を抱いていると、腑抜けになるもんだ」

猿助と芋兵衛は、いつの間にか、大志を抱く壮士の気持になっていたようである。

二人は、織田重四郎が、再び起ち上るのを、毎日待っていたのである。

この前——。

猿助は、織田重四郎の前で、同志たる誓いをたてていた。

その気持は、真剣であった。

はじめは、報酬めあてに働いたのだが、大坂城内で死地をくぐり抜けてから、猿助も芋兵衛も、人間が志をもって働くことの気持のよさをさとったのである。

だからこそ、猿助は、重四郎に向って、同志の誓いをたてたのである。
ところが――。
それきり、重四郎の方は、動こうとせぬのだ。
「芋兵衛――」
「うん」
「もう一度、織田の旦那をたずねようじゃねえか。なにをぐずぐずと、腑抜けになっているんだ、とひとつ説法を、こましてくれよう」
「あちらは、あちらで、思案があって、じっとしていられるのだと思うがのう」
「いいや、もう我慢ならねえ。おい、起きろ！」
猿助は、叫んだ。
「猿助、お前も、変ったのう」
芋兵衛は、のろのろと起き上って、首を振った。
やがて――。
二人は、曲輪を出た。
すぐに、松並木の街道になり、左右はひろい畠地であった。
遠くから、馬蹄の音がひびいて来た。
顔をあげた猿助は、
「芋兵衛――、役人らしい連中が来るぜ」

と、険しい目つきになった。
「べつに、こっちは、あやしまれる風体はして居らん」
「そりゃ、そうだが……」
大坂城の公儀隠密や守兵を敵にまわして以来、猿助は、警戒心がつよくなっていた。
騎馬の群れは、みるみる近づいて来た。
二人は、並木のわきへ、身をさけた。
六騎が、目の前を駆け過ぎた。
「どう見た、芋兵衛――？」
見送る猿助の表情は、ひきしまっていた。
「どう見たとは？」
「ありゃ、ただの役人じゃねえ。どうも、隠密らしい」
「そうかの」
「おめえは、カンがにぶいぞ。あいつらの紋は、大坂役人には、ないものだ。……あいつら、江戸から来た連中だ」
「わしらに関係ねえだろう」
「どうかな？」
猿助は、首をひねった。
それから、ものの三町も行かぬうちに、一人の行商人ていの、大きな荷を背負った男に、

出会うた。

笠で顔をかくして、いそぎ足に来ていたが、ちらと、猿助たちを一瞥するや、

「お――」

と、足を停めた。

その声に、視線を向けた猿助は、

「あ――おめえさんは！」

と、眉字をひそめた。

笠の下の顔は、田野村丹三郎のものであった。

田野村丹三郎は、数年前までは、野盗の群れにいた。

その頃、猿助、芋兵衛とは顔見知りになっていた。

「猿か！」

「丹三さん、どうしてそんな恰好をしているんだね？」

「うむ。……実は、追われている。お前らは、ここを駆けて行った騎馬団に、出会わなんだか？」

「会うたぜ」

「まずい！　木戸をかためるつもりだな」

丹三郎は、鋭い眼光を、堺の町の方へ送った。

「丹三さん、ありゃ、公儀隠密じゃありませんかい？」

猿助が、たずねた。

「そうだ」

「どうして、公儀隠密などに追われていなさる？」

「くわしいことは、話して居れぬ。……お主らに、たのみがある」

「どんなことを？」

「わしは、かくまわねばならぬ者を三人、つれているのだ。若い女子二人と少年一人――、むこうの百姓家に、ひそませて居るが、わしが、このあたりまで、つれて来たことを、すでに、公儀隠密どもは、かぎつけた。……かくれ場所を、ほかに、えらばねばならぬ。お主らに、たのめぬか？」

丹三郎としては、みすみす、堺の町をむこうに眺めながら、ここで、公儀隠密団に、襲撃されるのは、あまりにも無念であった。

「丹三さんは、堺の町では、いくらでも、顔がきくだろう。その三人を、商家の者のように、姿を変えさせて、町へつれ込めばいいじゃないか」

「それが、若い女子の一人が、目立つのだ。異人なのだ」

「異人?!」

「そうだ。オランダの娘だ」

「そいつは、まずいな」

「お主らの才覚でなんとかならぬか？　恩にきる。礼もする」

そう云われて、猿助と芋兵衛は、顔を見合せた。
「百両、出そう！」
丹三郎は、云った。
「百両！　よほど、大切な預かりものらしいな」
「そうだ。わしの生命に代えても、守らねばならぬのだ。たのむ！」
丹三郎は、頭を下げた。
「よし！」
猿助が、うなずいた。
「おれたちが、力を貸そう」
「忝ない！　一日だけ、どこかに、かくまってくれれば、わしが、迎えに来る」
「引受けた」
「おい、猿――」
芋兵衛が、猿助を小突いた。
「安受けあいをして、大丈夫か？」
「まかせておけ！」
猿助は、にやりとした。
「うまいかくし場所を思いついたんだ」
うまくやってのけた、とほめてやるべきであった。

それから一刻ばかりのちのことであった。
猿助と芋兵衛は、ともに、大きな葛籠を背負い、折笠をかぶった少女をさきに立てて、かれらが今朝がたまで流連けた遊廓へ入って行ったのである。
二人の風体は、一見して、遊里の六尺と判るものに変っていた。
どこかへ、傾城の衣裳を取りに行った、と見せかけたのである。
案内役のように思われる少女は、実は、数馬が化けていた。
堺の市中に入る木戸は、丹三郎が云ったように、公儀隠密の命令によって閉じられていたが、
「へえ、柳の曲輪の者どもでございます」
と、猿助が、ぺこぺこと頭を下げると、べつに、葛籠の中をあらためようともせずに、通してくれた。
「お主の猿知恵も、相当なものだ」
芋兵衛は、感服した。
「おれは、猿は猿でも、太閤秀吉公のご落胤かも知れんぞ」
猿助は、にやにやしてみせた。
やがて、二人が、葛籠を持ち込んだのは、「万福楼」という店であった。
あるじの居間へ、どさりと葛籠を置くと、二人は、顔の汗をぬぐって、顔見合せて高笑いした。

あるじが、すぐに、もどって来て、眉宇をひそめて、
「どうしたのだ、お主ら？」
と、問うた。
このあるじ徳右衛門というのも、実は、前身は、海賊で、苦之市、猿助、芋兵衛らをかたらって、瀬戸内海を荒したことがある。
大名の持船を襲って、女を犯し、金品を掠めたことも、二度や三度ではなかった。
いまでは、口をぬぐって、遊里の顔役におさまっているが、もとより前非を悔いて、殊勝に、町人になっている次第ではなかった。
まだ、海賊船を三艘も持っていて、乾分どもに、瀬戸内海を荒させているのである。
いわば、女郎屋のあるじは、世間の目をごまかす方便であった。
徳右衛門は、しかし、剛腹で、さっぱりとした気象の持主であった。
「なんだ、こりゃ？」
徳右衛門は、猿助たちと葛籠を見くらべた。
「なんだ、と思いなさるね？」
「まさか、お主らが、このわしに、傾城の衣裳を売りつけに来るとは思わんが……」
「まあ、ひとつ、見分してもらいとうござる」
猿助は、芋兵衛に、目くばせした。
芋兵衛は、葛籠の蓋をあけると、

「どうも、ご窮屈さまでござった。さ、出て下され」
と、うながした。
徳右衛門は、それらの中から、起ち上った二人の若い女子を見出して、「ほう！」と声をあげた。
徳右衛門が、唖然としたのも、むりはなかった。
一人は、金髪、碧い眸子をもった異邦の娘であり、もう一人は、あきらかに武家の娘で、匂うような気品をそなえていたのである。
「どういうのだ、こりゃ？」
「誤解しないで、頂きとうござるな」
猿助は、小鼻をひくめかして、云った。
「この二人の美女を、万福楼へ、売りつけに参ったのではござらぬ」
「そりゃ、そうだろう。これほどの美しい娘御を、こんな堺の新開地へ、売りつけるほど、お主らの根性がくさって居るとは思わぬが……」
「つまり、仔細あって、かくまって頂きとうござりたてまつる」
「かくまう？」
「実は、公儀隠密衆に追われている不幸なお女中がたでござる」
「成程――。切支丹門徒か」
徳右衛門は、合点した。

「しかし、いくらお主らのたのみでも、ただかくまってくれ、と頭を下げられただけで、諾(うん)とうなずくわけにいかぬ。いや、べつに、切支丹門徒をかくまったことが露見した時のおそろしさにおののくわけではないぞ。……かくまうには、それだけの筋道をふんだたのみがあって、こちらが納得し、肚(はら)をきめた上でのことだ。そうだろうじゃないかね？」

「ご尤(もっと)も！」

猿助は、大きく首を二三度振ってみせて、

「お館(やかた)、きいてもらいましょうぜ」

と、説明しはじめた。

「ちょっと、待った」

徳右衛門は、芋兵衛に、廊下や庭をのぞかせ、誰もきいていないことをたしかめさせておいて、

「きこう」

と、うながした。

「お館は、伊丹に平家館という旧(ふる)い屋敷があったのを、ご存じですかい？」

「知らないでか。この堺にも、平家館の倉が十もあるわさ」

「このお女中衆は、その平家館にかくまわれていなさったので……」

「ほう！」

徳右衛門は、あらためて、静香とアンナを見やった。

猿助は、丹三郎からきかされた話を、のこらず、話した。

「成程――そうであったのか」

徳右衛門は、沈痛な面持になって、腕を組んだ。

「平家館が、公儀隠密に夜襲されて、焼きはらわれたとはのう……。公儀は、いったい、なにを血迷って居るのか？　平家館が、たくわえた南蛮金をまきあげようというこんたんであろうが、せいぜい、一豪族の交易したもうけなど、公儀からみれば、たかの知れた金であろうに――」

首をかしげていたが、

「それとも、隠密を支配する地位にいる人物が、私腹をこやそうとたくらんだことか？」

猿助は、徳右衛門のその独語をきいて、

「大坂城に、隠密奉行てえのがいることを、お館は、ご承知か？」

と、問うた。

「ほう、そんな役職の人物が、いるのか？」

徳右衛門にとっては、初耳であった。

「そやつのしわざでござるて、平家館を焼いたのは――」

「そうか。いや、その話は、あとできこう」

徳右衛門は、静香とアンナに、

「そなたがたをかくまうことは、このおやじが、たしかにひき受けましたぞ」

と、安心させた。

「やれやれ、これで、ひと安心だ。お館、忝のうござる」

猿助は、あらためて、徳右衛門に礼をのべてから、

「さて、娘御二人は、ここに預かってもらったが、あのわっぱは、ここに置いてゆくわけにはいかんな」

と、芋兵衛を、かえり見た。

「そうだの」

芋兵衛も、首をひねった。

静香は、ここが遊廓であることを、廊下を行き交う派手な衣裳の女たちを眺めて、さとっていたので、かすかな嫌悪感にかられていた。

なろうことなら、どこか、ほかの場所に、かくまってもらいたかった。しかし、いまは、そんなわがままは許されなかった。

せめて、弟の数馬だけは、ここに、とどめたくはない、と思っていたので、猿助たちの思慮は、ありがたかった。

「どうぞ、おねがい申します」

静香は、たのんだ。

「芋兵衛、あそこは、どうだ？　苦之市がさがしたあそこよ」

猿助が、云った。

「うん、あそこなら――」

芋兵衛は、うなずいた。

織田重四郎のかくれ家のことであった。

もし、その名が口にされていたならば、静香はとび立つようなよろこびで、顔をかがやかしたに相違ない。

猿助たちは、織田重四郎と、この娘たちとは、全くなんの関係もない、と考えていたので、その名を口にするのを、はばかったのである。

「よし、きまった！」

猿助は、膝を打ってから、静香にむかい、

「お嬢さん、ここは、ごらんの通りいかがわしい場所ですが、このあるじは、ただのおっさんじゃないのでござるゆえ、安心して、厄介になりなさるといい」

と、云った。

「ご厚情、忘れませぬ」

静香は、心から礼をのべた。

やがて、猿助と芋兵衛は、町人の息子の装いにさせた数馬をつれて、廓を出た。

べつに怪しまれることもなく、木戸を抜けてから、猿助は、数馬の肩をたたき、

「小さなうちから、苦労をなさるのう。さむらいの子に生れた因果じゃて」

と、云った。

数馬は、こたえず、まっすぐに前方を見ながら、歩いた。

織田重四郎にとって、生涯二度とは、望めぬであろうような、平穏無事な日々が、つづいていた。

朝はやく、小舟をこぎ出して、沖で釣りをして、陽が高く昇った頃合、その獲物を携げて、戻って来る。午後は、なんとなく、すごして夕餉を迎える。

昏れがた、木太刀を携げて、松林の中に立ち、素振りを千回する。

こうした日課であった。

さわは——さわもまた、生れてはじめて、あじわう平和な家庭生活であった。そのよろこびで、さわは、女の幸せとは何か、ということを知ったようであった。

夕餉で、向いあった時、

「わたしは、女が、人の妻になる幸せを、はじめて、知りました」

と、しみじみと、もらしたことであった。

今日も——。

黄昏のしずかなひとときを、重四郎とさわは、食膳を中に、さしむかっていた。

さわは、給仕の盆を、膝に置いて、重四郎を見まもりながら、

「わたし対手に、毎日おすごしなされて、お退屈ではありませんか？」

と、たずねた。

重四郎は、微笑をかえした。

「女性が、しだいに、美しく、色香をまして来るのを眺めるのは、愉しみなものだ」

「まあ！」

さわは、微かに頬をそめた。

「貴方様が、はじめて、お世辞を申されました」

「いや、世辞ではない。そなたは、知りあった時から、正直を申して、美しかったが、それが……今日この頃は、なんともいえぬやわらかな色香を湛えて居る。この織田重四郎が、しだいに、とまどうて来た」

「ご冗談ばかり申されます」

「本音を申しているのだ。……かくしても、はじまらぬゆえ、白状しておこう。わたしは、白河館の娘を——あの静香を、妻にしたい、と考えつづけて来た。その気持は、いまも、心にある。惚れたのだ。……にも拘らず、そなたと、こうして、二人きりで、しずかなくらしをつづけているうちに、そなたという女性にも、惹かれるようになって来た。男という奴は、勝手なものだ」

重四郎は、なかば自嘲の笑いを示した。

その言葉をきいているうちに、さわは、真剣な面持になって来た。

「わたしを、おからかいになっているのでは、ないのでございましょうね？」

「からかう道理がない」

「わたしは……」
さわは、にわかに昂ぶった動悸で、声がつづかず、いったん、肩で喘いでから、
「わたしは、貴方様を、お慕いするようになりました」
「……」
「どうせ、このような流浪の女でありますゆえ、人の妻になるのぞみなど、持ちませぬ。たぶん、このくらしが、わたしの生涯で、唯ひとつの愉しい家庭を持った思い出になりましょう」
さわの双眸に、炎がきらめくのを、重四郎は、みとめた。
「織田様！」
さわは、思いきって、云った。
「おのぞみなら……、わたしを、お抱きなさいませ」
「……」
重四郎は、さわを、黙って、見かえした。
その必死な面持に、女の哀しさをみとめて、重四郎は、微かな胸の疼きをおぼえた。
「そなたを抱くことは、そなたを幸せにしてやることにはならぬ」
「いいえ！」
さわは、かぶりを振った。
「わたしは、今日が幸せであればよろしいのです。明日は、わが身が亡びても、すこしも悔いませぬ。そのようにして、生きて参りましたし、明日からも、そうして生きて行くと存じます」
重四郎は、うなずいた。
さわは、重四郎の片手がのばされると、それに応えて、身を傾けた。
さわのからだは、ふつうの娘とはちがい、きたえられて、ひきしまり、重かった。
重四郎は、そのからだをかかえた瞬間、ふっと、悔いた。
——おれは、まちがったことをしている！
おのれを叱る声があった。
しかし、もう、さわは、身も心も、重四郎にあずけて、うっとりと目蓋をとじている。
重四郎は、さわをかかえあげて、寝室にあてている奥の部屋へ入らねばならなくなった。
脳裡にうかぶ静香のおもかげを、ふりはらって、重四郎は、
——この女を、愛そう！
と、思った。
その折であった。
庭にはいって来る人の気配で、重四郎はさわをはなした。
さわは、あわてて、台所の方へ去った。
「織田様——。猿でござる」
声をかけてから、猿助は上って来て、

「ご機嫌よろしゅう……」
と、挨拶した。
重四郎は、この男の出現で、さわと契る機会が、遠くへ去ったのを知った。
「実は、折入ってお願いの筋があって、罷り出ました」
「何であろう？」
「人を一人、預かって頂きとうござる」
「どんな人物だ？」
「子供でござる」
「子供？」
「さむらいの子でござる。ひょんなことから、かばってやらねばならなくなり、かくまい場所を考えた挙句、ここに預かって頂ければ、と思いたったのでござる」
「よかろう」
重四郎は、承知した。
――これで、おれとさわのあいだは、何事もなく、すぎることになる。
重四郎は、内心、ほっとした気持であった。
猿助は、縁側へ出て、芋兵衛を呼んだ。
重四郎は、芋兵衛がともなった少年を、一瞥するや、
「数馬！」

と、呼んだ。
「あ！」
数馬は、縁側へ、とびあがって来た。
肉親にめぐり会ったような悦びで、数馬は、息をはずませて、
「小父さま！」
と、呼びかけつつ、両手をつかえた。
「なんだ、ご存じでござったのかい」
猿助は、あきれた。
「この少年は、わたしの弟のようなものだ」
重四郎は、笑ってこたえてから、数馬に、
「姉者はどうした？」
と、たずねた。
「織田様、そうと判っていれば、姉様の方も、ここへともなうのでござった」
猿助は、頭をかきながら、仔細を語った。
「そうであったか」
重四郎は、うなずいたが、
「静香の方は、その万福楼とやらに世話になっているのがよいかも知れぬ」
と、云った。

さわと、静香と一緒にくらすことは、なんとなくはばかられたのである。
重四郎は、姉弟が、いままで、どこにかくれていたか、数馬に問うた。
数馬は、伊丹の平家館にかくまわれていたことを語った。
「神屋主膳が、敵ではないことが、判ったのだな」
「はい」
「敵は、大坂城内にいる公儀隠密奉行赤松丹波であることが、明白になった」
「はい！」
「これは、神屋主膳を討つよりもむつかしい人物だ。機会を、辛抱づよく、待たねばなるまい」
「小父さま！」
数馬は、じっと、重四郎を仰ぎ見ながら、
「嘉七は——じいやは、どのようにして亡くなりましたか？」
と、きいた。
この質問にこたえるのは、重四郎にとって、気が重かった。
しばらく沈黙を置いてから、
「嘉七殿は、忍者幻夢十郎次として、見事に相果てた」
にがい重いものを押し出すように、こたえた。
「……」

数馬は、まばたきもせずに、重四郎を見つめている。
「嘉七殿は、自分に対して、人を殺すことを禁じて居った。もし、人を殺すことができていたならば、自身の生命も、たすかっていたであろう」
数馬は、俯向いた。
泪はあふれたが、嗚咽すまいと、必死にこらえるさまが、いじらしかった。
「数馬！　男だぞ。泣くな」
「は、はい——」
「男は、さまざまの不幸、不運をのりこえて、たくましくなるのだ。嘉七も、泣いてくれるな、と云っているに相違ない」

堺の新開地の廓では——。
静香とアンナは、それぞれ、「万福楼」の奥の別棟に、ひと部屋ずつ、与えられていた。
ひっそりと、坐りつづけながら、にぎやかな三絃の音と、歌声をきくともなしにきいている静香は、なんとも云いようのないさびしさをおぼえていた。
静香は、今日まで、弟とはなれてくらしたことは、一日もなかった。
はじめて、孤独になって、静香は、どうしていいかわからぬほどのさびしさに、堪えなければならなかった。
夕餉の膳部がさげられると、静香は、牀に就くまで、こうして、じっと坐っていなければ

ならぬことを、思って、時刻の過ぎることのおそさが、死ぬほど苦しかった。
——やはり、弟とはなればなれにならなければよかった。
つよく後悔した。
「ごめん下さいよ」
廊下から、声がかかった。
静香がこたえると、ひょいと顔をのぞけたのは、あるじの徳右衛門であった。
「お嬢さんは、さわという女人をご存じでありましょうかな？」
「はい」
静香は、うなずいた。
「失礼じゃが、お嬢さんがここにいなさることを、知らせても、さしつかえはないひとでしょうかな？　当人は、そう云うているが……」
「さわさんが、ここへみえたのですか？」
「お嬢さんに、ぜひ会わせて欲しい、とたずねて来なさったが、一応念のために、うかがってからのことにしましたわい」
「さわさんなら、わたくしの味方なのです」
「そうですか。いや、それで、安心——」
徳右衛門は、去った。
静香は、さわが、どうして、ここに自分がいることを知ったのか、ふしぎであった。

やがて、廊下に、足音がひびいた。
静香は、立って、杉戸をひらいた。
「お嬢さま！」
さわは、一年ぶりでめぐり会う静香に、なつかしさをいっぱいに湛えた表情で、近づいた。
静香は、さわへ両手をさしのべた。
「さわさん！　ようこそ、ごぶじで——」
「お嬢さまこそ！」
さわは、部屋に入ると、
「ご苦労なさいました由、数馬様のお話をうかがいました」
と、云った。
「え？　数馬と？」
「はい。猿助さんたちが、数馬様をおつれになった家に、わたしは、居ったのでございます」
「まあ！」
「その家には、お嬢さまが、是非お会いなさらねばならぬ御仁も、おいでなのでございます」
「え？　どなたが——？」
「織田重四郎様でございます」
さわは、告げた。

静香は、あまりの偶然に、一瞬、さわにこたえる言葉も忘れて、遠いところを視るまなざしになった。

その様子を眺めて、さわは、

――やはり、そうだったのだ！

と、うなずいた。

静香は――静香もまた、織田重四郎を、この世で唯一の男性と想うようになっていたのだ。

さわは、重四郎には、無断で、そっと、抜け出て、静香を迎えにやって来たのである。

重四郎を恋すればこそ、すすんで、静香に、自分の立場をゆずろうと考えたのであった。

さわは、そういう女であった。

さわは、大坂城にとらわれているあいだに、隠密奉行に、からだを犯されていた。その恥も、重四郎に打明けていた。

したがって、さわが、重四郎の優しい言葉に酔って、身をまかせようとしたのは、せめて、短い同棲（どうせい）の期間中でも、かりの妻としてのよろこびをあじわいたい、という儚（はか）いねがいにほかならなかった。

やがて、別れる日が来ることは、覚悟していた。

さわにとって、悲しいことには、重四郎の胸へ身を投げかけた時に、数馬がおとずれたのである。

せめて、もう一日、おそかったならば、さわは、生涯の思い出として、心に秘めておくよろこびの一夜が、すごせたのである。

さわは、重四郎を知るまでは、恋を捨ててきた女であった。

重四郎と、ひとつ屋根の下で、くらすようになってから、生れてはじめて、男を慕うことを知ったのである。

さわは、もうふたたび、別の男を愛することはないであろう。

――わたしは、こういう哀しい運命の女なのだ。

さわは、ふかい失望をかくして、けなげにも、身を引く決意をしたのであった。

「お嬢さま。参りましょう」

「え？」

「織田様にお会いなさいませ」

「でも――」

静香は、とび立ちたい想いにかられつつも、すぐに行くことをためらった。

いまは、わが身は、わがものでありながら、自分だけの考えで、自由にはならなかった。

「お嬢さま、わたしが、ご案内いたします」

さわは、云った。

「でも、わたくしは……」

「ご遠慮には、及びませぬ。安全なかくれ家でございます」

「わたくしは、当家のあるじ殿におねがいして、置いて頂きましたし、それに、わたくし一

人だけが、お世話になっているのではないのですもの」
「そんなことは、かまいますまい。……お嬢さまは、ぜひとも、織田様とおくらしにならなければいけませぬ。ぜひ、そうなさいませ。わたしから、お願い申します」
さわは、すすめているうちに、泪ぐんで来た。
静香は、さわの様子を眺めるうちに、はっと、直感した。女性特有の鋭いカンであった。
――このひとは、重四郎様と一緒にくらしているうちに、恋を知ったのではないだろうか。
「さわさん、織田様は、貴女にやさしゅうなさって居られるのでしょう？」
「お嬢さま！」
さわは、ちょっとためらったが、思いきって、云った。
「わたしは、身がけがれている女でございます」
「……」
「わたしのことを、お考え下さいますな。……どうぞ、織田様にお会いなさいませ。さ――ご案内いたします」
さわがうながした時、徳右衛門が入って来た。
「立ちぎきして、申しわけありませんな。お嬢さんは、べつに、往来を歩かれても、とがめられますまい。女子の幸せは、恋しい男子に会うことでありましょうて。……お行きなされ」
徳右衛門にすすめられて、静香は、もう自分を抑えることができなかった。

さわと肩をならべて、廓を出た時、静香は、
「すみませぬ。このご恩は、一生忘れませぬ」
と、礼をのべた。
「なにを仰言います。織田様とお嬢さまは、たがいに、心を許し合っておいでなのでございます。お会いなさるのが、さだめでございます」
「……」
静香は、しかし、すなおに、このよろこびを、さわにきかせるのは、つらかった。
さわの方も、静香の気持がわかって、嘉七の死のことに、話を変えた。
静香は、それをつたえられると、あらたな泪を催した。
さわは、嘉七が、自分という女を救い出すために相果てた仔細を話した。
静香の泪は、そのあいだに、おさまった。
やがて――。
さわは、
「あそこでございます」
と、月あかりに浮きあがった松林を、指さした。
「どうぞ、お行きなさいませ」
「え？　貴方は――？」
「わたしは、これで、失礼いたします」

「どうして？」

静香は、いぶかって、たずねてから、はっとなった。

「さわさん、それはいけませぬ。一緒に、どうぞ」

「いいえ。わたしは、お嬢さまをご案内すれば、これで、どこかへ参るさだめだと存じます」

「いいえ、それは、いけませぬ。わたくしだけが、幸せになるわけには参りませぬ」

「お嬢さま――」

さわは、云った。

「織田様と貴女様がおくらしになる家に、ともに住まわせて頂くのは、このさわの幸せではございませぬ」

毒

赤松丹波は、修築の成った大坂城の天守閣上の武者走りに立って、朝靄（あさもや）にけむった市街を、見渡していた。

つい先日までは、この大坂が、おのれの支配下にあるような王者の気分を、あじわっていたものであった。

日本の金の中心地――それが、この大坂であった。

大坂は、冬の陣、夏の陣で、市街はめちゃめちゃになり、町民は、四方へ散りはてた。落城のあと、大坂は、家康の外孫にあたる松平下総守（しもうさのかみ）忠明が、領有した。

松平忠明は、大坂復興に力をそそぎ、伏見の町人を招いた。

大坂は、伏見の町人を中心として、堺、平野郷、そして江州の町人たちによって、みるみる復興し、太閤秀吉時代以上に、盛んになった。

人口も、すでに、三十万に近くなっていた。

松平忠明が五年あまりで去り、幕府直轄領となってから、完全に町人の町になった大坂は、いよいよ、その金力を発揮した。

この大坂城の修築復元にしても、町人たちが進んで、大金を献じて、成ったのである。

天領になってからは、この大坂城の城代が総支配者となり、町奉行、三十騎の与力が治めていたが、江戸にくらべて、きわめて、役人の数は、すくないのであった。

それというのも、大坂には、総年寄とか町年寄とかがいて、いわば自治をもっていたのである。

大坂城代は、ただ、黙って、大坂の発展を眺めていればよかった。

問屋と両替屋を中心として、町人たち自身が、町をつくり、発展させているのであった。

そして――。

これらの実力ある町人たちが、いま、最もおそれているのは、城代でも町奉行でもなかっ

た。

隠密奉行であるこの赤松丹波なのであった。

去年から、城代は出府して留守になっているこの城に在って、赤松丹波は、縦横の知能を働かせて、金蔵に、金銀を貯えた。大きな問屋、両替屋の台所を、片はしから探索して、かれらをおそれさせ、御用金の名目で、莫大な金を召しあげることに成功したのであった。赤松丹波が、江戸城の閣老たちさえ、自分の実権の前には、頭を下げざるを得ない、と自負したのも、当然であった。

ところが——。

つい、一月あまり前に、江戸から目付・竜造寺匡が、やって来てから、丹波の心は、ひとつの不安にとりつかれたのである。

あの日以来、竜造寺匡は、一度も、大坂城には現われていなかった。

しかし、竜造寺匡の行動は、丹波の配下の監視によって、あきらかなものとなっている。

竜造寺匡の行動は、まことに、目まぐるしいばかりであった。

一日も、じっとしてはいなかったのである。

まず——。

竜造寺匡は、伊丹の平家館を夜襲して、これを焼きはらった。

これは、赤松丹波が、金子調達がいかにむつかしいものか、自身でその苦労をあじわってみるがよい、とそそのかしたのに対して、応えてみせた行動であった。

竜造寺匡が、はたして、平家館から、金銀を奪いとったかどうか、いまだ報告はない。

丹波としては、是非知りたいところであったが、こちらから、報告を求めるのは、面目上できなかった。

もし、奪いとっているのであれば、竜造寺匡個人の考えで、自由にさせるわけにはいかぬことであった。

竜造寺匡は、平家館を焼きはらったのち、こんどは、大坂の大商人たちを、召集している。

いかなる目的をもって、召集したのか、不明であった。

丹波にとって、これは、非常な不安をおぼえざるを得ないことであった。

——竜造寺に、思うがままな振舞いを、ゆるしておくわけにはいかぬ！

朝靄にけむった大坂の市街を眺めやりつつ、丹波は、胸のうちで、おのれに云いきかせた。

背後に、人の気配がして、われにかえると、丹波は、歩き出した。

腹心の山県であった。

「竜造寺の行動は？」

丹波は、板敷きの間にもどると、問うた。

「昨日は、堺の町を、視察して居ります」

「堺へ行ったか？」

「主として、船を視てまわった模様であります」

「神屋主膳は、館を焼かれて、堺へひそんだのではないかな？　竜造寺は、それを追って、

探索に参ったのかも知れぬ」
「そうかも知れませぬ」
「竜造寺が、平家館から、南蛮金を奪いとったかどうか、まだ見当がつかぬか？」
「はい」
山県は、俯向いた。
「もし、奪いとって、かくして居るのであれば、名目が立つが……」
「は――？」
「竜造寺を召捕る名目が、だ」
「は！」
山県は、緊張して、丹波を視かえした。
「竜造寺は、小ざかしゅう、動きすぎる。しかも、公儀のために、動いて居るのではない。おのれの栄達のために、野望をたくましゅうしているふしがうかがえる」
「……」
「山県！　あれは、危険な男だ。そうは思わぬか？」
「……」
山県は、当惑の面持になった。
「わしは、わしがこれまで築いて来た自分の世界に、他人を踏み込ませるのは、断乎として、拒否する。これまでも、そうして来たし、これからも、そうだ！」

丹波は、烈しい語気で、云った。
「竜造寺匡殿を、討ちすてる、と申されますか？」
腹心は、隠密奉行の気持を読んで、自分の方から、それを口にした。
「反対か？」
丹波は、冷たい視線を、山県に据えた。
「いえ――。お奉行のご決意ならば、力をつくします」
山県は、こたえた。
山県にとっては、隠密奉行があっての自分であった。
「相手は、狡猾無類の目付だ。寸刻も油断はせぬであろう。討ちとるのは、容易ではない」
丹波は、そそのかすような云いかたをした。
「目付殿も人間でありますれば、いずれ隙を見せましょう」
「うむ。しかし、山県、これは、絶対に、人に知れてはならぬ。竜造寺は、十人の手勢をつれて居る。彼奴らが、一人でも生きのこって、江戸へ還ったならば、この暗殺は、かえって、わしの生命とりになりかねまい。そのことだな。重々に配慮して、片づけねばならぬ」
「心得て居ります。刀を用いることは、不可と存じます」
「そうであろうな」
「また、毒殺するにも、場所をえらばねばなりませぬ」
「もとよりのことじゃ」

「それがしにおまかせ下さいますよう――」
「うむ」
丹波が、うなずいた時、用人が登って来た。
「お目付竜造寺匡様が、参られました」
「ほう……噂をすれば、影か」
丹波は、薄ら笑った。
やがて――。
丹波は、書院で、竜造寺匡と対坐した。
「伊丹の平家館を、夜襲いたしましたが、いたずらに、焼きはらっただけで、金子一文も獲ず、また、神屋主膳もとりにがし、不覚のきわみでありました」
竜造寺匡は、平然として、そう告げた。
「わしならば、もっと巧みな攻撃をしたかも知れぬ」
丹波は、云った。
「それは、たしかに、身共も、いまにして、そう感じます。……ところで、神屋主膳が、疑いもなく、金を貯えて居ったことは、その巧みな逃亡ぶりから推察して、明白でござる。どこにかくして居るか、早晩、判明いたすかと存じます」
「自信がおありのようだな」
「ははは……、一種のカンでござる」

竜造寺匡は、声をたてて笑ったが、目は笑ってはいなかった。冷たく光っていた。
「当方不覚のご報告を申し上げて、ご不興かと存じます」
「いや……」
「ついでに、おうかがいいたしたいことが、二つ三つ――」
「なんだな？」
丹波は、微かな不安に襲われた。
「おうかがいいたしたいことのひとつは――」
竜造寺匡は、隠密奉行を、じっと見据えて、
「この前、おたずねいたした際、ここ五年あまりのうちに、大坂商人を、不当の利をむさぼった科によって、三軒ばかりとりつぶして、合わせて五万両余を召し上げた、と仰せでありましたな？」
「いかにも――」
「実は、このたび、身共が、商人どもを召集して、来年度の御用金の旨、あらかじめたのみ置いた際、ここ数年の間に、ご公儀の咎を受けた商家が、十数軒に及ぶ、と訴えて居りましたが、お手前様の申されました三軒とは、チト差がありすぎますが……」
竜造寺匡は、皮肉な口調で、云った。
「わしがとりつぶしたのが三軒と申したまでだ」
「しかし、とりつぶした商家の貯え金を召し上げられたのは、隠密奉行殿ではありませぬ

か」

「貴公は、わしが私腹をこやしたとでも申すのか？」

「そうは申しては居り申さぬ。ただ、五万両ばかりではなかったのではないかと……」

「黙らっしゃい！」

丹波は、かっとなった。

ここで、憤怒するのはまずい、いたずらに、目付のこんたんに乗せられるだけだ、と判りつつも、丹波は、居丈高にならざるを得なかった。

「竜造寺！　貴公は、わしを失脚させる目的をもって、下坂して参ったのか？」

「目付と申す役職は、味方の上司といえども、不正あると看れば、容赦なく糾明いたさねばなり申さぬ」

竜造寺匡は、冷然として、云いはなった。

「竜造寺！　平家館を襲って、一文にもならなかった憤懣を、わしに向って、あびせるとは、いささか女々しゅうはないか」

「左様なケチな料簡を、この竜造寺が持っている、と思われるとは、お手前様の方こそ、かなり血迷われた、と申さねばなりますまい。……いや、身共は、今日、お奉行と、争いに参上いたしたのではない。おうかがいしたいことがあってのこと――」

「なんなりと、きけ」

「堺の朱印船は、身共が調べたところ、二十艘以上はあり申すが、はたして、このうち、抜荷買いをして居らぬ船が、幾艘あるか、隠密奉行としては、すでにご承知と存ずるが、如何でありましょうか？」

「わしの目の光のとどいて居る範囲では、抜荷買いをいたして居る船はない」

「はたして、そうでござろうか？」

「抜荷買いの証拠をつかんだ、とでも申すのか？」

「いや、ただ、堺の湊に出たところ、怪しげな船を二三艘見かけ申したゆえ――」

「目付は、すべてのものを、疑ってかかるようだの」

「左様――」

竜造寺匡は、にやりとしてみせた。

侍女が、茶菓子を、はこんで来た。

丹波は、さっさと、茶碗を把って、口にはこんだ。

しかし、竜造寺匡は、いったん、のばした手を、膝にもどすと、

「無礼の言辞を弄し、申しわけござらぬ。では、これにて――」

と、頭を下げた。

「竜造寺――、わしがもてなしの茶はのめぬ、と申すのか？」

「ははは……、生命は、惜しゅうござる」

竜造寺は、云いすてて、座を立った。

瞬間――。

丹波は、殺気を、露骨なものにした。

竜造寺は、屹(きっ)となって、頭をまわすと、

「身共は、目付をつとめる者。隙はみせ申さぬ。別間へ控えさせた配下にも、一切出されたものに、手をつけるな、と申し渡して居りますぞ」

「……」

丹波は、はらわたが煮えるような激情を、辛うじて抑えて、去って行く竜造寺匡を見送った。

入れかわりに、山県が、入って来た。

「申しわけございませぬ。茶と菓子に毒を入れたこと、感づかれた模様にございます」

「あっぱれなカン、とほめてやるべきであろう」

丹波は、云った。

戦いは、宣言されたのだ。

この上は、いかなる手段をえらんでも、竜造寺匡とその配下十人を、江戸へ還すわけには、いかなかった。

しばらく、じっと思慮していた丹波は、

「山県――」

「は？」

「毒を使う機会は、まだ、あるぞ」

「ありましょうか？」

「ある！」

「どのような機会をつくる、と仰せられます？」

「商人どもを使うのだ」

「は――？」

「竜造寺は、商人どもを、おどして居る模様だ。これからも、かれらをいくどか召集いたすであろう。そこだ。……商人どもの方から、竜造寺を招待させるように、とりはからうのだ。そして、毒をくらわせる」

「それは、巧みな計りごとにございます」

「すぐに、手筈せい」

「かしこまりました」

山県は、出て行った。

丹波は、なお、長いあいだ、書院に坐っていた。

――なんというおそるべき奴が、味方の中にいたことか！

丹波としては、全く思いがけぬ強敵の出現であった。

――朱印船のことさえ、かぎつけ居った。

実は、丹波自身が、指令して、抜荷買いをやらせている朱印船が、いたのである。

これこそ、絶対の秘密であった。

それさえも、竜造寺匡は、するどい嗅覚で、感づいたようであった。

竜造寺匡の方は、配下をひきつれて、宿所へ戻って来ると、直ちに、密議に入った。

「隠密奉行を敵とする」

竜造寺匡は、はじめて、大坂へやって来た目的をあきらかにした。

「これまで、誰人も――老中、若年寄の方々さえも、隠密奉行に対しては、いささかも、その行為に不正があるか否か、糾問する機会を持たなかった。そのために、隠密奉行の行動は、おのが思うがままとなり、その増上慢ぶりは目にあまった。この竜造寺匡ただ一人が、これを怪しみ、ひそかに、探索の目を向けて来たのだ。……お主らも、身共を信頼して、当地へ従って参った上からは、隠密奉行を敵として、これが不正をあばくことに、必死の覚悟をきめてもらいたい」

その鋭い眼光は、一人々々の顔へ、そそがれた。

密議をおえると、竜造寺匡は、居間にあてた奥の一室に入った。

いつの間にか――。

そこには、一人の男が、影のように坐っていた。

竜造寺匡が、この数年間、手足として使っている伊賀の忍びであった。

飛馬、と呼ばれている。

「お報せがおくれまして、申しわけありませぬ。ようやくに、調べがとどきました」

「うむ。やはり、平家館には、伴天連が、かくまわれていたであろう？」

「御明察――。シモンと申すオランダの布教師が一人、それに、アンナと申す娘が居りました。アンナは、台湾オランダ商館の長をつとめていて、先年、通訳として渡来したファン・サンテンの娘であります」

「ファン・サンテンは、たしか、大坂城の地下牢に入れてある」

「アンナは、その父の行方をもとめている模様でありました。……平家館が、烏有に帰するや、シモンとアンナは、いずれも、神屋主膳の配下の手びきにて、館を脱出いたしましたが、シモンの方は、途中にて生命を落したか、とうかがわれます。また、アンナの方は、ほかの掛人らと、堺へ、逃げ込んだ証拠をつきとめました」

「ほかの掛人とは？」

「それが奇妙なことに、曽て、神屋主膳と、堺で、覇をあらそった白河館の遺児の娘とその弟が、掛人になって居りました」

「白河館、と申せば、先年、隠密奉行が、襲うて、一族みな殺しにしたはずだが……」

「遺児姉弟は、生きのびて、母方の祖父の故郷である姫路で、くらして居りました。弟の方が、藩士の伜を殺す不祥事をひきおこし、逃亡いたしましたが、どこをどうやって辿ったか、平家館にかくまわれることに相成りました。この姉弟に対して、かなり怪しい手輩が、目をつけていた模様であります。と申しますのは、白河館にひそかに貯えてあった南蛮の金銀が、まだそのまま、誰人にも発見されずに、何処かに匿されてあり、その場所を、姉弟が知っているに相違ない、と――」

「そうか」

竜造寺匡は、薄ら笑った。

「隠密奉行は、白河館を焼き打ちしたが、その目的としたかくし金は、奪えなかったのだな。その失敗ゆえに、平家館に対しては、容易に手を下さなかった。たまたま、下坂して来たわしをそそのかして、おのれの轍を踏ませたのだ。まさしく、わしも、隠密奉行と同じ失敗をやった。しかし、ちがっている点がひとつある。奉行の方は、館のあるじを殺したが、こちらは、生かしておいて、泳がせた。そこだ。殺しては、財宝の方も地中に埋もれたままになる。生かしておけば、いずれ、生捕って、そのかくし場所を白状させることもできる。……で、神屋主膳の行方だが、つきとめたか？」

「それが……」

飛馬は、当惑の面持で、

「主膳は、たしかに、館を脱出したに相違ありませぬが、その足跡を巧みに消して居り、いまだに――」

と、こたえた。

「飛馬！　お主らしゅうもないぞ！」

「申しわけありませぬ。しかし、それがしの下知によって、五人の者が、八方をさがして居りますれば、一両日中には、行方をつきとめられるかと存じます」

「神屋ほどの者が、このまま、息をひそめて、かくれたまま、姿をあらわさぬはずはあるまい」

「それがしの調べたところ、神屋主膳は、あるいは、国外へ遁れようと計るのではないか、と予測もされます」

「うむ。おのが莫大なたくわえ金に、白河館の隠匿金を加えてな」

「仰せの通り――」

「猶予はなるまい。神屋は、必ず、あの館から程遠からぬ場所に、金銀をかくして居るに相違ない。神屋自身も、そこにかくれて居ろう」

「それがしは、方三里以内と見当をつけて、五人の者に探索させて居りますが……」

「よかろう。堺の方は、わしの方でも、さがすことにしよう。あと二十人ばかりが、江戸からやって来る」

竜造寺匡は、飛馬の報告をきいてから、大坂へやって来た目的が、さらに大きくふくれあがるのをおぼえた。

隠密奉行赤松丹波を、失脚させるということだけを考えて、江戸を発って来たのであったが、思いがけず、丹波を倒せば、丹波が狙いつけていた莫大な金銀も、つかむことになりそうであった。

「飛馬――」

「は――？」

「わしは、本日、隠密奉行と、まっ向から対立して来た。いわば、戦いの宣告をしたわけだ。

むこうも、あとへ退けぬはめに相成った。この戦いが、どうなるか――その方の働きに、かかっている。そのことを、肚に据えておいてもらおう」

「わかりました。必ず、ご期待にこたえまする！」

飛馬が、去ると、竜造寺匡は、悠々と午睡をとった。

竜造寺匡が、大坂の大商人たち連署の招待状を受けとったのは、その次の日であった。

「町人どもは、わしに、袖の下をつかうこんたんを起したようだ」

部下たちに、笑っておいて、竜造寺匡は、供を一人もつれずに、出かけて行った。

武弁殺伐の時世ではあったが、ここ新町の遊廓は、江戸吉原、京島原とともに、この世の桃源境をほこっていた。

瓢箪町、佐渡島町、越後町、吉原町、新京橋町、新堀町、九軒町、揚屋町など……、すべて、ここ十年あまりで、田圃の中に、湧きあがったように出現した色里であった。

「……絃歌の声は、洋々として、常に巷頭に湧き、御様つけらるる太夫の、はやり衣裳の仕出し、素足に雪踏みの音高き廓の道、千金積まれたる身請の門出、いずれ目覚ましからぬはなく、世にも大尽とたたえられる有徳の町人、在所の物持なども、一夜のなさけに迷いて、紙衣着る身となれるも多かり。名高き揚屋の繁昌は、すでにこの時よりの事とす」という次第であった。

太夫、三八、天神、かこい、というのは、この廓に於ける、遊女の階級であった。

七十五匁、五十匁、三十匁、十八匁というのが、この階級に対する揚銭であったが、遊女

たちを同じ座敷に長くひきとめておくには、この揚銭だけではすむはずもなかった。

また、名のある太夫と枕を交すには、別に、莫大な金を積まなければならなかった。

二十年もかかって、貯えあげた金を、三日あまりで費消することなど、珍しくもないことであった。

この日――。

新京橋町の揚屋「浪華楼」には、新町十人衆と称される太夫が、のこらず集められていた。

前代未聞のことであった。

鴻池屋、天王寺屋はじめ、大坂中の富豪が居並んだのも、壮観であった。

竜造寺匡は、上座に就くと、商人たちとすこしはなれた座についている末吉孫左衛門に向って、いきなり、

「お主に、ききたいことがある」

と、云った。

「なんなりと、どうぞ――」

末吉孫左衛門は、にこにこして、目付を見かえした。

末吉船といえば、大御所家康から朱印をもらって、海外貿易に最大の活躍をした船であった。そのあるじが、孫左衛門であった。

末吉船の名を挙げたのは、孫左衛門の父勘兵衛であった。

呂宋助左衛門、荒木宗太郎、角倉了以、茶屋四郎次郎、末次平蔵、そして神屋主膳など、

徳川幕府が、国を閉ざす以前の、この時代には、海外に雄飛する堺、長崎、平戸の商人たちは、南方の大海原に、覇を競うていた。

角倉了以の船を角倉船、末次平蔵のものを末次船と称えたように、平野荘の大土豪末吉勘兵衛の船は、末吉船と称され、どんなに遠くからでも、一目で、判った、という。

その構造に、特徴があったのである。外面を油石灰で塗り、その上の方は、丹土色で塗った華美な装いをしていた。

長さ二十間、荷物二百万斤積み——二百万斤積みを、四斗俵の米になおせば二万俵、石数にして八千石積みの巨船が、その華美な装いをして、南方の波濤をのりこえて行くすがたは、まさしく、日本商人の気概をあらわしたものであった。

安南、交趾、占城、その西のカンボジヤ、安南の北東京、シャム、マレイ半島の諸港に、朱印船は、交易をもとめ、そして、莫大な金品を日本へもたらした。

「大坂には、お主のほかに、朱印船を持つ者は、皮屋、薬屋、木屋、檜皮屋、豆葉屋などがいるが、いずれも、わしの調べたところでは、抜荷はやって居らぬ。しかし、堺には、公儀を無視して、思うさまに、抜荷をやって居る者が居る。お主が、知らぬはずはあるまい。名を挙げてもらおうか」

色里の座敷には、およそふさわしくない話を、竜造寺匡は、冷然と、持ち出した。

「さあ、それは——」

末吉孫左衛門は、顔から微笑を消さずに、

「商人と申すものは、むしろ商売敵の内情は、わざと、知らぬことにいたして居ります。武将の国取り、城攻防とちがい、間者を使って、内情をさぐるようなことをいたせば、ひとたび朱印船を海へのり出した時、敵として睨み合わねばなりませぬ。……異国に於ては、日本人同士が、いかに、互いにたすけ合わねばならぬか、これは、必死の航海をした者でないと判りませぬ」

孫左衛門は、こたえた。

「そうか。云い分、判った。では、きかぬことにする」

竜造寺匡は、大坂商人が、いったん、口を割るまいとほぞをきめたら、いかなる苛酷な拷問にも堪える不屈の根性を持っているのを知っていた。

竜造寺匡は、その質問をうち切ると、はじめて、居並ぶ大町人衆を見まわして、

「造作に相成る」

と、挨拶し、太夫の酌を受けた。

歌と踊りの饗応が、はじめられた。

竜造寺匡は、別人のように気楽な態度を示して、太夫と語り、盃も重ねた。

やがて、初更を告げる柝の音を、廊下にきいて、竜造寺匡は、太夫のみちびきで、奥の部屋に、移った。

そこで、あらためて、盃が交された。

一夜限りではあるが、婚儀をまねて、いかにも、客をよろこばせる趣向が、もう、廊には

つくられていたのである。

「酔うた」

竜造寺匡も、さすがに、いつの間にか、陶然となっていた。

太夫の美しさと、その色香は剃刀のように鋭いその神経を、ゆるめる魔力があった、といえる。

もとより、酒は、対手に毒見させてから、口にしたし、料理の方へは一切箸をつけぬだけの要心は忘れなかったが、牀に就いた時、酔いざめの水を所望して、それを飲む時、その要心を忘れたのは、竜造寺匡の不覚であった。

水は、うまかった。

「甘露――」

と云って、仰臥したが……。

ものの四半刻も過ぎないうちに、竜造寺匡は、突然、

「う――むっ！」

と、呻いて、掛具をはねのけて、起き上ろうとした。

腹部に、焼けつくような激痛が起り、四肢がしびれていた。

――やられた！

悔いと憤りと怖れが、渦をまいて、からだ中をかけめぐった。

「う、うぬが……」

悪鬼の形相で、太夫を睨みつけつつ、ずるずると匍った。

太夫は、あとへいざりながら、

「だ、だれか！」

と、救いをもとめた。

太夫自身は、知らぬことであった。酔いざめの水の中へ、毒を混じたのは、何者かのしわざであった。

竜造寺匡は、太夫が敵の手先と思い、これを捕えて、せめて、しめ殺してやろうと、文字通り必死になって、匍った。

その時――。

すっと、踏み入って来た者があった。

赤松丹波の腹心山県であった。

「目付殿――」

冷たくせせらわらって、その醜態を見下ろした。

「お手前様ほどの御仁でも、遊里に於ては、油断をされたか。不覚であった、と申さねばなりますまい」

「き、きさま――、奉行の……」

「左様、隠密奉行のふところ刀――山県弥八郎でござる」

「うぬっ！」

竜造寺匡は、起ち上ろうとした。

とたん、肩を蹴られて、ぶざまに仰のけにひっくりかえった。

「これは、お手前様の自業自得と申すもの、隠密奉行を失脚させようなどとは、あまりにも、身の程を知らぬ増上慢でござった」

「お、おれは、死なぬ！　死なぬぞ！」

竜造寺匡は、最後の気力をふりしぼって、絶叫した。

しかし、次の瞬間には、四辺が暗黒と化す眩暈におそわれて、虚空をつかみ、顔面を、肩を、胴を、下肢を、烈しく痙攣させた。

山県は、その断末魔のさまを、眉毛一本動かさずに、見とどけておいて、太夫へ視線を移すと、

「よいか、太夫――、このことは、なかったことにいたす。忘れるのだ。生涯、口外しては相成らぬ」

と、命じた。

「は、はい――」

「もし、口外いたしたならば、そなたも、あの世へ行かねばならぬぞ」

「はい――」

太夫は、おののきつつ、両手をつかえて、ひれ伏した。

すぐに、数人の男が入って来て、竜造寺匡の遺骸を、何処かへ、はこび去った。

山県の姿も、それなり、消え去った。

一方――。

竜造寺匡の宿所である浄願寺の方丈でも、異変が起っていた。

竜造寺匡が出て行って、一刻ばかり経った頃あいであった。

大店の番頭以外の何者でもないという顔つき、物腰の町人が、小僧二人に、酒樽を持たせて、訪れた。

「大坂年寄一同のお願いを、お目付様は、お受け下さいまして、有難う存じまする。ついては、留守居のかたがたにも、鴻池の清酒を召しあがって頂きとう存じまして、持参つかまつりました次第でございます」

口上は、それであった。

この時代には、まだ酒といえば、ほとんどが濁酒であった。

清酒は、まだ庶民の口に入らぬ、貴重なものであった。

清酒をつくり出したのは、摂津鴻池村に山中酒屋をひらいていた鴻池新六であったといわれる。

鴻池新六は、山中鹿之介幸盛の子であった。大叔父信直に養われ、その隠栖地鴻池村で育って、そこで、酒屋をひらいたのであった。

元和のはじめであった。すなわち、豊臣家が滅亡して間もなくの頃である。

鴻池山中酒屋の下男に、根性のわるい男がいて、あるじ新六に烈しく叱責されたのをうら

み、逃げ出す間ぎわに、何か腹いせをしてやろうと、あたりを見まわすと、裏口に灰桶があった。下男は、それを、土蔵にはこんで、酒桶へ投げ込んでおいて、立去った。

その次の日、使傭人が、酒桶から汲み出そうとすると、昨日までのにごり酒が、清く澄みわたっていた。ひと口飲んでみると、香味がいたって良かった。すなわち、清酒というものが、日本にはじめて出現したのであった。

鴻池家では、灰でにごりを除く秘法を、かたくかくして、つぎつぎと清酒をつくり、ついに、日本一の富豪にのし上ったのである。

したがって、清酒が出現して十年ぐらいしか経っていないこの時代には、貴重なものなのであった。

竜造寺匡配下の隠密衆も、清酒ときいて、思わず、のり出した。

六つの樽を前に置かれては、つい、手をのばさざるを得なかった。

竜造寺匡も、この清酒をここへ贈るのをみとめたという。

「飲もうか」

一人が云い出すと、もはや、ためらう者はいなかった。

そして——。

酒宴のはてに、この世の地獄が現出した。

十人が、おそろしい苦悶ののたうちをくりひろげたのちに、相果てたのであった。

山県が到着したのは、その直後であった。配下十数人を引具して居り、下知して、十個の

屍骸を、裏手の墓地に葬り、立去った。

竜造寺匡とその配下は、こうして、完全に、闇に消された。

往くべき道

「良い日和だ」

雲影一片もとどめぬ空を仰いで、笠のかげから、主人が、云った。

「まことに——」

従者もまた、笠をあげて、応えた。

船の上であった。

伏見の船場から、はなれたばかりであった。

酒樽が、二十あまり積まれていた。

誰が眺めても、大坂へ酒を送る問屋船であった。

この酒樽が、伊丹から伏見まで運ばれるには、なみなみならぬ苦心を要した。

樽には、鴻池の焼印が打ってあった。鴻池山中酒屋の江戸積みの荷とみせかけたのである。

鴻池山中酒屋が、陸地あるいは海路を、江戸表へ、清酒を送る——いわゆる江戸積みは、よく道中に見かける光景であった。

公儀御用という立札をかかげて、運ばれると、武士も道をあけた。
江戸積みは、鴻池屋ばかりではなく、池田の満願寺屋、伊丹の猪名寺屋なども、輸送している。
いま――。
伏見から、淀川を下る船に、積んだ酒樽は、江戸戻りの空樽とみせかけられていた。
「伍兵衛、苦労をかけた。もう、安心してよい」
鴻池屋の番頭に化けた神屋主膳は、笑った。
「さあ、まだ安心はできますまい。堺へはこび込むまでは――」
伍兵衛は、要心ぶかく、岸辺の方を見やった。
伍兵衛自身、日本人の貌ではない。人々にあやしまれないように、絶えず、顔をかくしていなければならなかったのである。
「いや、もう大丈夫だ。……大坂の八軒に着く時刻は、夜明けだ。役人もまだ起き出ては居らぬし、どう眺めても、怪しい船ではない」
「さあ、要心の上にも、要心いたしませぬと……」
「八軒から堺までは、むしろ、堂々とはこぶことだ。鴻池屋が、海路を江戸表へ酒をはこぶのだ。ははは……胸をはって、運ぼうではないか」
神屋主膳は、自信をもった口ぶりであった。
「お館様――。ひとねむりされませぬか。お疲れと存じます」

「お主こそ、疲れたろう。やすむがよい」
「いえ、お館様の方こそ、どうぞ――」
「では、交替で、やすもう。……半刻ばかり、横になるとするか」
主膳は、やおら立って、下へ降りて行った。
伍兵衛は、流れの前後を、注意ぶかく眺めやった。べつに警戒すべき船の影をみとめなかった。
伍兵衛は、あるじの言葉通り、こちらの方がいささか神経を使いすぎるのであろう、と思った。
思いがけぬ騒動は、それから四半刻も経たぬうちに起った。
船体にかなりの衝撃がくわえられた瞬間、主膳は、はね起きていた。
――何か？
不吉な予感が、掠めた。
別の船が横づけされた模様であった。
どやどやと移って来るかなりの人数の足音をきいて、主膳は、すばやく、懐中に短筒をしのばせ、仕込みの杖をつかんだ。
そっと、上をうかがうと、すぐ真上で、鋭い声音が発しられた。
「川で襲って来たのだから、川賊と思ってもらおう」
不敵な言葉であった。

伍兵衛が、あびせられたのだ。

「なにを、御所望でございます？」

「江戸戻りだろう。たっぷり、金を持っているはずだ。出してもらおう」

「とんでもない。てまえらは、ただ、空樽だけを、持ちかえりましたので……、金子の方は、飛脚が、さきに、もう大坂の店へとどけて居ります」

「ははは……、ごまかすな。金を持っていないとは云わせぬぞ。それが証拠に、この樽は、空樽ではない」

「酒は一滴も入っては居りませぬが……」

「そのかわり、別のものが入って居るだろう。判って居るぞ。伏見の船場で、積む時に、ちゃんと見とどけているのだ。空樽の軽さではなかったぞ。……つまり、鴻池は、江戸で、酒を売って、その金で、さまざまの貴重な品を仕入れて、樽へかくして、持ち帰って来た。世間の目をごまかす必要のある品とすれば、おそらく、甲冑、刀槍、あるいは、商人が持つのを許されぬ金銀細工の珍品、または、豪華な衣裳などではないか。どうだ？」

そう問いつめられて、伍兵衛が、返答に窮した時、主膳は、物蔭からはねあがりざまに、その首領とおぼしい男の背後に立つや、短筒の口を、背中へ押しつけた。

「な、なんだ？」

「しずかに！　動けば、一発、くらわすことに相成る」

「くそ！」

「たしかに、樽の中には、品物が詰めてある。これは、かくしてもはじまらぬゆえ、正直に云っておこう。……ところで、川賊は、こういう場合、いくらぐらい、金子をゆするものか、きこうか」

「……」

「場合によっては、お主一人を捕虜にして、大坂までつれて行き、役人にひき渡してもよいのだ」

七八人の手下は、首領が、短筒を押しつけられているので、黙って、見まもっているよりほかはなかった。

月がのぼって、あかるかったのも、主膳の側にさいわいした。

「どうであろうな。二十両あまりで、手を打たぬか？」

首領は、ひくくうなった。

「撃ち殺してもよいのだぞ！　岸では、猟をしているのだと受けとるだろう」

「よし！　二十両で、手を打とう」

首領が、ついに、承知した。

「そうか。談判が成れば、手下の連中を、船へもどしてもらおう」

主膳は、申し渡した。

「よし。お前ら、船へもどって居れ」

輩下を去らせておいて、首領は、向きなおった。

とたん——。

「おっ！」

首領は、声をあげた。

月あかりに、主膳の顔をみとめて、愕然となったのである。

「神屋主膳——そうではないか！」

「ははは……やっと、判ったか」

主膳は、笑った。

主膳の方は、この首領が何者か、すでに、さとっていたのである。

檜垣又十郎——西国一円に、その槍術をもって、名をひびかせた武辺であった。

熊本の加藤家の旧臣であった。

「檜垣又十郎も、いまは、おちぶれて、川賊となったか」

「それを云われると、慙じ入る。……天下に、この檜垣又十郎の随身をゆるす大名がいない、ということだな。やむを得ず、大坂の商人どもの船を襲って、くらして居るのだ」

「これも時世だな。川賊は、いいあきないになるか？」

「禄にあぶれた浪人を三十数名もやしなわねばならぬのでやむを得ず、荒かせぎをいたして居る。ところで、神屋主膳ともあろう人物が、何故に、鴻池の番頭などに化けているのであろうか？」

「仔細がある。……実は、おのが館を、公儀隠密の手で、焼きはらわれた」

「なに?!　あの館をか！」

檜垣又十郎は、おどろいて、主膳を見かえした。

「公儀からかくし知行をもらっていた程のお主が、どうして、そのような不運に遭わねばならなんだ？」

「これだな——」

主膳は、かたわらの酒樽を、たたいてみせた。

「お主が看破した通り、この樽の中には、わしの全財産が詰めてある。南蛮金が、小判に換算して、ざっと十万両——」

「うむ！　公儀では、それを、狙ったか」

「天下泰平になれば、世の中万事金次第だ。将軍家といえども、金がなくしては、威厳が、張れぬ」

「そうか。あさましゅうなったものだ」

「そこで、わしは、日本をすてることにした」

「日本をすてる？」

「新天地を、海の彼方の国にもとめたく、大きな計画を樹てて居る」

「ふむ！　それでは、堺から、船で——？」

「そうだ」

「成程、神屋主膳らしい行動だ」

檜垣又十郎は、唸ってから、
「どうだ、ひとつ、このおれも、連れて行かぬか？」
と、申し出た。
同じ日――。
堺はずれの松林の中の家では、織田重四郎が、ひとつの決意をしていた。
神屋主膳から、密書が届いて、隠していた金銀を、堺まではこび、いよいよ、日本を出て行く、と報せが来たのである。
――平家館のあるじをして、無事に、船出させるためには、除かなければならぬ人物が一人いる。
重四郎は、いよいよ、隠密奉行・赤松丹波と、決戦する時が来たことを、自分に云いきかせたのである。
重四郎は、静香と数馬を前に据えると、
「そなたたちとの、しずかなくらしも、今日で、おわりに相成る」
まず、そう云った。
「どこかへ、お行きなさいますか？」
「遠くではない。大坂城内へ行く」
「では、もう一度――」
「左様――、男の面目というやつだ。隠密奉行と雌雄を決しなければならぬ」

「小父様。数馬も、おつれ下さい！　父の敵を討ちます！」
数馬が、云った。
「数馬、対手は、尋常の敵ではないのだ。復讐の役目は、この織田重四郎にゆずってもらいたい」
「でも――」
「いや、隠密奉行を討つのは、そなたら姉弟のためだけではない。嘉七の怨みをはらすためだけでもない」
重四郎は、神屋主膳の壮挙のことを、教えた。
「つまり、これは、日本人が、海の彼方の未知の国に雄飛するために、邪魔だてする敵を除かねばならぬ――ひとつの使命だ。討ち損じてはならぬのだ。絶対に、討ちとらねばならぬのだ！」
「では、小父様も、斬死する覚悟ですか？」
「そうなりたくはないが、あるいは、そうなるかも知れぬ」
「いやだ！」
数馬が、叫んだ。
「それでは、姉者が、かわいそうです！」
「……」
数馬は、すでに、姉の心の裡を知っていたのである。

「……」
「姉者！」
数馬は、静香の肩をつかんで、ゆさぶった。
「小父様に、生きているように、たのむんだ！　死んじゃ、いやだ、と願いなされ！」
静香は、俯向いて、泪ぐんでいるばかりであった。
重四郎は、しいて、笑顔をつくった。
「よし！　死なぬ、と約束しよう。必ず、生きのびてみせる」
「お願いします！　どうぞ、姉者と夫婦になって下され！」
数馬は、頭を下げておくと、ぱっと立って、おもてへ走り出て行った。
少年は、重四郎と静香を二人きりにする心遣いをしたのである。
二人きりになると、重四郎と静香のあいだには、しばらく、沈黙があった。
やがて、重四郎が、口をひらいた。
「そなたが、わたしの意中の女性となって、片刻も忘れられぬことは、もはや、かくさぬ。……この家に住んでから、そなたが、そばにいてくれたら、と思わぬ日はなかった」
「うれしゅう存じます」
静香は、それだけが、やっと、云えた。
想いは、胸にあふれて、痛むほどであった。
「妙なものだ。そなたが、そばに来てくれて、こうして、夢はかなったわけだが、そのくらしを、わたしは、すすんで、すてようとしている。この決意は、ひるがえすことはできぬ」
「はい」
静香は、うなずいた。
「人間のいとなみとは、こうしたものであろう。……さいわいに生命があれば、いつか、そなたを妻にして、こうしたしずかなくらしをしたい」
「わたくしも、それを、毎日、神様にお祈りいたします」
「そなたとめぐり会ったことは、わたしの無頼の料簡を変えた。ありがたかった。礼を云っておく」
「いいえ。わたくしこそ、貴方様にお会いできて、生きているよろこびをおぼえました」
静香は、やっと、そう云った。云ってから、全身が、火照って、俯向いてしまった。
重四郎は、静香の手を取った。
「悔いはないか？」
「はい、決して――」
静香は、顔を擡げた。
重四郎の視線を受けとめるまなざしは、必死であった。
処女が、おのが心と身を、捧げようときめた一瞬であった。
そのいじらしいふるえを感じつつ、重四郎は、この一瞬をのがしたくない衝動をおぼえた。
しかし、次の瞬間、重四郎は、さわのことを思いうかべた。

――この娘を妻にするのは、生きのびたのちのことなのだ！

「静香――」

「はい！」

「そなたは、待てるか？」

「はい。お待ちします」

重四郎は、立って、縁側へ出て、数馬を呼んだ。

数馬とともに、ひょっこり姿を現わしたのは、苦之市であった。

重四郎は、別室で、苦之市と対坐すると、

「お主と猿助と芋兵衛に、もう一度、わたしの部下になってもらわねばならなくなった」

と、告げた。

苦之市は、微笑した。

「いよいよ、おやりなさいますかえ？」

「うむ。こんどこそ、隠密奉行の生命をもらわねばならぬ！」

「待って居りましたわな。猿助も芋兵衛も小躍りいたしましょうぞえ」

一刻を経ずに、苦之市は、猿助と芋兵衛を、連れて来た。

重四郎は、深い感動をもって、この三人を眺めずにはいられなかった。

世間の目には、この三人は、人間の屑としか映らぬはずであった。また事実、かれらが、世のために働いたということは、一度もないに相違ない。

ところが、いま、重四郎にとっては、かけがえのない信頼すべき助力者となったのだ。しかも、こちらからたのんだわけではなかった。

苦之市も、猿助も、芋兵衛も、自らの意志で、すすんで、生命を投げ出そうとしてくれているのだ。

世間から人間の屑とみなされるこれらの男たちが、実は、純粋な誠意を持っている、ということは、重四郎自身の心を、きびしくひきしめさせる。

むしろ、世間から疎外された者の方に、我欲をすて、無私となって、働こうとする清らかな魂がのこっていることは、なんという意外であったろう。意外であるだけに、感動も深かったのである。

「いよいよ、お主らの生命をもらうことになった」

重四郎は、態度をあらためて、云った。

三人は、じっと、重四郎に、視線を集めた。

「隠密奉行・赤松丹波を、是が非でも討つ。討ち損じてはならぬのだ。そのために、われわれとしては、生き残ろうとする気持をすてねばならぬ。……猿助、芋兵衛、お主らにとって、隠密奉行は、主人の敵でもなければ、父兄を討たれた怨みの対手でもない。いわば、無縁の人物だ。その者を討つために、おのが生命をすてるのだ。考えてみれば、ばからしいことだ。それでも、敢えて、わたしに、味方してくれる。この厚情には、礼の言葉もない」

そう云って、重四郎は、深く頭を下げた。

「織田様――」
猿助が、にやりとして、こたえた。
「そういうお手前様にとって、隠密奉行は、なんでござるかな？　べつに、怨みのある敵ではありますまいぞ」
「うむ――」
「お手前様もまた、義のために勇んで、死のうとなされているのじゃ。わしらと同じではござらぬか」
「いや、わたしには、白河館の姉弟に代って、敵討をしてやらねばならぬ責務がある」
「それとても、お手前様が、どうしても引受けなければならぬ義理があったわけではござるまいがな」
「……」
「わしらは、べつに、お手前様から、礼を云われるおぼえはない。そうだろう、芋兵衛？」
猿助は、芋兵衛を、かえり見た。
「ああ、そうだ。ない」
芋兵衛は、重い口をひらいて、うなずいた。
「わしは、わしらで、勝手に、ひとつ、やらかそうと、肚をきめただけじゃ。わしらのような虫けらのような人間にも、一度は、五分の魂があることをみせたい、という気持が起るのでござる。それだけのことじゃて」

その折、静香が、お茶を持って入って来た。
苦之市が、そのしとやかな立居のすがたを、黙って、眺めて、なにやら、うなずいた。
重四郎は、数日費やして樹てた襲撃計画を、三人にきかせ、かれらに異存はない、とたしかめてから、
「では――往こうか」
と、腰を上げた。
「これから、すぐに、大坂へ――？」
苦之市は、問うた。
「そうだ」
「それは、チト性急にすぎましょうぞえ」
「どうしてだ？」
重四郎は、苦之市を見据えた。
「仕度というものがありますわな。明朝出発になされませぬかえ？」
「いそぐのだ。……今日のうちにも、神屋主膳殿が、堺に到着する。当然、公儀隠密側では、動きはじめる。猶予はない。隠密奉行の指令によって、この関西に在る公儀隠密全員が、堺へ殺到することも、想像されるのだ」
今夜のうちにも、大坂城へ忍び込む、という重四郎の肚であった。
「したれど、神屋主膳ともあろうほどの御仁が、公儀隠密に、すぐに見破られるようなまぬ

けな塀入りをなさいますまいが……」

「それは、わからぬ。看破されるかも知れぬ。……ともかく、隠密奉行を討つのは、焦眉の急であることだけは、お主ら、胆に銘じてもらおう」

重四郎が、そう云うと、猿助もまた、

「苦之市、お主は、いまになって、怯じ気づいたか！」

と、きめつけた。

とたんに、苦之市は、猿助の膝を、思いきり、つねりあげた。

「い、いてえっ！　なにをしやがる！」

猿助は、目をひき剝いた。

苦之市は、すずしい顔つきで、

「ここで、女心がわかるのは、この苦之市だけじゃわな」

と、独語をもらした。

猿助は、敏感に、――そうか、と合点した。

「織田様、われわれは、明朝、お迎えに参る」

猿助が、立ち、芋兵衛がつづいた。

重四郎が、とどめるいとまはなかった。

苦之市は、次の間に入ると、数馬に、

「今宵は、ひとつ、われら三人の忍びの術をごらんに入れますゆえ、ついておいでなされ」

と、さそった。

重四郎は、静香と二人きりにされた。

「わたしとそなたを、この家で、最後の夜をすごさせたいための、心づかいを、してくれた」

「はい」

「この好意を、すなおに、受けねばなるまい」

「はい」

静香は、重四郎と視線を合わせると、にわかに、からだの内が、燃えるのをおぼえた。

やはり、同じ日――。

大坂城を臨んで、大きな計画を胸に蔵している一組があった。

修築成った大坂城天守閣を観賞するためにひらかれた並び茶屋のひとつに、袖なしの皮羽織をはおった、なんともみにくい面貌の老人と、目もとのきつい武家娘が、ならんで、甘酒の湯呑みを手にしていた。

杉山道満と春奈であった。

「いい眺めだのう」

道満は、いかにも屈託のない表情であった。

「もう、戦禍の跡は、どこにもない。これで、濠に水が湛えられていれば、むかしのままのすがただ」

たしかに、この場所からは、ほぼ、城の威容は、復元されていた。

「なつかしゅう、往時が想い出されますか」

春奈は、云った。べつに、春奈自身としては、城の威容になど、目をひかれてはいなかった。心は、別のところに置かれていた。

「想い出されるのう。真田左衛門佐幸村、後藤又兵衛基次、木村重成、明石掃部助……その武者ぶりが、あの石垣の上に、うかびあがって参る」

「……」

「ははは……、若い女子には、これも、愚痴ときこえるであろうな。たしかに、愚痴かも知れぬ。志操高く、廉節を尚び、武勇のほまれあったもののふたちは、ことごとく、この天下の名城を枕にして、滅びはてたような気がする。生き残ったのは、いずれも、屑ばかりじゃ。そういう気持は、頑な年寄りのものであろうて」

春奈は、その言葉をきくと、一種の反撥にかられた。

「愚痴をこぼされているいとまはないのではありませぬか、道人？」

「うむ。そうであったの」

「大事は、いつ、決行されます？」

「さあて――、いつにするかの」

道満は、ちょっと、とぼけてみせた。

逗留している寺から、道満は、しばしば外出してはいるが、春奈には、大きな企てのために、働いているようには思われなかった。

尤も――。

春奈自身、あのことがあって以来、心は外へは向かず、内にのめり込んで、鬱々としていたのである。

憎むべき長曽我部左門は、武者修業のため、大和の柳生庄へおもむき、まだ還って来ていなかった。

もし、道満が、大坂城内にたくわえられた軍用金を奪うために、同志を集めているのであれば、一緒にくらしている春奈に、その気配ぐらい、察知できないはずはないのだ。

道満は、ただ、ぶらぶらと日をすごしているだけのように思われる。

「道人――、実は、もう、大事決行の日は、きめて居られるのではありませんか？」

春奈は、さそいの水を向けた。

「いやいや、どうして、これは大変な企てじゃからのう」

道満は、春奈を促して、茶屋を出た。

歩き出しながら、道満は、ふと、独語するように、云った。

「もう、あの寺へはもどらぬ」

「……？」

春奈は、はっとなって、道満を見やった。

「宿所をかえなければならぬ。二三日前から、こちらの神経にふれる男が、寺のまわりを二三人、うろつくようになった」

「……」

「そなた、どうするな？」

道満にきかれて、春奈は、返辞をしかねた。

女心のふしぎであった。

春奈は、左門に犯された、と知った時、殺してやりたいほどの憎悪をおぼえたものであった。

事実、数日のあいだは、左門と顔を合わせることも避けた。

ところが、左門の方は、あれほど傲慢であった青年が、春奈に対して、卑屈なほどの気遣いを示したのである。

春奈は、左門のその態度を見ているうちに、かたくひきむすんでいた心が、しだいに溶けるのをおぼえたことだった。

といって、春奈は、急に、妥協の様子をみせたわけではなかった。

ただ、こちらの顔色を、そっとうかがったりする左門に対して、春奈には、一種の快感に似たものをおぼえ、もう、憎悪など、すこしも心にとどめてはいなかった。

やがて、左門は、そうした息苦しい日々をすごすことに堪えられなくなって、武者修業のために、柳生庄へ出かけて行ってしまった。

春奈は、その時、左門を見送りもしなかった。しかし、左門が出て行くことに、名状しがたいさびしさをおぼえたことであった。

なろうことなら、あとを追いかけて行って、ぜひもどって来てくれるように、願いたかった。

それができない自分が、もどかしかった。

左門が出て行ってからは、春奈は、いつも、左門のことを想うようになっていた。

大きな野望を抱いて、そのことに一命を賭していた昨日までの自分が、他人のように遠いものに感じられた。

――やはり、自分も女だったのだ。

はっきりと判ったのは、そのことであった。

「そなたは、あの禅刹で、左門の戻りを待っていたいであろうな？」

道満は、春奈の心の裡を看透したように云った。

「しかし、もう、あの禅刹からは、はなれた方がよい。どうやら、わしの面は、奇怪にできあがりすぎた。一歩を行けば、十人からふりかえられるありさまでは、公儀隠密どもにも、目をつけられることに相成る」

「道人殿――」

春奈は、前方へ眸子を据えて、云った。

「わたしは、やはり、あの禅刹へもどります」

「ふむ！」

道満は、春奈の横顔を、見やった。

春奈は、道満と別れた。

道満は、立ちどまって、遠ざかって行く春奈の後ろ姿を見送っていたが、

「男まさりの気丈夫でも、やはり、娘だのう」

微笑して、首を振った。

半刻あまりのち、春奈は、その寺へ帰って来た。

山門を入りかけた時、虚無僧が二人、塀沿いの小径を行き過ぎるのを見かけて、

——あれが？

と、あやしんだが、道満が去ったいま、公儀隠密の探索をおそれる必要はないのだ、と思いかえした。

離れに入った春奈は、ひっそりとした冷たい座敷へ、うつろな視線をまわした。

——いつまで、待てばよいのであろう？

このさびしさは堪えがたかった。

春奈は、俯向いて、膝で、両手をにぎりしめた。

——わたしには、もう、左門殿を待つよりほかに、生きる道は、ないのであろうか？

あれほど、烈しい気力をはりつめさせて、徳川将軍家を討つ企てに、ひた向きになっていた自分が、どうして、このように、あわれともいうべき哀しい存在に変ってしまったのか？

春奈は、わからなかった。

俯向いているうちに、眸子が潤んで来た。

そのまま……。

夕餉も摂らずに、坐りつづけていた春奈は、二更（午後十時）の鐘の音をきいてから、ようやく身を起した。

牀をのべた時であった。

戸口に、人の気配がした。

——あっ！

春奈は、胸がおどった。

——戻られたのだ！

春奈は、優しく迎えなければならぬ、と思った。

いそいで、身づくろいして、玄関へ出た。

しかし、そこに立っていたのは、帰って来た時に見かけた虚無僧二人であった。

「杉山道満という老人に、御意を得たい」

そう申し入れて来た。

「他出いたして居りますが——」

春奈は、冷たく見かえして、こたえた。

すると、虚無僧たちは、無言で、上って来ようとした。

「なにをなされる！　無礼は許しませぬぞ！」

春奈は、きっとなって、前をふさいだ。

「われわれは、公儀の者だ。杉山道満の挙動に不審がある。それを糺しに参ったのだ。居留守をつかわせぬ！」

「道満殿は、もはや、ここには居りませぬ。他処をさがされるがよろしかろう」

春奈の態度は、女性らしからぬものであった。

それを視て、虚無僧の一人が、いきなり猿臂をのばして、とらえようとした。

春奈は、とび退った。

「やむを得ぬ！　斬りすてる」

もう一人が、叫んだ。

春奈としても、事態がこうなった上からは、闘うよりほかに、すべはなかった。

しかし――。

二人の虚無僧が湛える殺気は、ただならぬものがあり、尋常一様の対手ではない、と看て取れた。

暗殺者たるべく、修練を積んだおそるべき敵といえた。

春奈は、身をひるがえして、座敷へもどるや、刀を手にした。

追って、ふみ込んで来た虚無僧たちは、春奈のかまえを一瞥して、

「やはり、ただ者ではなかったな。女にあるまじき腕前をそなえて居る」

「杉山道満が手飼いの女忍者といったところだな」

と、云った。

虚無僧たちは、隠密奉行・赤松丹波が放っている隠密であった。

目付竜造寺匡とその部下の面々を、一挙に屠った丹波は、第二、第三の竜造寺匡が現われることをおそれて、その前に、大坂とその周辺に在る怪しい浪人衆を、この際、ことごとく消してしまう指令を発したのであった。丹波は、そうしておいて、江戸へひきあげる肚になったのである。

杉山道満が、伊丹から出て来たことは、すでに、隠密の目のつけるところであった。

道満が、大坂城生き残りの武辺であること、平家館の神屋主膳と親しいことは、すでに、調べられていた。

春奈は、床柱を後ろ楯にして、青眼に構えた。

虚無僧二人は、正面を空けて、左右から、じりじりと肉薄して来た。

間合が、きまってから、しばし、固着状態があった。

「えい！」

右から、誘いの一撃が来た。

春奈が、その誘いとともに、左の敵へ向って、身を躍らせたのは、実戦の場数を踏んでいた証拠であった。

刃と刃が、鳴った――次の刹那。

春奈は、障子を倒して、庭へ、おどり出ていた。

長曽我部左門が、山門をくぐって、戻って来たのは、その折であった。

やはり、左門も、春奈を忘れかねたのである。
春奈を犯す前の左門ならば、女人などの色香に迷う若者ではなかった。
大和からまっすぐに、江戸へ足を向けたに相違ない。
左門は、それができずに、戻って来たのであった。
暴力を加えてわがものにした娘を、いつの間にか、愛している自分を発見していたのである。
境内を横切って、離れへ近づいた左門は、凄まじい気合と、刃音をきいて、
「おっ！」
と、叫んだ。
次の瞬間――。
疾風を起して、奔った。
庭へとび込んだ左門は、
「春奈！」
と、呼びざま、抜刀した。
もし、対手が、そこにいる虚無僧二人だけであったならば、あるいは、左門は、勝利をおのが手につかんだかも知れなかった。
左門が、春奈をかばって、二人の敵に対し、一刀を上段にふりかぶった時、さらに、三人の虚無僧が、境内に姿を現わしたのであった。

左門は、凄まじい気合とともに、まず一人を斬り伏せた。
つづいて、もう一人をも、苦もなく斬り仆してくれるぞ、と猛然と肉薄した。
敵は、左門を強いと看てとるや、かなりの速度で、後退した。
「逃げるか、卑怯者っ！」
左門は、あびせた。
春奈に、おのが強さをみせたい、という気持もあった。
敵は、無言で、泉水に架けられた石橋を、じりじりと後退した。
「刺客のくせに、なんだ！」
左門は、石橋上に立つや、わざと、白刃を下げて、五体を隙だらけなものにした。
そうすれば、敵が反撃して来るものと思ったのである。
ところが――。
襲って来たのは、追い詰めた正面の敵ではなかった。
宙を截る鋭い音とともに、左門は、右肩に、激しい衝撃をくらって、
「うむっ！」
と、呻いて、よろめいた。
手裏剣が、突き刺さったのである。
「左門様っ！」
春奈が、呼んだ。

「春奈！　油断すな！」

左門は、石橋から、跳び退ると、あらたな敵に備えた。

激痛が、全身をかけめぐったが、左門は、いささかも屈しなかった。

右手は、しびれて、感覚を失ったが、左手がのこっていた。

侵入して来たのが三名と、視てとるや、

「おのれらっ！　来いっ！」

叫びざま、猛然と、突進した。

敵がたは、こういう暗殺には馴れた余裕ある動きを示して、左門を巧みに、楯とするもののない場所へ、誘った。

左門の欠点は、こうした場合、おそれを知らぬことであった。必ずしも、おのが腕前を過信するのではなかったが、敵がたがどれほどのおそるべき曲者か、見さだめて、闘いのかけひきをする、というすべを知らなかった。

敵がたの力を、無視して、

「来い！」

と、闘志を全身にみなぎらせてしまうのであった。

すでに手負うた身で、どれだけの働きができるか——一歩さがって、事態を測ることをしなかった。

たしかに、左門は、剣の天稟をそなえていたし、修業も積んでいた。

しかし、それだけでは、こうした決闘で、勝負を占めるわけにはいかなかった。

孤身を以て、多勢をむこうにまわすからには、それだけの思慮と方策がなければならなかった。

左門は、おそれるところもなく、三方へ敵を置いて、猛気を撒いたのであった。

もう一人の敵は、春奈に向っていた。

左門は、正面と左右から迫らせながら、

——どいつを、斬ってやろうか？

と野獣のように、目を光らせた。

刺客たちは、左門との間に、かなりの間隔を置いていた。これは、決闘に時間を費やすことを辞さぬ作戦であった。

手負うた左門の疲労を待とうとしたのである。

もとより、左門に、それが判らぬはずはなかった。ただ、疲れぬさきに、勝負を決してみせるという覚悟であった。

「やあっ！」

気合を噴かせて、二三度、跳躍したが、いずれも、はずされた。

右肩の痛みは、次第に烈しくなった。

左腕一本で、地摺りに構えながら、左門は、ようやく、あせりをおぼえた。

冷たく、こちらの疲労するのを待っている敵がたに対する憎悪が、火と燃えた。

「おのれら、来ぬかっ！」
左門は、悪鬼の凄まじさで、左方の敵めがけて、躍りかかった。
逃げられた。
と思った瞬間、右方の敵の一撃が来た。
これをかわす業はのこっていた。
しかし、かわすと同時に、そこへ、正面の敵のまっ向から襲って来た白刃を、さけるいとまはなかった。
右肩から、したたかに斬り下げられた左門は、
「く、くそっ！」
喚きつつ、盲滅法に、太刀をふりまわしはじめた。
もはや、左門は、餓狼に包囲されたいっぴきの獲物でしかなかった。
躍り狂うたびに、すこしずつ、斬られて、その動きはにぶくなった。
その時——。
泉水のほとりでも、春奈が、一太刀あびせられて、がくっと膝を折っていた。
ついに——。
左門は、松の幹へよりかかると、そのまま、ずるずると、地面へ落ちた。
「とどめをくれるか？」
一人が云うと、もう一人が、

「いや、その必要はあるまい。……目的は、杉山道満だ。たぶん、もうここへは、戻らぬであろう」
と、云った。
虚無僧四人がひきあげて行ってから、左門は、意識をとりもどした。
「は、は、春奈！」
うろうろと、視線をまわしてから、その名を呼んだ。
刀を杖にして、立ち上り、泉水のほとりまで、よろめきながら、近寄ったのは、その気力の凄まじさの程を示した。
「春奈！」
左門は、その上にかぶさった。
春奈は、すでに事切れていた。
左門の気力も、その上で、尽きた。
二人が往くべき路は、永遠の闇であった。

人間模様

黄昏刻になると、さまざまのあきないを終って、千差万別の人間が、ぞろぞろと戻って来

る一廓であった。

大坂の市巷でも、南の、このあたりは、いわば、最も人間くさい区域であった。

その大半は、旅籠であったが、女中がいて食事の給仕をしてくれるような宿ではなかった。六畳に三人が相宿している、といったあんばいで、食事も自分々々で、木椀を二つ持って、広い板の間に行き、汁と麦飯をよそって、摂るのであった。

おもしろいのは、旅籠によって、おのずから、泊める客の種類がちがっていることであった。浪人者だけが泊っている宿、旅商人だけが泊っている宿、そして、大道であきないをする者だけが泊っている宿——とわかれているのであった。旅籠がそうきめたのではなく、いつの間にか、類は友を呼んで、そうなったのである。

行商の町人ばかりが泊っている宿へ、浪人者がまぎれ込んでも、なんとなくおちつかなくなって、すぐにかわる、ということになるのであった。

誰がきめたともない秩序が、このうすぎたない一廓にもつくられていて、役人の指令がなくとも、平和は保たれている。

盗賊とか破落戸のたぐいが集まるところは、また、別にあった。

夕餉のにおいが、屋内に満ちた頃、その浪人宿のひとつへ、戻って来たのは、天堂寺辰馬であった。

木椀を持って、板の間に坐った時、となりの浪人者から、話しかけられた。

ここへ来てから知りあいになった室崎という中年の男であった。

「お主、楠不伝という軍学者の名をきいたことがあるか？」

「いや——」

辰馬は、かぶりを振った。

「大層な評判をとっている。商人どもが、その軍学の講義を受けると、あきない上の役に立つ、というわけでな」

「ふうん——」

辰馬は、そんな話は、一向に、興味がなかった。

どうころんでみても、うだつのあがらぬ人生に、辰馬は、いい加減やけくそになっていた。

——どうでもなりやがれ！

そんなすてばちの気持が、辰馬の顔を、悪党面にしかけていた。

この大坂へ入り込んでから、辻斬りも二度ばかりやってのけている。

「その楠不伝の家に、美しい女子が、身を寄せている」

「……」

「その女子の素姓が、ただではないようだ」

「……」

「さる大名の息女で、なんの仔細があったか、城からぬけ出して、うろうろとさまようた挙句、楠不伝にひろわれたらしい」

「……」

「当然、その大名の家中では、さがしているだろうな」
室崎という浪人者は、にやっとして、
「どうだ、チト耳よりな話ではあるまいか」
「……」
辰馬は、室崎をじろりと見かえした。
室崎が、どういうこんたんを起しているのか、判った。
「その女子が、大名の息女であるというたしかな証拠があるのか？　お主が、ちゃんと、その証拠でも見とどけたとでもいうのか？」
「い、いや、証拠はない。しかし、これは、まちがいないらしい」
「らしい、では話にならんな」
「わしは、その女子を、視て居る、顔だちといい、気品といい、ただの素姓ではないことは、あきらかだ。……どうだ、ひとつ、出かけぬか？」
「ふん――」
辰馬は、鼻を鳴らした。
しかし、夕餉を摂り終えた時、室崎からかさねてさそわれると、
「ものはためしに、見てくれるか」
と、つい、その気になった。
肩をならべて、夜道を歩き出してから、さすがに、辰馬は、忸怩（じくじ）たるものをおぼえた。

「これは、武士の振舞いではないな」
思わず、吐き出した。
「天堂寺氏は、まだ、武辺の誇りをお持ちか」
室崎は、あざけるように、笑った。
「尾羽打ち枯らしても、性根は失いたくない。と云いたいが、お主にさそわれるままに、出て来たところをみると、もはや、誇りなどはすててしまって居るのであろう」
辰馬は、自嘲（じちょう）した。
小半刻のち、室崎と辰馬は、楠不伝宅の玄関に立っていた。
「入門の儀、お願い申したい」
そう申し入れた。
「ご浪士が、これは、殊勝のお志だ」
不伝は、二人を座敷に招じた。
やがて、茶をはこんで来た女性へ、辰馬と室崎は、鋭い一瞥をくれた。
――どうだ？
室崎は、辰馬に、薄ら笑ってみせた。
――うむ！
辰馬は、合点してみせた。
たしかに、ただの女性ではなかった。

その顔だちといい、挙措作法といい、そこいらの平凡な家の出とは思われなかった。

女性が、さがって行くと、辰馬は、不伝に向って、

「失礼なことをおたずねつかまつる。あの美しい女人は、どうやら高い身分のおひとかと存じますが……？」

「お目が高い」

不伝は、うなずいた。

ただの身分ではない女性をやしなっているのが、いまや、不伝の自慢であった。

「三十万石の大名のご息女、と申したなら、おのおのがたは、おどろかれるかな。ははは……」

うかつにも、不伝は、正直なことを口にして、笑い声をたてた。

次の瞬間——。

室崎が、片膝立てざま、無言の気合を発して、抜きつけの一閃を、不伝に送った。

峰撃ちであったが、見事にきまって、不伝は、叫びもたてずに、その場へ倒れ伏してしまった。

「できるのう、お主——」

辰馬は、いささか、おそれをなして、室崎を、視た。

「ははは……、これぐらいの心得はある」

室崎は、云いすてて、ずかずかと奥の部屋に入った。

八千代は、いきなり白刃を携げて、ふみ込まれたので、はっと、からだをひきしめた。

「無礼の儀、容赦されい。……そなたは、ただの素姓ではない、ときいた。かくされるな！」

室崎の鋭い視線に射られた八千代は、とっさに、素姓をかくさねばならぬ、と思った。

「わたくしの父は、名もない浪人者です」

「その顔だち、物腰は、名もない浪人者の家では、つくれぬものだ」

「いえ、まちがいありませぬ。……ただ、さるお大名の屋敷に、一年あまり奉公したおぼえがありますゆえ——」

「と、ごまかしても、こちらの目は、くらますことはできぬ」

室崎は、白刃を畳に突き立てると、一歩迫って、

「どこの大名の息女か？」

と、凄みをきかせた語気で、睨みつけた。

「い、いえ……わたくしは——」

「かくすな！」

「かくしはいたしませぬ」

「どうしても、名無しの浪人者の娘だ、と云いはるか？」

「そ、それに、まちがいありませぬゆえ……」

「よし！　それでは、同じく名なしの浪人者に、手ごめにされても、文句はあるまいな？」

「……」

「大名の息女ならば、こちらも敬意をはらって、そのように扱いもいたすが、どこの馬の骨とも判らぬ者の娘ならば、もてあそんでも、さしつかえはあるまい。……こちらも、二刀をたばさむ身であるからには、身分ある人に対する作法は心得て居る」

室崎は、巧みに、八千代の白状を誘った。

「……」

八千代は、なお、だまって、じりじりと、あとずさった。

不意に——。

室崎は、猿臂をのばして、八千代の手くびを、つかんだ。

「無礼な！」

八千代は、ふりはなそうとした。

「ははは……、無礼の態度をとらせるのは、そなたであろう。大名の息女ならば、このような狼藉はたらかぬ」

「……」

八千代は、必死に、ふりはなそうと、もがいた。

室崎は、にやにやして、うそぶいた。

「この美しいからだを、犯すか、犯さぬか——そなた次第だ」

その時、辰馬は、その部屋の前の廊下に立っていた。

室崎の行動のあさましさに、にがにがしさをおぼえつつも、同時に、それが、白状させるには最も手っとり早い手段であることも、みとめなければならなかった。

「さあ、どちらだ？」

室崎は、矢庭に、八千代を抱きすくめて、押し倒そうとした。

「不伝殿！」

八千代は、救いをもとめた。

「不伝は、悶絶して、しばらくは、闇の中でねむって居る。助けてくれる者は居らぬぞ」

室崎の片手が、裳裾にかけられた。

それを捲くられる屈辱に堪え得ず、ついに、八千代は、叫んだ。

「わたくしが、大名の娘ならば、なんとするのじゃ？」

「ははは……とうとう、白状されたのう」

室崎は、さっと、八千代から身を退かせると、

「いずこのお大名の息女か——うけたまわろう」

と、見据えた。

八千代も、ついに観念した。

「本多美濃守忠政が娘八千代——」

「ふむ。本多美濃守か——姫路の城主だな」

室崎は、にたりとした。

辰馬が、緊張した面持で、入って来た。

「それは、まことか？」
「もう、かくしはいたしませぬ。……わたくしが、姫路城主の娘ならば、その方らは、なんといたしますぞ？」
八千代は、威儀をつくろった。
「姫路城まで、お送りつかまつる」
室崎は、云った。
「そうか。わたくしを送りとどけて、礼金を取ろうという存念じゃな？」
「左様――その通り」
「あさましい！」
「浪々二十年に及べば、世の中は、万事金次第と判り申すて。……では、姫路まで、窮屈ではござろうが、手足をしばらせて頂きたい」
「いやじゃ！　わたくしは、もう姫路へは、戻りませぬ！」
「戻りとうない理由など、われわれが、うかがっても仕方がない」
室崎は、せせら笑った。
「室崎、一応、きいておいてもよかろう」
辰馬が、云った。
「同情は禁物だぞ」
「いや、仔細をきいておけば、事情によって、送りとどけかたも、ちがって来るぞ」

「うむ、それもそうだな。……姫、では、出奔された理由を、うかがおうか」
「わたくしは、良人ある身です」
「なに？」
「良人のあとを慕うて、城をすてました」
「良人とは？」
「……」
「良人とは、何者でござろうか？」
「その方らと同じ、浪人者です」
「なんだと？」
辰馬と室崎は、顔を見合せた。
「浪人者が、姫のご亭主とは、合点がいかぬのう」
「まことじゃ」
八千代は、冷たい面持で、こたえた。
「大名の息女ともあるおひとが、なぜ、浪人者などを亭主にされた？」
「……」
「その浪人者の名は？」
「織田重四郎」
八千代は、こたえた。

「なに！」
辰馬は、愕然となった。
「織田重四郎だと！」
「その方、織田重四郎をご存じか？」
「う――」
辰馬は、唸った。
「知っているならば、いま、どこにいるか、教えて欲しい」
「し、知らん」
辰馬は、かぶりを振った。
――あの重四郎が、この姫の亭主とは！
信じ難いことだった。
辰馬は、そんなことを、重四郎の口から、一度も、きいたことはなかったのだ。
ただ、姫路には、旧知の老人がいる、ともらしていたのを、ききおぼえている。
「天堂寺、なさけ無用だぞ！」
室崎が、いら立って、云った。
「お主の知りあいが、姫の亭主であろうと、そんなことは、どうでもいい。第一、姫の云うことなど、信じられんぞ。……これから、まっすぐに、姫路行きだ」
室崎は、有無を云わせず、八千代を、後ろ手にくくりあげた。

そうしておいて、
「駕籠を呼んで来る。……よいな、天堂寺、なさけ無用だぞ！」
と、念を押した。
室崎が出て行くと、辰馬は、ちょっと、とまどった。
生来の悪党ではないのであった。
この姫が、織田重四郎という名を、口にしたからには、良人ではないまでも、なにか深い縁があるに相違ない、と思われる。
辰馬にとっては、織田重四郎は、唯一の親しい友であり、また、その気象、腕前を尊敬もしていた。
「姫――、織田重四郎を、どこで、知られた？」
「十余年前、織田重四郎は、本多家の家臣でありました」
「その頃、重四郎を慕われた、というのか？」
「そうです。わたくしは、十余年間、一日も、重四郎を忘れずにすごしました」
そして、ゆくりなくも、昨年、江戸から姫路へ帰る途次、街道上で、めぐり会い、ついに意を決して、城をぬけ出して、あとを慕うた、と八千代は、語った。
「ふむ！」
辰馬は、腕を組んだ。
――会わせてやれば、どんなに、よろこぶであろうな。

つい、そんな慈悲心も生れた。

しかし、その時、室崎が、駕籠をつれて来た話声が、おもてからきこえた。

一梃の駕籠をはさんで、二人の浪人者が、西国街道を、西へ向って、歩いて行く。

いずれも、むっつりと、口を一文字にひきむすんでいる。

殊に一人の方は、時折片眉をビクビクと痙攣させて、肩を貧乏ゆすりしていた。

天堂寺辰馬は、やはり、悪党にはなれぬ男であった。見かけは、いかにも豪放な風貌、体軀をそなえながら、性根のすわらぬ弱さは、自分でもみとめなければならなかった。

——どうも、不吉な予感がする。

胸のうちに、その独語があった。

出奔した本多家の姫君を、姫路へ連れて行って、その謝礼を取ろうというのは、いささか虫がよすぎるような気がしてならないのであった。

本多家としては、もはや、姫君を、亡きものときめてしまっているのではあるまいか。

いま駕籠の中にとじこめている女人が、ほんものの姫君であったとしても、本多家では、みとめようとはしないかも知れぬ。

大名というものは、家名を保つためには、そういう冷酷なところがある。

謝礼を得るどころか、逆に、室崎と自分は、暗殺されてしまう、ということも、考えられる。

——いっそ、織田重四郎をさがしあてて、この女を、くれてやった方が……。

そんな気が起っている辰馬であった。

人家がきれて、松並木の街道に入った時、辰馬は、思いきって、

「おい——」

と、室崎を呼んだ。

「なんだ？」

「姫を、本多家で、受けとらなかったならば、どうする？」

「受けとらぬはずがあるまい」

「わからんぞ。大名というものは、わが子よりも、家門の方を大切にする。いや、藩主自身は、情が動いても、宿老たちが、こういうことには、始末の権限を持って居るからな」

「おい、天堂寺、怯じ気づいたか」

「怯じ気づいたのではない。そういう場合も考えられる、というのだ」

「ははは……、当ってくだけろ、というではないか。送りとどけてみなければ、どうなるか、わかるものではないぞ。うまくいけば、百石で召抱え、という次第に相成るかも知れぬ」

「すこし考えが甘いのではあるまいかな」

「やはり、お主、怯じ気づいたな。……よし、では、わし一人で行く。お主は、ここから、ひきかえせ」

そうきめつけられると、辰馬も、むっとなった。

「お主一人に、勝手なことはさせぬぞ！」

「なに！　……天堂寺、貴様が、このことで、わしに指図する権利はないのだぞ！　この計画は、わしが樹てたことだ。お主は、黙って、わしの命令に従えばよいのだ。文句はないはずだぞ。……去れ！」

「去れとはなんだ！」

辰馬は、かっとなった。

室崎は、せせら笑うと、

「やるか！」

そこは、左方が白い砂浜になり、渚が目路の限りつづいていた。右手は、松林と畠地であった。

室崎は、雲助に、駕籠を並木ぎわへ据えさせると、

「天堂寺、来い！」

と、砂浜へ、あごをしゃくった。

こうなると、辰馬も、あとへひけなかった。

「よし！」

二人は、砂浜へ出ると、波打ち際まで歩いて、対峙した。

恰度、その折であった。

街道を、西の方角から、やって来た一人の武士があった。

編笠で顔をかくしていたが、その特徴のある歩きかたは、戦場武者のものにまぎれもなかった。生涯を、戦場から戦場へ渡った武辺の歩きかたは、普通の武士とはおのずからちがっていた。

並木ぎわに据えられた駕籠のそばを通りすぎようとして、武士は、足を停めた。

駕籠の中から、ひくい呻き声がもれるのを、ききとがめたのである。

武士は、駕籠へ、近よった。

「な、なんでえ！」

すこしはなれたところに憩うていた雲助二人は、血相変えて、とんで来た。

「どうしようってんだ？」

つめ寄られて、武士は、編笠のかげで、笑った。

「お前らが、ひどうあわてるところをみると、この中には、あわれな者が、とじこめてあるようだな」

「そっちの知ったことじゃねえ。さっさと、行きやがれ」

「見すてておくわけには参らんの」

そうこたえる武士に向って、雲助たちは、息杖をふりかぶって、躍りかかった。

姫路まで、かついで行けば、法外な報酬が約束されていた。

むざむざ、こんなところで、邪魔をされたくはなかった。

かどわかしや手ごめやかっぱらいは、常習にしている雲助たちであった。

したがって、喧嘩の骨法は、充分知っていたのだが、あいにく、対手は、思いがけぬ強さ

であった。

あっという間に、二人の雲助は、地べたへ匍わされてしまった。

武士は、駕籠の中を、のぞいた。

後ろ手にしばられ、猿ぐつわをかまされた女を見出して、

「ほう……美女に生れた不運さかな」

と、云った。

猿ぐつわをはずしてやって、

「どうされたな？」

と、問うた。

八千代は、

「わたくしを捕えた者どもは、むこうで、果し合いをいたして居ります」

と、告げた。

武士は、並木のあいだから、砂浜へ視線を送ってみて、

「ほう――」

と、眉宇をひそめた。

室崎と辰馬は、相青眼に構えたまま、微動もしていなかった。

対手にみじんの隙もないので、撃ち込めない、という次第ではなかった。

双方、対手の腕前をはかりかねたのである。

室崎の方は、かなり腕におぼえのある男であったが、見た目には堂々たる構えを示した辰馬を、相当な手練者と受けとったのである。

しかし、対峙の時間がのびるにつれて、いら立って来たのは、室崎の方であった。

「天堂寺！　かかって来い！」

室崎は、不意に、呶号した。

「おのれこそ、かかって来い！」

辰馬は、呶鳴りかえした。

室崎は、じりっと、一歩を詰めた。

辰馬は、一歩退った。

瞬間――。

室崎は、辰馬の構えが、崩れるのを看てとった。

――こいつ、もしかすれば、さほどの腕前ではないのかも知れぬ！

にやりとすると、

「天堂寺！　いかに！」

叫びざま、室崎は、猛然と、斬りつけた。

辰馬は、かわしそこねて、たたらを踏むや、恐怖が全身をつらぬいた。

「ま、まてっ――室崎！」

「待てとはっ！」

室崎は、二の太刀、三の太刀を、あびせかけた。
辰馬は、滅茶滅茶に、刀をふりまわして、のがれようとしたが、やがて、左肩をふかく割りつけられ、
「わっ！」
と、悲鳴をあげて、しりもちをついた。
八千代を救った編笠の武士が、馳せつけたのは、その時であった。
辰馬へ、容赦のないとどめの一撃をくらわせようとする室崎の前に、さっと立ちふさがるや、抜く手も見せぬ迅さで、その白刃をはらいのけた。
「邪魔するな！」
室崎は、喚いた。
「邪魔をするわけがある」
「なんだと？」
「この臆病者は、それがしの知りあいだ」
そう云って、武士は、編笠をはずした。
千本強兵衛であった。
春奈と別れて、どこでどうすごしていたものか。
尼崎にちかいところで、織田重四郎と出会い、春奈の行方をきいて、姫路へ向って足を進めたに相違ないが、むなしく、ひきかえしたものであろう。

「おいぼれっ！　こんな下等の男を助けようとして、むだに生命をすてるか！」
室崎は、あざ笑った。
「ははは……、お主の方こそ、生命を惜しむがいい」
「ふん――」
室崎は、わざと、踵をまわそうとしかけて、突如、隙をうかがって、強兵衛に、襲いかかった。
「たわけっ！」
一喝とともに、室崎の頸根から、血煙りがあがった。
「う――ああっ！」
室崎は、凄まじい形相になると、強兵衛めがけて突進して来たが、いたずらに、刀をふりまわしただけで、がくっと膝を折った。
強兵衛は、室崎が砂の中へのめり込むのを見とどけておいて、辰馬のそばへ寄った。
「天堂寺辰馬！　しっかりせい！」
「おお！」
辰馬は、それが千本強兵衛であることをみとめると、むりに笑顔をつくろうとしたが、疼痛のために、できなかった。
強兵衛は、眉宇をひそめて、辰馬の様子を見まもっていたが、
――たすからぬかも知れぬ。

と、直感した。
出血がひどいようであった。
「天堂寺――、しっかりせぬか。悪党ならば、これしきの深傷で、くたばらぬものぞ」
「さ、左様――、く、くたばりたくは、ない」
辰馬は、喘ぎつつ、身を起そうとしかけたが、反対に、ぐらっと上半身をゆらめかせると、仰向けに倒れた。
なにか、つぶやいたが、強兵衛には、よくききとれなかった。
「なんと云うたな、天堂寺？」
強兵衛は、耳を寄せた。
「……あの姫君を、姫路城へ、送って頂きたい」
「あれは、本多家の息女か？」
「左様――。た、たのむ」
辰馬は、両眼をほそめて、青空を仰ぎ見た。
「……く、くらい」
「くらい？」
「あ、あの世は、闇であろうな。……あかるい日は、一日も、ないので、あろうか」
「……」
「つ、つまらん。……闇の中に、と、とじこめられて、いるのは――」

「天堂寺！」
強兵衛は、あわれをおぼえた。
武士として、尊敬すべきところのない男であったが、人間としては正直な性情をそなえていたように思われる。
どうせ、この果し合いも、おそらくは、みにくい我欲からなされたものであろうが、犬死の瞬間を迎えたその呟きをきくと、強兵衛も、胸の痛みをおぼえずには、いられなかった。
強兵衛は、辰馬が息をひきとるのを見とどけてから、街道へひきかえして来た。
八千代は、そこに、悄然として、たたずんでいた。
「姫路城へ、お送りつかまつろう」
強兵衛が、申し出ると、八千代は、さびしげなまなざしをかえした。
「……？」
「果し合いをして、犬死して行った者の口から、貴女様の素姓を、きき申した」
「……」
「お送りつかまつろう」
「わたくしは――」
八千代は、云いかけて、泪をあふらせた。
「姫路城へは、帰りたくない、とお思いのようだが……」
強兵衛は、問うた。

「わたくしは、出奔いたした者です」
「……」
「もどれば、生涯、一室にとじこめられましょう」
「乱心者にされる、と申されるか？」
「はい」
「出奔なされた理由によるのではござるまいか？」
「一人の浪人者を慕うて、出奔いたしました。大名の息女としては、あるまじき振舞いでありまする。狂気の沙汰と申せます」
「成程な――。大名の家にお生れになった因果でござろう」
強兵衛は、大きくうなずいてから、
「他に、身を寄せられるあてがおありならば、そちらへお送りいたしてもよい」
と、すすめた。
「いえ――」
八千代は、かぶりを振った。
「姫路城へもどりまする」
「これからの生涯を、暗い牢格子をめぐらした部屋ですごすのを覚悟なされたか」
「はい」
「生甲斐は、ござるまいに――」

「出奔いたしてより、さまざまの苦労をあじわいましたが、所詮わたくしは、大名家という殻の中からぬけ出せぬ女子でありました。どのような環境の中でも、順応して生きて行くことは、叶いませなんだ。大名のむすめは、やはり、おのが生れた城へ、もどるよりほかにすべはない、と知りました」
「悟られた、ということでござろうかな」
「いえ、さとったのではありませぬ。泪が涸れたのです」
そう呟く八千代の横顔を、強兵衛は、眺めやった。
春奈の貌が、その横顔に、かさなった。
――女の幸せは、妻となって、子を生み、育てることであろうが、それがゆるされぬ女子には、不幸のみが与えられるものなのか。
強兵衛は、暗然となった。
春奈を失った強兵衛は、大きな志をも失って、ただの老人になっていた。
老残の身を、どうしてすごしていいのか、全くのあてのない孤身になっていた。
それだけに、このあわれな大名の息女の心が、手にとるように、判った。
しかし――。
この姫君を、救ってやる力は、老人の身には、なかった。
ただ、姫路城へ送って行くだけであった。
「人さまざまの運命でござるな」

強兵衛は、云った。
云ってから、その言葉のむなしさを、強兵衛は、慙じた。
「お手前様は――」
八千代は、強兵衛に視線をかえした。
「やはり、さびしい御仁なのですね」
「ははは……それがしなどは、生れた時から、野たれ死するように、運命づけられて居り申す」
強兵衛は、笑った。
二人の行手に、白い道が、まっすぐに、どこまでもつづいていた。

天と地と

織田重四郎は、庭の端にある井戸で、冷水をあびて、座敷にもどって来た。
朝陽がさしそめた頃あいであった。
重四郎が、坐ると、すぐに、静香が、膳部を持って、入って来た。
いつの間に、用意していたものか、それは、出陣の食膳であった。
重四郎は、微笑して、

「忝ない」
と、礼を云った。
「妻のつとめでございます」
静香は、はじらいつつも、はっきりとこたえた。
一夜を境にして、重四郎と静香は、夫婦になっていた。
重四郎は、盃を把って、静香が注ぐ水を、飲み、次いで、静香に、盃を渡した。
静香は、水盃がおわると、両手をつかえて、
「ご武運のほど、お祈り申し上げます」
と、述べた。
「必ず、生きて還るつもりだ」
重四郎は、云った。
「わたしは、そなたを知るまでは、いつ死んでもかまわぬ、と思っていた。生命を惜しむ気持は、全くなかった、といってよかった。……そなたを知ってからは、生きていることの意義がわかった。……死地へ向ういまほど、生命が惜しい、と思ったことはない。皮肉なものだな」
「貴方様が、生命をおすてなさいましたならば、わたくしも、生きては居りませぬ」
静香は、じっと、重四郎を見つめかえした。
「うむ！」

重四郎は、静香の愛情を、受けとって、全身に満たした。
風もなく、よく晴れて明るい朝であった。
しずかな、二人きりの食事がおわった。
重四郎は、起つべき時刻を、縁側へさした陽足に看て、
「では――」
と、腰を上げた。
玄関へ送って出た静香の態度も、ものしずかなものであった。
玄関を出ると、重四郎は、空を仰いだ。
雲影一片もとどめず、遠くはるかに、澄みわたったその碧い色を、吉兆と眺めた。
「往っておいでなさいませ」
静香は、ひくく頭を下げた。
重四郎は、わざと、ふりかえらなかった。
松林を抜け出ると、そこに、数馬をはさんで、苦之市と猿助と芋兵衛が、待っていた。
「数馬、吉報を待っていてくれ」
重四郎が、云うと、数馬は、感動のために胸がつまったか、ただ、うつ向いて、うなずいた。
「参ろう」
重四郎は、歩き出した。

いかにもさり気ない、しずかな様子が、三人の下忍を、ほっとさせた。
かなりはなれてから、数馬が、
「ご武運を！」
と、叫んだ。
ものの二町も、重四郎と三人の下忍は、黙々として、歩いた。
そのうちに、いちばん無口の芋兵衛が、黙っているのに堪えられなくなって、猿助の脇腹を小突いた。
「なんだ？」
猿助が、首をまわすと、芋兵衛は、
「隠密奉行を、城外へ、おびき出せぬものかのう」
と、小声で、云った。
「それができれば、織田殿も苦労をせぬわさ」
「なにか、うまい策がないかのう」
「お主の脳味噌では、思いうかぶまい」
「猿助！」
芋兵衛は、むっとなって、
「他人事のように云うな！　お主が、知恵を働かせたらどうだ？」
「おあいにくだ。おれは、おれの分を知って居る。芋兵衛、おれたちは、黙って、織田殿の

あとに従って行けばよいのだ」

猿助が、声を高くすると、苦之市が、とがめるように、振りかえった。

重四郎だけは、なにかの思念にとらわれていて、まっすぐ、前方へ視線を据えて、歩きつづけた。

遠く、碧空の下に、大坂城の天守閣が、すっきりと、優美で荘厳なすがたを、浮きあげている。

道は、まっすぐに、その大坂の市中へ向って、のびていた。

「はて――？」

苦之市が、ふと、頭をまわした。

二十歩あまりおくれて、一人の虚無僧が、一歩毎に大きく上半身を傾けながら、歩いて来るのへ、視線を投げた。

――どうも、怪しい！

苦之市は、直感した。

「織田様――」

苦之市は、重四郎のわきへならぶと、

「うしろの普化僧が、怪しいと思いませぬかえ？」

と、ささやいた。

「普化僧？」

重四郎は、振りかえって、じっと、双眸を据えたが、そのひどく足の不自由なさまに、ふっと、微笑した。

「道人！」

大声で、呼んだ。

「道人ではないか？」

虚無僧は、ゆっくりと、近づいて来ると、

「声が高いな、織田重四郎」

天蓋を、あげた。

苦之市ら三人は、その面貌を一瞥して、ぎょっとなった。

全くの化物といってよかった。

「どこへ行かれる？」

「ははは……、大坂で、あちらこちらをうろついてみて、堺へまわり、それから、また大坂へひきかえすところだ。お主らに、一臂を仮すためにな」

「……？」

「お主らは、隠密奉行を討ちとりに参るのであろう？」

「ご存じか？」

重四郎は、道満の眼力に、いまさらながら、感服した。

杉山道満は、重四郎と肩をならべて歩きながら、

「悲壮な決意だの、織田重四郎氏？」
「どうして、われらの決意をご存じか？」
「むだに、大坂と堺を歩きまわっては居らぬよ。……先般、お主らが、大坂城へ侵入して、隠密奉行と華々しい一戦を交えたこともきいた。幻夢十郎次が討死したこともな。三十年前、幻夢十郎次と、わしは、親しかった。……十郎次は、白河館の下僕になっていた由、すこしも知らなんだ。知っていたならば、会いに行ったものを、ざんねんなことをした。……ところで、お主らは、再度、大坂城へ侵入しようと企てている模様だが、その必要はないようだ」
「と申されると？」
「赤松丹波は、大坂城から出て、堺へ向って来るであろうな。今日のうちにも――」
重四郎は、その予言に、おどろいて、思わず、足を停めた。
「道人！　それは、まことか？」
「わしの取柄は、おのれに自信のないことは、口にせぬ――それじゃて」
「赤松丹波が、堺へ向って参る理由は？」
「黄金亡者だからじゃな」
「……」
「昨日、神屋主膳は、京から淀川を下って、大坂に着き、その足で、堺に入った」
「そうでしたか」

「神屋主膳は、巧みに、公儀隠密衆の目をくらまして、財宝を、堺へはこんだ――つもりであったろうが、どっこい、敵もさる者、見のがすはずがなかったわい」
「……」
「赤松丹波は、隠密奉行として、二十年の間、大名をとりつぶし、町人から金品をまきあげて来た古強者だ。江戸から、目付の竜造寺匡という男が、丹波を失脚させる目的でやって来たが、逆に、討ち滅ぼされた。……神屋主膳が、いかに知能をしぼって、ひそかに、財宝を堺に移そうとしても、それを感づかぬ丹波ではない」
「道人は、それとさとって、堺へ行って、主膳殿に、告げられたわけか」
「左様――。主膳も、苦心が水の泡になるか、と苦笑して居ったが、どっこい、軍師がついていることを忘れてくれては困る、とわしは云ってやった」
「成程――。虚々実々の戦法をとるわけか」
「その通り――。さいわい、神屋主膳は、したたかな味方を、淀川を下る途中で、ひろって居った。檜垣又十郎、という男でな、槍を取っては西国随一の名を持っていたが、方今、川賊になっていた模様だ。主膳に説かれて、日本脱出行に加わると誓った。……どうだな。お主は独力で――いや、うしろにいる下忍三人を供にしただけで、赤松丹波を討ち取る決意であったようだが、それは、無謀もはなはだしい振舞いと申すもの。丹波を討ち取るには、万全の備えと、それだけの精鋭をそろえなければならぬのだ。……お主は、やはり、まだ、若かったのう」

「そう申されると、慙じ入る」
重四郎は、無謀をみとめざるを得なかった。

「殿――」
廊下から、腹心山県の声が、呼んだ。
隠密奉行赤松丹波は、先刻から、机上に、一通の密書を披いて、黙然と坐りつづけていた。
密書は、老中酒井讃岐守忠勝からのものであった。
その内容は、いかに隠密奉行としても承諾しかねる苛酷な要求であった。
昨年度公儀内証金は、すでに六十万両の不足を告げ、本年度の予算計上が為しがたいために、是非にも、公にされぬ金を、捻出しなければならぬ必要に迫られている。すでに、諸大名に対しては、参覲交代制とともに、手伝い普請によって、その経済力を極度に消耗させているために、この上の負担はかけられぬ。
大名衆は、貢租の増徴及び冥加金・御用金によって、その年をしのいでいるが、公儀としては、そのような見苦しいまねはできぬ。ついては、隠密奉行の力をもって、三十万両ばかり調達して、至急に、江戸表へ送ってくれるように、たのみたい。
この命令は、あきらかに、老中方が、赤松丹波の貯蓄ぶりを看てとった上でのことに相違なかった。
しかし――。

丹波としては、大坂城内にたくわえた金は、江戸城の金蔵に入れるべき軍用金であり、毎年の支出にあてるべき性質のものではなかった。
財政窮乏は、勝手方老中の責任であり、その放漫政務のしりぬぐいを、させられるのは、やりきれなかった。
隠密奉行が、集めた金は、公儀財政とは、全くなんの関係もないのである。
――ばかにして居る！　わしが、この大坂城内にたくわえた金が、どれだけの苦労をはらったものか、老中、若年寄は、知らぬのだ。まるで、落葉でもかきあつめたように、かんたんに考えて居る。むざむざ、出してたまるものか！
丹波は、幕閣の人々の顔を、ひとつひとつ思いうかべながら、胸のうちで、罵った。
とはいえ、老中の命令は、絶対のものであった。
これを拒否することは、できなかった。
「殿、ご出馬の用意ととのいました」
山県が、再度、うながした。
「うむ！」
丹波は、ようやく、立ち上った。
山県が入って来て、
「隠密衆二十七名、ほかに、与力十三、同心二十、そろえましたが、いかがでありましょうか？」

と、問うた。

「よかろう。……但し、各組は、同時に、向ってはならぬ。対手がたに気どられぬことが、肝心だぞ」

「それは、充分に心得て居ります」

「隠密らは、むしろ、一人一人、変装して行くようにいたせ」

「仰せを待つまでもありませぬ」

「よし！」

赤松丹波は、自ら総指揮をとって、堺へおもむき、神屋主膳とその一味を一網打尽にしようと企てているのであった。

主膳が、こっそりと、伊丹山中から堺へ、その数十年にわたってたくわえた南蛮財宝を運んだことは、数人の隠密によって、たしかめられていた。

竜造寺匡に、平家館を襲わせておいて、その財宝は、こちらが奪う——という計画は、竜造寺匡をそそのかした時から、すでに、丹波の肚裡にあったのである。

思案は、見事に図にあたったわけであった。

いわば、神屋主膳は、松葉いぶしで孔から追い出した狐であった。

「山県——」

丹波は、出馬の仕度をしながら、

「神屋主膳のかかえている金は、どれくらいか、見当がつくかな？」

「さあ……？　五十万両以下ということはございますまい」

「うむ」

丹波は、にやりとした。

「もし、そうだとすれば、江戸へ送って、なお、二十万両はあまる」

「は——？」

「江戸へ土産にするためにも、どうしても、こちらのものにしなければならぬのう」

「御意——」

「山県、どうじゃ、江戸表へ帰ったら、出世をのぞむであろうな？」

「……」

「番方がよいか？」

「それは、殿が、お就きになったお役次第であります」

「ははは……、わしののぞみは、御側御用じゃ」

「そうではなかろうか、とひそかに推測いたして居りました」

「こいつ！」

丹波は、笑って、

「それも、こんどの土産によっては、夢ではない。……老中や若年寄で、わしほどのご奉公をした者が一人でも居るか。諸大名の台所の状況、商人どもの金儲けぶり、その他、世間のくらしかたの表裏を、わしほどつぶさに見知った者は、江戸城内には居らぬのだ。そのわし

が、御側御用をつとめるように相成ったら、どうであろうか、ということだ」
「さだめし、諸侯は、気味わるがるでありましょう」
「閣老といえども、いちいち、わしの顔色をうかがわねば、政務はとれぬようになるぞ」
丹波は、そう云って、また、愉快そうに高笑いした。
大坂商人の脅威であった自分が、こんどは、閣老をじりじりと威圧することを想像するのは、たしかに、愉快であった。
――三十万両を土産にして、なおそのまま、隠密奉行の職掌にとどまっていることはない。
丹波は、その土産の報酬を、要求する決意をした。
「どれ――参るか」
大坂と堺は、大和川が境になっていた。
当時――。
大坂側の堤は、かなりの台地につづいていた。台地は、まばらな赤松の林になっていて、豊臣氏が盛んであった頃は、淀君や秀頼が、野点をした、といわれている。
杉山道満と織田重四郎は、その林の中にいた。
三人の下忍は、道満の命令で、街道の要所に身をひそめているはずであった。
「お主も、おもしろい忍びどもを、家来にしたものだな」
道満は、笑いながら、云った。
「はじめは、我欲の張った小悪党であろう、と思っていたのですが、それが意外に、心がよ

ごれて居らぬ男たちであったのに、こちらの方が、頭を下げることになったのです」
「とかく、人間という奴は、見かけによらぬものだな。世間の尊敬を集めている身分の高い人物が、途方もなく下劣な品性の持主であったりするものだて――。いずれにせよ、あの忍びらは、役に立つ」
「道人に、うかがうが……」
「なんだな？」
「道人は、すでに、人を集められたか？」
「それだ。……さがしてみると、使えるような男は、まことにすくないものだ。せっせと、ひろってみたが、二十人にも足らぬ。……野に、語るに足りる士は、まことに乏しいのう」
「それでも、二十人も集められたか」
「うむ」
道満は、前方へ眼眸を、送って、うなずいた。
重四郎の方は、不審をおぼえずにはいられなかった。
二十人を集めながら、道満自身は、たった一人で、自分たちに加わっている。その二十人は、いったい、どこにいるのであろう？
重四郎の疑念を、道満は、看てとったように、
「孫子曰くかのう、将、九変の利に通ずる者は、兵を用いるを知る。将、九変の利に通ぜざる者は、地形を知るといえども、地の利を知る能わず、兵を治むるに、九変の術を知らざれ

ば、五利を知るといえども、人の用を得る能わず」

と、云った。

重四郎は、べつに、孫子の兵法を学んだことはなかったので、道満が、どういう意味で、その言葉を口にしたのか、判らなかった。

重四郎は、沈黙をまもっているよりほかはなかった。

道満は、しばらく、何か考えている様子であったが、

「ところで、お主は、赤松丹波という人物が、どのような襲撃方法をとるか、想像できるかな？」

と、問うた。

「さあ？」

重四郎には、判らなかった。

「わしの推測するところ、丹波は、必ず、奇襲して来るであろうて」

「奇襲と申すと？」

重四郎は、道満を見かえした。

「丹波は、決して、神屋主膳を、堺のかくれ家に襲わぬであろう、ということだな」

「……？」

「丹波ほどの男になれば、神屋主膳が、どうして、財宝を堺へはこんで来たか——その理由を看通すであろう。主膳は、日本を脱出しようと企てているに相違ない、と。……そこで、

考える。主膳が、用意した船へ、財宝を積み込んで、いざ出帆、という間際に、襲うて、船もろとも奪い取ってくれよう、とな。つまり、丹波は、宝船を、江戸へはしらせて、手柄にしようと、考えるに相違ない。たしかに、これは、成功すれば、隠密奉行として、まことに見事な手柄になる。江戸へ着いた宝船へ、閣老らを案内して、山のごとき南蛮の金や品物を披露することは、この上の得意はない、と申すものではあるまいか」

「成程！」

重四郎は、道満の推理眼に、敬服した。

「船を奇襲して参るとなれば、かなりの手勢をひきいることになると存ずるが……」

「それじゃな。まさか、一隊を引具して、堺へのり込んで来るような、まぬけなまねはせぬであろう」

道満が、そうこたえた時、桑畑を抜けて、台地へのぼって来る人影がみとめられた。

猿助であった。足は早かった。

すぐに、林の中へ入って来ると、

「そろそろ、隠密どもが、堺へ入り込んで来る模様でござる」

と告げた。

「街道を行く者を、見張って居ったところ、虚無僧やら旅商人やら百姓やら六部やら、さまざまに変装いたして居り申したが、われらの目をごまかすことは、でき申さなんだ」

猿助は、ちょっと、得意げに、小鼻を動かしてみせた。

「どれだけの頭数を、かぞえたな？」
「いままでのところ、まだ七八人でござる」
「そうか」
道満は、うなずくと、きびしい表情になって、ちょっと、思慮していたが、
「襲撃勢は、隠密ばかりではあるまい。赤松丹波は、おそらく、与力同心らもひきつれるに相違あるまい」
と、云った。
「すると、それは、見張るまでもござるまい。どんな遠方からでも、わかり申す」
猿助が、云うと、道満は、かぶりを振った。
「いや、そうではあるまい。やはり、与力も同心もばらばらになって、やって参るであろうな。……お主ら三人は、赤松丹波の通過して行く姿だけは、しかと見とどけい」
「へい、かしこまりました。その時こそは、織田様、その剣を存分にふるわれませい」
「ちょっと、待て！」
道満は、重四郎に向って、
「討ちいそぎはせぬものよ」
と、云った。
「小人数の護衛でやって来た丹波を、むざむざ、見のがせ、と云われるのか？」
重四郎は、疑惑の視線をかえした。

「時と場所がいかんのう」
道満は、こたえた。
「なぜであろう？」
「いま、ここで、丹波を討ちとれば、手勢どもは、急遽、大坂城へひきかえすに相違ない」
「……」
「それが、まずい」
「まずいとは？」
「こちらは、あるじの留守をねらって、泥棒猫になる計画だて」
道満は、笑ってみせた。
「大坂城の金蔵を襲う、と申されるのか？」
「せっかく説き伏せて、えらび出した二十人の浪人衆を、むだに遊ばせておく手はないからのう」
「左様であったか」
重四郎は、道満の軍師ぶりに、頭を下げた。
おそらく、道満がえらび出した二十人は、いずれも、一騎当千の強者どもに相違ない。
大坂城へ侵入して、金蔵にたくわえられた何十万両かの軍用金を奪う兵力として、不足はないであろう。道満のことであるから、綿密な計略を樹てているはずである。
「道人――」

重四郎は、あらためて、道満を視た。

「それがしと三人の忍者が、これから為すべきことを指示されたい」

「お主が狙うのは、赤松丹波の首級である、とすれば、丹波があの街道を通過するのを待って、あとを尾ける」

「うむ」

「堺には、丹波が、腰を据えるところが、きめてあろう。まず、丹波を、そこに入らせるのだな。……神屋主膳は、丹波に勝手に探索監視させておいて、出帆の準備をすすめる。丹波の方では、神屋が何も気づかぬ、と思い、船を乗取るべく、配下どもを暗躍させるであろう。そして、愈々、襲撃の用意をととのえた——と見てとるや、逆に、こちらが、丹波を襲う。どうだな？」

「わかり申した」

重四郎は、納得した。

それから四半刻あまり過ぎてから、こんどは、苦之市が、野を掠めて、台地へ馳せもどって来た。

「来ましたぞえ」

にこにこしながら、報せた。

「隠密奉行は、なんと見せかけて参ったかな？」

「京のお公卿が、どこやらの陵へ参拝するかと見せかける行列をつくって居りまするわな」

堺の周辺には、歴代の帝の墓所が、多かったのである。

「公卿行列を、隠密奉行と看破したとは、あっぱれだの」

「それは、すぐに、わかりますぞえ。御所ざむらいは、あのように力のある歩きかたは、いたしませぬわな」

赤松丹波は、よもや、おそるべき強敵から、見張られるとは知らず、堂上公卿の乗物の中に、黙然と坐っていた。

大和川を渡ったところで、

「山県——」

と、呼んだ。

「堺の宿所は、どこだ？」

「湊を見渡せる浜辺の、米倉を用意いたしました。倉の上階の高窓からは、一望のもとに、出入りの船をごらんになれます」

「ふむ。うまいところにさだめたの。……神屋主膳が、どのような艤装の船を用意するか、たのしみだの」

「おそらく、一艘だけではございますまい」

「数艘が、舳艫相銜んで、出帆いたすか」

そう云ったとたん、丹波は、ふっと、おのれが、それを奪取することに、うしろめたい気持をおぼえた。

神屋主膳は、べつに、悪事を犯そうとしているのではないのだ。

海の彼方に、雄飛しようとしているのだ。異邦の土地で、日本男児の力を発揮しようとしているのだ。その壮図は、ほめたたえるべきである。その壮図を、はばみ、船を奪おうとしているこちらの方こそ、卑劣きわまる悪党ではないか。

主家を喪って、前途に希望を持たぬ浪人たちを、集めて、新しい天地を与えてやる神屋主膳こそ、あっぱれな勇者というべきであろう。

丹波は、心中、忸怩たるものをおぼえつつ、同時に、むしろ、自分もまた、なろうことならば、神屋主膳にならって、軍船をつらねて、大海原を押し渡って行きたい衝動をおぼえた。

閣老たちは、隠密奉行を働かせるだけ働かせておいて、用なしとみるや、ひそかに消すことを考える冷酷な連中なのだ。

さいわいに、目下のところは、こちらに絶大な力がそなわっているために、老中も若年寄も、せいぜい利用することにしているが、いずれは、このまますまさぬ考えを持っているに相違ないのだ。施政者というものは、常にそうした非情きわまる措置をえらぶのが、ならいなのだ。

江戸へ還ってから、こちらが、よほど油断なく警戒して居らぬかぎり、第二、第三の竜造寺匡が現われて、失脚せしめようと企てて来ることは、目に見えている。

いや、この運命から、まぬがれることは不可避かも知れぬ。

不吉な予感が、丹波の心中を占めた。

――大坂城の金蔵にある軍用金を、そっくり持って、海を渡って行くことの方が、わが身にとっては、幸運ではないのか？

丹波は、思わず、胸のうちで、呟いた。

「殿――」

山県の声が、丹波をわれにかえらせた。

「なんだ？」

「行列を迂回させまするが、よろしゅうございますか？」

「うむ、よい」

偽の公卿行列は、しずしずと進んで行った。

神屋主膳が、仮のかくれずまいにしたのは、猿助と芋兵衛が流連けした堺の新地廓の「万福楼」の別棟であった。

その日――。

主膳は、あるじの徳右衛門を、呼んで、対坐した。

すでに、徳右衛門は、主膳が、なんの目的で、堺へやって来たか、看破しているようであった。

「あらたまって、お主に、たのみがある」

主膳は、厳しい表情で、きり出した。

「なんでありましょうな？　手前にできることならば、なんでも――」

「お主の海賊船を、水主もろとも、そっくり、もらいたい」
主膳は、ずばりと、云った。
「成程――」
徳右衛門は、べつにおどろく様子もなく、うなずいた。
「呉れるか？」
「さしあげましょう」
「忝ない」
主膳は、頭を下げた。
「お主は、たしか、三艘持っていたな？」
「はい。目下、三艘とも、瀬戸内の島かげで、遊んで居りますわい。……ところで、神屋様の方は、たしか、まだ、五艘お持ちのはずだ、と思いますが……？」
「そのうち、三艘は、もう老朽で、長い航海は、おぼつかぬのだ」
「手前の三艘を合わせて、五艘――遠い海を渡ろうと申される？」
「うむ」
「いよいよ、日本をおすてなされるか」
「そういうことだ」
「手前も、お供をしたいところでございますが……、ははは、年齢には、勝てませぬな。どうやら、この女郎屋のおやじで、余生を送りたくなりましたでな」

「お主が一緒に行ってくれるとありがたいのだが、しいてすすめもできぬ。あるいは、異邦の土地で、野たれ死することに相成るやも知れぬのだ。新しい天地で成功するとは限らぬ」
「いや、貴方様なら、必ず成功なさいましょう。手前の予想するところでは、貴方様は、いずれ、この日本の土地ぐらいの広さの領土を、つかみなさる」
「買いかぶられたものだ。……ともあれ、わしのかねての念願を、いよいよ果す秋が来た。お主らの援助によって、叶えられる」
「手前の手下は、約百三十人あまり居りますが、貴方様の方は如何でございましょうな？」
「うむ。人数は足らぬ。だが、さいわい、一騎当千の強者をそろえることができそうだ」
「それは、結構でございます。手前の方も、この堺にかくれ住んでいる浪人衆を十人あまり知って居りますれば、説いてさしあげてもよろしゅうございます」
「ぜひ、たのむ」
「女子は、どうでございましょうな？」
徳右衛門は、笑いながら、たずねた。
「そうだ。子孫をのこすには、女子もつれて行く必要があるか」
「左様――、では、手前が、女子をのせる船を別に一艘、用意つかまつりましょう」
徳右衛門は、ひき受けた。
「それは、願ってもないことだが、はたして、この壮挙が、成功するものか、どうか、成算はない。あたら、若い美しい女人らを、まきぞえにするのは、あわれな話だ」

主膳は、云った。

「なんの、人間の寿命というものは、生れた時からきまっている、と申しますゆえ、失敗して、はかないしまつに相成っても、それは、それだけの宿運であった、ということに相成ります」

徳右衛門が、去って、しばらくすると、檜垣又十郎が、ふらりと姿をみせた。

「いま、お主の船を、拝見して来たが、あれで、大海原を押し渡る、とは壮快なものだのう。淀川辺をうろうろしていた川賊にとっては、望外のよろこびだ」

「こちらは、お主のような味方を得て、心強い」

「船は、何艘だ？」

「わしの持船二艘に、この家のあるじの海賊船三艘を合わせて、五艘だ」

「乗り込む頭数は、そろって居るのか？」

「いや、足らぬ。……お主の手下は、幾人いるのであろう？」

「屑をふるい落して、三十二三名か」

「それだけいてくれれば、有難い。杉山道満が集めてくれたし、わしが呼集できる浪人らも十人あまりいる。まずまずだな」

「それで……、どこへ行く？」

「まだ、きめて居らぬ」

「山田長政が王者になっているしゃむろがいいのではないか？」

「わしは、日本人が一人も居らぬ国を考えている」

「ふむ！」

檜垣又十郎は、じっと、主膳を見据えて、

「お主は、やはり、只者ではなかったな。いつか、何かやるであろう、と思っていたが、南蛮の土地へ押し渡って、王国をつくろうという野心を起したとは、まことに見あげた度胸だ。今日からは、おれは、お主に対して、家臣の礼をとることにする」

「そのような遠慮は無用にしてもらいたい。それよりも、お主にたのみたいのは――」

主膳は、今日明日うちにも、この堺の町へ、大坂から、続々と、公儀隠密が入って来るであろう、と予想される、と告げた。

「大坂城に滞在する隠密奉行が、総指揮をとる模様だ」

「ふむ?!」

「おそらく、隠密奉行は、わしの船を奪うこんたんと思われる。船と積み込んだ金品を、そっくり横取りして、江戸へ回送すれば、これは、相当の手柄になるわけだ」

「成程――。お主にとっては、強敵だな」

「これと闘って勝たねばならぬ。敗れれば、壮図は、画餅に帰する」

「勝とうではないか。おれの槍にも、もの云わさせるぞ」

「それを、ぜひ、たのみたい」

「承知した」

檜垣又十郎は、血の躍る気色を示した。

またたくうちに、十日間が過ぎた。

湊を一望のもとに見渡せる米倉の上階に、本拠をさだめた隠密奉行・赤松丹波は、隠密衆をはじめ、与力・同心一統が、次つぎにもたらして来る探索の報告に、襲撃計画をねりなおしていた。

ただ——。

肝心の神屋主膳が、どこにひそんでいるのか——つきとめられぬもどかしさに、丹波は、不機嫌であった。

配下がいかに躍起になっても、どうしても、つきとめられなかったのである。

あるいは、すでに、湊に碇泊する船のどれかに、乗り込んでいるかも知れぬ、と思い、一斉探索の指令を発してみたが、結果は、むなしかった。

湊には、二十余の船が、碇泊していたが、いずれも、素姓あきらかな大坂商人の持船ばかりであった。

神屋主膳ほどの曲者であるから、もとより、いささかでも疑惑を抱かせるような持主不明の船を、湊に入れているはずもない、と考えられる。したがって、怪しめば、どの船をも、怪しむことができた。

たとえ、大坂商人が江戸へ回送する米や酒の積み船であっても、実は、神屋主膳と何かの交換条件によって、巧みに公儀をあざむいているのかも知れなかった。

丹波は、商人どもの狡猾さを、知りすぎるほど知っていた。

——湊中の船を、焼きはらってくれれば、片がつくのだが……。

苛立たしさのあまり、そんな暴挙も、念頭を掠めた。

腹心の山県が、入って来るや、丹波は、その報告もきかずに、

「総勢六十名も、この堺をうろつきながら、いったい、何をいたして居るのだ！」

と、呶鳴った。

山県は、おちついた態度で、

「神屋主膳のかくれ家、ようやく判明いたしました」

と、告げた。

「ふむ！　判ったか？」

「新地廓の中に、ひそんで居ります。よもや、人の集まる場所に、悠々と腰を据えて居るとは、夢にも気づかず、つい、探索をおろそかにいたして居りましたため、本日まで、つきとめられませんでした」

「廓の中に、一味が居るのだな？」

「万福楼という女郎店のあるじが、海賊であることを、つきとめ、もしや、一味ではあるまいか、とさぐってみましたところ、疑いもなく、神屋主膳をかくまって居りました」

「よし！　主膳のひそむ場所が判明したからには、わしの計画は、九分九厘まで成ったと云えるぞ」

「御意――」

「山県――、主膳に、気どられては居るまいな？」

「それは、ご懸念には及びませぬ」

山県は、自信をもって、こたえた。

それぞれ、巧妙な変装をして、八方を探索していたものであり、堺の住民らに疑われるような失敗は、一度もしていないのであった。

翌朝――。

丹波は、山県を呼ぶと、

「万福楼に、主膳を襲って、これを生捕り、手下をも一網打尽にして、船を奪う、という手段は、如何だ？」

と、相談した。

湊に於ける出入はげしい多数の船の中から、神屋主膳の持船を見分けるのは、想像していた以上に、困難なわざであった。

そして、どの船も、疑う余地のない素姓明らかな商い船なので、一瞬の油断もなく見張っていても、海の外へ、遁してしまうおそれが多分にあった。

山県は、ちょっと思慮ぶかい表情になったが、

「殿が、そのように計画をお変えになるのでありますれば、敢えて、異論はございませぬが、ひとつだけ、懸念されることがありますので……」

「なんだ？」

「神屋主膳が、どれだけの手下を集めたか――その頭数が、まだ、しかと、つかめて居りませぬ」

「ふむ。……お前の推測するところでは、どうだ？」

「主膳は、おそらく、船を数艘、用意したと考えられますれば、集めた手下も、二三百名はあろうかと――」

「わしは、せいぜい、四五十名か、と予想して居ったが……」

「用意した船数によりますが、いやしくも、異国へ押し渡って、領土を奪おうという野望を起している以上は、かなりの頭数をそろえる必要がありましょう。三百名が、五百名になっても、多すぎる、という次第ではございますまい」

「三百名も集めていると、襲撃は不可能、と申すか？」

丹波は、笑った。

「山県、明朝、およそ七八十名の隠密衆が、江戸から到着いたすぞ」

「え？」

山県は、おどろいて、主人を見かえした。

「わしは、柳生道場へ、派遣方を要請しておいたのだ。その返事が、昨夜おそく、とどいた。……安堵せい。主膳の方に、たとえ五百の頭数がそろって居ろうとも、おそるるには足りぬ。柳生道場から、選りすぐった手練者が、一隊を組んで、やって来るのだ」

将軍家兵法指南を表看板にしている柳生道場は、実は、公儀隠密の養成所でもあったのである。柳生十兵衛をはじめ、柳生家の一族も、隠密役をつとめているし、門下の旗本の子弟もまた、これはと見込んだ者は、隠密の修業をさせられ、それぞれ、日本全土へ派遣されていた。

隠密奉行職が、ある大きなことを為すにあたって、道場の手練者を呼び寄せる権限を与えられているのは、当然であった。

ただ、丹波が、これまで、それをしなかったのは、柳生道場に在る隠密は、閣老直属だったからである。

したがって、丹波がこれを使おうとすれば、閣老に頭を下げなければならなかった。

丹波は、自身でえらんだ者どもに、党を組ませ、働かせていた。

丹波が、柳生道場の手練者派遣を要請したのは、背に腹は代えられぬ、と肚をきめたからであった。

堺に入って、二三日もすると、丹波は、神屋主膳を襲って、船を奪うことが、いかに容易ならざる仕事か、思い知らされた。とうてい、おのが配下のみの力をもってしては、成功おぼつかぬ、とさとって、早馬を、江戸へ奔らせたのである。

その返辞が、昨夜とどき、明朝、七八十名が大挙して、来堺して来る、という。

柳生道場の手練者を、これだけ加えれば、成功は九分九厘の確率といってよかった。

ただ――。

問題は、手練者七八十名が、列をなしてやって来ることであった。当然、人目を引くことになる。神屋主膳側が、そのために、急遽計画を変更するおそれがある。

あるいは、出帆の日をさきにのばすか、または、船団を瀬戸内海のどこかの島で、組むことにして、一味徒党が、ばらばらになって、その島へおもむくことになるかも知れなかった。

丹波としては、主膳のかくれ場所が判明した上からは、まず、わが手勢をもって、これを襲って、生捕り、然るのちに、柳生道場の隠密衆の力を借りて、船を奪うことにする方が、上策ではないか、と考えたのである。

「山県、決行は、今夜だ！」

丹波は、命じた。

「は！」

山県は、ちら、と不安の色を、面上に掠めたが、敢えて反対はしなかった。

「まず、三更を期して、新地廓の出口をふさぎ、万福楼を包囲する。これは、与力と同心にやらせる。万福楼に踏み込むのは、隠密二十七名――」

「心得ました」

「神屋主膳を斬ってはならぬ。生捕るのだ。生捕って、拷問にかけて、白状させる」

「殿、ご自身にて、指揮をとられまするか？」

「うむ。やろう」

丹波は、うなずいてから、

「山県、これが成功すれば、わしは、必ず、御側御用の地位に就いてみせるぞ」
「それは、疑いなく、殿のものに相成りましょう」
「浮世は、万事金次第だのう。閣老といえども、わしの持参した金の前には、頭を下げざるを得ぬ、というものだ」
丹波は、破顔した。
その笑い声をききながら、山県の方は、ふっと、いちまつの不安が、胸中を横切るのをおぼえた。
——今夜、襲撃するのは、早計ではあるまいか？
——やはり、神屋主膳の動きを待って、船を襲って、奪い取る方が、上策ではあるまいか？
山県は、最近の隠密奉行には、あせりがみえすぎると考えていたのである。
主人の命令に、いまだ一度も、さからったことのない山県も、このたびだけは、なぜか、不安にかられずにはいられなかった。
雲が流れ、月も流れていた。
時刻は、もう亥刻（午後十一時）をまわっていた。
新地廓のさんざめきも、一刻ほど前にしずまって、二三人の客が駕籠でひきあげて行ったあとは、おもてのあかりも、ひとつひとつ、消えた。
一群の武士が、音もなく、出現して、木戸をふさいだのは、その折であった。

と同時に——。
あちらこちらの店から、一人、二人と客が、出て来た。
それぞれの風体をしていたが、ただの客ではない証拠に、木戸の方へ出て来ようとはせずに、一斉に、ひとつの店へ向って、迫って行った。
隠密奉行配下の隠密二十七名が、客に化けて、各店に登楼していたのである。
襲撃計画は、山県の指令の下に、水ももらさぬ周到さで、おしすすめられていた。
隠密の面々は、すぐに万福楼に踏み込まず、いったん、散って、物蔭にひそんだ。
四半刻が、そのままに、過ぎた。
頭巾に顔を包んだ赤松丹波が、木戸口へ、姿を現わしたのは、子刻すこし前であった。
山県が、寄って来て、
「手配り、ととのいました」
と、告げた。
「神屋に、感づかれては居るまいな？」
丹波は、念を押した。
「注意の上にも、注意つかまつりました」
「うむ」
丹波は、寝しずまった廓の様子を、眺めやって、
「場合によっては、火の海にしてもよい」

と、呟いた。

「火を放つと申されますか？」

「神屋ほどの者だ。八方をふさがれた時のことを考えて、身をかわしてひそむところを設けて居るかも知れぬ。いぶし出すよりほかはあるまい」

「では、火を放つ場合の手筈も、ととのえます」

山県は、与力を三人ばかり呼んで、その指令を下した。

やがて、遠く、寺の梵鐘が、三更を告げて、ひびいて来た。

「やれ！」

丹波は、下知した。

一斉に——。

二十七名の隠密が、万福楼へ、侵入した。

しかし、その行動は、音をたてず、きわめて敏捷であったので、しばらくは、騒ぎにはならなかった。

とある箇所で、呶号と悲鳴があがった。

その後、ようやく、うろたえ騒ぐ音が、高くなった。

襲撃者たちは、旋風のごとく、屋内を奔って、奥の別棟へ殺到した。

別棟は、闇の中に、ひっそりと、わだかまっていた。

丹波は、万福楼の前に、立って、成果を待っていた。

屋内が、騒然たるものになった時、隠密の一人が、とび出して来て、

「神屋主膳の姿は、見当りませぬ！」

と、告げた。

「そんなはずはないっ！」

山県は、思わず、呻くように云った。

丹波の方は、さして、あわてもせず、

「火を放てい！」

と、下知した。

忽ちに——。

黒煙が、屋内に渦をまき、おもてへ噴き出て来た。

その煙に追われて、遁れ出て来るぶざまな寝衣姿の客や遊女へ、山県は、鋭く目をくれながら、焦燥した。

——これは、失敗だ！

胸のうちで、そう叫ばずにはいられなかった。

丹波自身が、悠然とおちつきはらっているのが、ふしぎでならなかった。

紅蓮の舌が、檐下へ匍い出た頃には、万福楼ぜんたいが、巨大な生きものと化したように、凄まじい唸りをたてた。

噴きあがる黒煙の下から、火粉が、舞い散って、遁げまどう人々の頭上へ、降って来た。

「殿！」
山県が、叫んだ。
「木戸口まで、退られませい！」
「ここでよい！」
丹波は、いまにも、自分の眼前へ、神屋主膳が、とび出して来るのを待っているように、じりとも動かなかった。
すべての店から、あわをくらって走り出て来た客や遊女や使傭人たちも、もう、ほとんど木戸から外へ、遁れ去っていた。
あとは、廓がのこらず焼きはらわれてしまうのを、見とどけるばかりであった。
丹波以下隠密の面々も、熱気に堪えられない状態になっていた。
「燃えろ！　燃えさかれ！　神屋主膳め、いぶし出されて参るぞ！」
丹波は、口走った。
山県は、その横顔を、ちらと視やった刹那、ぎょっとなった。
その形相が、いつの間にか、一変していたのである。
――もしや？
山県は、もう一度見なおして、愕然となった。
――狂った！　狂ったのだ！
「殿！」

その肩をつかんだ――その時であった。
木戸口で、轟然と、火薬の爆発する音が起った。
山県が、ふりかえってみると、濛っと渦巻く白煙の中で、わが味方ののたうつ光景が、目にとまった。
「しまった！」
襲うべき敵に、逆に、襲われたのだ。
「殿！」
あわてて、丹波をひっぱろうとしたが、その時は、すでに手おくれであった。
燃える万福楼と往還をへだてた向いの店の屋根に、一斉に、黒い影が出現した。
およそ、三十とかぞえられるその伏勢は、一斉に、地上めがけて、鉄砲を撃ちかけて来た。
「殿っ！」
山県は、丹波をかばって、その前へ立った。
瞬間――。
胸部を貫かれる衝撃で、山県は、唸りを発して、よろめいた。
「おっ！　山県っ！」
丹波は、愕然となって、山県の身を支えた。
「殿っ！　は、はやく……遁げられい！」
十余年間、忠実無比の奉公をつくした腹心は、その最後にのぞんでも、なお、主人の身を

気づかった。

「山県！　ゆ、ゆるせ！」

丹波は、地上へ崩れ込む腹心に詫びておいて、木戸へ奔った。

木戸口には、南蛮製の火薬の爆発に遭うて斃れた与力や同心のむくろが、ころがっていた。

そこを馳せ抜ける丹波に、従う隠密は、一人もいなかった。

隠密たちは、鉄砲玉に撃たれるか、それをさけて、店の中へ逃げ込み、丹波を守護することを、忘れたのである。

神屋主膳側の反撃は、まことに見事であった、というべきであった。

丹波自身、疾駆しつつ、まんまと計られたおのが愚かさを、正直にみとめていた。

――主膳め！　やはり、ただ者ではなかった。しかし、わしは、負けぬぞ！　赤松丹波は、これしきの痛手には、みじんも屈せぬぞ！

おのれをはげましつつも、廓の中にすてて来た山県が、もう明日からは側にいないことを思うと、片腕を殺がれたような心細さがあった。

ものの十町も疾駆しつづけて、繁華な通りに入る辻に来た。

丹波の足を停めさせる者が、そこに待っていた。

うっそりと、黒い影が、丹波の行手をふさいだのである。

丹波は、はっと、足を停めて、月闇をすかし視た。

対手は、ゆっくりと寄って来た。

「隠密奉行殿。大坂城内であずかった勝負を、今夜、ここで、あらためて、決し申す」

「織田重四郎か！」

丹波は、かっと、双眼を剝いた。

あの夜――。

重四郎は、日時と場所は約束しなかったが、必ず、その首級を申し受ける、と断言したのである。

その誓い通りに、丹波の前へ、出現した。

多勢の味方をもって、包囲するのをさけて、ただ一人だけで、ここで待ち受けたのは、武辺の心意気というものであったろう。

丹波は、もの静かな重四郎の姿を、見据えているうちに、絶望をおぼえた。

――わしの生涯も、ここで、おわるか。

おのれに呟いた。

次の瞬間、丹波は、ふっと、一種のすがすがしい気持になった。

――隠密奉行の最後は、これが、ふさわしいのかも知れぬ。

あるいは、江戸へ帰れば、御側御用役の代りに、閣老たちの奸計による横死が、待っているかも知れぬのだ。

そのような無念の最期をとげるよりも、この眉宇秀でた、気風清冽の青年の刃の下に伏す方が、どれだけましかも知れぬのだ。

「白河館の姉弟は、如何した？　ここに、ともなわぬのか？」
「姉弟に代って、それがしが、お手前を討つことにした」
「よかろう！」
丹波は、青眼に構えた。
重四郎は、地摺りにとった。
物蔭には、苦之市と猿助と芋兵衛が、ひそんで、この決闘を、見まもっていた。
対峙は、そのまま、絵に入ったように、固着の長い時間を、持った。
「こっちの、息が、苦しゅうなったわい」
猿助が、もらした。
「こ、このまま、夜が、明けるんじゃねえか」
芋兵衛も、ふうっと、熱い息を吐いた。
それから、さらに、四半刻が、経過した。
突如——。
丹波が凄まじい気合もろとも、斬りつけた。
と同時に、重四郎が、影が掠めるに似た迅さで、斜め横に奔った。
勝負は、その一瞬に、決した。
丹波が、二三歩よろめいた。重四郎は、二間を奔った地点で、佇立した。
「やった！」

丹波のからだが、地に伏すのを目撃して、下忍ら三人の口から、同じ言葉が、発しられた。
重四郎は、丹波のそばに寄って、事切れているのをたしかめた。
そこへ、三人が、馳せ寄った。
「おめでとうござる」
猿助が、代表して、よろこびを述べた。
重四郎は、しかし、なぜか、沈んだ様子で、黙々として、歩き出した。
辻の一方から、一歩毎に大きく上半身を傾ける杉山道満の姿が、出現したのは、その折であった。
近づくと、
「やったのう」
と、笑った。
「道人——。敵討というものをすませると、こうも、うつろな気分になるものか」
「ははは……、強敵であればあるほど、それを屠ると、気抜けがするものよ。重畳、重畳——。これで、いよいよ、神屋主膳は、船出ができるわい」
「道人の軍師ぶりには、頭を下げ申した」
「なんの、天と人と時の利が合わさっただけのことよ」

大団円

空は美しく晴れ、海は凪いでいた。
その海辺からつづく小高い台地の頂きに、二つの影が、より添うて、立っていた。
織田重四郎と静香であった。
二人は、いま、湊から六艘の船が出て行くのを、見送ろうとしていた。
台地にのぼってから、もう小半刻が、過ぎている。
静香の顔は、わが身におとずれた幸福感を、惜しみなく湛えている。
昨夜——。
例の松林の中の家で、重四郎は、神屋主膳と対坐した。
「いよいよ、明日、出帆いたすことになった」
主膳は、告げて、当然、重四郎も同行してくれるものと思い、
「お主の剣が、異邦の土地にも、どれほどか、役立ってもらえるもの、と期待される」
と、云った。
すると、重四郎は、
「申しわけないことながら、それがしは、生れた国にとどまりたく存ずる」

と、こたえた。
主膳は、おどろいて、
「なぜかな？　……将来のない浪人ぐらしをつづける意義が、どこにあるのか？」
と、問うた。
「自分でも、よく判り申さぬが、妻と二人で、どこか、山中に、草庵をつくって、くらしてみたい、と考えて居るのです」
「夫婦で、南蛮の国に、館を構える気持は、さらに起らぬかな？」
「どうぞ、われら二人のことは、お忘れ頂きとう存ずる」
重四郎の心は、かたかった。
その折、数馬が入って来て、
「わたくしは、お連れ頂きます」
と、主膳に願い出た。
「そうか。少年は、大きな夢を抱かねばならぬのう」
主膳は、満足げに、うなずいた。
数馬は、重四郎に向うと、あらたまった態度で、
「姉者のこと、よろしく、お願い申します」
と、大人びた挨拶をした。
重四郎は、胸に熱いものをおぼえつつ、

「幸せにする、と約束する。……そなたは、大きな夢を、実現するがいい。遠く、はるかに、祈っている」

「はい」

数馬は、泪もみせず、にこりとしてみせた。

主膳が、

「この少年は、いずれ、わしの後継者と相成ろう」

と、約束した。

「何卒、きびしく、きたえあげて下さいませ」

と、静香が、願った。

主膳は、数馬をともなって、去った。

そのあとで、苦之市と猿助と芋兵衛が訪れて来た。

重四郎は、三人を説いて、海を渡らせることにした。

はじめは、しぶっていた三人も、やがて、その気になった。

「……さまざまのことが、あったな」

重四郎は、紺青の海原を見やりながら、ふかい感慨をこめて、呟いた。

過ぎ去った日々が、ひとつひとつ、掠めた。すべての思い出が、なつかしかった。

その日々の間に、つぎつぎとこの世を去った人々の面影が、しのばれる。

味方であった者も、敵にまわった者も、いまは、恩讐をこえて、なつかしく偲ばれるので

あった。

「あ――見えまする！」

静香が、叫んだ。

「おお！」

重四郎は、目をあげて、微笑した。

いま――。

六艘の船影が、白い帆をすっきりと紺青の海上に映えさせて、すべるように、出て行く。

あの船には、昨日まで、自分たちとふかい縁でつながっていた人々が、乗っている。

神屋主膳。

数馬。

杉山道満。

苦之市、猿助、芋兵衛。

田野村丹三郎。

伍兵衛とその女房。

檜垣又十郎とその一党。

そして、大坂城の地下牢から救い出したファン・サンテンとその娘アンナも、乗っている。

「みんな、往ってしまうか」

自ら好んで、残ったとはいえ、こうして、見送る側に立ってみると、別れのさびしさが、

胸を噛む。

異邦には、どんな世界が待っているのか、想像もつかぬが、どうぞ、幸せなくらしがあるように、心から祈って、見送る二人であった。

「数馬！　さようなら！」

静香は、泪をいっぱいためながら、片手をあげた。

重四郎の方は、心の中で、

——なろうことなら、天堂寺辰馬も、嘉七も、さわも、乗せてやりたかった。

そう思っていた。

六つの船影は、やがて、沖あいへ、小さくなった。

静香が、嗚咽した。

重四郎もまた、まぶたが潤んだ。

船影は、やがて、水平線上に、消えた。

「さ——行こうか」

重四郎は、促した。

「はい」

二人は、ゆっくりと、台地を下りて行った。

浜辺へ降りた時、静香が、「どちらへ？」と問うた。

「歩きながら、きめよう」

重四郎は、笑って、こたえた。

貧しい二人であった。住居をきめるのは、さきのことにしなければならなかった。

静香の父が隠匿しておいた莫大な財宝は、静香の手鏡の裏に、秘めてあった絵図面によって、場所が判り、それは、そっくり、船に積まれたのであった。

重四郎と静香は、貧しいくらしの中に、この世の幸せを見出すべく、まっすぐに歩いて行く——。

解説

瀬沼茂樹

柴田錬三郎は、大衆作家にふさわしく構想力が極めて豊富で、イントリィグが巧緻で、私達を娯ませてくれる。時にはサスペンスを用い、時にはパロディを利し、意表を衝いて、心をくすぐり、自在の趣をみせる。錯雑する人物の出没に私達を幻惑させながら、いつしか作者の虜にしてしまい、一喜一憂せずにはいられなくする。戦後の文界に机竜之助の血脈をひく無頼の剣士眠狂四郎を創造して現れ、戦後の中里介山ともいうべき地位をきずき、私達を喜ばせてくれた。『徳川浪人伝』は、この柴田錬三郎がその才腕を自由に揮ってひらいた別天地の一つである。

『徳川浪人伝』は、大坂落城後二十年、三代将軍家光の時代で、徳川政権が着々と基礎を固めている状況を背景にしている。大坂の陣に敗れて主家を失い放り出された浪人群だけにとどまらず、徳川政権が政治上・財政上・軍事上の必要から、さまざまな口実を設けて改易した諸侯から新たに発生した浪人群を加えて、十数万といわれる失業武士群が、巷に彷徨し、戦後の平和を脅かすいろいろな不安や混乱の要因を形づくっている。殊に徳川政権の中枢である江戸を遠く離れ、旧政権の根拠地であった大坂を初めとする関西では、反政府的陰謀を

めぐらす浪人群の蠢動も考えられるから、大坂を天領とし城代を置いて、浪人群の探査・監視の必要があった。作者が浪人伝を描くにあたり、江戸ではなく、大坂や堺を中心とする関西に眼をつけ、慶安事変の前史ともいうべき物語を構想した所以でもあろうか。

柴田錬三郎は浪人伝を関西を舞台として描くについて、西国大名、殊に外様大名の動静を探査し、浪人群を取締る重職として、大坂城代の他に江戸幕府に直結する「公にされない」秘密の機関としての「隠密奉行」を造出して大坂城内に置き、物語の興味を盛り上げている。これは大衆文学の可能態の一つとしての妙技というべきであろうか。そればかりではなく、秀吉の禁教令以来、わずかに朱印船貿易で外国貿易が行われていた鎖国直前の事態において、「隠密奉行」には特有な任務が加えられている。即ち一つにはキリシタンの取締のためであるが、他方には大坂や堺の商人が密貿易によって得た隠し財産、すなわち南蛮財産の摘発、或いはまた豊臣時代の埋蔵金の摘発という江戸幕府の財政上の必要から狙いをつけた任務がこれである。作者は浪人群を主体において「隠密奉行」を頭領とする公儀隠密団との間に展開される虚々実々、波瀾万丈の闘争を盛りあげて興味尽きない物語を見事に仕立てている。

浪人群といっても、品性、志操から武術まで各人雑多であるから、浪人の一人、すなわち武術にすぐれた長身の織田重四郎、その氏名からいって名家の裔と思われる品性、志操において卓越した一人を重要な主人公の一人に置いて物語を展開する。伏見の白河館の遺児、楠木氏の裔である静香、数馬姉弟の仇討の依頼に応じ、助太刀をするために奔走する。ここで伏見の白河館は伊丹の平家館と競争する南蛮貿易に従事する豪族であり、この競争から平家

館の神屋主膳の謀略で、姉弟の一族は焼打に遭ったとする風評が流され、姉弟の仇は神屋主膳と目されていた。織田重四郎はその真偽を探索することから南蛮貿易の概略を明かにし、浪人群のなかには、平家館の食客の一人であった山田長政に倣い、南方に日本町を築こうとする雄大な志操をもつ者のあることを明かにする。

伊丹の平家館の主、神屋主膳は実は四国に武威を揮った長曽我部元親の五男盛政の別名であって、徳川幕府から隠し知行一万石を与えられている程の豪族である。従って御朱印船を所有し、堺に幾つもの納屋（倉庫）をもっている南蛮貿易の雄者で、南蛮財宝五十万両を秘匿してもおれば、他日の世界雄飛を兼ねて多くの浪士をも養っていた。神屋主膳がいかに豪胆な人物であって、商敵伏見の白河館を焼打するような卑劣で陰険な男ではなく、彼こそは秘かに南方に日本町を築く計画を立てている当の人物である。なお神屋主膳の甥に長曽我部左門という青年を設定し、夕映えの里の隠家を出て、織田重四郎らと並んで品性、志操正しく活躍する浪士群の一人にあてている。

織田重四郎の探査によって伏見の白河館を焼打したのは、「隠密奉行」赤松丹波の率いる公儀隠密団であり、幕府の要請によって財政の窮迫に対処するために白河館の莫大な南蛮財宝に目をつけ、これを没収する目的から隠密裡に企て、伊丹の平家館の仕業という風評を煙幕として利用していた。しかるに白河館から南蛮財宝は発見されず、姉弟がその所在を記した絵図面を持っているとの推定から公儀隠密が姉弟の身辺を窺う始末となる。この絵図面の探索と争奪から、物語は大衆小説の常法の一つである宝捜しの要素を加え、いよいよ興味を

増すという手法をもちいている。

「隠密奉行」赤松丹波の方も平穏に権力の上にあぐらをかいているわけではなく、老中、若年寄より以上の実権を握る重職という設定からして、その地位を狙う野心家も現れてくる。かくて警戒を要する野心家の目付・竜造寺匡が公儀表から差遣され、財政不足十万両の調達を要請される。竜造寺匡は江戸表からつれてきた葵決死隊を率いて、五十万両の私財を貯えていると目される平家館の神屋主膳を討つ役目を買って出て、その野望を遂げようとはかる。しかし白河館の場合と同様に神屋主膳には逃げられ、焼跡から財宝は発見されない。さらに白河館の秘宝を探索しようとして屋敷跡をさぐり、ただ一種の指標を手に入れるにとどまった。「隠密奉行」赤松丹波は自己の地位を狙う竜造寺匡とその一党を毒殺する。公儀の内部の権力争奪はどこにもみられる図であるが、織田重四郎の再度に亙る大坂城侵入とともに物語を錯綜させて興味を加える手法というべきだろう。

平家館も白河館と同じ運命を辿ったとはいえ、神屋主膳は一党を率いて、遙かに南方諸国を訪れ、日本町を築く時期が早まったのであり、『徳川浪人伝』は世界に雄飛する浪人群の場合を物語るものであろう。浪人群には盗賊と化する下の部類もあるが、武術・器量をもって仕官の困難な道をさぐるのも、出世といえば出世である。先には呂宋助左衛門、近くは山田長政のように海の彼方に出て日本町を開くものこそ男児の面目を発揮するものといえよう。徳川時代に「天下を取る」ことをもくろむ浪士群があれば、これに劣らずなかなかの大志を抱くものと認めてよかろう。

「天下を取る」という志をもつ浪人としては、主取したことがないと自称する長髭の一刀流の剣士千本強兵衛や春奈の一党がいる。「徳川将軍を裏切るのは、徳川一家でなければならぬ」という論理から紀州徳川家の主頼宣を奉戴して京都の占拠をはかるという構想を打出している。紀州徳川家が大坂城の浪人のうち有能なものを取立てていたから、謀叛の名目にかついだとするのは真偽はとにかく大衆小説の常法である。作者もまた千本強兵衛が三年前に仕官を要望されたとし、天下取りの旗印に掲げる。手土産に軍資金として十万両が必要だというところから、白河館の宝捜しの騒動に一役を買おうとして、物語の紛争の渦中に捲込み、興味を多様化している。

紀州徳川家をかつぐという点からみれば、慶安事変の立役者由比正雪（民部）やこれを助けた金井半兵衛の十数年前の若い姿が登場する。由比民部は駿河の由比宿の紺屋の伜に生れ、大人を驚かせる優れた頭脳を持ち、十四歳で京都に出て、軍学者楠不伝の門を叩き、やがて伊丹の平家館の食客となった。神屋主膳から海外に雄飛する山田長政の話をきき、心の中に「大きな夢」を抱いた。この「大きな夢」が鎖国で転化し、天下取りの「大きな志」となったと作者は示唆するもののようである。これに対してどこかの大名の落胤といったり、みずから「下の浪人」に数えたりするかと思えば、「天下救世主」をもって任じ、人生相談を掲げる剽軽な金井半兵衛も登場する。由比民部とは楠不伝の同門であり、その参謀として慶安事変を用意するほどの親交が暗示されている。いずれにせよ、慶安事変を最後として徳川政権は安定するといわれるまでの最後の大事件、「大きな志」と主人公の若い日の姿が出没して、

作者の雄大な物語の奥深さを現し、私達の物語的興味を満足させてくれる。

『徳川浪人伝』は徳川初期に発生した多様な浪人群の「伝」であるから、由緒のある浪人だけではなく、「下の浪人」群も登場し、甲賀・伊賀の忍者群とともに物語を賑わせている。この意味で物語の主人公の一人織田重四郎とともに最初から登場し、長槍をかついで秀吉の股肱の臣を父とするとほざき、伊賀忍者上りの盗賊をおどす天堂寺辰馬なども主人公の一人とみるべきである。天堂寺辰馬は見かけによらぬ臆病者であることがあばかれ、主人公の一人でありながら、頼りにならぬ道化者として舞台廻しの役をつとめている。舞台を賑わす女性にはたとえば姫路城主本多忠政の娘八千代のような姫君も登場し、多くの女性群とともにロマンスを形づくっていることはいうまでもない。登場者に一々拘泥することは必ずしも解説者の任ではないとすれば、最後に私の感想を一言つけ加えて結語としたい。

柴田錬三郎が『徳川浪人伝』を構想するにあたって、太平洋戦争後の不安と喧騒とを胸において構想を立てたのではあるまいか、またそういう読者を予想して物語の説話の「近代化」を計って時代小説に新生面を開いたのではあるまいか。時代小説の枠を外して考えれば、人物の会話や思考に、たとえば「人間の尊厳」とか「自我」とかいった人間主義が隠顕して、あたかも現代小説を読むの感がある。これこそ普遍的人間性を越えて、『徳川浪人伝』を新しい時代小説としてその雄大な規模とともに新生面をひらいたと称えるべき所以であろう。

（昭和五十八年九月、文芸評論家）

この作品は昭和四十三年五月新潮社より刊行された。

文字づかいについて

新潮文庫の文字表記については、なるべく原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めた。

一、口語文の作品は、旧仮名づかいで書かれているものは現代仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、一般には常用漢字表以外の漢字も音訓も使用する。
四、難読と思われる漢字には振仮名をつける。
五、送り仮名はなるべく原文を重んじて、みだりに送らない。
六、極端な宛て字と思われるもの及び代名詞、副詞、接続詞等のうち、仮名にしても原文を損うおそれが少ないと思われるものを仮名に改める。

筒井康隆著
富豪刑事
キャデラックを乗り廻し、最高のハバナの葉巻をくわえた富豪刑事こと、神戸大助が難事件を解決してゆく。金を湯水のように使って。
定価280円

山本周五郎著
艶書
七重は出三郎の袂に艶書を入れるが、誰からか気付かれないまま他家へ嫁してゆく。廻り道してしか実らぬ恋を描く表題作など11編。
定価360円

司馬遼太郎著
胡蝶の夢（三、四）
瓦解する幕府の海陸軍軍医総裁、松本良順は江戸を脱して会津に向う。他方、共にポンペに学んだ関寛斎も官軍野戦病院長として会津へ。
定価各400円

山口瞳著
男性自身 困った人たち
日々眼に映る笑いや慟哭、怒りや不満、胸の中にわだかまり、心のひだに隠された細やかな感情を、鋭く潔く描く「男の本音」51編。
定価320円

山崎豊子著
不毛地帯（三、四）
アメリカの巨大自動車企業フォークが、日本市場を狙う。黒いFX商戦から十年、商社マン・壹岐正は国際経済戦争の最前線に立つ。
定価各560円

北杜夫著
悪魔のくる家
あまりに齢をとり妖怪じみてきた老女が、傾きかけた旧家を再興すべく打った大博打。破天荒な笑いと無気味な黒魔術のあやなす世界。
定価220円

新潮文庫最新刊

三島由紀夫著
裸体と衣裳
文壇の寵児としての超人的日常の表と裏を描く表題作。ほかに「文化防衛論」等、犀利な知性と鋭いイロニーの横溢する評論全9編。
定価360円

海老沢泰久著
F2グランプリ
強い男が勝つか、速い男が制するか、新鋭が奪い去るか。チャンピオンをめざす三人の男の野望と苦悩が、サーキットを疾駆する！
定価280円

藤本義一著
元禄流行作家
—わが西鶴—
「わしは俳諧師という商人や」——愛欲と金銭欲こそが庶民の夢と説いた元禄の流行作家・井原西鶴の数奇な半生を描く力作長編小説。
定価280円

長部日出雄著
笑いの狩人
—江戸落語家伝—
江戸落語の創好者・鹿野武左衛門から、完成者三遊亭円朝まで——江戸文化の華を生み育てた五人の芸人たちの凄絶・痛快な生き方。
定価320円

滝田ゆう著
昭和夢草紙
裏町、横丁、路地、小路、〝色街〟玉の井を抜ければ思い出はみんな夢まみれ。下町の粋人が絵と文で綴る、今は昔の「夢のお話」。
定価360円

読売国際漫画大賞選
ユーモア美術館
思わず吹き出す大傑作、一瞬アタマを使わせる外国作、ほっぺたがゆるむジュニア作。読売国際漫画大賞の作品を集めたカラー文庫。
定価480円

徳川浪人伝(下)

新潮文庫　草150=26

昭和五十八年十月二十五日　発行
昭和五十八年十二月二十五日　二刷

著者　柴田錬三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Eiko Saitô 1983　Printed in Japan

ISBN4-10-115026-5 C0193